
ストレンジネス・オラトリオ

デン助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストレンジネス・オラトリオ

【Nコード】

N5174I

【作者名】

デン助

【あらすじ】

アルテリア王国の衛士協会に所属するディオンは護衛任務の帰り道、ユーフォリア大陸中で噂になっている未成年の誘拐事件現場に出くわす。

法令違反だとしてその実行犯を殺害したところに現れた、金髪の女騎士とその部下達。

女騎士に突っかかれるも子供達を早く街に帰らせようとしていると、そこへ人外と呼ばれる、人を糧とする生き物が襲い掛かってきた。

——この事件を皮切りに、ディオンは王家のいざこざに巻き込まれ、やがて国同士の和平を実現しようとするお姫様が暗殺されるといいう噂を聞きつける。

社会の裏で暗躍する、暗殺者組織。剣を振るしか能の無いディオンの、それを防ぐ事が出来るのか？

＊不定期更新になりました

第一章 旋風（つむじかぜ）（前書き）

異世界ファンタジーには初挑戦ですので、粗が目立つかもしれませんが、
んがご容赦下さい。少しでも楽しんでいただければ幸いです。

第一章 旋風（つむじかぜ）

双子の月が浮かぶ夜空だった。そこに覗く星も今夜は一段とはつきり見える、空気の澄んだ夜だ。男は林道を歩いていた。分厚い革で造られた靴が地肌を踏む、重く乾いた音が夜の闇に響く。何度も人が行き交ってできた道の脇には、背の低い草木が茂っていて、まばらに立つ背の高い広葉樹がさわさわと風に吹かれて囁いている。

淡い月光が降り注ぎ、夜にしては明るく静かな宵だった。地肌に見える道を、歩く。そこかしこから虫の鳴く声が聞こえた。

それに混じり、腹の虫が鳴く、情けない音がした。

「腹、減ったなあ」

右手で腹を押さえながら、力なくつぶやいた。口からは自然とため息がこぼれる。

その様相には特徴があった。通気性の良い長袖の黒い服に、戦闘用にあしらえた同色の武装コンバット・スラックス下衣。その上から羽織っている、これも黒い——戦闘用外套は防寒用に着る類の外套を、耐刃性の高い生地で補強したものを纏っている。両前型で、丈は膝までである。幅広で厚い、頑丈な革製のベルトで腰を巻き、その裏腰に柄が右手近くに来るよう大剣を下げていた。がちゃ、がちゃと音が鳴る。

黒瞳、ツンと立った黒髪に赤いバンダナを巻いたその容貌は、年の頃二十になったばかりの精悍な顔立ち。傭兵稼業で日銭を稼いでいる青年だった。

名前をディオーン・アウフシュナイターといった。彼が所属する衛士協会という組織は、街の治安維持や、人間を襲う人外と呼ばれる存在から人々を守る仕事を主にこなす。言わば戦闘力を商品として売り出している傭兵派遣協会、数ある職人ギルドの内の一つだった。

ディオーンは今しがた、護衛任務を終えて帰路についていたところだったが、燃費の悪い彼の体は街の食堂まで持たなかった。

「ぐう……あの商人、金払い悪いぜ。

おまけに街まで遠いし、帰りもあるこっちの事なんて考えてない
んだろうか。ないんだろうなあ」

がつくりと項垂れる。本来であれば、到着した街にある衛士協会
で仕事を貰い、各地を転々とするのが衛士の仕事だった。だが隣街
の衛士協会に顔を出したところ、ディオンの宛に書状が届いていると
いう。先ほど読んだそれを懷から取り出し、もう一度読んでみる。

「ったく、“手段を問わずに戻って来い”って、一体何なんだか」
たったそれだけの、簡潔な一文だ。どうやら急ぎの用らしいので
馬車に乗せてもらう事も考えたが、懷事情からそれは事実上難しか
った。

衛士が衛士を雇う、というのもおかしい話なので、こうして一人
で夜道を歩いていた。

「うーん、文面から察するに、急用みたいだが。

しかも、他人に知られたくない事を頼みたい、とかか」

事実、衛士協会に暗殺や殺人を依頼する人間も多い。その場合は
協会側から、異端審問会に直接依頼内容と依頼人の身元、詳細情報
を明かし、その判断を受けて行動するという手法を取る。

「また面倒な事を押し付けやしないだろうな、あの頭領」

ディオンの顔が嫌そうに歪む。彼は苦手な部類の人間である、頭
領の顔を思い浮かべる。

禿頭に白髭、小太りな体型をしていて甲高い声で喋る。しかも性
格が嫌味ったらしい。

「大体、何で俺なんだ。他にいるだろうが、もっと腕の立つ奴。ま
さか捨て駒扱いか？ 冗談じゃねえや、だったらあの禿頭いっぺん
ひっぱたいてやる」

ディオンのぶつくさ愚痴を零していると、また腹の虫が鳴った。

「うおー、死ぬ、餓死する……」

そうして、さっさと立ち上がって街へ戻ろうか、と思っていると、
ディオンの向かう先から一台の馬車が走ってきていた。

「何だ？ えらい勢いだな」

土煙を上げながら猛進している。二頭の土色をした馬が引く幌馬車だ。ディオンは道端に身を寄せ、それが通り過ぎるのを待つ。馬が引く荷車を見る。白い幌ほろを被せて中が見えないようににされていた。（衛士はあの中に居るのか。何やら事情がありそうだ……無ければ、こんな夜中に馬車を走らせたりしないか）

そこで、思い至る。昨今、このユーフォリア大陸中で少年少女が夜間に誘拐される事件が多発している。その大陸の最南端に位置する、今彼が向かっているアルテリア王国。

そこで誘拐事件が起きている、と考えれば。

（成る程。協会でも腕の立つ奴らは他の重要な仕事に回し、中堅の俺あたりをこの事件にあたらせよう、って魂胆だったのかな、頭領は。だが残念な事に、報酬や依頼期間の定まっていない現状でタダ働きするほど、俺はお人好しじゃない）

馬車が横を通り過ぎる。強い夜風が頬を叩くと同時、巻き上げられた土煙がディオンを覆った。顔を左腕で庇い、それから目を守る。過ぎていった馬車を見る。荷車の後部が見える。

（やはりか）

ディオンの予測通り、幌を被せた荷車の中には少年少女が数人いた。荷車の後口には鉄格子が備えられ、逃げられないようになってる。鉄格子の傍で向かい合わせに座る、衛士二人の姿。その向こうで、一人の少年がディオンの気付き、何かを――助けを求めるような顔をした。

ディオンの心に苦いものがこみ上げる。

（何だよ、そんな顔して。もしかして、救いが欲しいのか？）

――少年が、鉄格子の間から手を伸ばす。たすけて、という声が聞こえる。だがそれも、二人の衛士によってすぐに黙らされた。

「チッ……」

（胸糞悪い。あれじゃまるで、昔の俺だ。俺もああして、奴隷とし

て売られる寸前に、今の養父に助けられた。あの時の養父の立場に、今の俺がいる。

養父さん。俺は、あの日のあんたになれたのか

荷車がどんどん離れていく。このままでは、追いつけなくなる。

人徳法では奴隷の売買は違法となっている。各地の衛士協会でも、この事件を防ごうと動いている。だから自分がそれに手を貸して、なんらかおかしくない——という、建て前を作って。

（——ええい、畜生！ 何もしないで後悔なんか、したくねえしなあ！）

結局。子供を見捨てる事が出来ないお人好しは、そうして駆け出した。

ウルス・ラグナ

大剣の柄に手を掛ける。腰の後ろ、革ベルトに仕込まれている四基の術器で留められた、肉厚の鋼板のような……剣と呼ぶのもおこがましいような罅だらけの鉄塊。四十タイトもある長く図太い柄には白い紐が巻かれているが、申し訳程度のそれは既に使い込まれてボロボロ。

切っ先は存在せず、長方形の鋼板に片刃を付けたような様相。下げた右手のすぐ傍に柄が来るよう、腰に下げているのは抜剣の速度を重視しての事と、帯剣時に重心を出来る限り低く保った方が移動や咄嗟の反応速度に優れるという利点を考えてだ。

何しろ、この剣はでかくて重い。

全長一リール（メートル）と八十タイト（センチ）という、地面に立てると己の背丈ほどの長さ。重量は三十ウェイン（キログラム）。これを片手で振り回せるのは、鋼のように鍛えられた筋肉を纏う男ぐらいだ。

彼は既に駆け出している。夜気に溶けるようなディオンの様相は、相手の目には宛ら夜風のように映るだろう。先ほどの少年の行動が意図するものを予測してか、走り寄るディオンの気付いていた二人

の衛士は鉄格子の隙間から弓矢を射ってきた。

ウルス・ラグナ

大剣を抜き放ち、その四十タイトという剣としては異常に幅広い剣身を盾に矢を防ぐ。

（恐らく次の狙いは、足）

そう予見してすぐさま横に身をずらすと、予測通りの一撃。だが、このままでは近寄れない。そもそも、馬の脚力に人間が走り勝とうというのが間違いだ。

ならば、と左腰から一本の短剣を抜き、それを荷車の車輪——車体との接続部目掛けて投擲。命中。木造は脆い。バランスを崩す荷車に、馬車の速度が一気に落ちた。距離が詰まる。衛士が鉄格子を開き、それぞれ己の得物を抜いて地に降り立つ。彼は逆手に握った大剣を、そのまま力任せに振り抜いた。暴風のような剣風。得物ごと分断される衛士の肉体。引き千切れた体から内蔵と血液が飛び散る。地面に付着し、湯気が上るそれを横目に、もう片方の衛士に斬り掛かった。

「刹！^{セツ}」

彼は剣を振り抜いた勢いを殺さず、そのまま敵に背を向ける形で回転する。ここぞと隙を突いて踏み込んでくる敵の、剣による刺突。

「——っ」

回転運動を横から縦に捻じ曲げ、敵の攻撃を避ける。胸元をかすめていく剣を横目に、己が剣をその脳天へ向けて、振り下ろす。頭の天辺^{てっぺん}から砕き、裂かれ、眼球や脳漿が飛び出る。そのまま地面へ叩きつけると、もはや原型も留めないほど破壊された人体と、一リール四十タイトの地面の裂け目が出来る。

——この大剣は既に剣ではなく、鈍器の類だ。相手が頑強な板金^{プレート・アーマー}を装備していても、その衝撃力により問答無用で殺害する事が出来る。加えて、盾として使える側面も持つ。伊達にでかいだけではないようだった。

「まだいるか」

大剣を術器に吸着させる。これはそういう機能を持つ、変わった

留め金。

（衛士だけじゃダメだ。護衛を殺しただけでは、原因の解決にならない）

彼は再び駆け出し、荷車を回り込んで御者に掴みかかる。御者台に座っているのは、中年の口髭を生やした男だった。

「よう。雇い主は誰だい？」

静かだが、威圧的な声で男を脅す。しかしぶるぶる、と首を振る男はどうやら一切、喋るつもりがないようだ。

「そうかい、あばよ」

言って、右手で首を絞める。締める。ごきり、という音が辺りに響く。手を離せば、かくんと首が不気味に折れた。口から泡を吹いて、白目を向いている。首は最も弱い人間の急所。どんな達人でも、ここだけは鍛えられない。彼は、人の殺し方を心得ていた。

（これで、子供達の解放には成功した。しかし、このままここに居てはいつ人外共の襲撃を受けるか解らない。さっさと町まで送っていかないと）

「おい、ガキ共。もう安心だ、家に帰らせてやるから、俺の後を付いて来い」

一息つき、投げたナイフを回収しながらそう告げ、子供達を見渡す。すると、泣いていたり、恐怖で固まっていたり、果ては殺害された衛士の身を漁っていたりと、どうも扱いが難しいようだった。

「全く、どうするかな……」

ディオオンがぼやく。一人一人説得して回るのも面倒なようで、頭を掻く。

そうしていると、女の声が聞こえた。

「――待てー！」

「ン？」

数匹の馬が、蹄で地面を蹴る音。再び、待てという若い女の声。

（……何だ？）

距離が近くなると、その様相が良く解った。白い戦闘服の上に、
銀色の胸鎧と具足。^{プレストアーマー}手綱を握る同色の籠手に、下半身はふわりと広がった前開きの戦闘用外套の下に、^{コンバット・マント}武装下衣を着込んでいる。白馬に乗った金髪の女騎士を先頭に、同じような様相の騎士が隊列を崩さずに目の前で立ち止まった。

「こ……この惨状は一体？　もしや、お前がやったのか？　おい、そこの黒いの！　どうなんだ、答えろ！」

先頭の女騎士が、ディオンを見下ろすようにその目を向ける。気の強そうな切れ長の青い目、服に負けず、白磁のように白い肌。目鼻立ちの整った、隠せない気品を漂わせる顔。肩口で揃えられた金髪がさらさらと風に揺れる。

（もしかして、貴族の娘か？）

「黒いのは何だ、黒いのは。俺は衛士協会のモンだ。この衛士と御者は俺が殺った。」

確証は無かったが、人徳法違反だよな？　これ」

「そうだ。衛士ならば耳にしているとは思うが、昨今噂になっている未成年の誘拐事件だ。」

口惜しいが、我がアルテリア王国でも発生している。騎士団も尽力しているが、完全に防げていないのが実情だ。しかし今回はそちらの働きで子供達を取り戻す事が出来た。

礼を言う」

「や、こちらとしては謝礼の一つでももらえれば、それで良いんだけど」

「……金か。やはり衛士は金に汚い生き物だな。金のためなら汚れ仕事も進んで請け負うと聞く。下劣な」

途端に女騎士の顔が、まるで汚いものを見るような表情に歪んだ。ディオンはそれにかちんと来たようで、口元がぴくりと動いた。

「フン。まともに子供も守れない騎士が何を言うかと思えば」

鼻で嘲ると、金髪の女騎士は片眉をぴくり、と跳ね上げた。

「何だと、貴様。それは騎士である私を侮辱しているのか」

「それ以外にどう取れる？　頭が弱いんじゃないか、騎士さんよ」

「なっ……貴様あっ！　衛士の分際で騎士を愚弄するか！　良いだろう、謝礼代わりに踏み潰してやる！　——ハッ！」

激昂した女騎士が手綱を一際強く引く。途端に白馬が嘶いて前足を上げ、ディオンを踏み潰そうと振り下ろしてくる。

（シャレになってねえ！）

咄嗟に横へ飛び、その騎手を睨み付けた。

「おい、この金髪馬鹿！　テメェ騎士の癖にそういう事やっていいのか！？」

「ば、馬鹿だと！？　国に巢食う蛆虫が、アシユクロフトの名を持つ私を、言うに事欠いて馬鹿だと！？」

女騎士の表情が怒りに赤く染まる。意外に単純なようだった。

「んなもん知るか、馬鹿！　それよりさっさと子供達を連れていけよ！　どうせそっちも仕事なんだろ、この馬鹿騎士が！」

「ぬ、ぐ、ぐう……！」

ディオオンが正論を言うのと、周囲にいた数人の騎士がアシユクロフトと名乗った女騎士を宥め、子供達を馬に乗せ始める。

「ゆ、許せん、絶対に許せん！　この黒いのだけは私の手で捻じ伏せなければ、怒りで眠れそうにない……！」

ふと、空気の感触が変わった事をディオオンは敏感に察知した。

「ン？　これは……まずいな」

怒り拳をぶるぶると震わせる女騎士を横目に、周囲を見回す。森がざわざわと騒いでいる。周囲の気温が数度、下がったように感じる。 “夜” が、騒いでいる。

——この惑星テラ・セオドシウスでは、街から街への移動時に人間を餌として捕食する人外が襲ってくる事が多い。そういう時のために、街を行き交う人々は衛士を雇って旅の安全を確保するのが定石であり、人徳法という法令で定められた規則だった。

（これは、遅かったな）

内心で溜息を吐きつつ、騎士に背を向けて油断なく警戒する。

「おい、金髪。子供達を固めろ。騎士共はその周囲を囲め。早くしろ！」

「何だと、何様のつもりだ！？ まさか衛士の分際で騎士に命令する気か！？」

「良いから言う通りにしろ！ “奴ら” が来た！ 人外だ！」
アウト・ヒューム

——ぞわり、という悪寒が背筋に走る。恐らく、騎士達もディオンの同じように感じたはずだ。それと同時に、影のように黒い狼がその赤い双眸で夜闇に尾を引きながら現れ、彼ら集団に向かって駆け寄ってくる。ディオンは大剣をとっさに逆手で抜き放ち、狼を切り伏せる。腰の後ろから発射された鉄塊は、そのまま地面を斜めに穿ち、土塊として吹き飛ばした。重過ぎる重量は、その質量もあいまって中途での停止が出来ないのだ。

黒い何かを撒き散らしながら、斬られた人外の姿が霧散する。周囲を見れば、すでに囲まれていた。数は、およそ三十程度。にわか

に騎士達が驚く声と、子供達が怯える声が耳に届く。

「人外か……！ 各員、戦闘態勢を整えろ！ 来るぞ！」

女騎士が馬から降りて、号令をかける。騎士達はそれでようやく、己の得物を抜いた。

そして、金髪の女騎士は腰から抜き放った青い両手剣を“起動”させた。

「駆けろ、“旋風”よ！」
ヴィルベルヴィント

空のように青い剣身に、鏑元から切っ先まで細い隙間が入っている。
スリット

（何だ、あれは？ 二又の剣？ それに、あれから感じる霊圧は……）

彼はヴィルベルヴィントと呼ばれたそれが発する力に、覚えがあった。

「まさか、魔導器か！？」
アーティファクト

それは魔導工学の産物である。使用者の精神同調により内包された概念を起動させる、個人で運用できる特殊な兵装。専門の学者に

よれば、単体で戦場のバランスを崩す事が可能だとも言われている。風が吹く。それはアシクロフトと名乗った女騎士の周囲を旋回し、彼女が駆ければ追い風となって手助けし、敵が寄れば向かい風となって押し返す。

自然風を操る女騎士——一方的な戦闘になるのは、自然だったのだろう。

女騎士の剣技と、身のこなしも相俟あいまって一体、二体と確実に仕留めていく。他の騎士達は盾を持っているのに、この女騎士は両手剣一振りですべて戦場を駆けている。

——つまり、それは盾が必要無い事を意味する。風が自然の鎧として機能し、それはまるで剣の舞にさえ見えて。敵の攻撃が、逸れて、鋭い剣閃が閃くと、人外は致命的な損傷に悲鳴をあげ、倒れる事を余儀なくされる。

恐らく、とディオンは思う。この女騎士に飛び道具の類は意味をなさないだろう、と。

「便利そうだな、それ」

ディオンは二匹の人外を横薙ぎに碎き様、そう声を掛けた。

「一族の誇りだ！ この程度の相手に遅れは取らん！」

「心強いこって」

（しかし、こう数が多いと押し負ける可能性がある）

何にしろ、戦いは数である。一人に対して二人でかかれば、難なく倒す事が出来る。加えて、彼等には子供を守ると言うハンデもある。

「……ジリ貧か」

当然の帰結。

見れば、周囲の騎士達もその数の多さに何人か手傷を負い、倒れている奴も見受けられる。確かに、子供も合わせてこれだけの人数だ。寄って来る人外も、これだけ餌が多ければその数も多くなっている。当然なのだろう。

(なら……)

ディオンは決断した。生き延びる為の決断である。それはここに
いる誰も彼もを、死なせないという意味を持っている。

「退路を開く。おい騎士共、街まで撤退するぞ。怪我人乗せて馬を
引いていけ」

「何だと？ いや、今は子供達を逃がす事が最優先されるか」

「そういう事だ、金髪。俺とお前で殿を務める。敵を食い止めるぞ」
しんがり

「フン。私はともかく、お前に何が出来る。そもそも、衛士が騎士
に指示を出すな」

ディオンは大剣を諸手で振り回し、時に地面を抉り、時に樹木ごと
と敵を斬り伏せていく。嵐のような剣風が、近くの草木を薙いで根
こそぎ吹き飛ばす。一振りで三体を破壊するその戦いは、女騎士に
負けじと戦場に風を生む。

「ヴィルベルヴィント。古代フェニキア文字で旋風を意味する言葉
だな。まあ“旋風”程度なら、俺にも造れる訳だけど」
つむじかぜ

皮肉げに口元を歪ませて、彼は白い女騎士を見た。

「下らん。それに、品の無い戦い方だ」

彼に背を向け、横顔だけを肩口から覗かせてそう吐き捨てる。

「戦い方に上品も下品も無いだろ。どっちが強いかわかった」

大剣を盾に、正面からの人外の攻撃を防ぐ。

(距離が近過ぎる。剣では対応出来ない)

そう判断して格闘に切り替え、人外の腹を蹴って距離を離す。

「……貴様、誇りは無いのか」

「生憎、そんな余計な荷物は持ち合わせてないな。荷が重いと、動
きも重くなっちゃう」

言っている間に、敵の包囲に穴が開いた。

街への方角、アルテリア王国の玄関口、テルマビスタへ続く地道。

「行けよ、騎士共」

「お前が命令するな。ウェルナー！ 子供達を連れて街へ戻れ！」
背を向けあう二人の間を、馬に乗った騎士と子供達が駆け抜けて

いく。その後を数匹の人外が追う。

（無事に戻ってくれよ……）

街まで行けば、きっと人外は引き返す筈だ、とディオンは見ている。それは今までの経験から導き出される、人外の習性を良く理解している証だった。

「クッ、このままではキリがないな」

白騎士の表情に疲弊の色が見える。

（ともかく、子供達を逃がすという目的は果たした。後は……）

「後は、俺達も逃げるだけだな」

「騎士である私が敵に背を向けるなど!」

同時に襲い掛かってくる人外に、ディオンは左腰のナイフを抜いて対応する。

「誇りつてのはそういう時に邪魔なんだよ。生き延びる為に必要なものじゃない。むしろ邪魔だろ」

「……っ、いちいち気に食わない男だ、貴様は!」

白騎士の罵声を号令代わりに、町へ向かって駆け出す。

「そう言うな。ところで、謝礼は出るのか?」

「うるさい!」

女騎士は顔を嫌悪に歪ませる。ディオンは、腹が減っているのを思い出しそうになって、それをどうにか頭の隅に追いやった。

第二章 姫君の決意（前書き）

ディオオンが未成年誘拐事件を解決している一方、アルテリア王国の首都では大事件が起きようとしていた。

第二章 姫君の決意

時刻は深夜で、日付もじきに変わろうという時間だった。デリオン達が町へ辿り着くのと同時頃、遠く離れた王国——同じ国内である——の首都では、静かに佇む巨大な城が、淡い月光を浴びてその輪郭を蒼く浮かび上がらせていた。

アルテリア王国首都のシンボル、シャントルイユ城である。ここには国の王族や王族公爵が集う、国の中枢だった。城を囲むように城下町が発展し、それを見下ろすように中心に高く聳える、白い石膏と煉瓦で造られた、壮麗な城だった。政治や貿易、経済状況を定める機能を持ち、また、陽の光届かぬ暗い場所では民を傷付ける、いわゆる悪党も蔓延る——城下町。

城の周囲には溝が掘られ、地下水がそれを通して城下町へと流れていく。溝に接する城壁は高く、よじ登れるような突起も無い。ただ、上部からは弓矢を射る事の出来る物見台が多くあり、監視の目も厳しい。

加えて教会の聖堂騎士団という、制服と甲冑に身を包んだ騎士達エーデル・リッターが城下町を巡回警備し、城内には王族の直衛騎士、誇り高き騎士が配置されている。弓兵や従士、修道士も城外からの襲撃に備えて各所に配置された、文字通り鉄壁の要塞。

厳格な王と王妃の間に生まれた第二子、王位継承権第二位の姫：
：カタリナ・シャントルイユと言う。

カタリナは、城の上階から空中回廊を渡った場所にある別棟へ隔離されていた。歳の頃は十七だった。幼い頃から、様々なものが他人とは違う故の境遇だった。その高貴な身分も当然ながら、カタリナは色素欠乏症であるが故の異様を持つ。絹糸のように白く滑らかな髪、白い肌、白い眼……何にも染まらぬ色で、また、全ての色の基となる色。何にも染まらぬとは即ち何者にも屈さず、何者も寄せ

付けないが同義であるようだった。

カタリナは腰までである己の長い白髪を、指に軽く巻き付ける。石壁に開けられた丸窓には十字格子が嵌められており、開ける事は出来ない。幽閉されているのだ。カタリナは髪を弄りながら窓際に寄り、星空を見上げた。

（お父様……）

ざわと、嫌な予感が彼女の胸中に漂う。窓辺の壁に細いその身を預け、ふんわりとした薄赤い、一繋ぎの夜着に目を落とす。上等な絹で織られた、市井の者には手が届きそうにない高価なものだった。（やはりお父様は、隣国シルメリアと戦を起こすおつもりなんだわ）カタリナの父、シャントルイユ国王は野心家として知られる。東洋の島国、倭国と秘密裏に協定を結んで隣国シルメリアへと侵攻する。それは現在、城下町でまことしやかに囁かれているという噂だった。

シルメリアは蒸気機関の発達が著しい。恐らく、それを手中に納めんが為の戦だろう。カタリナが教育係に聞いた話では、蒸気機関は熔炉に石炭をくべて水を蒸発させ、その水蒸気を動力に変える新型の機関だと言う。

その技術を軍事転用すれば、恐らくこのユーフォリア大陸の勢力関係を揺るがす――どころか、大陸制覇も不可能ではないのではないか。そう睨んだが故の、根拠のある噂であるらしかった。

（それは諸刃の剣だというのに、お父様は私の意見など聞き届けてはくれない……）

カタリナは、どちらかと言えば平和主義者で、父の策によって失われる人命、更に広がる戦火を思い、胸を痛めた。どうにかして止めさせようと進言し続けた結果、疎まれ、王族でありながら異質であると蔑まれる事もあった。下賤の者に、何故に情など持つのかと。

憂いに満ちた白い横顔を、月光が照らした。すっきりと整った目鼻立ち、月光をそのまま閉じ込めたような眼、肌、すらりとした首

筋。その美貌は成る程、王族の高貴さを醸していた。

背後で、何かの物音。

振り返るも、薄暗い室内には何の変化も見当たらない。

(……何か、いる?)

注意深く辺りを見回す。床の赤い絨毯、金で縁取られた黒の卓台、椅子、煉瓦造りの暖炉。薄闇に目を凝らしてみるも、どこにも変化は無い。

「――姫様ー!」

突如、そう叫ぶ声が聞こえた。女性の声だ。

(この声は、クレアドール)

カタリナ在教育係にして、直属騎士の顔が浮かんだ。

「クレアドール、何事か?」

カタリナは大きな扉の向こう、空中回廊に向かって声を掛ける。

すると具足が回廊の絨毯を駆ける足音の後、扉のすぐ向こう側で立ち止まり、返答がある。

「申し訳ありません、城に賊が侵入しました!

すぐに片付けますので、どうかご安心を」

可憐な見た目に反し、賊と聞いて驚くような弱さを持ち合わせていないカタリナはすぐに聞き返す。王族であるが故、いつ命を狙われてもおかしくないと教育を受けていた為だった。

「賊の目的は、お父様か?」

「王族のおわします階層には常に十数名もの騎士がおります故、易々と近づく事は出来ません。こちらに向かったという事も聞きませんので、恐らくは財宝目当てかと」

財宝と言われ、カタリナは目を見開いた。城の宝物庫には、古来より大切に保管されてきた遺産、タブラ・スマラグディーナが安置されている。

「まさか、狙いは遺産!? クレアドール、あれを賊に渡してはならん!

何としても防げ!」

「はっ、承知致しました、姫様。では……」

回廊を一人の兵士が駆けてくる音。どうやらクレアドールへの伝令らしい。彼女の驚く声が小さく聞こえる。

「――姫様、急ぎお召し物のご仕度を！ 城内に火の手が上がりました故、一時ここより離れます」

カタリナははっと眼を見開き、問い詰めるように聞き返す。

「何と……！ 火の手はどこから！？」

「東棟の食糧庫、西棟の兵宿舎、南の武器庫からになるようです。お早く」

このシャントルイユ城は、昼間であれば東西南北の四方に向けて十字に、城壁から溝を渡す橋が架けられている。夜間の間のみ、北と南の渡し橋だけが架けられる決まりになっていた。

南は既に火の手があがっているという事の為、北側の橋から落ち延びる道しかない、と考えた。カタリナは、常日頃から勉強に意欲的であった。そのためクレアドールから、いざという時の逃げ延びる際に必要な用意と、落ち着いて行動しなければという心掛けを教わっている。行動は速かった。衣類架けから膝まである、生地の厚い白のローブを取り出して夜着の上から羽織る。動き易い革底の靴を履き、カタリナはドアを開けた。

そこには既にクレアドールともう一人、金髪碧眼の男性騎士がいた。彼女の部下だ。二人の騎士はカタリナが姿を現す以前からそうしていたように、床に膝を付いて頭を垂れていた。

「姫様、地下宝物庫の遺産はいかがなさいましょう？」

頭の後ろで長い銀髪を一条に纏めた女騎士、クレアドールが顔を上げて問い掛ける。

「良いか、直衛騎士^{エーデル・リッター}の面々は出来る限り城内に残って、皆の避難を優先するように伝えろ。ハンス、貴公は他の騎士を率いてお父上とお母上を城外へ導け。クレアドールは私と共に宝物庫へ」

カタリナの発言に、騎士二人は「承知致しました」と答える。ハンスと呼ばれた騎士は踵を返して駆け出した。カタリナらも後に続

く。見上げてても到底手が届きそうにない、高い天井には煌びやかなシャンデリアが下げられていて、広い廊下を照らしている。

走っていると、少しして、階下から悲鳴が聞こえた。絹を裂くような、しかしすぐに途切れたそれは、女性の断末魔だった。金色の胸当てと具足を付けた、赤装束の女騎士――クレアドールは左腰に差していた片手剣を抜く。白銀の直剣。

「姫様、ここから先は敵との戦いが避けられぬかも知れません。

どうか私の後ろから離れぬように」

心配げに掛けられたその言葉に、カタリナは気丈に返した。

「進めクレアドール。私とて術式による多少の援護は出来るだろう」
白い眼に宿るのは、強い意志だった。カタリナは王族である為、自ら民の前に立つべきであると自負している。そしてそれを守るのが、彼女達直衛騎士の責務だった。

クレアドールはこの主の為ならば、命を投げ出す事すら本望だと思っている。己が主を背に庇いつつ、信念の女騎士は駆け出した。

* * *

赤い絨毯が敷かれた廊下を走り、先にある階段を目指す。廊下の幅は広く、五リール近くはある。豪華な照明器具は高い天井から吊り下げられ、廊下をくまなく照らしていた。

「……っ！ 賊か！」

クレアドールの視線の先、階段を駆け上がってくる黒装束に身を包んだ、二人の人間。性別は定かではない。目元を覗いて、顎から頭の天辺まで包む頭巾ずきんもあいまって、不気味な様相。

両手には弧を描くように伸びた短剣が握られている。敵意。

「来るがいい！」

片手剣の柄を顔のそばに構え、女騎士は駆け寄る。

「あの装束……もしま？」

カタリナは頭の中で、一つの仮説を立てた。昨今、社会の裏で、

暗殺者という人殺しが多数、動いているという噂があった。その集まりである暗殺者組織……悪魔崇拝者や邪神信奉者が主要構成員だと聞いており、その特徴と類似する点が多かった。

背に薄ら寒いものを感じながら、カタリナは術式の起動式を紡いだ。

「——っ」

脳内で構築された起動式から展開式が連なり、ユリシイズ文字の演算が行われると、薄紫の半透明な、紋章が目の前に描写された。それと同時に、カタリナの視線が注がれていた片方の暗殺者は、その右腕を——あっという間に氷塊に包まれた。

一瞬の出来事。術式とは、こうした現象を可能とする不可思議である。氷塊はあっという間に成長し、間近にあった石壁と接着していった。

「ヌッ……！」

暗殺者の目が驚愕に見開かれる。身動きが取れない。

「刹^{セツ}！」

そこへ、脳天へと振り下ろされる白銀の片手剣。防ごうと左腕を翳すも、呆気なく両断されて血液と脳漿、内蔵がどちゃつと音を立て、床の絨毯を殊更赤く染めた。

絶命した同胞を振り返りもせず、残された暗殺者はカタリナに向けて投剣を投げ付ける。

「しまっ、」

クレアドールは、一瞬とはいえ敵を殺す事に集中し、それを許してしまった。カタリナへと飛ぶ、毒塗りの短剣。しかし冷たく、硬い音が廊下に響く。

それは、見開かれた白い眼の前で氷の壁に阻まれ、床へと落下した短剣の音。カタリナの周囲では、冷気が白い息を吐いて渦巻いている。氷の女王という形容がぴたりと当てはまる。

クレアドールはそれを認めると僅かに嘆息し、暗殺者へと切りかかった。応、という掛け声。軽やかに身を翻し、それを避ける黒装

束。後方へと飛び退いた暗殺者は形勢不利と見たか、背を向けて階下へと駆け出した。

それを許す程、甘い姫君ではなく、頭部を丸ごと氷塊に包まれた暗殺者は、しばらくはじたばたともがいていたものの、やがて窒息した。その脇を駆け抜ける、白と赤。

「お見事でございます。姫様」

「世辞はいらん。しかし久しぶりで加減が解らぬ、巻き添えを食わぬようにな」

そう零すカタリナ表情は、硬い。普段は穏やかで、柔和に微笑んでいるこの姫君は、こうして仮面を被り、王族としての責務を果たそうとしているのだ。

「承知致しました」

クレアドールは、先を走る主君を包む白い凍気に頼もしささえ感じて、綻ぶ口元を戒めるようにきゅっと引き結んだ。

火の手は治まる事を知らないように、上階へと向けてじりじりと舌先を伸ばす。夜の闇を照らす、大きな篝火となっていた。夜空に浮かぶ双子の月は、蒼い。

カタリナも、迅速な行動が無ければ今頃はあの部屋で火炙りにされていただろう事を考え、ぞっとする、と唇を噛んだ。

「先ほどの黒装束、恐らくは暗殺者組織の手の者であろう？」

駆けながらの問いに、クレアドールが答える。

「はっ、その通りだと思われます。」

恐れながら申し上げますと、北の門に待ち構えている可能性も高いかと」

「うむ。あそこを抑えれば完全にここは孤島となる。後は火に焼けるのを待つばかりだろう。であれば、長らく使われていなかった地下水道を通して城外へ……？」

カタリナはそこで、はっと口を噤む。

数多の監視を潜り抜けてくる暗殺者が、果たしてそれを知らずに

いただろうか？ 逆ではないか。恐らく、その地下水道を通って城内へと潜り込んだのであれば。

「クッ、そうか。確かにそこからなら、監視の目も護衛の目も潜れるというもの。」

わざわざ北門だけ残しているのは、恐らくそこを通るであろう王族を根絶やしにする為の誘い罠と考えれば納得がいく。

しかし、そうだとしても、遺産だけは渡す訳にいかない――

王国の遺産、タブラ・スマラグディーナは公国発祥の、御伽噺おとぎばなしとも思える程太古の遺物。しかしそれが非常に貴重な“太古の遺産”である事は疑いようのない事実だった。初代国王はあれを使って、たった数刻で山を切り開き、水脈を引き、荒れ野を更地に変えたという。

術式に造詣が深い者であれば、それをただの御伽噺と嗤う患者はいない。

一階の大広間から続く、王族の持つ鍵だけが開けられる大きな錠前のかかった両開きの扉。

カタリナはそれが、存在しない鍵の錠前だと知っている。これは、術式でしか開けられない類の封印を施された錠前だ。しかもその術式は王族しか継承していないという特殊な開錠方法。いつ、誰が造ったのか定かではないが、それを頭の隅に追いやり、カタリナは錠前に手を翳す。

「……………」

術式による干渉で、薄紫色の紋章が掌の前に浮かび上がる。がちり、という音と共に錠前が解かれた。扉を潜り、内側から門かんぬきで閉める。こちらは人力だ。

二人は進み、途中にある嚴重に封鎖された扉を何度も潜り抜け、薄暗い通路を潜ってようやく宝物庫へと辿り着く。そこで、クレアドールは幾度目かの嘆息。目の前には山を思わせるほどの金貨と金銀細工の装飾品が並んでいる。

「まさかこれほどの財産が、この国にあるとは……………」

「戦争の為に蓄えているのよ。お父様は、まだ足りないと言っていたわ」

ここには二人しかないからか、カタリナの口調が少し砕けたものになる。未だ硬い調子が抜けないのは、緊張を解きたくないからだろう。

「国王陛下が……やはり止めさせられないのですか、姫様」

「ええ、私ではダメだった。お母様も取り合ってくれない。あの人はお父様の言う事を聞くだけの、人形になってしまっている」

白い姫はそう返し、宝物庫の最奥部へと足を進める。

「……あった」

カタリナがそう言って四角い箱の中に安置されていた、一つのペンダントを拾いあげる。一見すると透き通る蒼色をした、角柱状の宝玉がぶら下げられている普通のペンダントだ。

それを首に掛けて、服の内に忍ばせる。

「それが、タブラ・スマラグデイナーでございますか？」

実際に眼にするのは始めてなのか、クレアドールがそう問い掛ける

「ええ、現存するアーネンエルベの一つよ。クレアドール。この先、どんな事があるかと、これを誰かに渡してはならないわ。例えば私に何があるとも」

女騎士は膝を付き、頭を垂れる。

「お任せを。宝玉も御身も、纏めて守り通してご覧にいきましょう」

「ふふ。相変わらず頼もしいわ。よろしくね」

少しだけ笑う事が出来て、今はそんな場合でもないのに、と口元を引き締めた。

二人は宝物庫を抜け、二階へと舞い戻る。しかしその大広間で目にしたのは、周囲を取り囲む大勢の暗殺者達であった。

「これは……まさか、いや……やはり狙いは遺産だったか」

暗殺者の群れが、割れるようにして道を開ける。そこから現れたのは、一人の男だった。

赤い。まるで炎のような深紅色の戦闘用外套に身を包んだ、細い目をした柔和な顔つきの男。しかしその右手には、銀色の爪が五指のように備わっている。下を黒い長足服に包んだ男は、穏やかな声音で語りかけてきた。

「やあ、初めましてお姫様。意外に行動的だね君は。おかげで脅迫する手間が省けたよ」

「貴公は誰か？」

「あ、俺？　俺はね、暗殺者組織の者だよ。

これでもちよつとは偉い立場なんだぜ？」

軽く両手を開いて、己の立場を誇示するかのように語る、赤い男。
「名乗れ」

「うーん、追い詰められてるってのに、偉そうだなあ。ちよつとき、自分の立場解ってる？」

男は不満そうな声をあげる。カタリナ表情は硬い。

「解っているが故、城を焼いた貴公らに対して私は怒りを抑えきれない」

ゆっくりと男が歩み寄る。間にクレアドールが立ちはだかった。

「近付くな、下郎」

片手剣を抜き放ち、男に突きつける。男がその剣を見て、目を見開く。蛇のような瞳を持った碧眼。

「ほお。これ魔導器か？　ちようど良いや、それも欲しいな」

右手で剣身を握りこむ。銀の爪が剣と擦れ合う、がりがりという金属音。信じられない行動に、クレアドールは驚愕した。だがそれでも剣を渡すまいと、睨み付ける。

「近付くなと言った！」

途端、起動された術式が男の体を押し退けた。よろめきながら後ずさる、赤い男。

「お、つとつと、何だ今の。四大元素が使われてないのか？」

「……っ！」

剣を脇構えに、油断せず周囲を見やる。数が多い。突破は困難だ

と判断。敵意を露にする暗殺者達。武器を取り出し、金属の擦れる音が響く。

「静まれ」

そう、場を制したのはカタリナ・シャントルイユ。

「貴公らの目的は何か、申せ」

赤い髪、赤い外套の男は薄く、口元を歪めた。厭らしく、暗いものを含んだ笑み。

「戦争を起こす事さ。俺達はそれが商売だからさ。」

商売する場所がなくなると困るんだよ姫様」

カタリナが言葉に詰まる。代わって、クレアドールが答えた。

「まさか、狙いは姫様……いや、姫様を始めとした平和主義者達か！？」

男はさも馬鹿にしたような嗤い声をあげた。単にクレアドールを嘲笑うようにも取れるし、事実を小馬鹿にするそれにも取れる、嗤い。

「ハッハッハ！！ ご名答その通り！ こんな事が国外に知れたら大変だ！ 今までどうにか、かろうじて！ 戦争を起こさないようにと引き止めていた臆病な側近共がいなくなったら、あの暴れん坊な国王を止める奴はいない！ 邪魔者がいなくなったら野心家の王様はどうするのかなあ！？ 嗚呼、当然！ 戦争だ！

戦争が起きて、俺達は馬鹿みたいに儲けられるのさ！ 今までの国境付近で起きてた小競り合いとは違う、本物の、国同士がぶつかり合う戦争！ 楽しみじゃないか、アハハハハハ！！」

熱に浮かされたように話す男へ、女騎士は侮蔑の視線を投げる。狂っている、と内心で呟き、クレアドールは顔を顰めた。

「戦争を起こすのが貴公らの願いか？ ならば何故、城に火を放った」

そう問い掛けるのはカタリナ。その表情は険しい。

「ああ、それか。それはついで……って事にしとこうか。いけないね、どうにも俺は口が軽くてさあ！」

男は、深く息を吸い込む。興奮した気分を抑えているようだ。

「……ふー。まあ、とにかくだ。王様に戦争を起こしてもらい——十中八九、負けるだろうがね。そうして、戦争に負けたこの国は、やがて大陸を制覇しようとしているシルメリア国王に利用される。そうして、終わらない戦争が始まる」

「なっ、何だと!?!」

二人は同時に驚愕し、そして同時に、絶望した。これは既に暗殺という視野の狭い話ではない。国家間の戦争を幫助する行為だった。「さあ、そろそろ時間もなくなってきた! 出入り口は全て封鎖されて、正にここは逃げ場のない地獄! どうする!?! さあ、どうするんだ!?!」

半狂乱のように声を荒げだした男にそう問われ、カタリナは冷静に考える。

(逃げなければ。何としてでも)

「殺されるか!?! 大人しく!?! それとも焼け死ぬか!?! 命乞いか!?!」

なあ、どうするんだ!?!」

カタリナは決意した。

(恐らくハンスは、上手く非常階段から父母を逃がしてくれているだろう。そう信じる。であれば、ここより階上に人は存在しない。王族が占有する階層であるが故に。直衛騎士が暗殺者に遅れを取るとは思いたくないが、もしも、という場合がある。

干渉は最低限に抑えよう。皆が逃げる時間を十分に稼いだか?

不安要素はあるが、しかし、こうなってはもう戦う以外にない)

カタリナの周囲から、白い凍気が地を這うようにもうもうと広がっていく。

「クレアドール。下がれ」

「出来ません、御身が危険に晒されます」

「下がれ、と言っている」

クレアドールは振り返り、見た。

冷たく、女王のように威厳ある佇まいをした、白い姫君。

「卑賤なる暗殺者共。貴公らの最大の誤算は、この私を見くびった事だ」

冷気は止め処なく湧き上がり、床を埋め尽くすと、やがて室内を満たした。クレアドールは姫君の背後に控える。カタリナは、赤い男を毅然と指差した。

「ここが地獄と言ったな。貴公の言うそれは焦熱地獄インフェルノであろう。

ならば私が見せてやる。

時間すら止めるとされる魔導術式、凍結地獄ニヴルヘイムというものを」

彼女だけは、この劣勢に置いて些かの気後れもない。ただ、自分を信じて戦う。

姫君は、まるでそう在る事が当然のように厳然と胸を張って敵を見下す。女騎士は、主君の凛々しい後ろ姿に感動すら覚えていた。

霜が足元から這い上がる。すでに空気中の水分は彼女の支配下にあった。あまりの冷気に皮膚は固まり、筋肉は硬直し、間接を動かすもぎしぎしと悲鳴を上げて限界を悟らせる。わずかな身動きすらままならないほどの冷気。床の絨毯も、壁も、天井さえ白く染まっている。

そんな中、姫君の周囲だけが別世界のように、赤い。ぽっかりとそこだけが今までと変わらぬ環境であるように。

「魔導術式……テメエ、平和主義者の頭なクセしてえげつないモノ持ってんじゃないかねえか」

そう答えるのはあの赤い男だ。この状況で何故か男だけは、術式の影響を受けていない。

「貴公らのような者から最低限、身を守る術である。尤も、この状況で貴公が言えた事でもないと思うがな」

数に任せて女二人を蹂躪しようとしていたのだ。そう言われて男はにやりと口元を歪ませた。周囲はすでに白銀世界へと変貌している。数多の暗殺者も、その姿を白い彫像へと変えていた。

声という、喚かせる為の機能は、まず最初に肺ごと奪っている。
室内のあらゆるものに霜が付着し、時間が停滞しているようにさえ
錯覚する、静かで、美しい光景。

「っ、う、」

カタリナが膝を付く。消耗しているようだ。慣れない戦闘に慣れない運動、彼女のか弱い肉体が悲鳴をあげている。

「姫様！」

「あーあ、無茶するからじゃない？ あんまり張り切るのも考え物だな、姫様」

「この状況で、貴様はまだ齒向かう気か？」

クレアドールはカタリナを庇い、剣を構えて前に出る。

「齒向かう？ ああ、お前のソレに興味があるな、俺は。」

ちよっくらダンスのお相手でも願おうか」

そう言って、男は右手の爪手甲の感触を確かめた。

「さっきのは仮想第五元素^{エーテル}だろ？ それを扱うなんてなかなか珍しい魔導器だ。組織への良い土産になる」

凍結地獄の侵食は止まっている。それを確認したクレアドールは、氷彫像の中心に立つ赤い男へ向かって駆け出した。

「――ヤッ！」

片手剣を袈裟に振り下ろす。男はそれを手甲で受け止めて流し、クレアドールの腹を挟ろうと爪を走らせる。それを左腕の盾で防ぐ。一旦後ろに下がり、間合いを測った。

（小回りが利くな。力は五分のようだが、近接距離では防戦一方になっってしまうかも知れない）

「ほら、ボヤツとするなよ」

男が走り寄る。地を這うような低い姿勢から、爪手甲が振り上げられた。それに盾を構えるも、待つ衝撃はやって来ない。

代わりに、右足に熱く鋭い痛みを覚えた。短く呻く。男がいるであろう場所を盾を引き様、剣で難いだ。しかし、信じられない事に、男はそれを左腕で受け止め、血を流しながらも尚、右の爪を突き出

してきた。どうにか首を捻って避けるも、相手は手首を返すだけで自分の首を刎ねる事が出来る。それを察した女騎士は、自分から床に倒れ、転がりつつ起き上がった。

「はっ、」

「ほお、良いね、オマエ。やるじゃん」

男は、感心したように女騎士を深く見入る。今のは予想外の反応だったようだ。

「綺麗な戦い方しか出来ないかと思えば、なかなか」

対してクレアドールは、内心焦っている。近接距離では完全に負けている。このまま続けばいずれ敗北するだろう。実感を伴って押し寄せる、絶望感。

そこへ、一人の兵士が姿を現した。

「姫様！ 騎士団長！」

先ほど、クレアドールへ伝令に来ていたハンスという金髪碧眼の青年騎士。

「ハンスか！？ そいつに気を付けろ、近付かれると厄介だ！」

生真面目な騎士である彼は、左腰から剣を抜いて男を回りこむように歩き、クレアドールの傍へと辿り着く。すぐさま、詰問された。

「国王陛下と王妃様はどうした？」

「陛下はご無事です。しかし、王妃様が……敵の手にかかり、お命を……」

膝を付いていたカタリナの眼がはっと見開かれる。クレアドールは歯を食い縛り、悔しさを噛み締めていた。

「ンー、二対一かぁ。何か姫さんもそろそろ持ち直しそうだし、ここは一旦帰るかな」

ぼんやりと左手で頭を掻きつつ、そんな事をぼやきだす赤い男。どこか不真面目さが漂う仕草だ。

「じゃ、そういう事で！」

ぴしっと左手を立てて、踵を返して走り去る。呆気に取られた一行は反応が遅れ、まんまとそれを許してしまった。

「ま、待て！」

「……追うな。あの男に勝てる見込みは低いぞ」

呻くような声に振り返れば、カタリナがどうにか立ち上がっていた。クレアドールが傍に寄り、支える。

「ハンス。お母様が、死んだのですね？」

「はい、姫様」

「そう、ですか……」

涙を流すかと思っている二人に、カタリナは言った。

「ハンス。城の様子は？」

「はっ、すでに殆どが焼け落ちており、北門からしか抜ける道がございせん。そこだけはどうか死守しました」

「よくやったぞ、ハンス」

クレアドールはそう言い、カタリナを促す。

「姫様、参りましょう。今の姫様には静養が必要かと思われます。

ここから最も近い町は……」

三人は歩き出す。クレアドールの言葉に、ハンスは言った。

「ここより北にテルマビスタという町があります。そこに私の生家も御座いますれば、姫様も落ち着いて休まれる事が出来るかと」

「テルマビスタ。そうか、あそこはアシュクロフト家が治めていたのか」

「恐れながら、汚い町で御座います。姫様のお気に召すかどうか……」

「構いません、境遇に四の五の言う程、子供ではありません」

三人は北門から城を出て、用意されていた馬車に乗った。

第三章 誇り（前書き）

ディオオン達が未成年誘拐事件をどうにか解決した、その後。

第三章 誇り

過去、大きな戦いがあった。

互いの文化の相違を発端としたそれは、ユーフォリア大陸全土を揺るがす程の大きなものとなり、長きに渡り——国同士を疲弊させる要因となった。

その際に使われた、多くの魔導器や古代遺産、魔導術式という強力な戦闘手段は殆どが失われ、少数ながら残存したものは聖堂教会によって厳重に管理されるようになった。

シルメリア国が保有する造船技術やヴィルヘルム帝国の火炮技術などは、これを発端として生まれたという。

多くの人命が失われ、人類史上最も愚かな行為であると揶揄される事もあった。

以来、この戦いを「魔導大戦」と呼ぶようになる。

これはユーフォリア歴史書にも記載されている史実として、知らぬ者はいなかった。

大陸の勢力図を大まかに分けると、大陸の半分以上、北西領土を占めるヴィルヘルム帝国がまず挙げられる。

ここでは主に鉄鋼業が栄え、特に鉄筒に火薬と砲弾を詰めて撃つ、大砲が軍事的脅威として知れ渡っている。

雨のように降り注ぐ砲弾の弾幕を、未だかつてかいくぐった者はいない

そして、この帝国に次いで巨大な、大陸南西に位置する造船業を得意とするシルメリア王国は蒸気機関を駆動部とした、飛行船という空飛ぶ船を生産した。その技術は未だ安定していないが、これは空中からの襲撃を可能とし、故にその製造技術を独占保有している。そしてアルテリアは魔導器や術式といった古来の技術を更に磨き上げ、術器や術式機関等を発達させた。これには天候や地形等に大

きく左右されるものが多いが、得意な条件下であれば他国にもひけを取らない戦力を保持出来た。

現在の情勢は、大きくこの三大国に分けられる。

大陸制覇という自己満足的な王族のチェスゲームによって、各所で小規模な戦闘が引き起こされはするものの、未だ本格的な戦争に成長するには至っていない。

しかし近年、それを助長する組織が現れた。

暗殺者組織、ウロボロス。

彼等は各国の首脳に取り入り、又は暗殺し、陰謀を企てて戦争を引き起こそうと画策している。

第二次魔導大戦は、すぐそこまで迫ってきていた。

* * *

暗い森の道を駆け抜けていくと、やがて街の明かりが見えた。煌々と瞬き、星灯りの下、家々が人工の、ボンヤリとした光を灯している。

白ずくめの女騎士と、黒ずくめの男が、街と森とを隔てる石造りの門へと辿り着き、それを潜った。

それと同時に、女騎士は門の傍らにいた部下に向かって叫ぶ。

「ウェルナー、門を閉めろ！」

まだあどけなさの残る騎士は両開きの扉を閉め、門かんぬきを入れる。女騎士——クリスティナはそれで人心地ついたのか、膝に手をついた。息が荒い。

「ん、はあっ、」

「どうした金髪、もうバテたか？ 意外に体力無いな」

口元をにやけさせて、今しがた女騎士と門を潜った黒髪、黒ずくめの男がそう問いかける。ツンと立った髪とバンダナ、腰の大剣が彼のトレードマークだ。

着ているコンバットコートの胸元を少し開けて、風をいれている。ダブルボタンの両前型という、機能を重視した造りだ。

「う、るさい、この、体力馬鹿が」

恨めしそうに、頭一つ分は違う長身の男を睨み付ける。

潮風の匂いが鼻に届く。歓声に振り向けば、攫われた子供達が帰ってきた事で、周囲にいた親達が我が子を抱き締めている光景にデ-ionは目を細めた。

港町テルマビスタは、大陸内部への玄関として、日持ちがするよう塩漬けにした魚介類を仕入れ、送る漁港としての役割を持つ。

貴族であるアシュクロフト伯爵公家が治める、貿易取引の盛んな国の要所であった。

ここからであれば、南に首都アルテリアを認め、東に小国サバステイオンへの道が伸びている。

北へ行けば、隣国シルメリアの国境へと辿り着く。今しがた走ってきた道である。

「さて、無事に辿り着いた事だし、メシにするか。ああいや、その前に……」

そう言って黒装束の男、ディオン・アウフシュナイターは金髪的女騎士に向かって掌を差し出した。それが意味するところは、つまり金である。

試すように。

「謝礼はいただけないのかね、騎士殿。これでも結構な働きをしたと思うんだが」

試すような口調。口元は変わらず、薄い笑みが張り付いている。断れば狭量と思われ、かと言って思い通りに謝礼を渡すのもプライドが許さない。

白装束の女騎士……クリステイナ・アシュクロフトは静かに葛藤した。

御家と騎士団の名を汚す事は出来ない。が、この男は先程自分の

在り方を散々に否定したのだ。端正な顔の眉間に皺が寄った。

「隊長、これを……」

門の傍にいた騎士、ウェルナーという少年の面影を持つ騎士が、金銭を入れてあると思われる小包をクリスティナに渡した。

「う、うむ……」

それを受け取る彼女の表情は硬い。

しかし、ディオンはと見れば未だニヤニヤと薄ら笑いを隠そうともしていない。

クリスティナは、頭の軽そうな笑みを絶やさないディオンを睨みつけて――小包を投げつけた。

「このっ！」

――気が強い少女である。生来のそれを理屈で押し込めるのは、まだ少し難しいようだった。ディオンは右手でそれを受け取り、意外な重みに少し驚く。恐らく金貨だ。

まともに当たっていれば鼻骨ぐらいはいつていたかも知れない。

「あぶねーだろが、ったく、まあ、いいけどさ」

「薄汚い衛士風情が、貴族である私に生意気な口を利くな！」

ディオンは呆れたように頭を搔く。

「はあ、そうですか。貴族ってのは皆そうだ。

身分を傘に着て平民をこき下ろす、自分勝手な連中――ってな」

ディオンは、自嘲するように口元をつり上げる。

自分勝手なのは俺も同じか。否、そうじゃない人間なんていない――と。

気に入らない気に入らない、とクリスティナが口にして。

「即刻失せろ！ その顔を二度と見せるな！」

そう怒鳴った。

「毎度あり」

黒い男はそう言い残し、踵を返して街路灯に照らされた、赤茶の煉瓦道を歩いていく。

気温は暖かい。日中になれば強い日差しが肌を焼くであろう港町

で、ひとまずは腹ごしらえを——と考えた。

ディオンは金髪の女騎士を、自分とは合わない人間と分類し、空かせた腹を満たすべく食堂へと向かった。

* * *

両開きの木造扉を開けると、いらっしやいませ、と店子の挨拶が掛けられた。

店内も木造でロウソクを光源としたランプの光が満たされている。未だにガス灯は貴族にしか普及していない、高級品である。

ざわざわと騒がしく、雑多な物音が徘徊している。繁盛しているようだ。

時折、酒飲み共の大きな笑い声が店内に響く。だがそれも夜の証、ディオンの慣れたものだった。

思わず、気分が高揚して口元がつり上がる。旨いメシが食べそうだ——という予感。

ディオンは店内でも入り口に近く、隅の方にある丸い木の食卓を選んで座った。

腰の後ろに下げた得物の所為である。鉄塊のような大剣を壁に立て掛け、木組の椅子に腰を下ろす。

「ふー……」

「お客さん、一人ですか？」

丁度良く掛けられる声に、見れば店子の衣装を身に纏った、年頃の娘だ。食卓に水の入ったグラスを置き、品書きを示す。店内の奥にある、厨房。そこを覗く形のカウンターの上に、ずらりと料理の名前が並んでいた。

茶色い髪と同色のくりくりとした眼、衣装を押し上げる胸の膨らみに眼が行く。

（この看板娘かね、なかなか……）

そう値踏みするも、色気より食い気な性格であるディオンはさっ

さと思考を切り替えた。

「ああ。店のお勧めは何だい？」

背凭れに体を預けつつ、陽気にそう返す。

酒も飲もうかと悩んだが、この後の用事もあるので控える事にした。

「トマトとオニオンのスープです。」

ガーリック炒めのベーコンパスタなんかもお客さんには人気ですよ」

そう言ってトレイを両手に下げ、にっこりと微笑む看板娘。

ディオンは嬉しそうにそれと決めた。

「良いね。じゃあそれを、そうだな、五人前くれ」

看板娘の笑顔が固まったのは、言うまでもない。

衛士が大食漢というのはそう珍しい話ではないが、ディオンのそれは少々行き過ぎている感がある。元々、燃費の悪い体だという理由もあるのだが。

「お、お客さん、空いたお皿下げますね！」

ディオンは皿に盛られたパスタを平らげ、こいつもよろしくと店子に渡す。

「ふー、これで三皿か」

トマトとオニオンのスープをまるで水のように一気に飲み干し、食卓の隅に置く。

まだまだいけると腹が言っているので、ついでに頼んだ麦パンを齧りつつ、ディオンは次のパスタを待った。

お待ちどう、と食卓に置かれたのはガーリック炒めのベーコンパスタ。

でん、と鎮座するそれは大盛りらしく、山のようにパスタが盛りれている。

これと同じもののおかわりを、三皿である。これで四皿目なので、周りの客から注目を集めたとしても仕方なく。

——湯気を立てて鎮座する大盛りパスタに。
ディオンは、喜んでフォークを突き立てた。

「ふー、ごっそさん」

またもスープを水代わりに一気飲みし、追加で頼んだペンネも綺麗に平らげてフォークを置く。今や店中の客から好奇の視線で見られているが、気にも留めない。

厨房と食卓を忙しく行ったり来たりしていた店子は、普段以上の働きに少しぐったりした様子でディオンの元へ寄る。

「お、お客さん、凄いね……その体のどこにあれだけ入るの？」

「いやいや、胃袋に決まってるだろ？ おかしな事を聞くなあ」

ですよね、と呟く店子は余計疲れた様子だ。

気を取り直したように、会計表を渡してくる。

「合計でこれだけになります」

「あいよ……っと、」

外套の懷から金銭袋を取り出し、護衛時に稼いだ銅貨と銀貨で支払う。

女騎士の渡してきた金貨は、庶民には少々荷が勝ち過ぎるものだ。こんな場所を出したら店は両替に苦勞してしまう。ディオンとてそのあたりの良識は弁えていた。

壁の大剣を片手で軽々と持ち上げる様に、再び店内の視線が集まる。

「パスタ美味かったぜ、お嬢ちゃん。また来るからよ」

「は、はい、ありがとうございました！」

意気揚々と店を出るディオンに、店子は満面の笑みで出送った。

「ふー……さって。協会に呼ばれてたんだっけか」

腹も膨れた今では気も緩んでいるのか、急ぎの用だというのにディオンはのんびり歩いて町の広場から裏路地に入っていく。

ひんやりとした空気が頬を撫でる。

自然、左手が腰の短剣に添えられた。特注の短剣である。

片刃は通常のナイフと同じ直刃で、峰には鋸のような波状刃が付いている。僅かな光も反射しないよう黒く塗り潰された、異様な短剣。

馴染みの鍛冶師に打たせ、ワイルドナイフと名付けられた、デイトン専用のものである。

先端は鋭利で、まるで斜めにすっぱりと切断されたような切っ先をしているのが特徴だ。握り易さを重視した丸型の柄に丈夫な麻を握って編んだ縄が巻かれ、今はデイトンの手がそこに触れている。刃渡り約三十センチ（センチ）、厚みを二センチも持たせている、何の装飾もなされていない無骨なナイフ。

閉所、遭遇戦での近接戦闘を考慮した装備だ。加えて頑丈で、罅や折れ等とも無縁であるのが、機能性を重視してこれの特徴づけている。

心地良い波の音に耳を傾けながら歩き、しかし決して隙を見せずに、目的地へと向かう。

ここには街路灯が無い為、裏路地という事もありその光も届かない。

……やがて、そこに辿り着いた。

明りの漏れる丸窓から中を覗くと、建物の中には、デイトンが苦手としている部類の人間、衛士協会の頭領がいた。

溜息を吐きつつ、両開きの扉を開ける。

「よう、爺さん。俺だ」

木造の長台の向こうで椅子に腰掛け、書物を読んでいた禿頭の小太りな中年男性はデイトンの姿を見るなり、甲高い声で怒鳴った。

「この馬鹿野郎！ 来るのが遅いんだよ！」

今までどこほつき歩いてやがった!?!」

「いやいや、これでも十分急いだ方だぜ？」

オーバーザ・ライン

国境越えは楽じゃないんだよ」

食堂の件は、急いだ、という言葉の内に入るようである。

「……まあいい、閉めろ」

言われた通りにし、長台まで歩み寄る。足が床を叩く硬質な音が響いた。

「それで？ 俺を呼び寄せた理由は何だい、爺さん」

「フン……お前、ウロボロスって知ってるか」

首を傾げる。

「ウロボロス？ 確かそれって神話に出てくる蛇じゃなかったっけ」

「そうだ、その名を語る暗殺者組織があつてな。」

今回の用件はそいつらから、とある人物を護衛する事になる」

暗殺者組織、と聞いてディオンの双眸が細まる。

「護衛対象は？ それと、依頼主」

「依頼主は、王族公爵のフリオニール公。」

人選は儂の一任だが、条件に当てはまるのがお前しかいなかった」

頭領はそう言って鼻を鳴らし、椅子に背を預けた。

「夜間戦闘任務、加えて屋内戦で十分に戦えるのはお前しかいねえ。」

護衛対象は、リディオ伯爵。この町を治める貴族殿だな」

「……何かキナ臭えな。まあ、どうせ詮索しても無駄なんだろうけど」

解ってるじゃねえか、と頭領が答える。

「報酬は？ それと周囲の見取り図をくれ」

既に用意されていたらしく、長台の下から金銭袋と護衛対象が住む公邸の簡略図が記された書簡を渡される。

「……前金でこんなに？ 何か間違っちゃいねえか」

「その代わり、失敗したらお前の首が飛ぶからな」

成る程、と頷き、それを懐にしまう。

書簡はと見ると、貴族である事を象徴するような豪邸だった。

簡略図でもそれが解る程には、ディオンの知識があった。

「護衛期間は？」

「今日の夜から四日間だ。」

だから伝書鳩で急ぎの書状を送ったつてのに、もうこんな時間になっちまった。

さっさと行け、場所は解るな？」

「ああ。それじゃ、生きてたらまた来るぜ」

「おい、敵は生死不問だ。それとお前はもうなってもいいが、任務は必ず成功させろ。」

うちの信用に関わる。それと勿論、この任務についての一切の情報は口外するなよ」

依頼主が王族公爵様だもんな、と心中で呟き、ディオンは扉を開けて外に出た。

再び、裏路地の煉瓦道を歩く。

（リディオ伯爵か……）

噂では、伯爵家は軍人一家であると言う。

貴族は率先して民を導く者であれ……

ノブリス

オブリージュ

“高貴なる義務”というものだ。

（それが民の望む望まぬに関わらず施行されたものだってのに、皆大人しく従う事を余技なくされる。貴族制度ってのは押し付けがましいね、ほんと）

嘲笑を浮かべ、ディオンは宵闇の道を歩く。

ふと思うところがあつたので、街路灯の僅かな灯りの元で先程の書簡を開いた。

（リディオ伯爵……リディオ・アシユクロフト……アシユクロフト？）

簡略図には、きっちりアシユクロフト邸の文字が入っている。まさか、と思う。先程の女騎士が脳裏を過ぎる。勝気な金髪娘。その見た目は可憐だが、どうにも激情家というか頭が固い印象が拭い切れない。

（いや、騎士なら聖堂騎士の筈だ。生家にいたりとかしないだろ）
そう自分を落ち着かせ、街路灯の下を離れた。

＊ ＊ ＊

聖堂騎士が跋扈する、裕福層の平民宅が並ぶ道に差し掛かる。

（うおう、いるいる……）

皆、白装束に銀色の胸鎧と具足をして巡回警護に余念が無い。

ディオンは白い煉瓦の壁に隠れて巡回をやり過ごす。

民家は疎らだが、この壁が視界を塞ぐ障害物として存在している。それなりに入り組んでおり、突破は容易ではない——正面からは、だが。

塀の高さは二リール（メートル）程。人一人隠れるだけはある。出会い頭の戦闘になったら難しい。壁超えをするには時間がかかってしまう高さだ。

加えて、家宅自体も背が高い。三階建て位がここでの普通のことだ。

この先に、アシクロフト邸がある。

しかし、任務に関しては口外禁止と言いつけられた事もあり、考える。

兵一人ひとりに事情を説明するのは避けるべきであり、つまり見つかるのと面倒なので忍んでいく事にし、騎士達の死角を突くように右から回り込む事にした。

（成る程。所詮は騎士、こういうのに弱いな）

騎士道というのは面倒なもので、正面から正々堂々というやり方に拘る。

ディオンのように隠密じみたやり方には滅法弱い、というより対応出来ないのだ。

恐らく、騎士道という固定観念に囚われている故だろう。

（馬鹿正直に道ばかり警戒してるんじゃないよ）

家屋の塀を超え、庭木から屋根に上って隣家に飛び移り、着地音

を転がる事で殺していく。

その際、大剣は手に持って置く事を失念しない。

素早く、一度の失敗も犯さずにディオンはアッシュクロフトの屋敷へと到達する。

硬いブーツと鉄板の仕込まれたコートはしかし、不思議な程に音を立てず、ディオンの痕跡を闇に消していく。

（俺が敵なら、まずかったんじゃない？）

ディオンが通ってきた進入経路は路地裏や茂みの中も通る、死角となる場所が多い。

（比較的、右から回り込む経路が死角も多くて進入しやすいな）
警戒するなら、右を重点的にしよう。

リディオ伯爵にそう進言しておこうと思い、見上げる程の豪華な邸宅の扉を叩いた。

（門番も置いておくように言っておくか）

出てきた侍女に衛士協会の者である事を証明する書状を渡し、伯爵に確認を取るように頼む。暫くして戻ってきた侍女は、ディオンを中に通した。

豪華な照明器具が天上から下げられた、玄関から入ってすぐの大広間。

正面先には横に広い階段があり、上った所の階段広間から左右横にまた階段が伸びている。どうやら二階へはあそこから行くらしい。

床には赤い絨毯が敷かれている。階段も然りで白い壁は染み一つ無く、隅や階段の傍には絵画や調度品が置かれている。

（貴族ってのは、どうしてこう自己顕示欲が強いのか……）

ディオンが大剣で立ち回っても余裕な程の広さである。

「お父様から、話は聞いている」

聞き覚えのある声が、ディオンの耳に届いた。

忘れるのは難しい。つい先程まで聞いていた声である。肩までの金髪、気品のある蒼眼の少女――クリスティナが二階の階段を下りて姿を現す。

肩口で、さらさらと髪が揺れた。

「ディオン・アウフシュナイター。衛士協会第十五位。閉所、夜間戦闘に高い適性を持つ。」

だからこそ、お父様の護衛として相応しいとか」

訥々と語るその声音は、穏やかだ。

だがその双眸は険しい。頭では解っていても納得出来ない、というのだろう。何の飾り気も無い青いフード付きローブに身を包んだその様子は、もしかするともう休む所だったのかも知れない。

「しかし、私はお前を認めない。」

お前のような、金に汚い衛士に大事なお父様の護衛など、任せる事は出来ない」

「金に汚くない衛士とかもないんだが。」

まあ、納得されなくてもこちらら仕事だしなあ」

どうあってもギルドに背く事は出来ないのだ。

そうなれば、ギルドは全てを賭して裏切り者の排除を行う。

衛士が金に汚くはあっても。その秩序だけは保たれなければならない為に、である。

「貴様の腕は確かだ。それは解る。しかし……」

クリスティナの言葉に、割り込んだ。

「言っておくが、騎士やら貴族どうこうはもう聞き飽きた。」

それとな、表の騎士共は俺がここへ来た事にまだ気付いてない。

これがどういう事か解るか？」

「な、何だと!？」

動揺するその表情に、歳相応の少女らしい素顔が見えた気がして、ディオンは薄く微笑む。

「お前、夜間戦闘を甘く見過ぎだ。どうして俺がこんな黒い格好してると思う？」

まさか正面から正々堂々とやり合うのが世の常、とか思っていないよな」

「馬鹿にするな！ その位知っている、だが卑怯者のやる事だ！」

「卑怯。そうだな、それが効果的であれば、つまり、何であれ実行する。それが暗殺者ってものだ」

少女の表情が驚きに変わる。

「あ、暗殺者だと……！？」

「――あっと。しまったな」

（つい口が滑っちゃった）

わざわざ知らなくても良い事を言ってしまった事により、少女は目線を泳がせる。

想定外だったのだろう、敵が暗殺者だという事は。

「そんな、お父様は暗殺者に狙われて……？ 誰か、この事を、」

途端。大広間を一息の間を通り過ぎ、数十段はある階段をたった数歩で駆け上がったディオンは、少女の口を塞いだ。逃げられぬよう、後頭部を逆の手で押さえて。

「喋るな、余計な混乱が起こる」

「――ッ、」

「良いか、この事は極秘に進められなくてはならない。

お前が思っている程、人間は簡単じゃねえんだ。納得……出来ないくても理解はしろ」

少女は押さえ込まれながらも、毅然と見返している。振りほどこうともがく。

それを鬱陶しく思ったディオンは、クリステイナへ体重を預け、そのまま体を密着させた。

「文句なら後で幾らでも聞いてやる。憎いなら幾らでも憎め。

だが、絶対に任務の邪魔はするな。俺の依頼主は……王族だ」

睦言を囁くように。しかし、その内容は貴族には逆らいがたい内容で。

——少女は、澄んだ眼を見開き……抵抗を諦めた。

第四章 ワイルド（前書き）

クリスティナに対し、うっかり口を滑らせてしまったディオオン。暗殺者に狙われているという父親を護衛するというディオオンに、クリスティナがある提案を持ちかける。

第四章 ワイルド

豪華な照明灯に照らされた、アシクロフト伯爵邸の大広間。

左手で少女の口を塞いでいたディオンは、顔を顰めた。

（ここまで言っちゃまったのは俺の失態……だが、こうでも言わなければ引き下がらなかったよな、コイツ）

護衛任務を滞り無く進行するには、家族の了解は取って然るべきだ。

ディオンのした事は一方で正解でありながら、衛士として己の任務内容を口外した事は信用に欠ける行為とされる。

それは彼の甘さであり、十五位という中途な位階に居続ける理由。彼の弱点だった。

……少女を解放し、数歩下がる。

「……………」

間近で見る金髪の少女は、白装束の時より幾分小さく見えた。頭一つ分小さいその少女は、見上げるようにして問いかける。

「答えろ。お父様は、何故暗殺者に……？」

ディオンは答えられない。その回答は彼とて持ち合わせていないのだ。

首を横に振るも、少女の眼差しは揺らがない。

「明日から屋敷の警護を厳しくする。屋敷に侵入する隙間も無ければ、お父様も安全だ。」

「そうだろう？」

強気な態度はなりを潜め、目の前には自分の父親を心配する、健気な少女がいた。

しかし、その考えはやはり未だ“少女”のもの。

戦いにおいて、より汚い部分を知るディオンにはそれが甘さとして映る。

「いいや。ここの騎士共は暗殺者に対抗する手段を持ってるのか？」

無いだろう、だから俺が居るんだ、こう言うとお前は我慢ならな
いかも知れんが、騎士では暗殺者に勝てない。

奴等と同じか、もしくは何らかの対抗手段を持っている相手でない
ければな」

少女はディオオンから眼を逸らさない。強い意志を込めた眼差し。

その蒼く澄んだ眼は、何かの宝石を連想させた。

「……貴様がそうだと言うのか。

ならば一つだけ答えろ、その暗殺者への対抗手段とは、何なのだ
？」

溜息を吐く。

「悪いが、人に自慢出来る程誇れるものじゃない。これはお前達騎
士には無縁のものだ。

外道の術だからな」

——歴史の裏で、密やかに進化し続けてきた術…… “ワイルド”
と言う。

今や少数民族が伝えるのみとされるそれを、ディオオンとその養父
は血の滲む思いで会得した。

全ては、故郷の村を焼いた“何か”……通称、ミドリメを倒す為
に。

「……そうか」

少女の声で、過去の回想から引き戻される。

「——ならば明日、私は貴様に手合わせを挑む。その術、この眼で
見せてもらうぞ」

ディオオンは、開いた口が塞がらなかった。

「私を納得させる事が出来れば、大人しくお父様の護衛を任せよう。
だが出来なければ、貴様より強い衛士を寄越してもらうよう協会
に掛け合う」

「お、おいおい」

（はぁ……やれやれ、こうなるかよ）

思わず頭を押さえる。ここまで頑固とは思っていなかったのだ。

されど、大切な家族を守りたいという思い故であるなら、無理も無い。

「仕方ない、時間はそっちで適当に決めてくれ。それで納得行くな
ら、付き合ってやる」

ディオンは剣術があまり得意ではないが、申し出を受ける事にした。

「フン。良い覚悟だ」

「ああ、待て。ええと……」

少女は階段を上って、二階へと向かう途中で足を止める。

「クリスティナだ。クリスティナ・アシュクロフト。覚えておくが
いい」

「解った、クリスティナ。なるべく窓には近寄るなよ。」

リディオ伯爵にも話の内容、伝えておいてくれ」

少し眉を顰めた後、彼女はふい、と返事もせずに再び階段を上り
始めた。

（うーん……扱いづらい）

まだ若いからかな、と心中で一人ごちる。

しかし夜分遅くに伯爵を叩き起こして挨拶するのも、後々の信頼
関係に響く。

ここは可愛い娘に頼んでもらうのが最善だ、とディオンは結論し
た。

つり目がちな蒼い眼と、さらさらと流れる金色の髪を思い出す。

（バカ正直な奴は、嫌いじゃないけどな）

口元が自然と綻ぶ。

少しだけ晴れやかな気分になり、屋敷を出た。

* * *

暫く屋敷の周囲を見回し、どこから侵入されると危険か、もしくは
簡単かを目算する。

しかし、周囲を広い庭が囲んでいるので侵入となると、確実に一度は身を晒す事になる。

(となると、やはり怖いのは弓矢、又は毒殺……)

こればかりはどうしようもない。

特に毒殺となると、その容易さと確実さで右に出るものが無い程、優秀な暗殺手段だ。

王族同士でも相手を蹴落とす際に使われる程、信頼性が高く下手人が判明し難い。

飲み水にでも混ぜてやれば、この屋敷に住む全員があつという間に死亡するだろう。

……屋敷を一周する。

予め、周囲を警護する騎士達には身分と屋敷の護衛という目的を明かしておいた。

流石にこれを伏せたままにしておくと言明がしづらい上に、下手を打つと自分が怪しまれる為だ。どうやって入ってきたか怪しまれたが、何とか誤魔化した。

――やがて、夜も明けようという刻限。

突然、一台の箱型馬車が屋敷の門前に停まった。

二頭の馬が引く御者台に座っていた青年騎士が、黒く染められた箱の扉を開ける。

(……銀髪?)

出てきたのは、長い銀髪を頭の後ろで一条に纏め上げた、凜々しい女騎士。

そして女騎士に手を引かれ、降りてくるもう一人。

暗緑色のフード付きローブに全身を包んだ、小柄な人影。

(いや、怪しいって)

ディオオンがそう思っていると、扉を開けていた青年騎士が周囲に集まりだした騎士達に言った。

「道を開けよ! ハンス・アシュクロフトの命令だ!」

すぱっと耳に届く、良く通る声。

この声で号令でも掛けられたら思わず従ってしまいそうになる程、それは自信と威厳に満ちていた。

……案の定、騎士達は屋敷までの道を空ける。

すぐさま整列し、道の両脇に並ぶ様は見えていて清々しい。

白煉瓦が敷き詰められた屋敷までの道を、馬車から降りてきた三人が歩く。

門から屋敷までは目測で三十リール。

立ち並ぶ騎士を横目に進んでくる三人は、やがてディオンの前を過ぎていく。

——その際、銀髪の女騎士と眼が合った。

(コイツ……)

鋭い眼。そこに、衛士に向ける侮蔑や嫌悪の感情は無い。

ただ、腰の大剣が気になった。恐らくその程度だろうとディオンは予測する。

だがその腰に差している得物を見て、驚愕の表情を浮かべた。

(アレはもしかして魔導器か!? しかも一等級品、あの金髪と同じ、聖堂教会で認定された奴の中でも極一部しか持たされないヤツじゃねえか!)

聖堂教会の認定とは即ち、聖堂騎士でも特に信仰の厚い人物が司教に認められる事を指す。

教会の管理する魔導器は、そうして認定された人物に貸し出される仕組みだ。

これには等級が制定されており、数字が少なくなる程に強力な魔導器という事になる。

中でも一等級の魔導器を持つ者を、畏敬の念を込めて“パラディン聖騎士”と呼称する。

(とんでもないヤツが転がり込んできたな……)

聖騎士の社会的地位は高い。子爵、もしくは公爵と同じ程度だろ

う。

ここの地方貴族程度が迂闊に逆らえるような相手ではない。
ディオンは、ここの領主であるアシュクロフト家がこの相手にどう出るか、抑え切れない興味を抱いた。

＊ ＊ ＊

「まずは姫様にお休みいただかれるよう、すぐにベッドの御用意をさせますので」

ハンスはそう言って恭しくお辞儀した後、侍女に空き部屋の用意をするよう命じた。

カタリナと女騎士クレアドールが通されたのは、アシュクロフト家の応接間。

金細工で誂えた調度品に、柔らかく座り心地の良い長座椅子。大理石の床に赤い絨毯が敷かれた、豪華な作りの四方十リールはあり、そうな広い部屋だった。

「ふう……」

カタリナは一つ疲れた息を吐いて、長座椅子に深く腰掛けた。

「座り心地は如何でしょう、姫様」

クレアドールが心配げに聞いてくるも、カタリナは眼を閉じたまま答えた。

「悪くない。……クレアドール、お前も疲れたであろう。少し休むがいい。」

ハンス、構わんか？」

「はっ、姫様。ご自由に御寛ぎ下さい」

頭を少し伏せ、右手で左肩を押さえるようにお辞儀をする。

その堅苦しさにカタリナは溜息を吐いた。

どうやら疲れているらしい。

そう悟ったクレアドールは、ハンスに下がるよう目配せした。

……彼が部屋から出て行き、部屋には二人が残される。

途端、カタリナはぱたり、と座椅子に倒れた。

「姫様!？」

「はぁ……騒がないで。疲れてるんだから」

眠そうにそう呟く声は、まるで歳相応の少女のようだった。

カタリナはクレアドールと二人の時だけ、こうして素の自分を曝け出す。

「あんまり大きな声を出すと、ハンスが飛んでくるわ」

気の抜けた表情で、脱力したように囁く。

「そうですね。しかしそれも全ては姫様を思ってたの事、あれは騎士の鏡です」

クレアドールは主君のそんな様子に苦笑しながら、髪を優しく撫でた。

カタリナは、そうして一粒の涙を流した。

「……お母上の事は、残念でした」

「……ええ」

幾ら身分が高かろうと、その実はやはり十七という年頃の娘と同じ感性を持っているのだ。親の死に何も感じない程、この姫君は強くなかった。

「お父様、お兄様、それにエミリオ……皆、大丈夫かしら」

「……夜が明けたら早速、情報を集めようと思います。」

早急に合流なされた方がよろしいでしょう」

「ええ、よろしく……ところでクレア。先程庭先にいた、黒いお人はどなたかしら。」

騎士でもこのお屋敷の人でもないようだったけれど」

黒い、と言われてクレアドールはぴんと来た。

「腰に巨大な、剣のようなものを下げていた男ですか？ 恐らく衛士かと思われます」

「衛士？」

「はい。金次第で何でも請け負う、戦闘屋です。」

腕が立つようですので、くれぐれもお気をつけ下さいますようお願い

願ひ致します」

険しい表情で告げるクレアドールの様子に、カタリナは何かを感じたのか神妙に頷いた。

「き、きつと無理矢理あんな事やそんな事をされちゃうのね？」

「いえ、それはまた違うかと……人によるかも知れませんが。」

姫様、ともかく金で雇われた連中ですのでああいっただ輩と接する際は極力、距離を置くようにしていただきたく願ひます」

ハンスのように出来過ぎたような堅い人間しか知らないカタリナの異性知識は、かなり偏っていた。

その後も、襲われたら大声で助けを呼ぶやら何やかやと対策を立てる二人の耳に、ノックの音が届いた。

「誰か？」

「姫様、ハンスです。父をお連れしました。一目ご挨拶したいとの事で」

「暫し待て。……クレアドール、櫛を持て」

頭を切り替えたカタリナは、クレアドールに寝乱れた髪へ櫛を通してもらい、外見を整える。ローブの裾を揃え、襟首を締める。フードは勿論、部屋に入った時に下ろしている。

「良いぞ、入れ」

……カタリナの座る椅子の、左手側にある扉から姿を現したのは一人の壮年男性。

黒く艶のある髪を後ろに流して纏め、口元にふっさりとした髭を湛えている。

眼が痛くならない程度の黒い燕尾服に身を包んだその男性は、カタリナに丁寧なお辞儀をする。

「お初にお目にかかります、アシュクロフト家現当主、リディオ・アシュクロフトと申します。カタリナ姫様におかれましては、燃える王城から辛くも落ち延びたとの身の上を息子から聞かされました。どうかここで心身共に疲れきった御身を休ませていかれるとよろし

いでしょう」

穏やかな声音で、心底カタリナの身を案じるように語る、リデオ。

立ち迎えるカタリナの、その白い異様を見て眉一つ動かさないのは領主たる器量故か。

「まずはこのような時刻に訪れ、受け入れて下さった事に深く感謝を申し上げます。

このカタリナ・シャントルイユ、暫しの間ですがご厄介にならせていただきます」

ローブの裾を摘み、片足を斜め後ろの内側に引き、もう片方の足の膝を軽く曲げて、背筋は伸ばしたまま挨拶をする。

女性のみが行う、カーテシーと呼ばれるお辞儀の作法だ。

たかが地方貴族に、身分の高い王族の姫が行うようなものではない。

しかし丁寧過ぎるその対応に、リデオは深く感銘を受けたようだった。

「お疲れの所、申し訳ございませんでした。それでは私はこれで失礼致します。

ご用意させていただいた部屋には侍女に案内させますので、どうかごゆるりと休まれて下さい」

そこへ、クレアドールが口を挟んだ。

「湯浴みの用意はされているか、リデオ伯爵」

「勿論でございます。入用であれば、夜着の変えも用意させていただきますが」

「助かる。姫様、先に湯浴みを済ませましょう」

「ええ」

そう言つて、二人はエプロンドレスの侍女に案内されるまま屋敷内を進んだ。

* * *

陽が昇り、町に活気が溢れ始める。

温暖な気候という事もあり、薄靄が町にかかっている様が見て取れた。

ディオンは、昼間なら騎士連中が所狭しと町を練り歩く以上、襲撃の危険はないだろうと踏んだ。

……庭木の幹に大剣を立て掛け、それを足掛かりに枝の合間へと体を滑り込ませる。

丁度良い位に寝る体勢を整え、睡魔に任せて意識を沈ませていった。

「――ディオン・アウフシュナイター！　おい、起きろ！　起きるのだ！」

ゆっさゆっさと揺れる体に何かと眼を覚ます。

声は下から聞こえたので、見てみると青装束に身を包んだクリスティナがいた。

「うるせえなあ。何だよ金髪」

それに顔を真っ赤にして反論する、クリスティナ。

「き、貴様は馬鹿か！　昨夜名乗ったであろう！　いいから降りてきて私と立ち会え！」

再び、両手でゆっさゆっさと庭木を揺さぶり始める。

「ああもう、解ったよ。ったく、気の短けえお嬢ちゃんだ」

「何だと!？」

「怒鳴るなよ、頭に響く……」

「貴様が素直に言う事を聞けば怒鳴らずに済むのだ!!」

「無茶苦茶言いやがる……」

庭木から飛び降り、頭をぼりぼりと搔いて欠伸を噛み殺す。

これっぽっちもやる気の感じられないディオンの、クリスティナは木剣を投げ付けた。

「おっとっと。これでやるのか？」

「そうだ。用意は良いか？」

「待てよ、まだだって」

そう言ってディオンは、前で閉じる型の膝丈まである戦闘用外套を脱ぎ捨てる。

「ぬ……」

クリスティナが息を飲む。

その下から現れたのは、黒い布地の服に包まれるがっしりとした肉体。

肘から先に覗く腕には、幾筋もの切創痕が修羅場を潜ってきた証として存在する。

みっしりとした筋肉に包まれた二の腕、絞られた胴回りは明らかに戦士のそれだ。

——クリスティナは自身の体を見下ろして、そのあまりの頼りなさに心を折られかける。

女だからと侮られる事を嫌った彼女は、それでも精一杯の鍛錬をこなしてきた。

それでも、目の前の男から感じる威圧感に押し潰されそうになる。あれに比べれば、自分の体など子枝のような錯覚を覚えて——

「さ、やろうぜ。お互い小細工無しだ」

そう言って腰の分厚い短剣も放り投げ、手甲も外して木剣を右手、逆持ちに構える。

「……望むところだ。」

暗殺者への対抗策を拝む、またとない好機。モノにさせてもらおうぞ！

ディオンの口元が綻ぶ。

「盗めるもんなら盗んでみな、お嬢ちゃん」

腰を落とし、右足を前にして肩幅に開き、体重移動を瞬時に行える姿勢を保つ。

目の前のお嬢様は“ワイルド”をお望みのようだ。

（別に広めちゃいけないってものでもないが、真っ当な騎士にはち

とキツイかもな)

そう考えつつ、左手を軽く開いて、肘も緩やかに伸ばして前に置く。

……ワイルド独特の構えだ。

「……………」

クリスティナは諸手段の構えから、踏み込んで袈裟に振り下ろす。

だが——ディオンの左肩に当たると思われたそれは、直前で唐突に停滞した。

踏み込んだディオンの左手が、振り下ろされる木剣を支える手と柄を完全に押さえている。

「そらっ」

そのまま手首を巻き込むようにし、相手の体勢を崩すように、引き込む。

「くう、」

——抵抗するように左足で踏ん張り、持ち応えるクリスティナ。

だがこれは当然の対応でありながら、同時にディオンの策中にまんまと嵌っている。

クリスティナは前に引き倒されないよう、左足で後ろへと踏ん張る。

……この時、ディオンは彼女の左足にちよいと足を引っ掛けて、右手で後ろに押してやると。

「わ、きゃあっ!?!」

踏み足となる左足を拘束され、既に半分以上後ろへ体重を傾けていた為、成す術もなく倒れ込むクリスティナ。

——そこへ、首元へと振り下ろされる木剣。

「取った。どうだ今の? ちょっと解りやすくやってみたんだが」

「な、何だ今のは……今までに味わった事の無い体術だ……格闘術? いや違うな、倭国の術か?」

興奮したようにまくし立てられ、ディオンは頭を掻いた。

「いや、とある民族が生み出した近接戦闘術だよ。密着するような距離なら、剣より手え出した方が速いだろ？ まあ、戦場で小奇麗に戦ってるような奴なんかいないしな。それを突き詰めた結果、こうなったらしい」

「も、もう一度だ！ 納得するまで付き合ってもらおうぞ！」

ディオンは顔を顰める。

「ああ、俺って女運ないのかなあ……」

——暫くはディオンの独壇場が続いたが、次第にクリスティナも受身の取り方や地面を転がって木剣による首元への一撃を避ける等の進歩を見せ始める。

（飲み込みが早い……コイツ、もしかしたら化けるかもな）

汚れる事を微塵も気に留めず、真っ正直に挑むクリスティナにそんな感想を抱く。

そして、そんな二人を屋敷の窓から眺めるカタリナは、羨ましそうに窓へと顔を近づけた。

第五章 星屑の夜（前書き）

父親を狙っているのが暗殺者という事を知り、その対抗策を学ぼうとディオオンに挑みかかるクリスティナ。

第五章 星屑の夜

鐘が鳴る。

町の中央広場に行く、平民の中でも裕福層が住む、高台の高級住宅街から伸びる階段の途中にそれはあった。

鐘楼だ。これが人に現在の時刻を知らせるものとして重宝されている。

「お、朝飯の時間だな」

ディオーン・アウフシュナイターはそう零し、右手の木剣を軽く振る。

「どうだ、お嬢ちゃん。少しは納得したか？」

「き、貴様、手加減、していたな？」

ディオーンから少し離れた場所、芝生の上に仰向けで寝転がる一人の少女がいた。今しがたまで近接戦の稽古をしていたのだが、ついに負け越して力尽きたのだ。途切れ途切れの言葉には荒い息が挟まる。

半身だけ起こして彼を見た。

「まあ、近接戦闘は俺の得意な部類だしな。逆に剣術のみだったら危なかっただろうよ」

少女、クリスティナは神妙に頷く。

「近接戦闘……相手の体の動きを利用し、自分にとって有利な状況を作る技術。勉強になった」

「ン？ 意外だな、お前が俺を認めるなんて」

ディオーンの返しに、彼女は顔を顰めた。

「これだけやられて相手の実力を認めぬ程子供ではないし、狭量でもない」

事実、彼女がディオーンに勝てた試しは一度も無い。剣を合わせた途端に体の動きを崩され、そこから一気に状況を覆される。地面に倒されたり、腕を取られて背後に回られたり、そのやられ方は様々

だった。

「まあ、魔導器使われたら俺なんか一蹴されるけどな」

そう言って木剣を地面に突き刺し、戦闘用外套を拾って再び庭木に登るディオーン。

「……何をしている。また寝るのか」

「お前と違って、俺は夜からが本番だからな。悪いがこれで仕舞いにしてくれ、いい加減眠い」

クリスティナは残念そうに呟く。

「そうか、解った。では、また手合わせしてくれ」

気が向いたらな、と返答し、手をひらひらさせる。誰かの視線を感じたが、どうせお嬢ちゃんだろう、とディオーンは気にしなかった。

* * *

「はぁ……」

屋敷に入り、クリスティナは深く嘆息する。

（近接戦闘。確かに荒っぽい剣術にはそういうものもありはするが、アウフシュナイターのアレは全く別種のものだった）

彼女の知っているそれは、拳打、蹴撃を主とした体術に分類される。しかし、近接距離で相手を制圧する事を目的とした、変則的な格闘術に彼女は深い感銘を受けたのだ。

（あれに初見で対応出来る人間は殆どいまい……現代の近接戦闘という既存概念を一蹴するものだ。深く剣術に関わった者程、あれの術中に嵌る仕掛けになっている）

眼を瞑る。騎士では暗殺者に勝てない、というディオンの言葉を反芻する。

それを深く実感し、唇を噛み締めた。

（あの男が本気で、これが実戦だったら私は何度死んでいるんだ）
今の自分は弱い。だからこそ強くなりたいと願う。その為には、あの黒い衛士から学ぶべき事は数多くあるのではないか、と思い至

った。

「お嬢様」

女性の声に眼を開ける。乾いた布巾を手にした侍女だった。

「こちらをどうぞ。お部屋にお召し物の替えをご用意させていただきます」

「ご苦労。直ぐに行く、下がって良い」

未だあどけなさの残る、黒髪を項^{うなじ}が見える程度に短く揃えた侍女が去っていく。

ひとまずは朝食を取り、その後は聖堂にて朝の祈りに加わる。それが彼女の日課だったが、階段を上って自室へと戻る際、声を掛けられた。

「あの……」

「ん？」

振り返れば、暗緑色のフード付きローブを羽織った、小柄な人影が立っている。

「あの、大丈夫、ですか？」

涼やかで、耳触りの良い声だった。何がだろうと思い、首を傾げると小柄な人影はクリスティナの服を指差した。

「土だらけです。どこかお怪我をなさっているんじゃないですか？」

「ん、怪我……？」

特に痛い所がない事に気付く。

「いえ、心配はありません。こう見えて頑丈でして……ところで、失礼ながらあなたは？」

声の調子から、同い年程度の少女だというのは解った。

「あ、私は……カタリナ、と申します。今日から、このお屋敷にて養生させていただく事になりました。それで、よろしければお話など如何でしょうか？ 歳も近いようですし」

人影がフードを取る。白い異様が眼に飛び込む。

色素欠乏症^{アルビノ}は生まれながらの病ではあるが、彼女のそれは気品と高貴さを漂わせていた。平民では備え得ないものだ。

同性である自分でさえ見惚れるその容貌は、すっきりとした小柄な顔の輪郭にきめ細やかな肌、神秘的な白い眼が印象的に映る。

（成程、養生か。ならばお父様のお知り合いか？）

少女の柔らかい笑みにそう結論したクリスティナは、頷いた。

「自分で良ければ。しかし朝食の時間が推していますので、その後で宜しいでしょうか？」

「ええ、ええ、構いません」

白い少女はとても嬉しそうに、にっこりと微笑む。

「それでは、失礼」

クリスティナは一礼して踵を返し、自室へと戻った。

ハンス・アシュクロフトはテルマビスタを治める貴族の長男であり、騎士の名門でもあるアシュクロフト家の次期頭首である。

以前、幼くしてこの町の聖堂騎士団に所属していた頃は学問でも剣術でも右に出る者はおらず、その優秀さを周囲に知らしめた。

そんな彼が王族直衛騎士、エーデル・リッターに選ばれたのは必然であったのだろう。

騎士としての頂点、国の誇り、名誉ある称号だ。彼はそんな自分に自信を持っていたし、これからも騎士であり続ける心積もりであった。

「ハンス、お前には言っておく。私は、このままではこの国は他国の侵略を受けて壊滅するのではないかと思っている」

目の前には彼の父、リディオが背を向けて立っていた。

リディオは壁に掛けられた肖像画……亡き母の絵姿を視線でなぞっているようだった。

「父上、それは……戦争が起こる気運がある、と？」

「王の居ない王城など、ただの作り物でしかない。私が敵国の主ならば、進撃するのなら今しかないと思うがな」

そう言っリディオは振り返り、ハンスに頷きかける。

「今しがた、フリオニール公宛てに伝書鳩を飛ばした。返答が早ければ明日の朝には帰ってくるだろう。王の行方が解り次第、直ぐにでも軍を動かして城に戻っていただかなくては」

「それまでは、王位継承権第一位のエリオット王子が王位を預かる、という事でしょうか？」

ハンスは自身の赤い戦闘用装束を見下ろす。

華美過ぎない装飾で、動きやすさを重視しながらも王族直衛騎士という地位を知らしめるよう、意匠がこらされた出で立ち。

腰から上下二分割、上は長袖で襟元が白い。金色の胸当てが誇らしげに右肩から左脇に渡って掛けられている。

下は大腿部に余裕のある広がりを見せ、膝から下はこれも金色の具足がしっかりと纏い上げていた。

胸当てのすぐ傍、左胸に王族シャントルイユの紋章が意匠として縫い止められている。

「エリオット王子は、王の器か？」

リディオの率直な質問に、ハンスは顔を上げる。

「……いえ。これは相手が父上だからこそ話しますが、正直第三位のエミリオ王子の方が軍略や経済、政治の手腕に置いて優れた才覚をお持ちになられています」

「ふむ……側近共が騒ぎそうだな。城内での派閥争いが激化する恐れがある」

リディオはそう言って顎鬚を撫で上げる。

「一刻も早く、国王を探し出して差し上げなければ……」

気ばかり焦らせるリディオに、ハンスは浮かんだ疑問を投げかけた。

「父上。父上は、カタリナ姫とその志を同じにする者……“平和主義”については如何お考えでしょうか？」

「平和主義か。武器の完全撤廃による和平など、夢幻の話でしかないが……私もフリオニール公も、カタリナ姫に陰ながら助力する者

の一人だよ」

ハンスは驚きに眼を見開く。

「知りませんでした。父上も、とは」

しかし、リディオの表情は冴えない。

「だからこそ、フリオニール公もあのような衛士まで雇って私の身を案じてくれたようだが……貴族である私が何故匪賊のような奴等に守られねばならんのだ」

「ご安心を、父上！ ここには私も騎士団長も、クリステイナも居ります！ 必ずや父上の身を守り抜いてご覧にいきましょう！」

「うむ、働きを期待する。」

私とて一線を退いてはいるが、騎士の端くれ。易々と敵に討たれるつもりはない」

ハンスの表情は硬く、リディオはそれに深く頷いた。

聖堂騎士の正装、白い戦闘用装束の上に銀色の胸鎧と具足を付けたクリステイナは、邸宅から出て右手側にある、庭先の庭園に歩いて向かった。

遠目に見えるのは水を撒いている庭師の老人と話し込む、暗緑色のフード付きローブを纏った小柄な人影だ。

更にその向こうには、黒い鋼板のような剣が立て掛けられた太い幹の庭木がある。

ここから反対側の離れには数頭の馬を世話する小屋があり、アシユクロフト家の箱型馬車も用意されている。

「カタリナ殿。お待たせして申し訳ない」

クリステイナがそう声を掛けると、ローブを纏った人影——カタリナは振り返った。

「あ、お待ち申し上げておりました。お時間の方、よろしかったでしょうか？」

そう言いながらも、ローブの端を摘んでお辞儀をするカタリナ。クリステイナも騎士としての礼を返す。

「申し訳ながら、長くは取れません。それで、お話とは何でしょう？」

カタリナは視線を泳がせた。

「ああいえ、その……簡潔に申し上げますと、その……」

歯切れが悪い。重要な事か、と構える。

「実は……お友達に、なっていたきたくて」

終には苦笑してそう言うカタリナに、クリスティナは動揺した。

「お、お友達？　つまり、友人関係という事でしょうか？」

突拍子も無い申し出だ。彼女が驚くのも無理はない。

「はい。実は私、今まで同年代の友人が一人もいなくて……それでその、貴女となら良いお友達になれるかな、と思ひまして」

「な、成る程……所作から察するに、然る高貴なご身分の方とお見受けしましたが、どういった経緯でアシュクロフト家に？」

そう聞き返すと、途端にカタリナはしどろもどろになった。

「え！？　あ、いえその、別に身分とかは余り高くなって、特に偉い訳では……！」

「……そうですか。しかし身分を隠したまま、友人関係を結んで欲しい、というのは些か自分勝手な願いかと思われます。せめて姓名乗るべきでは御座いませんか？」

「それは……」

カタリナの表情が翳る。

よく頭が固いと言われるクリスティナでも、それから彼女がどうやら訳ありな立場であるらしいという事は推察出来た。

それに、最初から全てを曝け出すのが友人関係を築く規則という訳でもない。

結論に基づき、クリスティナはまず非礼を詫びた。

「申し訳ありません。いきなりの追い詰めるような真似、人として礼節を欠いていました。人徳法を守るべき騎士として、恥ずべき事です」

「ち、違うんです！　身分とか礼節とか関係なく、対等に話せるお

友達として！」

「はい、それは理解しております。どうぞご安心下さい。

それでは聖堂に向かう時刻ですので、私はこれで失礼します」

一礼し、踵を返してクリスティナは去っていく。

途中で一度振り返り、

「帰りは夕刻になると思います。続きはその時に」

「あうあう……」

一杯一杯な様子のカタリナを戸惑いがちに視界から外し、再び歩き出す。

——彼女達二人は、どちらも不器用な人間だった。

「うう……クレア、お友達を作るのってこんなに大変だったのね」
そこにはいない自分の側近に、呟きで問い掛ける。

答えが返ってくる筈も無く、カタリナは力なく項垂れた。

＊

＊

＊

鐘が三つ、鳴らされる。

夕刻だ。

多くの人々は我が家へと帰り、徐々に町が静かに、だが夜なりの活気を醸し出していく。

暁色の光が、広場を中心に広がる町をほんのりと幻想的に浮かび上がらせた。

夕焼けが徐々に町を染めていく。

空には月。原初の災厄にてこの惑星から離れる事適わなくなったと言われる、双子の月が四半欠け程重なっている。

ディオーン・アウフシュナイターは眼を覚ました。庭木から降りて、立て掛けて置いた剣を腰の後ろ、革ベルトに掛ける。高台から見る町は、木材と煉瓦材の混合された建造物が多い。

壁は煉瓦材を積み上げて頑丈に、建物の心材となる柱は太い木材

を四角く削り出したものが使われ、屋根も煉瓦材だがこちらは重量の軽いものを選び、雨等をやり過ぐす為に緩やかな弧を描いて互い違いに組み上げられている。

それでも空いた隙間には石を粉状に砕き、泥を混ぜ合わせて固めたものが敷き詰められていた。

「さて……まずは挨拶してから腹ごしらえと、道具を用意しなきゃな」

ディオンは呟き、邸宅の入り口へと向かった。侍女に話し、リデオ伯爵への面通りを頼む。

夕食前なので手短に、との条件付きで、それは適った。

「こんにちは、衛士協会のモンですがー」
扉を二度ノックし、そう声を掛ける。

「……入りたまえ」
重い声。それには多分に厭な成分が含まれているのを、ディオンは敏感に感じ取った。

「失礼しまーす」

ノブを回して中に入ると、そこは書斎のようだった。
様々な部類の資料が所狭しと並んでいる。

「どうも。今回護衛任務を任された、ディオンってモンです。依頼主はフリオニール王族公爵……えー、こちらがその書簡になります」
懐からそれを取り出そうとして、

「不要だ。君は二度と屋敷内に入らないでくれたまえ。空気が穢れる」

「おっとお。随分な言い様ですな、伯爵殿」
衛士が金に汚い、金の為なら何でもやる、という通説は間違っていない。

その為に荒くれ者が多く、そういった抑圧された環境下から社会に対して反発する者も少なくない。

それがまた誤解を生む原因にもなっているのだが、ディオンはそ

うした事情も踏まえて自分の立場を理解している為、他人から向けられる嫌悪にも慣れていた。

しかしそれでも、仕事は仕事なのだ。

「でも、良いんですかい？　これを断るってなると、依頼主の御厚意も無下にするって事になるんじゃないア？」

「ああ、だからこそ、君には外の警護をしてもらう。無論寝る場所も外だ。君には我々アシクロフト家そのものを守ってもらう。

本来ならば馬小屋でも護衛してもらいたいところだが、これが私の裁量だ。

「どうだね？」

溜息を吐く。

どうにも手強い相手のようだし、ディオンの意見が聞き入れられる可能性は極めて低い。

「別に、それがそちらの御意向であるなら構いませんがね。仕事だし」

「なら即刻出て行け。これ以上長居されると不愉快だ」

リディオの表情が嫌悪に歪む。

身分に縛られたこの領主は、どうやら狭量なようだ、とディオンは頭の中で結論する。

……部屋を出ると、代わりに控えていた侍女が中に入っていく。

「おいおい……そこまでやるか、普通？」

恐らく、掃除だろう。この家の人間は衛士が余程、嫌いらしい。

予め侍女にそう命じていたのか、と推察し、ディオンは少し気分が悪くなった。

「まったく、何だっただ……」

……階段を降りて行くと、途中で銀髪の女騎士とすれ違った。

「――待て、ディオ・アウフシュナイター」

「あん？」

柄にも無く、まさに不機嫌ですという返答をしてしまい後悔する。しかし特に弁解する事もなく。

「何か用かい、^{パラディン}聖騎士さんよ」

眼の醒めるような銀髪。まるで宝石がそのまま一条の髪になったような艶を持っている。

「——お前の情報は集めた。勝手ではあるが、これも姫様の為だ」

「姫様……？」

「一つ聞きたい。お前は任務において子供だけは殺さず……暗殺や汚い仕事は全て拒否というのは、何か理由があるのか？」

呆れて、頭を押さえる。

「それ知ってどうするんだよ。まあいい、仕事選ぶのは個人の自由だろ。」

子供は……大人の都合で振り回されてる場合が多いからだ」

女騎士、クレアドールはそれを聞いて感心したように相槌を打った。

「ほう。それは何だ？ お前なりの職人氣質……それとも誇りか？」

「関係ねえよ。俺なりの、自分のルールだ。人徳法とかじゃなく、
な」

銀髪の、小奇麗にまとまった美貌を持つ騎士は深く頷く。

「衛士の中にもお前のようなのがいるとは思わなかった。」

正直、協会から渡された書簡を見て眼を疑ったくらいだ」

「はいはい。そんじゃ俺は見回りにいくんで、これで」

「うむ。何も無い事を祈る」

「……………」

女騎士はその言葉を最後に、階段を上っていく。

意外な言葉を掛けられたディオンは、暫しその後姿を眺めていた。

（驚いた。衛士を色眼鏡で見ない騎士とはね）

なかなか出来た人物かも知れない、と評価してディオンは屋敷を出た。

庭園の方から声が聞こえる。

夕暮れの中、二人の少女が木組みの白染め長椅子に座って、話し

こんでいるようだ。

風に乗って流れてくる会話を拾う。

「――ですから、ウェルナーとブルーノは私の部下ですが、まだ若過ぎる部分がありまして。時折、命令無視等の暴走する部分が目に付くのです」

「そうなんですか。お幾つぐらいなんです？ そのお二人」

「私より二つ下です。あ、私は今年で十七になりますが」

「あら！　じゃあ私と同年なんですね！」

女同士、花の咲くような会話だ。

クリスティナがいる手前、避けて通りたいところではあるディオンだが、聞きたい事があるのでそれは耐える事にした。

二人に歩み寄り、声を掛ける。

「よう、金髪。ちょっといいか？」

その声に、ローブの少女……良く見ると色素欠乏症なのか、白い髪と眼、肌をしていた。

加えて類稀な美貌、隠し切れない女としての魅力に眼を奪われる。

（色素欠乏症？　人徳法で処分対象になっているはずじゃねえか。

見つけたら異端審問会が黙ってねえぞ）

「何だ、アウフシュナイター。まさか、この方をその、て、手籠めにする気か！？　させんぞ、この色情魔め！」

「いきなり何だ！？　馬鹿、違うっての、どんな誤解の仕方だ！」

「ならば何だ、用件を言え！」

率直に切り込むのは誤解を加速させると思い、軽い話題を選ぶ。

「いやな、お前の親父さんに関してなんだが……」

「父上？　ああ、まさか」

クリスティナは得心がいった顔だ。

「衛士を毛嫌いしているからな、あの方は。手酷く言われたか」

「ああ、お前もやがてああなるのかと思うと、末恐ろしい一族だぜ。いや今でも充分、」

「き、貴様！　アシユクロフトを愚弄するか！」

「だから短気起こすなつての！ 見ろ、そっちのお嬢ちゃんが怯えてるぜ！」

クリスティナは一度、怒りの矛先を納めてローブの少女に謝った。
「ふう、全く。思い込み激しい奴だな」

「あ、あの……」

一息吐いたところに、ローブの少女がディオンの声を掛けてきた。
「ン？ 何だい、お嬢ちゃん」

努めて平常に返す。なるべく悪い印象を与えないようにとの気遣いだった。

「え、いえ、その……クリスとは、どのようなご関係ですか？」

「クリス？ ああ、クリスティナか？ うーん、別にこれと言って関係という関係もないが」

白い少女はちらちらとディオンの様子を伺っている。

「で、ではその……じよ、女性に対して、その、無理矢理……行為に及ぶというのは、」

「は？」

「ああダメ、恥ずかしくて言えないっ」

そう言つて赤くなった顔を両手で覆い、俯く。

「アウフシュナイター、貴様！ やはり女を食い物にする不埒者だったか！

許せん、そこに直れ！」

「だ、ちよつと待て！ 何コレどういう事！？」

その後暫くしてから、ディオンはようやくクリスティナの誤解を解いた。

そしてその頃には、周囲に夜の帳が落ちていた。

「ああ、疲れた……それに腹減った」

夜闇に、腹の虫が鳴く音が響く。

「うう、そういえばあのおっさん、二度と屋敷に入るなって言つて

たしなあ。

「やっぱり飯も食わせてくれないのかなあ」

燃費の悪いディオンはかなり重大な問題であった。かと言って今から町に繰り出す程、仕事意識は弱くない。聞こうと思っていた姫様というのも結局聞けずじまいだった。

「やれやれ……まあ、何とかなるだろう」

重く考えてばかりいても、事態は好転しない。

ともすれば向こう見ずなだけだが、後ろ向きよりは前向きな方が心持は楽である。

それがディオンの処世術だった。

やがて、夜半も過ぎようかという時刻になった。

するするする、と何かが屋敷の壁沿いに降りてくる。

麻を振ったと思われるその紐の先に付いているのは、籠だ。

「ヌウッ!？」

ディオオンが過剰に反応したのは、その中身である。パンだ。細長く、切れ目を入れて焼いた跡が見えるパンだった。香ばしい匂いが鼻に届く。

「ふふっ、やっぱり何も食されていなかったようですね」

「おお？ さっきの白いお嬢ちゃんか。これ、どうしたんだ？」

三階にある部屋の窓から顔だけ覗かせて、ディオオンを見下ろしているその姿にローブは無い。

夜だからか、陽の光を気にせずに済むようだ。月光に透けるようなその白い髪は、どこか神秘的にさえ映った。

「クリスと一緒に話したら、そういえばディオオンさんは夕食どうしたんだろうってお話になりました。この案もクリスが考え出したんですよ」

意外な答えに、言葉が詰まる。

「ちょ、ちょっと！ 余計な事は言わなくて良いのです、カタリナ姫！」

クリスティナの声だ。最後に、気になる部分があった。

「……姫？ やっぱり、アンタが姫様だったのか」

「ふふ。バレちゃいましたか」

ディオンに向ける微笑は、どう見ても年頃の少女のものだ。

「実はそうなんです。ディオン・アウフシュナイターさん」

ディオンは、それを聞き流したようにパンを取る。

中には旅のお供、チーズを挟んだサンドも数個見受けられた。

「そういや、昼間に聞こえた話なんだがよ。誰かさんが友達欲しいって騒いでたんだよな。あれってさ、やっぱり対等な友達が欲しかったんだろう？」

一国の姫君に対して無礼な口の利き方ではあったが、カタリナは気にしたふうもないようにきょとんとした。

「聞こえてたんですか？」

（そりゃ、あれだけ騒いでりゃ聞こえるさ）

「その金髪に言っとけ。固い言葉も姫って肩書きも要らないぞって。」

友達ならそんな言葉遣いしないからな」

「それが……言っただけですけど、止めてくれなくて」

「あらら。先は長そうだ」

ディオンは肩を竦めて、パンを齧り始める。

「それでは、夜警頑張ってくださいね」

「おう。夕飯ありがとな、“お嬢ちゃん”」

カタリナは一瞬、眼を瞬いてから、柔らかに微笑んだ。

「ありがとう」

（変なヤツ。礼言ったのはこっちだったのに）

あつという間に籠に入っていたものを平らげ、ふと思う。

（この麻紐、使えるかもな）

輪を何度も作るように一纏めにし、腰のベルトに括り付ける。

さて、と気を取り直し、屋敷の周囲を回り始める。

空には満天の星空。煌く一つ一つが遥かな世界を思わせる。

――そして、
星明りの夜に惨劇は幕を開ける――

第六章 君の成長が私を呼び覚ます（前書き）

カタリナからパンをもらったデイオンは、夜の警護に付こうとしていた。

第六章 君の成長が私を呼び覚ます

宵闇暗く、静かに鳴く虫の声。

そんな中、夜と同化するような服装の男、ディオンは薄く生える芝庭にうずくまり、呻いていた。

「うおおお……今の絶対ヤバイよな、一国の王女相手に“お嬢ちゃん”って……！」

頭を抱えて冷や汗をたらし、真剣にヤバイと悩んでいる。

——カタリナは友達が欲しいと願っているようだが、それは同年代の友人であり、ディオンのように齡二十の年上な友人までは欲しいと願っていないかも知れない。

そう思い至った瞬間、彼はさっきの自分の行動がただのでしょばりだと気が付いたのだ。

「あの銀髪、近衛っばいし後から何言われるか、いやそれよりも異端審問官とか出てこないよな？ そしたら本気でシャレになんねえぞ……」

先程の失言がどれだけ常識外れか認識し、失態だと恥じる。

だがそれに囚われて仕事を疎かにするのは二流だと自己判断して、どうにか立ち直った。

「後で謝ってみるか……許してもらえんといいが」

ディオンは立ち上がり、今いる自分の周囲を見回した。

アシクロフトの屋敷は周囲を街路灯で囲まれており、夜になっても邸宅の敷地外周は明るい。まるで宮殿のような様相、煉瓦を積み上げたような庶民の住宅とは一線を画すような作りで、四階までの階層を誇る。

出入り口や大広間の存在する中央棟を軸にして、左右の一階層には使用人や小間使い達が住み込みで働くよう部屋が貸し与えられて

いる。二階には応接間や客に貸し与える部屋割りがなされ、アシュクロフトの名を持つ者達は三階以上に在住するようだ。

中央広場を基点として街が広がっている為、この屋敷の玄関もそちらに向いている。それはユーフォリア大陸中で変わらない街の特質だった。

夜の帳が落ちて数刻。ディオンは邸宅の周囲を何週か回り、配置された兵士の数と装備を確認していく。

（セグメント・アーマーと鉄の具足か……武装は槍持ちと、剣盾持ちの二種）

セグメント・アーマーとは全身を鉄鎧で覆う板金鎧の簡易版で、身体の中でも特に重要だとされる胸部付近を板金鎧で覆い、他を最低限取り外した型の鎧。

騎士の胸鎧より広い部分を防御出来、板金鎧より軽く動き易い。

現状この型の鎧が一般的である。首周りから始まり肩、肘、胸、腹まで、下半身も腰下五十タイト程を外套状に覆い隠す。

（あれ重いんだよなあ……）

俊敏さが落ちるとして、ディオンはそれを好まなかった。

すれ違う兵士達と幾度か会話を交え、何週目かの巡回に入ろうとしていた時。

——ディオンの腰に下げられた大剣が、わずかに震える。

それと同時に、首筋に薄ら寒いものが奔った。

（何だ！？ 剣が反応した……まさか霊子への干渉反応、術式か！？）

現実を侵す数秘学、術式。現代の魔法だ。

その発現する予兆を敏感に感じ取ったディオンは、いち早く屋敷の裏に回った。

……周囲では数人の兵士がのんびりと会話を交えている。まだ氣付いた様子は無い。

「伏せろ！ “術砲撃” が来るぞ！」

何かと振り返る兵士。屋敷の周りに密集する裕福層の民家の合間から、術式によって生み出された炎の塊が飛び出して来る。

「チィッ！」

前後左右から屋敷を狙い、夜を照らして飛ぶ炎。それは矢のようにも見えた。

数多の火矢が屋敷の壁を穿ち、芝庭を燃やし、兵を焼く。

こればかりは、ディオンのにもどうしようもなかった。

屋敷に突き刺さり、尚も消えない炎。壁が焦げ始める。

兵士が騒ぎ出す。混乱が起こる。

「敵襲ー！」

指揮官らしき兵士が怒鳴る。それに合わせて兵士が周囲を警戒するが、林立する民家の合間や屋根から疾風のように現れる、黒装束の襲撃者達。

二リールもある外壁が、全く意味を成さずに飛び越えられる。

炎の塊が屋敷の窓を突き破り、邸内に火の手が上がる。

（やべえ！）

だが、迂闊に持ち場を離れる事は出来ない。

向き直れば、そこには二人の黒い暗殺者。

「っ、ハッ！」

右手が大剣の柄を逆手に握り、驚異的な臂力によって眼前の敵を薙ぎ払おうと、術器から切り離される。横薙ぎのそれを受け止めた一人は、得物ごと寸断されて肉塊へと成り果てた。地を砕いて刃が止まる。

残る一人はそれを見てから左に回り込み、ディオンの頭目掛けて弧を描く形の短剣を突き出してくる。

左腕の手甲でそれを受け流し、強引に相手の首元を掴み、地面に引きずり落として顎の骨を踏み砕く。

沈黙。絶命。誰かの悲鳴。

見れば周囲は敵味方が入り乱れ、混沌とし始めている。

(さっきの感触……装束の下はスケイル・アーマーか。術砲撃も止まない、このままじゃあつという間に屋敷が占領される！)

そう悟ったディオンは、早々に指示を出した。

「誰か、リディオ伯とカタリナ姫を連れて逃げろ！ 馬車を引けえっ！」

荒事慣れしていない兵士達は、指揮系統が混乱している事もあって素直にディオンの指示を受け入れない。

だがそうしている間にも、暗殺者の襲撃は止まない。

一人、また一人と倒れていく兵士達。

「クソッ！」

焦るディオンの脇腹を、炎の矢が掠めていった。

* * *

「敵襲ー！」

その声に、カタリナはまどろんでいた意識を無理矢理覚醒させた。

「つ……、やはり来たか」

恐らく、敵は例の暗殺者組織。昼間にクレアドールが掴んできた情報ではウロボロスというらしい。

現在活動が活発化している、魔導器や遺産の収集を主とし、社会の裏から国同士の戦争を起こそうと画策している組織。

カタリナはクリスティナから借りて身に付けている夜着の上から、暗緑色のローブを羽織る。首元に下げられているタブラ・スマラグディーナは就寝時でも外していなかった。

ドアがノックされる。

「姫様！ 敵襲です、急ぎお支度を！」

「出来ている！ 敵の目的は我々か？」

返答にクレアドールがドアを開けて入室する。

その姿は夜着ではなく、赤い戦闘用装束と金色の胸当てという騎

士の様相。腰には剣。

「はい。それと恐らくですが、リディオ伯爵でもないかと思われ
ます」

「……あの赤い男が差し向けてきた、と見て間違いないな？」

「はい。平和主義者の根絶……戦争の抑止力を消すつもりなのでし
よう」

三つ巴で何とか拮抗してはいるが、危ういバランスの上に成り立
っている、現在の平和。

過去の魔導大戦で得た教訓を忘れ、一部の人間達は再び戦争を起
こそうとしている。

クレアドールは言う。

「連中は再び、魔導大戦を起こすつもりようです。
魔導器、古代遺産、術式を利用して」

カタリナの顔が青ざめる。

「馬鹿な……過ちを二度も繰り返そうというのか」

――女性の、絹を裂くような悲鳴。

男の怒号と金属のぶつかり合う音が響き渡る。

「屋敷に入られたか！？」 姫様、私の傍から離れぬよう、」

「クリスは！？ それにハンス、リディオ伯も！ このままでは敵
に殺されてしまう！」

「今は、姫様がここより落ち延びる事が最も優先されます」

一瞬、脳裏に先日 of 落城を思い出す。

カタリナはそれを振り払うよう、声を張り上げた。

「クレアドール！ 私一人が生き延びて何が出来ようか！ 友人一
人助けられず、何が姫か！ たかが暗殺者、退けられずにどうして
民を守れようか！」

クレアドールはそれに眼を見開くと、次に膝を付き、頭を下げる。
カタリナはそれを見下ろす。

月光に透ける艶やかな白髪は、妖精のような神秘性を醸している。

「聖騎士クレアドール・レーゲンハイト！ 我に続き、成すべきを成せ！」

「ハッ！」

ローブを翻し、堂々と部屋を出るカタリナ。続く護衛騎士。

「私はクリスを、お前はハンスとリディオ伯を敵から守れ。その後
に外で落ち合おう」

「畏まりました。ご武運を」

ふん、と鼻を鳴らし、カタリナは傲慢なまでの態度を取る。

——戦場に優しさは不要だ。

少女は、王女としての仮面を被る。全ては国の為、民の為。皆が
求める平和の為に。

階段を駆け上がるカタリナの周囲に、白く煙る凍気が漂い始めた。

* * *

爪の先端から床に向けて血が滴る。鈍色をした爪手甲を右手に嵌
めた男は、その様子に口元を歪めた。

目の前の中年男性……リディオの血だ。

「父上！」

床に膝を付き、長袖長足の青い夜着を胸元から腹部にかけて赤く
染め、それでも右手に握った剣を構える、リディオ・アシュクロフ
ト。

爪の男は、今しがた部屋に飛び込んできてはこの光景に驚きを隠
せない様子である金髪碧眼の男に眼をやった。

「あ、ここの長子さん？ ちょうど良かった、実は折り入って頼み
があるんだよね」

まるで、道端で出会った他人に話しかけるような調子。ハンスは
面食らったが、すぐに陰しい表情で男を睨み返す。

「貴様、あの時の赤い男！ 何故こんな事をする！ 目的は何だ！」
「ま、待て、ハンス。お前が適う相手ではない、逃げろ」

リディオは傍らにある寝台に左手をつき、かろうじて立ち上がる。
……柔らかな寝台が手に付いていた血で、じわりと赤く染まってい
く。

赤い髪、赤い服を着て、黒い長足服を穿いた男は大仰に両腕を開
いた。

芝居がかった口調。

「いやあそんなに難しい話じゃないんだ！

たださ、アンタ達が囲ってるって話を聞いたもんでね、そいつが
どこにいるのか教えて欲しいんだよ！」

赤い男はその細い眼を開ける。蛇のような双眸。

「――ニコラ・フラメル。」

奴はどこにいる？ “賢者の石”を生み出したってえアイツだよ
リディオがそれに答えた。

「ニコラ・フラメルなど、歴史上の人物ではないかつ……しかも、
数百年以上も前の話だ！ 既に死亡しているという説さえある、そ
れを何故、今更……クッ」

「ああ？ おいおいそんなに興奮すんなよオッサン。喋ってもら
うまでは生きててもらわねえと困るんだからさ。――で、そっちのお
兄ちゃん？ どうよ、知ってるかい？」

嘲笑を浮かべながら近寄る赤い男に、ハンスは腰の剣を抜いた。
赤い男の背後、割れた窓から兵士達の怒号と悲鳴が聞こえる。

「……既に死亡している人間に、何の用がある？」

「そいつは教えられないな。」

あ、ちなみにニコラ・フラメルは生きてるよ。既に無機物かも知
れんがね」

「な、何だと！？」

戸惑うハンスの首元に一息で近寄り、爪の先端を押し付ける。

「――若いねえ、若い、若い。その程度で動揺するようじゃ、騎士
サマの名が泣くぜ？」

……は。はは、アハハハハ！」

赤い男はハンスの身につけている胸当てを爪で軽々と裂き、腹部に蹴りを入れる。

ハンスは部屋の外、向かいの部屋の扉まで吹き飛び、背中を強く打ち付けた。

「ぐあっ！」

しかしそれでも戦意を失わず、立ち上がろうと手をつくも。

「――ハンス。下がっている、後は私がやる」

現れた銀髪の女騎士、クレアドールがそれを窘めた。

「ンン？　いつかの騎士殿じゃないか。お前もいたのか。まあ別にどうでもいいけど」

「何……？　私と姫様、タブラ・スマラグディーナが目当てではなかったのか？」

「あ？　……あーあー、そんなのもあったな。でも別にそれ、どっちでもいいんだよね」

「何だと！？」

「いや、代えが効くし。それがあったところでどうにもならんし。

そもそも王様が死のうが何しようが、影者を作ればいいだけの話だしな」

「馬鹿な……ならばお前は、お前たちの目的は何だ！？　何故シャ

ントルイユ城を攻め落とした！？　何故ここに現れた！？　お前達

は、一体何なんだ！」

クレアドールが剣を抜く。

階下からは悲鳴が止まず、屋敷中に火の手が回り始めているのを誰かが叫んで知らせている。

「戦争を起こす事さ。前も言っただろ？　他に理由なんて無い」

リディオが、震える剣先を男に向けた。

実質、三対一の構図。

男の言っている事が本当なら、こんな事をせずとも戦争を起こす事は可能だ。であるが故に、シャントルイユを落とし、アシュクロ

フトを襲う理由は必ずある筈なのだ。

「“賢者の石”か……！」

そう問い掛けるリディオに、男はこれ以上ない嘲笑を返した。

「馬鹿だろ、オッサン。あれは実在しない。」

現存しないものをどうして探さなきゃならない？」

「な、何……！？」

漠然とだが、男の目的を掴み掛けていた予測は見事に裏切られる。否、男が嘘を吐いている可能性も捨て切れない。だが確かに、賢者の石は今まで確認された事例がない。ただ、生み出されたという話だけが一人歩きしている。

赤い男は、空いている左手で頭をがりがりと掻いた。

「んー、知らないのか。ならいいや、もういい。第一段階は失敗だ。第二段階は確か……平和主義者達の抹殺だったか」

男はそうして、右手の爪手甲をがしやりと鳴らした。

ハンスが既に立ち上がっている事を横目に確認し、クレアドールが問う。

「正気か？ 三対一だぞ。貴様に勝ち目は無い」

「は。なら試そうぜ、ほらかかってきな。」

それとも俺から行くか。そうだな、そうしよう」

言うが早いか、男は指先から肘までを包み込む爪手甲をクレアドール目掛けて突き出した。

クレアドールはそれを盾で防ぎ、左に払うと剣を横薙ぎに振ろうと構える。

——目の前には男の姿。剣を触れる隙間が無い程の近距離。

抗う術なく、下から突き上げるような体当たりをされて倒れ込む。

「ぐあっ！」

「うわあ!？」

ハンスもそれに巻き込まれ、クレアドールの下敷きになった。

次いで首元目掛けて迫る爪を、どうにか剣を立てて防ぐ。

「はん。情けないねえ、聖騎士ともあろう者が」

ぎりぎりと競り合うも、男の膂力はクレアドールを上回っている。徐々に押されていく。

「グッ……くう！」

「ハッ」

背後に倒れていたハンスはかろうじて動かせる右手を使い、男の脇腹を剣で突く。

だが体勢も悪く、腕だけの力。加えて当たりが浅く、掠めるだけにとどまる。

「仮想第五元素でも使ってみたらどうだ？ 或いは覆せるかも知れんぜ！」

そう語る赤い男は、どこかそれを望んでいるようにも見えた。

「う……っ」

ここにはリディオ伯にハンス、それにカタリナもいる。

クレアドールはこの男を最優先で排除しなければ、ここにいる皆が危機に晒されると判断し、“それ”を解き放った。

「——創造^{イエツィラー}」

クレアドールの手の中、赤い男の目の前で、銀色の片手剣が光を伴い姿を変える。

刃渡り八十タイト程の、何の変哲も無い片手剣から……巨大な“両手剣”へと。

赤い男の口元が、歓喜に歪む。

ハンスは驚きに眼を見開く。リディオはただ呆気に取られている。剣が、光りながら膨れ上がっていく。

「銀色偽装^{シルバー・バージョン}。まさか“マグナム・オーパス”だったとはな。ある所にはあるもんだ」

増大した剣幅、刃長。肉厚な剣身を支えるのは銀十字の刻印された鍰^{ガード}と柄。

バスタードソードよりも巨大なそれを、クレアドールは盾を捨てて両手に持つ。

「^{レコード}聖刻文字解放、押し返せ、“スタウロス”」

途端、赤い男の体は弾かれたように吹き飛び、終にはその体を部屋の壁へと強かに打ち付けた。

「ぐおっ……ゲホ、ゲホ。ってえなあ」

「リディオ伯爵！ 急ぎこちらへ！」

クレアドールは立ち上がり、男へと駆け寄って剣を突き付ける。
「動くなよ！ 動けばその身が砕け散るぞ！」

巨大な銀剣はおよそ女騎士が満足に扱えるとは思えぬ程、長大。
だが、クレアドールが持つそれは羽のように軽く、また使用者の行使する術式の効果を増幅させる……“魔法の杖”だった。

「ハンス！ リディオ伯と共に外へ！ 生き残った者達と逃げろ！
そこに姫様もいる筈だ！」

「し、しかし団長お一人では、」

「構うな！ 私はこの男を仕留める！」

赤い男が、顔を上げる。

その口が、呪紋を唱えた。

「——^{イェツィラー}創造」

「な、何い！？」

「起きやがれ、“パペット・クロウ”」

鈍色の爪手甲が、赤よりも深い紅に染まった。

* * *

クリスティナ・アシュクロフトは周囲が騒がしい事にまどろみから引き戻され、やがてそれが敵の襲撃だと気付いて跳ね起き、まず最初に壁へ立て掛けてあったヴィルベルヴィントを手にとった。

「て、敵か……やはり暗殺者、なのか」

クリスティナは幾度も他人と剣を交え、その腕を競い合ってきたが、その実まだ人を殺した事はなかった。

少女の心は恐怖に塗り潰されそうになるも、手に持つ一族の誇り

が、それをどうにか支えてくれた。

（殺さなければ、殺される……躊躇うな、民を守る騎士が死ねば、皆も死ぬ。

私は、皆を守らなければ……）

そう決意し、夜着の上から胸鎧と具足を取り付け、膝丈までのローブを羽織る。左肩で留める型の青いものだ。

屋敷の中が騒がしい事に気が付き、廊下へ駆け出る。

右手側に窓、左手側に中央棟へと続く階段。クリステイナは階段へと振り向く。

耳に届く、破碎音。窓が壊された音だ。クリステイナは振り返る。膝を曲げて着地する、黒頭巾と黒装束の人物。

「っ……！」

息を呑む。明確な殺意を感じる。自分を狙っている。それが解る。剣を抜く。敵はそれを見て、二振りの短剣を手に襲い掛かってきた。

「は、」

左手の一撃。横薙ぎ。仰け反って避ける。

次いで右手の突き。体勢は崩れている。回避は難しい。

「はあっ、」

——屈む。距離は自然と縮まっている。手の届く距離。剣は役に立たない。

「やあ！」

体当たりを行う。ぶつけた右肩が痛い。装束の下に鎧を着込んでいる。

敵はよろめく。距離がわずかに開く。剣が機能する距離。

「うつ、く」

——躊躇う。彼女自身が無意識に抱く、人を殺したくない、という甘い願望がそうさせる。

敵が体勢を立て直す。

「はあ、はあ……」

喉が渇く。唾を飲み込む。冷や汗が頬を伝う。

（殺さなければ。殺さなければ。殺して皆を守らなければ。私にはその覚悟がある。だからこそこの剣を手にしている。貴族の義務……果たすべきは、今なんだ）

彼女の蒼い眼が、強い意志の光を帯びる。

それは誰かを守るといふ強い意志、人を殺す事を決意した眼。

（私は逃げない。逃げて、たまるものか！）

「駆ける！ ヴィルベルヴィントよ！」

旋風が吹き荒れる。敵に襲い掛かるそれは足元から吹き上げ、一時的に行動を制限する。

両手で顔を覆う敵の、心臓目掛けて剣を突き出す。

「づあああー！」

装束を破り鎧を突き抜け、心臓を破壊し背中から飛び出す、蒼い剣。

大量の血潮を浴びて、ローブが赤黒く染まる。ぬめりと顔に付着し、敵が崩れ落ちる様を見届ける。

「はあ、はあ、はあ……」

荒い息。手足が震える。これは恐怖かと彼女は自問自答する。

「――クリスティナ！」

掛けられた声にびくりと反応し、振り返れば白い髪の少女。

「あ、カタリナ、姫……」

「敵を、殺したのか。良くやった」

クリスティナはその声に、酷く違和感を覚えた。首を傾げる。

「あの、カタリナ姫、先ほどとは様子が……？」

「そんな事はどうでもいい。今すぐ屋敷にいる皆を連れて外へ出るぞ。急げ！」

カタリナの王女としての顔を始めて見たクリスティナは少しだけ動揺するも、その堂々とした振る舞いに圧されて、はいと返事をした。

既に屋敷の半分以上が焼け落ち、周囲の民家付近には野次馬が集まっている。

そんな中、どうにか屋敷から逃げ出せた使用人達は門を通り、散っていく。

誰とて殺されたくはない。危険からは離れて当然、逃げる者を責める理由はここに無い。

カタリナはそれを横目に、馬車の位置を確認し、既に破壊されている様を見てどうするべきかを考えた。

（馬車は使えない。ならどうする？ 走るしかない。だがどこへ向かう？ 右に向かえばシルメリアとの国境、左はシャントルイユへの道……

いや、途中から東に分かれて、サバステイオンへの道があったはず）

カタリナはそう結論し、逃げる人達を誘導した。

* * *

赤い男の、紅い爪は脈動していた。

「貴様のそれも、マグナム・オーパスか」

「ちよつと違うな。似たようなもんだが、すこーしだけ違う」
微笑を張り付かせて、赤い男は立ち上がる。

先ほどの一撃で、周囲には五つの爪痕が刻まれた。

離れた場所に爪の一撃を届かせる……射程の増大。切れ味の増幅。クレアドールは男の武器にそう当たりを付け、大剣を真っ直ぐ構えた。

「術式装填」

「さあ、往くぜ銀髪！ 簡単に死ぬなよ！？」

男が爪を振り上げる。ただそれだけで空気が裂け、五つの爪痕が刻まれていく。

クレアドールは体に装填した術式を壁のように解放し、身を守った。

「術式障壁か、いいね、イイぞ。お前、やるじゃねえか」

「黙れ！ 貴様はシャントルイユ城を落とし、貴様の仲間が王妃様を殺害した！」

今その罪を償ってもらうぞ、私の一撃は民の怒りと知れ！」

怒りのままに言葉を吐き出し、大剣を天に向けて鍰の銀十字を眼の高さに。

「霊門開放、境界への干渉開始。出でよ、ドラゴン・ヘッズ“竜頭”」

眼前へと展開される、直径一リール半程の白銀色をした紋章法陣。そこを境に、這い出ずるのは一頭の竜。その頭と首。二本の角を後頭に備え、強靱な鱗に守られた皮膚。ぎよろりと巨大な眼球が敵を睨み付ける。白い下顎が開かれた、そこから覗くのは鋭い牙。

「幻獣の召喚……おいおい、本気か？」

赤い男は怪しげな微笑を張り付かせたまま、おどけたように肩を落とす。

「とんでもないね、聖騎士ってのは。まさか神話の生き物と呼び寄せるとは」

クレアドールはそれを聞き流し、怒りを込めて叫んだ。

「焼き払え！！」

巨大な山吹色の光条が、竜頭の口蓋から吐き出される。

赤い男はそれに右手を翳し、弾かれたように後ろへと跳んだ。

「……クッ」

逃げられたのだと歯を食い縛る。しかし重要なのはあの男の殺害ではないと思い至り、カタリナの元へと向かうべく階下へと向かった。

＊ ＊ ＊

あまりにも激しい黒装束の襲撃は、突如現れた赤い男の号令によ

って中断された。

「――ふー。疲れた、疲れた。もう嫌だね、アイツの相手。

おいオマエラ、撤退だ。撤退」

それを合図に一人、また一人と姿を消していく暗殺者達。

「ぬ、ぐう……」

黒い男……ディオーン・アウフシュナイターは傷だらけだった。

裁ききれない飽和攻撃によって負わされた傷がその殆どで、幸いにも致命傷に至るものがないのは彼の危機感知能力、生き延びる才能の賜物だろう。

地に膝を付くその姿は、火傷や裂傷がそこかしこに見当たる。体力の消耗も激しいようで、体はすぐにでも休息を求めているようだった。

「……お、兄ちゃん、生きてるのか？ 大したもんだな、そんな得物で渡り合うなんざ」

赤い男は、遠めの距離にいるディオーンにそう声を掛けた。

見れば周囲に人はいなく、彼だけがここに取り残されている。

「見捨てられたクチかい？ 寂しいねえ。」

一杯奢ってやりたいところだが、そいつはまた今度だ」

「赤い髪、赤い眼、赤い爪……てめえか、“アインハンダー”ってのは」

「おお、俺の事知ってるのか？ しかしそう呼ばれるのは懐かしいね。シルメリアにいた時以来だ」

「覚えてるぜ、“オブラ・マエストラ”の略奪事件。盗まれたのは殆ど俺の責任だからな。その右腕……パペット・クロウの他にもう一つ、奪っていったはずだ。」

今、あれはどこにある？」

「さあ。教えてやる程親切じゃないよ。何なら、その剣と交換……ってのはどうだ？」

ディオーンは嘲るように口元を吊り上げる。

「冗談じゃねえな」

「そう。お互い、冗談じゃねえのさ」

「へえ、流石アムネシア人。話が上手いな」

「そう褒めるなよ。思わず殺したくなっちゃう」

へへへ、と晒う赤い男。

だが、その眼は笑っていない。

「それより、いいのか？ お仲間が皆行っちゃうぜ？」

「おっと、いけねえ。それじゃお暇させてもらうぜ、黒いの」

「さっさと行け、赤いの」

赤い男の背中を見送ってから、ディオンは重い体を引きずり、屋敷の表へと向かった。

そこには二、三十人程の集団がいた。

殆どがアシクロフト邸に住み込んで働いていた者達で、十人程は先程、ディオンと共に裏庭で戦っていた際、先に逃がした兵士達だ。

「よう、無事だったか。アンタら」

「ああ、お前さんのお陰で。しかし部隊長がやられて、俺達はどうしたらいいのか……」

兵士の一人と話していると、不意に横から声を掛けられた。

「――ディオン・アウフシュナイター。皆の為に良く働いてくれた」
何かと見れば、白い髪少女。カタリナだ。頭一つ分程の身長差があるので、自然と見下ろす形になる。

「え？ あ、いや、別に……」

先程の事が頭を過ぎる。加えて、今のカタリナはどこか先程と違う。

「聞けば、兵達を逃がす為に一人で戦ったらしいではないか。
普通出来る事ではない。褒めてつかわすぞ」

「へ？ そ、それはどうも……」

「ついでに私の父上がいるという隣国サバステイオンとの国境近くにある街へ向かいたいのだが、何か情報は無いだろうか。貴公は国

を渡る衛士、地域ごとの留意すべき特徴を把握しているのでは、という予測なのだが」

ディオンは少し考えて、顎に手をやった。

「確か、あそこは川が近いな。それに年中、霧に包まれてる林道だった筈だ。」

道なりにいけば迷う事はないが、雨が降ると泥だらけで進めなくなる。ああ、ちなみに人外は光を嫌う。乾いた松明を多めに持っていった方が良い。夜は代わり番で火を消さないように用心して……っと。申し訳ありません姫様、出過ぎた口を利きました」

カタリナは、それに呆氣に取られたようだった。

ディオンの敬語を使われた事に驚いているようにも見えた。

「——い、いや。問題は無い。では皆の衆、旅の用意を始めてくれ。すぐにここを発つ。馬車は……そうだな、私の護衛達以外はここに残って欲しい。それで……」

カタリナが周囲に指示を出している間、ディオンは伏せているリディオ伯爵に歩み寄った。

「あー、あの、リディオ伯爵。その傷結構痛いんじゃないでしょうかね、この私めが思うに、ですが」

「……何の用だ。自分を蔑ろにした事でも、当てつけにきたのか」

「いえいえめっそーもない。ただ、今の時刻だと医者はやってません。私には多少なり傷を治療する手段があったりします。触らせていただけるなら、痛みを和らげるくらいは出来ますがどうしましう？」

それを聞いて、傍に控えていたクリスティナが身を乗り出してきた。た。

「本当か、ディオンの・アウフシュナイター！」

「あ、ああ。庭園の外周に薬草が生えてたし、手間は掛からないが」

「頼む。お父様を助けてくれ」

そう言うクリスティナの顔は青ざめており、普段の強気さは見えない影もない。

「わ、解ったよ。手早く済ませよう」

——その後、ディオンの応急手当によって持ち直したりディオ伯は複雑な表情をしながら馬車に乗った。彼等はこれから三台の馬車で隣国との境目にある街へ向かう。そこに国王がいるとの情報を頼りに、癒えぬ傷痕を抱えて。

状況は切迫しており、一刻も早く国を立て直さなければならない。国民の不安も膨れ上がっている。

加えて、暗殺者組織の動きも不気味だ。

ディオンは一抹の不安を感じながら、最後尾の馬車に乗った。

第六章 君の成長が私を呼び覚ます（後書き）

これ以降の更新は一週間ごとに行います。

それと、拙作「驟雨」を一時的になろうから消す事になります。
よろしく願います。

第七章 相棒（前書き）

燃え盛る屋敷から逃げ出したディオンは、隣国サバステイオンへの道を辿っていた。

第七章 相棒

大地を叩く馬蹄の音が、夜の闇に響き渡る。

真上にまで昇った双子の月が静かに見下ろす中、林の間に通る地道を三台の馬車が走る。

御者は目深に被った青い外套のフードの所為で、人相が判然としない。

急いでいるのか、馬車の走る勢いはかなりのものだ。

一台の馬車を二頭の馬が引いている。その蹄は激しく地面を蹴り、細かく砕けた土塊をその跡に残す。

……燃え盛る屋敷から逃げ出してきた。暗殺者という敵から逃げ出した。

焼けた匂いと血の臭いを漂わせる車内は、戦闘の傷痕を色濃く感じさせた。

車輪が地道のでこぼこを踏み、車体が揺れる。

「……ってかさあ。俺だけ扱い、ひどくない？」

最後尾の幌馬車、先を走る二台の黒塗り箱型馬車とは随分と格差がある。あの姫君に限ってまさかこんな差別はしないだろうな、とは思いつつ、何か作為的なものを感じるのはディオンとて仕方ないのかもしれない。馬車内には車輪のある縦面に沿って向かい合う形で座る木造の長座席が、申し訳程度に備えられている。そこに腰掛けて黒い大剣を足元に無造作にも置き捨てて、ディオンはがっくりと肩を落とした。

彼以外には誰もいない。

——独り、深く考える。

あの男……今は違うかも知れないが、数年前まではアインハンダーと名乗っていた、赤い男。以前は右腕に暗器を仕込んだ義手を装

着していたが、どうやら付け替えたらしい。

あの赤く脈動する腕、パペット・クロウはオブラ・マエストロと呼ばれる事象干渉兵器だ。代償を支払う代わりに、その力を行使する権限を得る事が出来る。

以前までシルメリアの聖堂教会が保管していたが、ウロボロスに襲撃されて奪われた、二つのうちの一つ。

これは偶然か。ミドリメを追う自分の行く先に、再び現れた赤い男。あの爪が奪われた事には自分にも責任がある。もしかしたら……爪を取り返せという、神の思し召しなのかも知れない。

そこまで考えて、ディオンは呆れて苦笑を零す。

「神様、ね……んなもん、どこにもいやしいってのに」

心のどこかに拠り所を求めてしまう。それはやはり人としての弱さだ。未熟。どうしても逃げられない、人間の弱点。

本当に強い人間は一握りだ。微塵の迷いも躊躇も悩みもなく、困難に立ち向かっていける人間。ディオンのからすれば、それは既に人間ではないようにも思える。

欠点の無い人間程、気味の悪いものはない。それは既に人間の常識外の存在。

——完全な人間など、どこにもいない。いたとしたらそれは、欠陥を持たされて生まれて来るべき“人間”の範疇にない、新しい生き物。

つまりは未知。それは恐るべきモノとして、人間に忌避されるだろう。欠点があるからこそ、人間で在り得るのだから。

嗚呼、ならばつまり人間とは何か。強さとは何か。解釈の仕方によつては無限にあるような答えなど、求めるだけ無駄なのか。

「……埒もない事を考えても仕方ない。まず、これからどうするかを考えなきゃな」

そう呟いて、顔を上げる。

荷車の後口部から、冷たい夜気に混じって薄靄が景色に混じり始める様子が覗いた。

二台目の馬車、黒塗りのそれに乗るのは女性二人と、怪我をした男性が一人。

赤く染めた絹に綿を詰めた内装と豪華な装飾が、少し眼に痛い。側面にある扉の両脇、少し上にあるランプ灯が車内を照らしている。

「クレアドール、剣を……スタウロスを使ったのね？」

カタリナは厳しい表情で隣に座る女騎士に問い掛ける。

責めるその様子に、クレアドールは静かに顔を伏せた。

「申し訳ありません。しかし使わなければ三人とも、殺されています。あの男にはそれだけの力がありました。マグナム・オーパスと似て非なるモノ……と言えはお解りになると思いますが」

カタリナは息を吞む。事象兵器マグナム・オーパスは“人外”が世界に賣したものとされるもので、その形態には謎が多い。どのような種類のものがどれだけ存在しているのか、それさえも定かではない。

「似て、非なるもの……噂で聞いた事があるわ。

オブラ・マエストラ……人間がマグナム・オーパスを模倣して製作した、事象兵器の模造品」

マグナム・オーパスが欠点のない完全な事象兵器だとするなら、オブラ・マエストラはその劣化版。

だがそこには“人間が扱えるように”という配慮がなされているのが特徴だ。わざと欠点を持たせ、使用者の負担をその分だけ軽減している。

その使用には“代償”を必要とする、諸刃の剣でもあるのだが。

「ウロボロスの連中は、オブラ・マエストラを入手している。その経路は不明ですが、二度の襲撃で予測出来る通り、これから先も同じような事が続くと思われます」

クレアドールの持つ事象兵器か、カタリナのアーネンエルベか。その違いこそあれど、相手がこちらを狙ってくる事は変わらない。そこで、対面の赤い長座席に横たわっているリディオが口を開い

た。

顔には汗が浮かんでいる。それが、ようやく治まってきた痛み
の辛さを表している。

「その事象兵器とは何なのですか、姫様。先程の竜は、幻ではな
かったのですか」

「幻ではありません。クレアドールの持つ召喚器スタウロスが境界
へ干渉し、そこから幻獣を呼び出した。境界とは、現実と幽玄の狭
間のようなものらしいですが、実際に観測された事実はありません
から、便宜上そう呼ばれています」

カタリナの言葉に、クレアドールは顔を上げる。

「姫様、全てお話になるのですか？」

「大丈夫よ、線引きはちゃんとする」

リディオが深く息を吸い、ゆっくりと吐く。

「……ご心配なさらずとも、私のような地方貴族如きがそのような
秘密に迫ろうなどとは思いません。ですが姫様、敵が襲ってくるの
は、それだけではございますまい」

カタリナが表情を曇らせる。

「——ええ、私もその考えに至ってはおりました。ですが、それが
真実であった場合……もしも予想通りであったなら、私は……」

「姫様、真実から眼を逸らす事はお止めなさい。貴女は民を率いる
者として、強く在らねばならない。真実がどれだけ非情であろうと
も、それを受け止める器がなければ、国の指導者では在り得ない」

リディオは険しい顔をカタリナに向け、静かに諭す。

「リディオ伯爵。姫様にそのような事、口が過ぎると思いませんか
？」

「失敬。どこか、事実から逃げているように見えたもので」

その洞察は間違いない。カタリナは逃げている。

何故、戦争を否定する自分を消そうとするのか。その存在が邪魔
なのは隣国でも、ましてや暗殺者組織でもない。

「やはり、お父様……お父様が、私を消そうとしている。そういう

事、なのですね」

カタリナの表情は翳り、俯く。揃えた膝の上で手を組む。辛い事実に、心が折れそうになる。

リディオは続けた。

「……確かに、隣国シルメリア、もしくはサバステイオンを征すればこの国は豊かになる。そして、その為に取り得る手段は戦争だけではない。今の国王陛下は恐らく……正常な判断力を失っている可能性があるでしょう」

「では、話せば解ってくれるでしょうか。お父様は」

「さて……どうでしょうな。ここで気休めを言う事は出来ても、事実は変わりません。ですが一つ、確かな事は……」

穏やかな微笑。カタリナに向けられたそれは、子を見る父親としての顔だった。

「国王としては間違いなく優れていらっしゃいます。政治の手腕にも隙は無い。ですが人の親としては……私の方が圧倒的に上ですな。私ならば、娘を殺そうなどと、それこそ死んでも思いません」

「お父様……」

辛い現実には押し潰されそうになる。その細い肩に、隣の女騎士がそっと手を置いた。

「姫様は、私が必ず守ります。この命に代えても」

「ありがとう、クレアドール。でも……私の傍から、いなくならないで」

「承知しました」

忠義に厚いこの女騎士に、主君の命は破れない。破れる筈がない。それは今までの経験から、カタリナは誰よりも知っていて、また罪悪感を感じている。

縛り付けている。彼女を、自分に。そんな罪悪感。

待ち構える大きな不安と、傍に感じる少しの安堵に、カタリナは静かに眼を閉じた。

クリスティナは、その端正な顔を呆然とさせながら、己の両手をじっと、見ていた。

人の皮を裂き、肉を貫き、血潮を浴びた。人を殺した、その事実が忘れられない。

剣術の稽古では味わえない、人外との戦闘でも味わえない、己の生を実感する瞬間。命を奪う感触。それが頭にこびり付いて、離れない。

一刻も早く忘れたいと、彼女は思う。しかし鮮烈なその記憶は、休む間も無く彼女を苛む。

「クリス。大丈夫か？ 具合が悪いようだが」

対面に座る、自分と似た顔の作りをしている美丈夫……ハンス・アシュクロフトは心配げにそう声を掛けてきた。

「お兄様……わ、私は、人を……」

それだけで彼女の感じている重圧を察したハンスは、刺激しないよう優しく諭す。

「クリス。僕も最初はそうだった。お前より少しだけ非情だった僕は、お前より少しだけ、楽だった。初めて人を殺した時、感じたもの……僕はそれに蓋をして、心の奥にしまいこんだんだ。そうしなければ、そこで終わっていただろうから」

「お兄様は、こんな事を続けて……こんな事を繰り返して、エーデル・リッターになったのですか？」

「そうだよ。エーデル・リッター、誇り高き騎士。それは名誉ある称号だ。貴族の中で騎士になる事が出来、その中でも更に限られた人間だけが手に入れられる称号。王族を守る称号だ」

「ですが……ですが、こんなの、間違っています。人殺しは罪ではないですか。何故、騎士が罪を犯してまで人を守らなければ……」

「そうしなければ守れないからだ。人も、町も、国も。クリス、お前は本当は優しい子だ。無理をして騎士になったのは、家の重圧があったからだろう。でもね、クリス」

ハンスはクリスティナの手を取り、優しく、言い聞かせる。

「騎士にはそうしなければならぬ義務がある。高貴なる義務……僕達が民を守るんだ。そうしなければ、奪われるだけになってしまう」

「……お兄様。私には、解りません。そのような免罪符など要りません。今までの私はただ、懂れていただけだった。もしかしたらそれだけで良かったのかも知れない。お兄様やお父様、レーゲンハイト騎士団長のようになりたいと、それだけで……」

それは、彼女の偽りのない本心。

ディオーンと出会い、偽りの仮面に罅を入れられ、そして人殺しの事実を叩きつけられた。

今の彼女は貴族としてでもなく、騎士でもない……ただの少女。

「私は、お兄様達のように……なれない」

頬を伝う涙を隠そうともせず、彼女は泣いた。

隣に立て掛けられた“旋風”ヴァルベルヴィントが、それを静かに見ていた。

＊ ＊ ＊

やがて、視界が完全に霧で覆われるようになった。

ディオーンは一寸先も見えないような状況の中、耳を澄ませている。
右手は床から起こされた相棒……大剣の柄を握り締める。
ウルス・ラグナ

霧の道。

襲うのであれば絶好の状況だが、邀撃ようげきとなればこれは致命的だ。

一瞬の遅れが命取りになる。

しかも状況は夜。夜明けにはまだ程遠い。目的地までの距離は、おおよそで半分を過ぎた程度だろう。

——川のせせらぎが聞こえてくる。この霧はその川の所為だ。

服と肌がじつとりと濡れる。ディオーンのツンとした髪も、先端が少しへたっていた。

纏わり付くような湿気の中、馬車は徐々にその速度を弛めていく。
(ま、当然か。先が見えないもんな)

夜の闇、そして霧。松明も上手く点かない状況の中、頼りになるのは地面の感触だけ。

既に頭上の月は隠れている。雲にか霧にかは定かではない。
(しかし、な……こういう状況に住む奴が、世の中にはいるんだよな)

人外。それは人の敵と言われている、影を塗り固めたような黒いケモノ。

だが、彼は知っている。それ以外にも存在する、人間の敵。

(安っぽい人外は今に限った話じゃないが……ミドリメのような“魔獣”が来ないとも限らないしな)

魔獣。人間がこの惑星に生まれる前から存在していたとされる、古代の獣。

北方の海上に線引きされた不可侵領域“アル・カートラス”より先に住むというそれの中でも、稀に領域を出て活動するものがある。

原初の昔。強大な力を持つ魔獣は、やがてこの惑星に生まれた人間という存在を忌み嫌い、戦いを挑んだ。

戦況は言うまでもなく、魔獣の群が優勢だった。

だが、戦争勃発間もなくして、ある魔獣が人間に味方をした。

“アベル”と呼ばれる魔獣だ。そのアベルがアーネンエルベを創り、アベルに続いて人間の側についた魔獣がマグナム・オーパスを創った。そうして、戦況は五分以上になり、やがて双方の消耗が限界に至ったところで戦争は終結。

——これが、最初の戦争。後に“原初の災厄”と呼ばれるようになった、世界初の戦い。

今では穏やかに暮らしているように見えるこの平和も、いずれまた同じように崩壊するのもかも知れない。否、これは仮初めの平和だと、彼は知っている。

ディオン・アウフシュナイターは識っている。

故郷を焼いた魔獣が、今もどこかで人を襲っている事を、彼は知っている。

その為の、魔獣を倒す為の、この大剣。人の身では倒せないという魔獣を断つ為に、常人ではまず考え付かない構想の元に生み出された相棒。

——その相棒が、一つ、震えた。

ディオンは戦慄する。コレが震えたという事は術式か、もしくは事象兵器か……それか、魔獣の持つ靈力に反応したという事。

何にしろ、彼等を狙う敵である事は、疑いようのない事実。

（おいおい、この状況でかよ。クソ、夜之眷属（NYX）め）

憎々しげに忌名を心中で呟き、馬車を降りた。

「敵だ！ 全員馬車から降りろ！ 術式を使える奴は可能な限りの範囲で障壁を張れ！」

号令を下し、ディオンは気配を探る。

（どこだ、どこにいる！？）

周囲は闇。視界は己の足元さえも定かではない程、濃密な夜（NYX）。

「——俺はここにいるぞ！！ いるなら、誰か返事をしろ！」

誰も答えない。もしかや一人取り残されてしまったのかと思い、ディオンは馬車伝いに御者台へと向かう。

「おい、どうした？ 返事ぐらいしたら……」

それ以上の言葉は紡げない。返事が期待出来ないと悟ったからだ。死んでいた。首から綺麗に寸断されて、血も流さずに手綱も離さずに絶命している。

馬鹿な、と周囲を見る。馬が動いていない。

同じだった。首から先が、無い。

（どうなってやがる！？）

胸中を渦巻く恐怖と絶望を堪えながら、ディオンは静かに膝を曲げ、腰を落とす。

臨戦態勢。

この静かな殺戮に、恐怖を覚えない人間などいないだろう。神経が集中していく。空気がぴんと張ったように、静謐な空間。自分以外、誰もいない。

——長い時間が過ぎた、ようにも思う。もしかしたら短かったかも知れない。

時間の感覚が狂っていく。そんな中、ディオンはただ耐えた。襲ってこない。まだか。もしかしたら後ろにいるのか？ 上か、それとも下か。

馬車の荷車に背を預け、せめて背後という死角を無くす。

——そして、ディオンは見た。

何かが歩いてくる。それが歩く事で風が流れ、霧が少しだけ晴れる。

まるで奇妙。複雑怪奇な輪郭をした異形。まさに、怪異と呼ぶにふさわしい生き物。

生物同士を継ぎ接ぎしたような光景。右に数頭の狼の頭、左に蛇の群れ。足は定かではない。白い体毛に覆われた、丸太のように太い二脚。

頭は、無い。背後に鋭い刃を持つ長い尾が、数尾。それが前方へと回り込むように上下左右から突き出されている。剣の山が迫ってくるようにも見えた。

かなりの巨体。どう見ても異体。まるで異界。

（馬鹿な、馬鹿な……！ こんな冗談にもなりやしねえ！ 何だこれは、こんなの、俺は知らねえぞ！）

魔獣ではない。

魔獣の放つあの霊圧が無い。

これは人外を軸にして様々な生物を寄せ集めただけの塊。ディオンは遭遇した未知に、ただ恐怖と絶望を抱いた。

第七章 相棒（後書き）

今年の更新はこれで一旦終了させていただきます。

一月に拙作「驟雨」を投稿するのと合わせて、再び更新を開始させていただきます。

申し訳ありませんが、どうかご理解いただきたく思います。

それでは皆さん、良いお年を。

第八章 混生体（前書き）

無事に驟雨の投稿を終えましたのでこれから一週間に一度、この作品を更新していきたいと思います。よろしく願います。

第八章 混生体

むせ返るほどの霧が漂う林道。地肌の覗くその道は、林を無理やり切り開いて作られたようで右に左に曲がりくねる。人が迷い込んで行方不明になる事も当然のように起こる場所で、本来ならば昼間にしか通らず、しかし人通りもほとんどないという、霧の道。

双子の月が見下ろす夜、周囲よりも一段と深い闇が、道に生い茂る広葉樹に覆いかぶさっていた。

そんな中、湿った空気を吸い込んで吐き出す、ディオーン・アウフシュナイターは水分を含んで重くなった戦闘用外套に眉を顰めて前を見た。

文字通り、一寸先は闇。その闇と濃い霧でほとんど見えないが、差し込む月明かりに照らされて確かにそこに居る、怪異。

（コイツは一体何なんだ、気味が悪い……しかし物音一つなく接近してきた事といい、あの異様といい、辻褄が合わない。存在が矛盾している）

怪異、ディオーンから見て右半身に狼の首から上が群れを成し、左半身には紫色をした、てらてらと艶を持った斑模様まだらもようの蛇が群生している。胴体は見えず、その群体に生えているように白い毛むくじやらの足が二本、あった。怪異の上下左右に見えるのは剣のように鋭く尖った、尾。それがおよそ十本。まるで生物に見えないソレは、蛇と狼が互いを食い合っているのも気に留めず、ディオーンに一步を踏み出す。足音は、無い。

怪異までの距離はおよそ五メートル。目の前には蛇の群れがその首を伸ばして、ディオーンに食い付こうと迫っている。わずかな月明かりでそれが解る。ディオーンは一步、後ろに下がった。

（こ、攻撃だ！ とにかくコイツに攻撃しないと、こっちがやられちまう！ だが、どこを攻撃すればいい！？ 動きを見るにまるで無統制、恐らくこれら一つ一つが独自の意識を持つ生物だ、一匹殺

しても別な蛇か、尾か、狼が襲ってくる……!」

うじゃうじゃと絡まり合う蛇の群れから、数匹がその口を開けてディオオンへと向かう。

（くそっ、考えてるヒマはねえ!）

左腰に差ししてあるワイルドナイフを逆手に引き抜き、そのまま振り抜く。ぶつり、と厭な音と感触を残して一匹の頭が飛ぶ。ディオオンへと纏わり付く三匹。それを右手の大剣を力任せに薙ぐ事で、切断しながら振りほどく。左首筋と左上腕に噛み付かれた痕。

目の前の男を脅威だと認識した怪異は、さらに一步、踏み込んできた。静かな脅威。まるで悪夢のような生き物が、無数にあるその眼で自分を視ている。

上下左右から縦横無尽に迫る、剣の尾。戦士としての本能か野性のそれか、直感で危機を感じ取ったディオオンは後ろに飛び退いて避ける。しかし追い縋る数尾。左腕の籠手こてとナイフで弾くも生き物のように動く尾は、うねって再び襲い来る。そこへ横殴りに叩き付ける、黒の大剣。ところが吹き飛ぶ尾はその数、二。十あるうちの二。残り八、それは一人の人間が対応するに不可能な数。加えて無数の蛇。絡みつく蛇腹、それに引き寄せられる躯体、さらに刺し突く尾。目の前に死が迫っている。狼の群れ、群生する蛇が鋭い牙をディオオンに突き立て、肉を食い千切る。狼と蛇の合間から、ぎよろりと出現する巨大な、眼球。ディオオンを視る。血走ったそれが、悪夢が、彼を視ていた。恐怖。

「はっ、うあっ……!」

ぞわりと悪寒が背筋を走る。怪異がその本性を現した。彼は、恐怖に震える舌で叫んだ。

「――ヘリオオオス!!」

夜闇に木霊する、それは術式。大剣に秘められた、ある金属の起動式。

ヘリオスとは、即ち太陽。抗魔金属ヘリオス・グラシリス。それが、ウルス・ラグナという黒色外装ブラック・バースジョンに封印されている、あらゆる魔

を弾く“盾”の正体。

術式も人外も魔獣でさえも、それに抗う事適わぬ盾。最硬の、大結果。

這い寄る怪異は不可視の盾に弾かれ、その巨軀を大きく後ろに吹き飛ばされた。霧と闇に包まれてその姿が見えなくなる。

「う、っ……」

体の損傷は大きい。もう一度来られたら、ディオンにはもうなす術がない。盾の能動的行使には多大な精神負荷を受け入れなければならないという条件がある。今のディオンに再度の行使は不可能。もし出来たとしても、相手を傷付けられないコレには意味がほとんどない。

（やばいな、足が言う事きかねえ。今の俺には、荷が勝ち過ぎたシロモノか）

だが、彼が復讐を遂げる為には不可欠な代物でもある。文字通り、魔に抗う為の希少金属レア・メタルを剣の容いれものに封じる事で、魔を断つ事も可能とした。本来の用途とは異なるが、これも魔を弾く特性を利用した一つの方法ではある。

しかし、その開放となると話は別だ。未だかつて誰も使った事のない希少金属を、誰も試した事のない使い方で行使する。手探りで制御法を見つけただけでも、ディオンの功績を称える意味があるだろう。

「はあっ、はあ……げほっ」

（幸いにも、あの蛇は毒を持ってなかったみてえだな。だが出血が酷い。手当てを……）

その時だった。ディオンの前方、あの怪異が吹き飛んでいった方向から声が掛けられた。それはこの場にそぐわぬ、小鳥が囁ささやくような少女の声。

「こんにちは、剣士さん。あれ、こんばんは、だっけ？ フフッ」
それは確かに少女の声ではあったが、どこか人を小馬鹿にしたよ

うな調子だった。ディオオンが何かとそちらを見る。闇の中から漆黒の髪を肩で揃え、同色でレース装飾をされた、ふわりと裾の広がったドレスに身を包む、年の頃十四、五ほどの少女が現れる。金色の瞳が月光を受け、魔的に輝く。

予想を大きく裏切る展開に、ディオオンは驚きよりも不審を抱いた。「誰だ、お前。さっきの怪物はどこにいった」

ディオオンは地面に膝をつきながらだが、彼の目線と少女のそれは同じくらいの高さ。

「ん？ 混生体のこと？ それなら平気よ、もうおうちに帰っちゃったから」

薄く、紫色の唇、常に人を見下しているような眼つき。ドレスの裾から見える細い足を赤茶色のブーツで覆い、どこか芝居人形のようにも見える様相。

小悪魔のような、コケティッシュな雰囲気を持っている。

「おうちに帰った、なあ？ お嬢ちゃん、アレにおうちがあるのかい？」

「あるよ。おっきいところ。あとね、私はアナンシア。蒼い影のアナンシア」

頭を左右にふらり、ふらりと、子供の仕草のように行かうアナンシアと名乗る少女。その目元が厭らしく歪む。微笑。

「ねえ、剣士さんは？ まさか私にだけ名乗らせて、自分は名乗らないの？ ——ねえ」

「剣士さんはディオオンってんだ。お嬢ちゃん、アレのおうちがどこにあるか、教えちゃくれないかね」

少女、アナンシアはドレスの裾を持ってくると、踊るように回る。

「知ってどうするの？ 私はただ混生体を連れ戻すように言われただけ。他に何かするようには言われてない。ねえ、どうするの？」

「俺に用があつて来たんだろ、その混生体ってのは。それとも、その背後にいる誰かさんかい？ 何なら俺から出向いてやってもいい

ぜ」

「それは無理。止めた方がいいよ、剣士さん。あなたが言っても豚のように殺されるだけだもの。私にはそう見えるもの」

回る事を止めたアナンシアは、ダンスで相手を誘うような仕草で手を差し出した後、その手にぽん、と何の脈絡もなく現れた白い花を、黒い髪に挿した。

「どういことだ、そりゃあ」

少女は謡うように告げる。

「発端。教団。Anfang。ペルフェクティオが向かってる。プロヴィデンス教団」

「教団……？」

「万能の霊薬。生命の水。アクア・ヴィタエ。転生術式、ラ、ラ、ラ」

そのまま、ステップを踏んで夜の向こうへと姿を消していく。

「お、おい！ 待て、どういう事だ！？ それが俺と何の関係がある！……クソッ」

ディオンは、少女が消えていった方向を憎むようにじっと、睨んだ。

第九章 座ったままでは、時の砂浜に足跡は刻まらない（前書き）

混生体と呼ばれる怪異を連れ戻しにきたと語るアナンシアは闇の中へと消えていった。ディオンは仲間達の下へと向かう。

第九章 座ったままでは、時の砂浜に足跡は刻まれない

不可思議な少女、アナンシアと名乗った子供は闇に溶けるように消えていった。ディオンはその後姿が見えなくなるまで睨み続け、やがて自身の体に意識を向け、傷から流れる血を止めようとコートのポケットから一つの小箱を取り出した。中には、先ほどアッシュクロフト邸の庭でディオンを治療する際に使った白い塗り薬が詰まっている。切創傷に良く効く薬草を混ぜた軟膏だ。大きさは掌に収まる程度。残りは少ない。

「つてて……こりゃ、使えてあと一回ぐらいか。足しておかないとな」

眩き、薬を塗っていく。塗り込んだ箇所ではすぐに染み込み、出血を抑える働きをしてくれる。市販の液体状傷薬では、手に入りやすい反面こうはいかない。

白い軟膏に赤い色が滲み始める。やがて溶け合い、半透明へと変色していく。あとは固まるのを待つだけだ。

「よし……姫さん達、無事だいいが」

その表情は険しい。未だ薬の乾ききらない体をおして、ディオンは胸に湧く不安を振り切るように暗い霧の中へと歩を進めた。

ディオンは、臭ってくる血の香りに、厭な予感を覚えた。

わずかな明かり。恐らく、馬車の室内灯だろう。それが霧の中、ぼんやりと輝いている。

歩み寄る。不安は隠せない。一国の王女が殺されたとあっては、この先何がどうなるのか見当もつかない。ただ、先行きは暗いという事だけは解る。

「カタリナ姫、伯爵殿……？」

返答は、ない。さらに近づく。やはり襲われたのか。あの怪異に。そんな当然の事に今更気付いて……しかし、あのアナンシアと名乗

った少女の目的は何だったのか。

それに気付いたのは、そこでリディオ・アシュクロフト伯爵の胴体だけがぶつとりと千切れた無残な屍骸を見て、あの銀髪の女騎士と白い王女が忽然と姿を消していた事実で、少しずつ繋ぎ合わさった。

残骸と化した馬車の破片から室内灯だけを取り出し、リディオ伯爵の遺体を横たえる。右手に剣を持っている事から、抵抗したのだという事が見て取れた。怪我でまともに動かない体で、戦おうとした意気にディオンは胸を打たれた。見開かれていた眼を閉じさせ、ディオンは左肩に右拳を当てると、そつと頭を下げた。弔いの礼法だ。

（安らかにお眠り下さい、リディオ・アシュクロフト伯爵殿。姫様は必ず、俺が取り戻します）

身分にうるさい御仁ではあったが、一本芯の通った性格で、強い信念を感じさせる人だったと、ディオンは思う。平和を願うのは、この国の行く末を真に案じていたからだろうとも。

（しかし……これで、俺の任務は失敗か）

本来の目的はこの伯爵を守る事だった。しかし今、目の前で息絶えている。これは任務の失敗を意味する。後味の悪い結果に終わってしまった。加えて、謎も多い。

（今、この国で何が起きているんだ。暗殺者組織、アナンシアが言っていたプロヴィデンス教団、ペルフェクティオとは一体？）

ディオンの予測では、女騎士と王女は攫われたのだと推測している。でなければここでリディオと共に絶命していなくてはおかしい。あの怪異から逃げる術など、現段階では一つもない。否、鈍重そうな外見と動きから、霧のない平地なら逃げ切れる可能性はある。

（今回は、運が良かった。けど次は解らない。あの女が敵か味方かさえ定かじゃない。本来ならもう関わるべきではないのかも知れない。今度、あの怪異に襲われたら俺は確実に殺されるだろう）

それは実感を伴って押し寄せる恐怖。対人戦闘に特化された戦闘

技術を持つディオオンにあの怪異と相対できる要素はない。ならば、逃げて然るべきなのだ。己が生き延びるためには。

（発端、とも言っていた。何の発端なんだ？）

ディオオンの思索を断ち切るように、少女の声が聞こえた。聞き覚えのある声。

「――誰か！ 誰かいらないのか！」

（この声、金髪！？）

「クリステイナ！ 俺だ、ディオオンだ！」

すると、幾分か声に安堵が混じる、返答。

「ディオオン！？ あ、アウフシュナイターか……良かった、こっちに来てくれ、お兄様が酷い怪我をしているんだ」

「解った」

（薬はあと一回分……これで終わりだな）

胸中で二人の父の死をどう告げるか考えながら、ディオオンは室内灯を照明代わりに、霧の中を進んだ。

ハンス・アシュクロフトは足を怪我していた。自分で歩けないように、小柄なクリステイナに肩を借りて、どうにか歩けるような状態のようだ。

「無事……ってわけじゃないな、ともかく、お互い生きて何より」
ディオオンがそう言うと、ハンスは苦渋に顔を歪めた。

地面に座らせ、塗り薬を手渡す。

「姫様が連れ去られた。それを追ってクレアドール騎士団長も森の中へ……」

「――リディオ・アシュクロフトが死亡した事はもう知ってるか？」

「な、何だと！？」

声を荒げたのはクリステイナ。眼を見開き、ディオオンの襟首を掴む。

「父上がどうしたと言った！？ 今、何と言ったんだ！」

「落ち着けよ、金髪。たぶん、敵の狙いは姫さんだったんだ。そうだな、ハンス・アシュクロフト」

ディオンの双眸は鋭く細められる。エーデル・リッターであるハンスは、姫君の隠している秘密を知っていると睨んだのだ。

「……その可能性は高い。だが断定は出来ない。私には、」

「違う、あんたがどうこうじゃない。姫さんは“何”を持っていた？ 恐らく魔導器か、それ以上の事象変移を起こせる何かを、持っていたんじゃないのか？」

「……………」

ハンスは黙る。クリスティナが、掴んでいたディオンの襟首を離した。

「——お父様が、死ん、だ？」

「ああ、恐らく、あの化け物にやられたんだろう。埋めるのはどうする、このあたりでいいのか？」

ハンスが塗り終わった葉の空き箱をディオンの手渡す。

「済まない、助かった。父上の埋葬は、出来ればアシュクロフトの墓地に、母と共に」

「運べる状態じゃないぜ。胴体から真つ二つだ……ああいや、俺が乗ってきた馬車があったな、あれを使おう」

「ど、どうするつもりなんだ？」

不安そうなクリスティナに、ディオンは眼を伏せる。

「これ以上の旅は危険だ。一度町に戻り、領主殿を埋葬する。その後、姫様を搜索する。それでいいな、ハンス・アシュクロフト？」

ハンスは頷くが、クリスティナがディオンの食って掛かった。

「カタリナ姫を見捨てるのか!？」

感情的になっているクリスティナに言い聞かせるよう、ディオンは言う。

「誰もそんな事言ってねえだろ、ただ、これ以上進む意味がねえんだよ。敵の情報もない、霧だらけで何も見えない。夜というの時間も間が悪い、せめて敵がどういう組織なのかぐらい知らなければ、手の打ちようもない。 解るか金髪、こういう時に人間は試される。騎士かどうかではなく、そいつが本当の意味で、戦えるかどうか」

そう語るディオンの瞳は、真摯にクリスティナを見つめている。どこか懐かしそうに、まるで昔の自分を見ているように。

「だが、こうしている今もカタリナ姫が酷い目にあっているかと思うと……初めてできた友人、なのに、何も出来ないなんて……」

自分の爪先を見るように項垂れる。濡れた金髪がさらりと垂れた。薄い唇を、血が出るほど噛み締める。

ディオンは、まるで自分に差し出されたようなその頭を、ぼんぼんと優しく叩いた。

「無事だ。きつとな。だから、安心しろ」

「な、気安く触るな!」

どこか覇気の無い声だが気丈にも手を払いのけ、クリスティナはその主を睨む。

「それだけ元気なら、大丈夫だろう」

ディオンは呟き、ハンスを見た。

今はこんな空元気でも、ないよりはいいと思ったのだ。ハンスもそれには同感なのか特に何か言う事もなかった。

「歩けるか?」

「いや、まだ無理そうだ」

「そうか、肩を貸そう。金髪、照明を持って先を歩け」
「指図するな」

不満そうに返し、しかし言うとおりにするクリスティナ。ハンスを立ち上がらせて壊れた馬車へと戻る。目前に現れる、リディオ・アシクロフトの無惨な遺体。

クリスティナの動揺と、すすり泣く声。ハンスの、悲しみを滲ませながらもそれを必死に堪える顔。たった一人の父親が死んだ。それは、ディオンの遭遇した事のある悲しみだ。

二人の悲しみを忘れまいと、ディオンは深く心に刻んだ。

遺体を布で包み、馬車へ安置する。

「一台目の馬車から馬を引いてくる、ここにいてくれ」

ディオンはそう行つて霧の中へと歩いていく。

「ま、待て！　ディオーン！」

クリスティナが言う。

「ん？　どうした」

ディオンの頭に何かが引かかる。それが、初めてクリスティナに名を呼び捨てられたのだという事に気付くのはしばらく後になつてからだった。

「あの怪物は、何だったのだ？　あんなものがどうしているのだ、どうして……逃げていったのだ」

ディオンは言葉に詰まる。確かにあの化け物は、自分達を殲滅できる力を持っていた。今頃は全滅していてもおかしくない。なのに何故、逃げていったのか。

答えていいものか逡巡する。だとしても、どこまで教えていいのだろうか。

「――黒い少女が迎えに来た。アナンシアと名乗ったな。蒼い影のアナンシア。そのあたりは道中で話そう」

「待て！　まだ話は終わってない！　どうしてお前はそんなに傷だらけなんだ！　どうしてお前だけ生きていたんだ！　あれと戦って生き延びたとも言うのか、ディオーン・アウフシュナイター！」

「その通りだ。話は終わりか？　じゃ、行ってくる」

クリスティナは項垂れた。視線は地道を濡らす、誰かの血の痕。

「……お前は、どうしてそんなに強く在る事が出来るのだ」

その言葉に、荷台に安置された父の遺体を見ていたハンスは、悔しげに顔を歪めた。

自分は齒が立たなかった。見ていただけだった。術式か何かで眠らされたカタリナ姫が連れ去られるのを、自分は見ているだけだった。クレアドールとディオーンだけが、立ち向かう事が出来た。矮小な自分。無力な自分。ただ路傍の石のように見過ごされた自分。

「――クッ」

ハンスは、かつて幼い頃、剣に誓った騎士としての立派な自分に、

なれたと思っていた。

エーデル・リッターという地位からもそれは明白だと、確信していた。だが現実はどうじゃなかった。追いかけていた父の背中では失われ、守るべき主君も攫われた。

無力。こんな騎士など居る意味があるのか。ハンス・アシュクロフトは無力に過ぎた。

黒い衛士との違いに、その落差に、ハンスは叩きのめされた。

「私は、何をやっているんだ」

もしもあの男がエーデル・リッターだったのなら、こうはならなかったかも知れない。

そんな事を思いながら、ハンスは二頭の馬を引き連れてきたディオンを見ていた。

霧の道に戻ると、周囲はやがて夜空に満天の星が煌々と瞬く、澄んだ夜の景色に移り変わる。双子の月が清冽な月光を地上に降らせる、静かな夜。どこかで虫の鳴く声。

ディオオンが御者を務める馬車の中は、無言。失ったものが大き過ぎた。癒えぬ傷痕は誰しものが抱える、生者必滅の理なのか。

かくしてリディオは地に還る。遺骸は焼け落ちた屋敷の片隅、アシュクロフト一族の墓地に埋葬された。昼に行われた葬儀には、ディオオンは参列しなかった。

「頭領。依頼は失敗した。俺はどうなる？」

衛士協会の受付にて、古ぼけた木机に片手をつき、目の前の小太りな男性を睨む。

「フリオニール公から新しい依頼が入った。最上級の衛士指定での依頼だ。お前はもうお役御免になった、頼む仕事もねえ。どこにでも行きやがれ」

「最上級指定？ それはどんな依頼なんだ」

「お前が知る事じゃねえよ」

苛立たしげな口調でそう会話を切ると、頭領は手元の資料へと目を落とした。

「頼む、調べて欲しい事があるんだ。プロヴィデンス教団、ペルフェクティオってのについて、情報を集めてくれ」

その単語に反応したのか、頭領は目を見開いてディオオンを見た。

「おめえ、何でそれを知ってんだ？」

「王女誘拐の犯人の疑いがある。情報は、その共犯者みたいな奴が漏らした」

「止めろ、おめえみてえな半端者が首を突っ込んでいい仕事じゃねえ。しばらく大人しくしてろ。既にワイズマンとガーネットを送り込んだ、じきに解決する」

「……そうかよ」

二人の名前を聞いたディオオンは、苦虫を噛み潰したような表情。

己の数段上に行く実力者が二人だ。しかも二人共、魔導器持ち。その戦力は騎士団が束になっても適わないだろうと噂されている。

（やはり依頼ってのは、王女の救出か。軍団を送り込むなんて真似をせず、衛士を送り込むって事は極秘任務。クソッ、確かに俺が首を突っ込める問題じゃねえ。しかし、こんなの後味が悪すぎるだろうが）

「……頼んだぜ、爺さん」

そう言い残すと、ディオオンは協会を後にした。

眠気を邪魔する強い日光が眼を刺す、昼の時間。

「よう。お前がディオオン君で合ってる？」

中央広場を横切り、以前の食堂でまたパスタを頼もうかと向かっている途中、そう声を掛けられた。

男の声。落ち着いた調子。振り返ると、赤い髪をした眼鏡の青年がこちらを見ていた。黒の上着に赤いコートを纏い、下も黒い長足服。穏やかな碧の眼に流れるような顎の線という、細身の美丈夫。背はディオオンと同じ程度。

（赤い髪……アムネシア人か）

「誰だ、お前」

問い掛けると、男は素直に答えた。眼鏡を右手でつい、と上げる。左手には分厚いカバーの書物。

「俺はアレックス。学院の高等部で教師をやってる。本職は、情報屋だがな」

「……情報屋？」

「そう、お前に売りたい情報があって来たんだ。——“アガート・ラーム”について、知りたくないか？」

「アガート・ラーム、“銀の左腕”か！？ てめえ、どこでそれを、」

それは、過去に奪われたオブラ・マエストラのうちの一つ。あの赤い男の、赤い爪手甲と対を成すもの。

アレックスと名乗った男は、眼鏡をつい、と上げる。

「ふむ、食い付きが弱いな、もう少し言おうか。“ウロボロスの円環”……己の尾を食らう蛇が象った、輪廻転生の理。それに必要不可欠だとされる部品らしいな」

（輪廻転生！？ 待てよ、確かアナンシアは言っていた、転生術式と。それと何か関係があるのか！？）

「そう睨むな、ディオーン・アウフシュナイターさんよ。元から悪い顔がもっと悪くなってるぜ？」

「んだと、テメエ。ケンカ売ってんのか？」

男、アレックスは厭な笑みを口元に張り付かせた。

「どっちでもいいぜ、俺は。それで、どうするんだ？ 買う？ それとも買わない？」

第九章 座ったままでは、時の砂浜に足跡は刻まれない（後書き）

次の更新は1月19日になります。よろしく願います。

第十章 円環楽譜（前書き）

町の領主であるリディオ・アシクロフトは死亡した。その遺骸を一族の墓地に埋葬するため、テルマビスタの町へと戻る一行。

第十章 円環楽譜

「クローズド・レコード？」

昼が忙しいというのは万国共通に当てはまる食堂の法則なのか、慌しい様子の堂内に二人はいた。以前、ディオオンが五人前パスタを平らげた食堂だ。ここの看板娘である茶色い髪と眼をした齡十七、八頃の少女が忙しく注文の品を運んでは、食べ終わった食器を手に厨房へと戻る作業を繰り返している。無論、接客に笑顔も忘れない。「そう。円環楽譜^{クローズド・レコード}。それが意味するのは永劫回帰。その部品のひとつなんだよ、銀の左腕は」

ディオオンの問い掛けに答えるのは、先ほど町の中央広場で声を掛けてきたアレックスと名乗る、赤い髪の男。腰に銀色の装飾品をじやらじやらと一繋ぎに付けているのが眼についた。左前から腰の後ろへと垂れ下がっている、銀の装飾鎖。

旨そうにパスタを頬張っていたアレックスは顔を上げ、口の中のものを一度飲み込んでから続けた。フォークを握っている手の人差し指を立てる。

その際、整髪料で固めて立てた髪が一房、垂れた。

「昔の学者の思想でな。人間は死んだら、自分が生まれた瞬間に戻るって話だ。そしてもう一度、自分の人生をやり直す。その繰り返し。未来永劫変わらない転生。いや、この場合は回帰か。まあそんな話だ。ちなみに自分はそれを認識できないらしい。出来ないようになってるんだとさ」

下らないとばかりに鼻を鳴らすディオオン。

「壮大な話だな。宗教か？」

「そう思うのも無理はない。実際、俺も信じちゃいない。だが考えてみる、お前はもう一度人生がやり直せたら、どうする？」

ディオオンの顔が歪む。アレックスの言葉には彼が背負ってきた過去の重みを、簡単に否定する意味が込められていたからだ。

「……そんな仮定に意味はない。あつて、たまるか」

アレックスは、そこで眼を細めた。他人を馬鹿にした笑み。

「クク、真面目だなあディオ。過去のやり直しは未来を夢見る事より魅力の多いもんだと思うが、まあいい、それで、その永劫回帰を創っているのが銀の左腕とその他なら、そいつを壊そうって考える集団が現れた。知ってるか？ “ミドガルズオルム” って奴らだ」

その言葉に、ディオンは片目だけを見開く。

「ミドガルズオルム？ 確か、神話に出てくる蛇だったな。あーあ、また蛇かよ」

右手に持った銀のフォークでディオンを差す、アレックス。

「ああ、そうか。お前そういやウロボロスの連中に一度襲われてるんだっけか？ ハハハハッ、そりゃ間違いなく縁があるな、蛇に」

「笑い事じゃねえっての」

殊更嫌そうに顔を顰めたディオンの前に、看板娘が笑顔でパスタの盛られた皿を置いていく。

「おっと。ありがとうございます」

笑顔を返して空いた食器を取り、厨房へと持っていく看板娘。ディオンの事を覚えているかどうかは定かではない。何より、忙しいというのもあるようだ。

「いいねえ、あの娘。好みだよ」

そう言うアレックスの視線は店子の服を押し上げる、ふくよかな胸に注がれていた。

「声掛けりゃいいじゃねえか」

呆れて適当に返したディオンの、アレックスは真面目な顔と声音で告げた。

「――俺の恋人、何故か浮気に鋭くてな」

パスタをフォークで巻いていたディオンは、その様子に呆氣に取られた。この嫌味な男に恋人がいたという事が意外だったというものもあるが、内容が意外に過ぎたからだ。

笑いを堪える事ができず、というよりディオンはそれに逆らわな

かった。

「は、はははっ！ おいアレックスって言ったっけ、お前、抜け目がなさそうな外見だが実は恋人に尻に敷かれてるのか？」

アレックスは眼鏡をつい、と上げる。

「抜け目がなさそう、じゃない。ないんだよ実際。いいかディオンのよく聞け、女の勘ってのは馬鹿にならないんだ。……あ、お前、女はいるのか？」

「いねえよ。だがまあ、そういう関係が無かったわけじゃない」

ふとディオンの脳裏に過ぎたのは、風に舞う金色の長い髪だった。持ち主は艶やかな雰囲気を持った妖しい女。排他的で他人を寄せ付けない、不可思議な女だった。ディオンの女を知ったのも、女が男を知ったのも、互いに最初だった。それが数年前。

（リグレット。まるで水みたいな性格の女だったな。掴みどころがないっていうか）

それはディオンのにとって捨てられない過去。今は彼女が、どこで何をしているのかも解らない。短い時間を寄り添った関係。しかし恐らく、生涯忘れられないであろう名前。

「ほお、意外だね。お前みたいな朴念仁、相手にする女がいるとは」「朴念仁とは言ってくれるじゃねえか、俺にゃお前みてえな嫌味ったらしい男を相手にする女がいる方が意外だぜ」

「クク、どこぞの辛気臭い喪服みてえな真っ黒い服着た奴よか、相手にされてるのは確かだな」

「そうかい、軟派で嫌味な眼鏡野郎よか、そいつのがマシなのは確かだな」

「へえ、知性があるのと野性的なのとを比べたら、女は圧倒的に知性がある方を選ぶと思うがね俺は。何せ将来が有望だ。稼げる上に顔も良い」

「売らなきゃ買ってもらえない奴は大変だな。まあ他人に媚びて自分を安く売るのも一つの処世術ではあるし？ 俺には別にどうでもいいがね」

「うーん、というよりお前みたいなのがいると場が辛気臭くなるなあ。いっそ今すぐ死にでもすれば社会的に貢献できるんじゃないかな？」

明らかな毒を吐くアレックス。ディオンはしかし愉快そうに口元をつりあげた。

「いやいや、お前みてえな色情狂には負けるよ。ちょっと近づくだけで女を妊娠させそうじゃないか、そのうち夜道で後ろから刺されそうだな。なんか股間だけ生きてそうで怖いけどな」

「ーク、クク、はははは……っ」

二人、声を出して笑う。それも昼の喧騒に紛れて注目されるまでには至らない。

アレックスは言った。

「お前とは仲良しになれそうだよ」

「ああ、俺もそう思うよ」

(どの口が言いやがる、このクソ野郎)

ディオンは内心そう呟き、パスタを口に運んだ。

アレックスも再びパスタを頬張ろうとし、ふと思いついたように言い出した。

「ああ、ちなみにミドガルズオルムは“プロヴィデンス教団”の下部組織だ。ウロボロスにも資金援助を行ってる。このあたり、かなり重要な秘密情報になるな」

「……っ、何だと!？」

ディオンは衝撃に席を立ち掛けたが、どうにか思いとどまった。口の中のものを飲み込んでいなければ吹き出していたかも知れない。目の前の男はさざりと言ったが、それはディオンのにとって何よりも重要な情報だ。

「えらい食い付きだな。どうした。何か思い当たる事でもあるのかな？」

「いや、少し待て」

(考えを纏めよう。アレックスの話では、俺が原因で奪われたオブ

ラ・マエストラの一つ、銀の左腕を狙っているミドガルズオルムという組織がいる。そいつらはプロヴィデンス教団に所属する組織で、その教団は姫さんを攫っていった奴らでもある。アシュクロフト家を襲ったウロボロスも教団に関係があるっていうんなら……全てが繋がっていく)

この一連の事件の背後に、教団の陰謀が隠れていると直感したデ-ionはアレックスに視線を戻す。どこか、得体の知れない不安を抱えながら。

「教団の頭は何ていう奴なんだ？」

「その情報は割増しになるな」

見下すような、人の底を見るような視線。

ぐっと堪える。デ-ionは懐の金銭袋から金貨を一枚、取り出した。ぴん、と指で弾いてアレックスの元へと飛ばす。

「ほう！　こりゃ驚いた、何だ、結構稼いでるじゃねえかデ-ion」

「うるせえ。それより、教団の情報は？」

「ああ、教祖はアンセムって奴らしい。それを守る二人の守護者が常に教祖を外敵から守っているようだ。トールトータス・クリスタラーと呼ばれる鞭型魔導器をあやつるなんて話も聞いたな」

(魔導器か、厄介だな)

「それで、その教団はどうにも怪しい実験を秘密裏に行っているらしくてな。いわく、動物の合成実験だとか……」

「合成、実験!？」

デ-ionの頭には、あの不気味な怪異の姿が浮かぶ。どう考えても自然の中で生まれたとは思えない、不可思議な生物。あれが動物の合成実験の元で生まれたという推論は、恐らく間違っていないだろう。

「万能の霊薬、アルカエスト。そう言うらしい。霊知学の権威であるヴィクター博士も関係してるってえ話だ」

「ヴィクター？　そいつは確か、数年前に行方不明になったって学者じゃねえか。覚えてるぞ、大陸中を駆け巡ったニュースだ。もう

死んでるとも聞いたが、なんでそんなところに」

「行方不明、ね。世間的にはそうなってるが、誘拐されたんだよ、あの先生は。そして教団で無理やり研究をさせられてる。確実な線からの情報だ。動物同士の合成、もしかしたら人間も人外も、その区別なく行われているのかも知れないな」

苦虫を噛み潰したかのように、険しい表情を象るディオーン。嫌悪を隠そうともしない。

「……外道じゃねえか」

「研究そのものはそうだな。しかし俺にはそれが、あの先生が自分から進んでやっているとはどうしても思えない。恐らく脅されてるんだろう。だから救出したい」

そこでアレックスは、今までになく真面目な表情になった。その双眸に真剣さが込められる。

「だから、お前に依頼したい。衛士協会第十五位、ディオーン・アウフシュナイター。ヴィクター博士を助けてくれ。アルテリアの霊知学理論を五年進めた天才だ。後は、俺の恩師でもあるから、俺も一緒に行くのが筋ってもんだよな」

「確かにそういうのもあるが、別にそのへん、俺は拘らないがね。まあいい、俺も教団には用事があるんだ。だが、足手まといは御免だぜ」

「心配するな。俺は術士だ。並の衛士よか役に立つだろうよ」

「それが口先だけじゃない事を祈るぜ」

「報酬は、こいつだ」

そう言ってアレックスは手の上で金貨をもてあそぶ。先ほど、ディオーンが渡したものだ。

「……はあ。そういうオチかよ」

アレックスは、あつと何かを思い出したようだった。

「そういや“銀の左腕”の在り処についてなんだが、これが未だに判明してないんだ。どうも国外にあるみたいだな。俺の情報網にも引っかからないなんて、そのぐらいしか考えられん」

（随分な自信だな。しかし、国外にあるのなら、教団もそっちに注目してるって事になるのか？）

「おい、プロヴィデンス教団の本拠地ってのはどこにあるんだ？」

「は？ お前、それが解ったら苦労しねえよ。もし俺が知ってたらとつくに国王に密告してるっての」

「……そうか、そうだな。お前も恩師を攫われてるんだしな」

（しかしそうすると、敵がどこにいるのか解らない。あの化け物が国内を闊歩してたら、こいつみたいな情報屋の耳に届いてるはずだ。やはりあの霧の道の近くか？）

顎に手をやり、思索する。アレックスが言った。

「ところで、ディオーン。お前さんウロボロスに一度、襲われてるんだろ？」

「ん、ああ。それがどうした」

アレックスは言い淀む。何かを、良いたくなさそうな素振り。

「いや、まさかとは思うんだが……お前が“銀の左腕”を探してるんだったら当然、もう片方の事も知ってるだろ。“パペット・クロウ”とか呼ばれてる、オブラ・マエストラの事なんだが」

「ああ、知ってる。持ち主はアインハンダーだ。お前と同じ、アムネシア人だな」

ディオーンは既に協力関係にあると認識している為、アレックスに隠さずそう告げた。元々裏のある人間ではない為に言い洩るような真似をしないのが、この男の美点だろう。

「アイン・ハンダー。片腕の男、か。そうか、今はそんな呼び名なのか、アイツ」

憂いの表情で視線を落とし、皿の上の Pasta をフォークで巻く。
「知ってるのか？」

「――フン。下らない感傷だ。いや、柵しがらみかな」

かちゃん、と音を立てて置かれる、フォーク。

「弟だよ、俺の。アルフレッド・ベートーヴェン。今年で十八になる」

「お、弟！？ いや、だが……そう言われても、似てねえぞ」

呆れたように椅子にもたれ掛かるアレックス。赤い髪が揺れる。

眼を丸くして自分を見るディオオンに、男は視線を逸らして答えた。
「ベルニは似てるって言うんだが……あ、ベルニってのは俺の恋人な。三人共、幼馴染みなんだよ」

内心で、聞いてねえよと返すディオオン。目の前の男とあの赤い男の共通点は、共に赤い髪という点しか見つからなかった。しかもそれは船で海を渡った先にあるアムネシア大陸に住む人種特有のものだ。交流が盛んな今では、然して珍しいものでもない。

「暗殺者組織のアサシン……同情はしねえが、どうするつもりなんだ？ わざわざ聞いてきたんだ、何か考えがあるんだろ。改心させるだの、殺すだのってのは良く聞く話だが」

「ああ、そのあたりはまだ。正直、俺が恨まれてるだけだから」

ディオオンは眉根を寄せた。しかしすぐに合点がいったように表情を崩す。

「ははーん。大方、女を取られた恨み……ってどこじゃないか？」

「それだけであんなになるか？ どうもアイツは、俺の事を根底から否定し尽さないと気が済まないようだな……会えば殺し合いになるだろうが、やっぱり弟なんでさ、どうにか暗殺者って仕事から足を洗わせてやりたいんだよ。ベルニも悲しむし」

「ふーん。まあ、勝手にすればいい。しかしマエストラ持ちなんて力に依存した人間だぞ、どうにか出来るのか……って、これは俺が心配する内容じゃないな」

「何言ってる、これからお前は、俺と一緒に敵地に乗り込むってのにそんなんじゃないか困る」

ディオオンは、一瞬何を言われたのか解らなかった。またあの霧の道に行くという事なのだろうか考えるも、あまりに無策過ぎると思ったのだ。

「解らねえって顔だな。大まかに説明しよう。このテルマビスタと首都シャントリュユ、そしてサバステイオンとの国境付近の村、リ

フルを線で結ぶと、こういう逆三角形が出来るだろ」

そう言って木机の上を指でなぞり、ディオンのから見えて逆三角形を描くアレックス。下の頂点が首都シャントルイユとして、左の頂点がテルマビスタ、右がリフルだ。

「ここまで、いいな？　で、このテルマビスタとリフルの中間に、年中ずつと霧に包まれる道がある。しかも曲がりくねって行方不明になる奴が多い、難所だ。しかしこの難点を利用して人目につかないよう、潜伏した場合は絶好の“隠れ家”となる」

「隠れ家、つまりここに、教団に關係する何かがあると？」

「話を急ぐな。しかし外れてない。ここにあるのは支部だ。通称“蛇の巣”と呼ばれているらしい」

「蛇の巣……まさか」

「ミドガルズオルムか、ウロボロスか。恐らく後者だとは思うがね。恐らくここに」

（攫われた姫さんがいる、可能性が高い）

「アルフレッドとヴィクター博士がいる。……どうした？」

強張った表情のディオンを不審に思ったのか、アレックスは尋ねた。

「何か思い当たる事でもあるのか。言っとくがこの情報の信憑性はほぼゼロだ。何せ場所が場所だし、肝心の提供者も数日後に姿を消した」

「なるほど……」

「あくまで噂程度でしかない。だが、今はこれに縋るしか道はない。だろ？」

恐らく、その情報の提供者は暗殺者達によって殺されたのではないか。そう考えると信憑性がゼロというのは無い。ディオンはそう考える。加えてあの怪異。あれを隠す場所にしても、ここはもってこいの場所。

「だが、あの霧だらけの中でその支部ってやつをどう探す？　霧を払う術式なんぞ無いだろう」

「そうだな、何せ霧自体が霊力を纏ってる、不可思議な場所だ。払おうと干渉しようにも掻き消されちまう。だが、戦闘用の術式を使うには問題ないってワケの解らなさ。どうも、あの霧は罠らしいな」

その言葉にディオンは小さな引っ掛かりを覚える。
(罠として利用してる、っていうのが正しいと思うが)

あくまで霧は自然に発生したものであり、それを媒介として視覚的な幻惑効果を持たせたのだというのが、ディオンの中での推測だった。

「話じゃ、蛇の巣は地下に掘られてるらしい。出入り口は一見そうとは解らない、とも聞くな。まあ偽装されてるんだろう。当然だな」
ディオンはここに来てようやく、というよりも少し前から、この男の持つ情報量に感心していた。それを今更ながら口にした。

「お前、嫌に知ってるな。俺の知りたい情報を次々と……」

「ははん、まあな。ペンは剣より強し、という格言もある。こっち方面じゃ情報は速ければ速いほどいいのさ。無論、種類の引き出しも多けりや稼ぐのに苦労はしない。買い手が多い情報ほどよく売れる。それに、アルフレッドとヴィクター博士の事は俺も何とかしたいと思ってたし」

なるほど、と頷く。この男の動機はそれなのだと合点がいき、情報の質と量にも納得がいった。ディオンは再びパスタにフォークを突き刺す。

目的は違えど、過程が共通していたのだ。互いの道が合流して、当然というものだろう。

「しかし。一見そうとは解らないって支部をどう探すんだ？」

「だからこそその“餌”なんだよ」

「餌……？」

そこでアレックスは、赤い髪と眼をした目の前の男は、にい、と口元を歪めた。邪悪な笑み。眼鏡の奥で双眸が怪しげに細められる。
「釣りだよ、釣り。やった事あるか？ 釣り餌は俺と、お前。正確には抗魔金属と魔導術式を記した書物。奴らは必ず、欲しがると思

うけど。まあ実際はやってみないと解らない、賭けになるかな」

「っ、テメエ、どうしてその事を!？」

眼を見開いて机を叩き、立ち上がるディオオン。周囲も何事かと注目する。

「落ち着けよ、ディオオン・アウフシュナイター。いや、ユウ・シラガイ。そういう名前だったらいいじゃねえか。倭国人なんだろ。ん？」

ディオオンは、その言葉に、ぶちりと音を立てて何かが切れる音を聞いた。

左手がナイフの柄に走る。逆手に引き抜き、目の前の男の首下へと。空気を撫でるように一寸の淀みない、冴えた刃筋が奔る。それは、人を殺すと明確に覚悟しそれを果たす為だけに行われる最小限の行動にして最速の動き。しかしディオオンのそれは、男のフォークによって防がれる。硬い音。銀色のフォークで、遮られた。

「ああ、良いね。素晴らしい。俺じゃなかったら死んでるぜ。術式もギリギリ間に合ったくらいだ」

「――誰から聞いた。その名前と、ヘリオスの事を」

静かながら、迸るような怒気を孕ませた声。余計な事を一言でも言えば、弾けるような速度を以ってナイフが再び一閃するだろう事は容易に想像できる。

張り詰める緊張感の中、しかしアレックスは小馬鹿にするような姿勢を崩さない。

ディオオンからすれば、男の持つ情報は便利であったと同時に、脅威にも成り得ると判断した結果だ。この男は目的を果たしたその後、自分を敵に売る可能性が高い。故に即殺しようと動いた。生き延びる才能に長けた戦士の嗅覚、条件反射のようなものだ。

「こんなの調べりゃ、すぐに解る事だろ？ 何そんなに必死になってんだよ、情報屋は情報を仕入れて、売るのが商売なんだ。実際にお前も今、利用してただろ？ 自分に都合が悪くなったから斬って捨てるってか？ クク、いいね、いい感じに“人でなし”だよ」

「黙れ！　ぶち殺すぞ、テメエ！」

男の襟首を掴もうと伸ばした手を、その手首を掴まれる。

「落ち着けて。怖がってるぜ、後ろの子」

その言葉に我に返り、肩越しに背後を見るディオーン。そこには、銀色のトレーを胸に抱えて立ち尽くし、がたがたと震える、看板娘の姿。

「……チッ」

脇の壁に立てかけてあった大剣を手にし、食事の代金を置いて店を立ち去る。アレックスも後に続いた。

「悪いね、お嬢さん。今度は静かに食べにくるよ」

浮ついた声音を背中越しに聞き、ディオーンは不快感を表情に滲ませた。

＊ ＊ ＊

朦朧とした意識の中、しわがれた男の声が反響して聞こえてきた。狭い場所らしい。

「白い髪の女は悪魔の使いだ。欠落因子を内包した、世界の敵。しかしそれは永劫回帰という環を破り、新たな世界へと生まれ変わる為の礎……依り代ともなる存在」

意識が徐々にはっきりとしていく。冷たい、土の床に横たえられているのが解った。手足は鎖で繋がれているようで、動かすとじやらり、と音がする。薄暗い。僅かな灯りはロウソクのものだろうか、カタリナの全容を照らすまでには至らない。目の前には鉄格子。扉には錠前が嵌められており、出る事は不可能だと見てとれた。ロウソクの灯りは鉄格子の向こう、左手側に通じる通路から漏れてきていた。

周囲はと見れば、土の壁。ひんやりとした空気が肌を刺す。カタリナは次に自分の格好を見た。ローブのままだが、首元にあったタブラ・スマラグディーナがなくなっている。

一瞬、動揺しかけたが、カタリナはしわがれた声に耳をそばだてた。

「代替品、という事か。“銀の左腕”の。しかし確実性はあるのか？ 危ない賭けをするつもりはないぞ」

応対するのは、若い男の声。どこか威厳のある、人を使う立場の声であるとカタリナは感じた。二人の声は、左手側から聞こえてくる。

「心配するな。エメラルド・タブレットもある。媒介としては十分だ。後はそうだな、補佐役として魔導器が幾つかあればいいのだが」

「それならちょうど良い。先ほど、衛士と見られる二人を駆除したところだ。二人共、質の良い魔導器を持っていた。それを使おう」

「ふむ。ならば万事抜かりはない」

「欲を言えば銀の左腕が欲しいところだが、致し方あるまい。全ては教団の為に、人類に掛けられた縛鎖ギアスを引き千切る為に」

（縛鎖ですって？）

「ところで、異約聖書……今はどこに？」

「また、あいつだ。いつもいつも、我々の邪魔ばかりする」

がしゃ、がしゃ、という金属が床を踏む音。恐らく具足の音だろうとカタリナは当りをつけた。どうやら誰かが来たらしい。これで三人。

「ああ、お前か。長期間の任務、ご苦労だった」

「この先にいる。もう目覚めているだろう」

しわがれた声と若い声は、順に言った。

三人目が、がしゃ、がしゃとこちらに歩いてくる。軽い足音からして体重はそう重くないだろうという事が解った。だが、鉄格子の向こうに現れた姿を見て、カタリナは眼を見開き、驚愕に唇を震わせた。

それは、どうしても理解できないものを目の当たりにした人間の反応。

「――え……？」

「具合はどうだ、カタリナ・シャントルイユ」

金色の見慣れた胸当てと膝までの具足。白い外套。赤い戦闘用装束。

そして、煌々とロウソクの光に照らされる銀色の、長い髪と眼。

「クレア、ドール……？」

彼女の側近。近衛兵。教育係。昔から変わらず彼女に仕えてきた女騎士が、そこにいた。

彼女を見下すように、見下ろして。

「カタリナ・シャントルイユ。お前は既に“我々”の手の内にある。逃げる事も抵抗する事も許さない。許されない。良いか、お前は儀式の供物として捧げられる、人柱だ」

カタリナは震える唇に手を当て、信じられないものを見るようにクレアドールを、見上げた。銀の眼に情の光はなく、ただ道具を見る眼差しだった。

何もかもが遠いように思える中、クレアドールの声だけが頭に響いた。

「勘違いしないように言っておく。これは裏切りではない。私は元々、こちら側の人間だったというだけだ。国王には別室で休んでもらっている。長い年月がかかったが、これも全て筋書き通り。時間の枠の外側に立つ私には、長い年月とは言っても瞬き程度の時間ではない」

カタリナの頭を過ぎるのは、ただ、どうして、というものだった。（どうして、クレアドールがこんな言い方をするの？ どうしてクレアドールが私を裏切るの？ どうして、クレアが私を……）

「クレアドール……どうして……」

「だが、そうだな。お前といた時間は、悪くなかった。人の子が成長していく様子も、そんなに悪いものではないと、再び認識させられた」

「人の、子？」

呆然と呟く。まるで、自分はそうではない、というように。

クレアドールは、それを鼻で笑った。

「考えなかったのか？ 一度も？ 私がお前の幼い頃から何一つ変わらぬ姿でいることも、私が何故“マグナム・オーパス”を使えるかという事も」

カタリナは、再び驚愕に思考を断ち切られた。全てが、信じられなくなっていく。

「人から外れたもの……私は人外なんだよ、カタリナ」

そう言って。遥かな断絶の向こうにいる銀色の女騎士は、どこか寂しそうに小さく、晒った。

第十章 円環楽譜（後書き）

次の更新は諸事情により、1月24日に更新しようと思います。その後、2月3日まで戻れない可能性がありますので、書けたら次週の分もあげます。
よろしく願います。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (1) (前書き)

銀髪の女騎士は主君を捨て、その前に立ちはだかった。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (1)

ロウソクの儂い灯火が、周囲を土壁に囲まれた洞窟内を心許なく照らす。地下なのか山中に掘られた場所なのかは、定かではない。

縦に長く掘られた洞内は狭苦しいという感じはしない。大人二人が余裕を持ってすれ違う事ができる程度には幅があり、高さも二メートル余りある。空気の流れも考慮されているのか、さらりと吹くわずかな風を肌を感じる事が出来た。

ロウソクの頼りない光が鉄格子を照らし、そのところどころにある錆を浮き立たせた。

「私は、どうなるのですか？」

少女のか弱い声。ロウソクと同じく、それは頼りなく紡がれ、流れていく。

声の主、カタリナは白いローブとその下に来ている夜着を膝の上で握り締め、そう言葉を吐き出した。睫毛がふるふると震えている。泣き出したいのをかろうじて堪えているのだ。彼女が心から信頼を寄せていた、銀髪的女騎士が裏切った。否、元から彼女の敵だったのだと正体を明かした。その事実が重くつらく、心に押し掛かっている。

俯きながら問い掛けたカタリナに、凛々しく気高く、しかし無情に答える声。

「儀式の供物として死ぬ。世間的には、霧の道で行方不明になった事にされる。我々ミドガルズオルムは、秘密裏に社会に入り込み、情報操作や人材の派遣、政治にも介入している組織だ。故にこういった長期間の潜伏任務も行える。

お前は最初から儀式の為に生かされ、その為に守られてきたのだ」カタリナはその言葉に、潤んだ眼を瞑る。

彼女の内面は脆い。少女が被る姫君の仮面は、この女騎士ありきで存在していた。今となっては、彼女はただの、少女でしかない。

寄る辺なく立てる程、強くはなかったのだ。

「……では、全て演技だったのですか？ 私を守ると言ってくれた事も、教育係として傍にいてくれた事も」

クレアドールは、そこで、興味がなさそうに眼を逸らした。

「そうだ。全ては組織の為に行ってきた事。私を信じ、何の疑いもなく私の言う事に耳を傾けるよう、教育してきた。期が熟すこの時まで、そう在り続けるように尽力した。何故なら色素欠乏者は悪魔の使いとして皆、真っ先に殺されていく。人徳法でそう決められているからな。故にお前の存在は貴重であり、失うわけにはいかなかった。王は、お前を私達に売ったのだよ。それがお前の、幽閉されていた本当の理由だ」

がしゃり、と具足の鳴る音。主君を裏切った今に在っても、この女騎士の尊厳は微塵も揺るがない。騎士が偽りの身分であったとしても、芯に宿る強い意志が彼女を支えているのだ。

「わ、私は……貴女を、信じていた、のに」

どうか否定してほしい。そんなわずかな望みを乗せた、つかえながらも必死に紡いだ言葉。

「世の中には二種類の人間がいる。利用する者と、される者だ。お前は後者だったというだけの話。恨むのなら、己の運の悪さを恨むのだな」

再び、具足の音。女騎士は去ろうと踵を返し、歩き出す。

「クレア……嘘、だったのね。ぜんぶ」

その言葉に答えず、騎士は歩き去った。

もしかしたら、彼女だけは自分を裏切らないと、どこかで思っていた儚い希望を、粉々に打ち碎かれた。カタリナは未だ現実を受け止め切れず、呆然と虚空を見つめている。

やがて。洞窟内に反響する少女のすすり泣く声が、薄暗い洞を満たしていった。

＊ ＊ ＊

女騎士、クレアドールは暗い洞窟内を躊躇いなく進んだ。先からは数人の男女が歓談する声が聞こえてくる。そこは兵達の休憩所となるよう四角く掘られた広場になっていて、明るい。皆、数脚ある丸い木机の上でカード遊びに興じていたり、チェス等で時間を潰したりとそれぞれの時を過ごしているようだった。木机の合間合間にロウソクが台に立てられている。

そこにいるものは皆、黒い生地縦に赤い線の入った戦闘用外套と長足服を纏っていた。それぞれ細かく異なる意匠のようだが、概ね同じものだ。かすかに酒の臭いが漂う。牢獄のあった場所よりは風の通りが良いのか、女騎士の銀髪がさらりと一房、揺れる。クレアドールは手近な木造椅子に座り、机に手を置いた。今しがた出てきた洞の、すぐ傍。

（ここなら、カタリナの所に行く輩を見張る事が出来るな）

それは未だ残る主君への忠誠心なのか、それとも組織の任務で彼女を守っているだけなのかは、彼女以外に知る由もない。

果たしてクレアドールの予想通り、数人の男が下卑た笑みを口元に湛えて牢獄の方へと広場を進んでくる。クレアドールはすぐさま腰に差してある片手剣を抜き放ち、その行く先を塞いだ。

「ああん？ 何だよ、邪魔するのか魔女」

男達の威圧的な視線。言葉。それに一切動じぬ銀の双眸は強く、男達を睨みつけた。

「その通りだ。この先に行く事は何人であろうと許さん。退け」

強い声音で、違う男が言った。

「何でだ？ お前がお姫様を守る意味はもうないはずだが、銀の魔女さんよ」

「儀式まで彼女は生娘でなければならない。お前達の薄汚い欲望の吐け口にされるわけにはいかん。解ったな。意味ならあるのさ。こうしてお前達のような輩からカタリナを守るという意味がな」

男達は、その言葉に引き返す事を余技なくされた。憎々しげに舌打ちをする者もいる。

剣を納めたクレアドールは、再び椅子に座った。その後、そこを番人のように離れない彼女を見て、やがてカタリナを犯そうと考える輩はいなくなった。

（魔女、か。幾度となく呼ばれてきた蔑称だ。慣れている）

クレアドールは眼を閉じる。思い出すのは過去。百五十年に渡って生き続けてきた、その時間を思い出す。

彼女とて、生まれながらに銀髪銀眼という風貌だったわけではない。ただ、彼女は不運だった。“銀の十字架”に選ばれてしまったが故、人外として生きていく事を強制されたに過ぎない。魔女という呼び名も、ただ周囲の人々に与えられた蔑みの称号でしかない。

そこに、あの男が現れた。己を“蛇”と名乗る、不気味な男。

——もし、人生をやり直せるとしたら——

彼女は思う。本当にこれで良かったのか。自分は何か過ちを犯していないか。これはもしかしたら、ただの子供のわがままと同じではないのか、と。

嫌な事があったからやり直したい、では、本当にただの馬鹿だ。しかし、それもまた人の消せない感情であるのも、確か。未練。彼女のそれは、どうしようもない未練。人間に戻り、普通に歳を取って死にたいという、ありきたりな、しかし文字通り死ぬほど、取り戻したいもの。

再び、腰の片手剣を引き抜く。真っ直ぐに伸びた八十タイトの諸刃、白銀に輝く眩いミドルソード。柄と剣身の間にある同色のガードには読めない言語で文字らしいものの意匠が掘られており、柄は諸手で握れる程度の長さを持った造り。

（銀の十字架……コイツが、コイツさえなければ）

彼女はそれを忌み嫌いながらも、手放す事が出来ない。棄てても必ず、彼女の元へと戻ってくるのだ。千度繰り返し、ついに諦めた

過去がある。そういう、因果というものがあるのだと、彼女は長年の調べで知った。

故に。彼女もこれの全容は掴みきれていない。

未だかつて一度たりとも、これを全力で行使した事がないために。

＊ ＊ ＊

ディオンのアレックスは宿屋に戻る。昨夜、戻ってきた際に三人部屋と個室を取っておいたのだ。もちろん、個室はクリスティナに分になる。三人部屋なのは、二人部屋が空いていなかったせいだ。だが、今はそれがちょうど良く働いた。

家を失った貴族ほど惨めなものはない、とディオンは思う。何せ住む場所さえないのだ。資産を失い、地位も失った。

クリスティナが葬儀に参列している間、ハンスはそこにいた。木造建築と煉瓦造りの宿屋、木の階段を上った二階。ディオン達が取った部屋は白塗りの廊下の壁に立て付けられた木の扉を開いた先、三脚の寝台が並ぶ室内。正面に開いた窓から潮風が流れ込んでくる。外は燦々と強く照り付ける太陽で眩しい程。

「よう。足の具合はどうだ？」

寝台に仰向けに寝ていたハンスはディオンの言葉に、被っていたシーツごと半身を起こす。胸当てや戦装束、剣などは寝台の横にある木机に置かれていた。性格なのか、装束は丁寧に折りたたまれている。今のハンスは上下共に空色の薄い寝着だった。

金色の髪がさらりと流れる。中性的な容貌。

「……だいぶ、良くなってきた。痛みも引いたし、傷口の熱も下がった。良い葉だな」

ぼそぼそと呟くように語るハンスは、その端正な顔に憔悴の色を覗かせている。生真面目な性格故に、自分を責めているのかも知れない。

アレックスは部屋に入って右手側にある寝台へと腰を下ろす。ち

ようどハンスとは反対側だ。

「アレだろ、倭国のナンコウってやつ。ちょっと見たけど、それが一番近いな。刃傷には飲み薬もないっけ？　丸いやつ」

「おまえ、本当、何でも知ってるな」

ディオンの呆れ半分、怒り半分の言葉に眼鏡をつい、と押し上げる事で答える。

「ふ。さすがだろ俺」

「うるせえよ。しかし丸薬は持ってないんだ、悪いな。一度ちゃんとした医者にかかった方がいい。昨夜診たところ骨と神経は無事なようだし、しばらく安静にすれば大丈夫だとは思うがな。あ、包帯と当て布は一日一回、清潔なのに交換しろよ」

そう言いつつ、ディオンは寝台の傍らにある机、ハンスの側に大剣を置いた。戦闘用外套と上着を脱ぎ、己の傷の具合も診る。

ハンスは口をぽかんと開け、ディオンの背中を見ていたアレックスが言った。

「すげえな。傷だらけじゃねえか。衛士ってのは皆そうなのか？」

鍛えぬかれて余分な肉を一切排除した、戦う為の肉体に治りかけの刃傷、既に治った槍傷、治った後もその痕跡を強く残す四本の爪傷がある。なかでも、炎か何かで焼いて無理やり止血したような大きな傷が腰の少し上、背中から腹部へと渡って存在する事に、ハンスは眼を奪われた。

「さあな、他の衛士の体なんざ見た事ねえから知らん」

「お、お前は、そんなになってまで何故、衛士などやっているのだ？」

ハンスの言葉にディオンは治療の手を止める。右腕に包帯を巻き終わったところだった。

「何故？　そりゃ目的があるからだ。そいつが終わるまで衛士は止めねえよ」

「目的、とは？」

「……他人の詮索が好きなのかい、ハンス。いいから寝てろよ」

ディオンの返答に言葉を詰まらせたハンスは、項垂れた。そこへアレックスが、寝台に寝転がり、腕枕をしながら言った。

「まあまあ、そう言うなよ。ハンス坊ちゃんも貴族以外の人間を見るのが珍しいのさ。例えばほら、話のタネにそれとかどうだい？」
そう言っウルス・ラグナて大剣を指差す。ハンスはそれに眼を落とした。

「これは、剣、なのか？ 土木用の工具にも思えるが、」

ディオンの言葉に、冗談じゃないと牙を剥いて怒鳴った。

アレックスは馬鹿笑いをしている。

「剣だよ！ こいつはれっきとした剣！ ど、土木用とか馬鹿にしてんのか！？」

「あっはっはっは！」

「す、済まない！ どう見ても鈍器か何かにしか見えなくて、最初見た時は、露天用の看板かと、」

「ぶあっはっは！ か、看板！ 看板を持ち歩く衛士！」

ディオンの肩越しに後ろを振り返り、腹を抱えて笑い転げるアレックスを一喝。

「黙れよ色情魔！ 俺は露天商じゃねえっての！」

一頻り笑ったアレックスは体を起こす。

「あはは、は、はあー苦しい。それって希少金属レアメタルの黒色偽装ブラックバージョンだろ？ そんなのが看板に使われるって、おもしろくねえ？」

「おもしろくねえよ！むしろ宝の持ち腐れだ！」

「お、倭国人だけあってさすがに格言は解るみたいだな。なかなか優秀じゃないかディオン君。褒めて……いや、褒めろ。俺を」

「はあっ！？ いきなり何言ってるんだお前！」

左手で前髪をかき上げるアレックス。

悦に入っているような、自分に酔った表情。

「いつでもいいぜ」

「いや褒めねえから！ 何ソレ、待ってるのかお前！？」

「何だよシケてんな。つーかお前もお前お前うるせえよお前」

「お前のがうるせえよ！ 今何回言った！」

息が合っているのか合っていないのか、二人のやり取りはちぐはぐのようで絶妙。

そのやりとりがおかしかったのか、ハンスが笑った。

「ふ、あはは……っ」

ディオンの見る。表情は険しい。

「はは……あ、いや済まない、今のはその、二人がおもしろくてつい、」

気恥ずかしそうに口元を押さえるハンスに呆れた表情を返し、デ-ionは再び自分の治療を開始した。

「いや、別にいいけどさ。冴えないツラされてるよか、マシだ」

「え？ それ自分の事言ったよな今。冴えないツラって」

「んだとアレックス！」

「だってお前、この中で一番醜いじゃん」

平然と告げる。ディオンは眼を丸くして反論した。

「み、醜いとか言うな！ 至って普通だ！ 俺は普通の顔だ！」

「ああ悪い、ハンスと俺が良すぎて凄いブサイクに見えた」

「テメエ言っている事と悪い事があるぞ！ そういう事は思っても言うんじゃねえよ！ いや、その前に俺はブサイクじゃない！」

「ごめん、美しくて」

「こ、この野郎っ」

さらりと髪をかき上げるアレックス。

それはディオンのとってとても鬱陶しい動作だった。

事実、顔の造形で言えばディオンはあくまで普通の部類であり、ハンスは中性的で整った目鼻立ちに白い肌、柔和な目元という容貌。アレックスに至っては自賛するだけあり、絵画のモデルと言われてもおかしくない程の顔立ちだ。すっきりとした鼻筋に薄い唇、深い碧色の眼。無駄な肉のない細い首筋にすらりとした長身は確かに女性の方が放っておかないような魅力を持っている。

「あは、はははっ……！」

ハンスは腹を抱えて笑っている。馬鹿にするような調子はなく、

あくまで爽やかな笑い声をしている。

「美しい……」

「もう何なんだよコイツ……」

手鏡を取り出して本気で自分に陶醉し始めたアレックスに溜息を吐き、作業を再開。

ふと、しばらくそれを見ていたハンスが言った。

「楽しいな、君達は。友達なのかい？」

「冗談じゃねえ！　こんなのが友達であってたまるか！」

嫌悪を隠そうともしないディオーン。後ろからの反論がないと振り返れば、アレックスは寝入っていた。自分本意な人間らしい。

「ね、寝てやがる……これから出立するってのに」

「ふ、ふふ。自分が美しい事に満足したのかな」

「お前までそんな事言うか。全く。こういうのは友達にするんじゃないぞ、ハン……おっと。申し訳ないアシュクロフト殿」

「いや、構わない。むしろそのまま呼び捨ててくれ。君達とは、対等でありたい」

ディオンはハンスの言葉に一度顔を上げる。この男は果たして、カタリナ姫と同じ種類の人間かと考えた。

しかし、何より身分にうるさいアシュクロフトの人間だ。申し出が意外に過ぎた。

「じゃあ遠慮なく」

だが堅苦しい言葉遣いも苦手な上、無作法なディオーンにその申し出を断る理由はない。何より、このハンスという男と話してみたいという、多少の興味も出てきていた。

アレックスが癖の強すぎる人物であったがため、どちらかと言うと普通に近いハンスに親近感を覚えたのだ。

「お前の妹も、コイツに食われないようにちゃんと見ておけよ」

「ああ、そうだね。クリスティナには気を付けるよう言っておこう。ところでディオーン君。君のその剣は罅だらけだけど、大丈夫なのか

い？」

そう言ってハンスは大剣を指差す。ちょっとした衝撃ですぐにも壊れそうな見た目が気になったのだろう。

「ん、ああ。折れやしねえよ、絶対にな。シルメリアの馬鹿でかい飛行船が上に乗ったって壊れやしねえ」

「あはは、そんなはずないじゃないか。あれは三十万ウェイン以上あると聞くよ。しかし飛行船には一度も乗った事がないんだ。君は？」

まるで信じてないハンスの様子に、説明したくとも隠しておくべき事柄なので諦め、肩を落とす。

「……まあ、良いけど。俺は仕事で一度だけある。空からの眺めは最高だったな」

海を渡る船舶の中部に鉄の支柱を立て、それに四枚羽根の回転翼をつけたものが船尾側にも右舷と左舷に合わせて二本。それが空を飛ぶ浮力を生む機関となっている。これがシルメリアに普及している小型飛行船舶の特徴だ。

もちろん蒸気機関は、最大の特徴として原料さえあれば平民でも奴隷でも利用できるその利便性にある。水上での船舶の機動力も侮れない。シルメリアは結果的に強力な海軍も保有する事となった。

「でも、国の教えでは蒸気機関は忌むべきものだとも言うんだよね」

「そんなのお偉方の僻みじゃねえの？ シルメリアのあれは科学技術ってやつでな、きちんとした根拠と原理が過程を生み、結果を導き出すってものだ。いや、俺も理論は詳しく知らないが、火で水を蒸発させて円筒みたいなのを動かす仕組みらしい。作動の確実性は不可思議な術式よりかは断然、信頼できるらしいぜ。一般市民も小型の飛行船で遊覧飛行できるくらいに普及してる。加えて耐久性、安全性も高い。まあ、軍事用に転換されるのも近いだろうな」

ディオンの言葉にハンスは眼を剥いた。

「そ、それはつまり、空からの攻撃……？ 防ぎようがないじゃないか、そんなの」

「だからさ。今はまだ、長距離の飛行が不可能な状態だからアルテリアは助かってるようなものでな。やっぱり長距離用の飛行船ともなると、機関部にかかる負担やら回転翼の大きさやら角度やら船体の歪みやら、色々と計算しなきゃならない部分が多いらしい。石炭の貯蔵量の問題もあるしな。炭鉱、掘りまくってるらしいぜ」

ディオンの説明にハンスは感心したようで、溜息を一つ吐いた。

「はあ……君は、何でも知ってるね」

「んな事ねえよ。たまたま知る機会があっただけだ」

それ以上は言いたくないので、何か違うもので話を逸らそうと周囲を見る。

ふと、窓の外の景色が眼に入った。潮の音。湾港だ。

「……それに比べて、アルテリアは人力で船を漕いでる。使われているのは数十人の奴隷達だ。中には術式機関を動力にした魔操船なんてのもあるが、絶対数が少ない。海軍だけで考えた場合、まずシルメリアに負けるだろう。それを補っているのが、陸の術式支援連隊だ。そうだろう？」

「あ、ああ——そう、言われている。あの部隊がある限り、帝国が保有する砲撃部隊にも拮抗する事が出来る」

術式とは万能の力ではない。個々人に主題構造モチーフと呼ばれる、隔絶的な差がある。これは優劣の問題ではなく、一個人が使える術式はほぼ一つの主題テーマに限定されてしまうという原理が大前提として存在するためだ。

例えば、炎を使う術士は水に干渉する術式は編めないというように、限られた制約の中で術式の行使を余技なくされる。

これを、個人での運用から集団での運用に切り替えた場合。個人が持つ長所を伸ばし、欠点を補い合う形に環境を整え、行使した場合、それは限りなく強力な威力を持つ軍団へと進化する。

しかし、術士になるには特別な才能が必要だ。グノーシス・フアクター 霊知因子というのがそれに当たる。

それを発見したのは、このユーフォリア大陸に名を遺す偉大な先人。

ニコラ・フラメル、その人だ。

「しかし、それだけじゃないよな？ シルメリアがそれだけの理由で攻め込んでこないわけがない。戦略的拮抗を生むのは、もう一つの理由がある、と俺は踏むわけだが」

そう語るディオンの視線は鋭い。ハンスはびくり、と身を震わせた。

（なるほど、嘘をつけない人間なんだな）

「アルテリア創成期の記述に出てくる、一つの宝玉がある。初代国王はそれを使って数刻で山を切り開き、水脈を引き、荒れ野を平野に変えたという……“ヘルメス文書”」

「な、何故それを知っている！？ 我々エーデル・リッターでさえ、その記述に触れるのには王族の許可がいるというのに！」

取り乱したように声を荒げるハンス。しかし目の前の男は冷静そのものの。

「俺にこの剣を与えた性悪魔女が、そういうのに詳しくてな。エメラルド・タブレット、またはタブラ・スマラグディーナ。使用者の“都合の良いように事象を移り変える”という事象兵器。人知れず、王国の窮地を幾度も救ってきたらしいじゃないか。戦術的観点から見ても、この存在は強大だ。それこそ、一個人が国を相手取って、勝てる程の威力を持つ。」

使えるのは、王族に連なる血筋の者のみ」

「どうして、そこまで詳細に……」

「だが問題も多い。中でも“一度の行使で使用者は死亡する”という最大の難点がある」

ハンスはぱくぱくと口を動かしたが、やがて疑問が勝ったのか、それを口にした。

「それも、都合の良いように変えたりはできない、のか？ 死なな

いように、とか」

「解らん、何せ城に保管されたままらしいからな。そんな危ないもん、研究しようという王族もないだろ？ 失敗したら、自分が死ぬんだからな」

「それは、そうだが……」

「――ああ。そういえば。あの姫さんは色素欠乏症だったよな？」
どこかわざとらしく。空々しく響く、ディオンの声。

ハンスは、動揺した。そして、諦めた。

「わ、解った。君に隠し事はできそうにない。それに、これからカタリナ姫を救出に行くに当たって、情報の共有は不可欠だ」

「ああ、そうだ。お前は妹みたいに頭が固くなくていい」

ディオンは満足そうに頷いた。

姫君は先日のシャントルユ城襲撃事件の際、その秘宝を持ち出したのだとハンスは語る。真意は解らないとも。しかしディオンは推測する。恐らくヘルメス文書……タブラ・スマラグディーナを使えるのは、“ある魔獣”に連なる血筋の者なのだ。

魔獣アベル。原初の災厄の折、人間に味方した魔なる獣。それが作り出したアーネンエルベは文字通り、魔獣や人外が操る事が前提とされていたのだろう。それ故に、人間が行使する事には絶命という一種の限界が付きまとう。人から外れるという事に耐えられる人間は、少ない。

アベルが人間との間に子を成したという記述はない。だが“色素欠乏者は悪魔の使い”という人徳法の規律は、ならば何故存在するのか？

恐らく、それは間違っていないのだ。シャントルユの王族が、自分達以外の“アベルの子孫”に大事な秘宝を奪われ、行使される事を嫌った。それが露見する事すら嫌った。だからこそ色素欠乏者は処断される。王族の矮小な独占欲のために。

力を持った人間は、力を手放す事を尤も嫌う。否、できない。そ

れは人間であるが故の業か。

「――私が知っているのは、これだけだ。あの日、カタリナ姫とクレアドール騎士団長は宝物庫から秘宝を持ち出した。それだけしか、知らない」

「解った、ありがとよ。確証が持てた。……教団が、姫さんを使って実験するかも知れないって事がな」

「な、何だと！？　どうしてそうなるんだ！」

「銀の左腕がなくても、“都合の良いように事象変移を起こせる”のなら、それは利用するべきだろう。むしろ、どこにあるか解らない銀の左腕なんかよりこっちを先に狙うべきだったん……だ？　いや、そうだよな、ああ、そのはずなんだよ……」

ディオンの、自分の発言に戸惑う様子にハンスは不審を抱いた。「どうしたんだ？」

己の胸にわだかまる、疑問が解けない。何かが引っかかっている。それがディオンには不快だった。何かを忘れているような気がしているのだ。

――鐘の音が二つ、鳴る。昼を過ぎた。

ディオンの背後で、ごそごそと物音。

「ん……」

呑気に寝返りを打つ、アレックス。男の無防備な寝顔を見てしまったディオンは後悔の念に駆られた。見なければよかったと。

「……好きだぜ」

ぼそりと。シーツを抱き締めてアレックスが言った。

（気持ち悪い！　男の寝言でこんなに気持ち悪いものが飛び出してくると思ひもしなかった！　ああ鳥肌も立ってきた！　ほんとこいつ気持ち悪いな！）

両手で体を掻き抱くようにし、摩るディオンの様子とアレックスの寝言がおかしかったのか、またもハンスは笑っていた。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (2) (前書き)

ディオン達は捕われの姫君を助け出すため、状況の打開策を模索する。

＊今回は一挙二話更新です。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (2)

風が頬を撫でていく。纏わり付くような湿り気をもった、潮風だ。前ボタン留めの黒い喪服――上から被るように着る型で、胸元から白のアンダーシャツが覗く――を着た少女はその風に金色の髪と、喪服の裾をふわりとそよがせた。

強く照り付ける太陽から隠れるように、頭に被っているのは黒く丸い鍔つき帽子。

日差しを避けてそれに隠れているのは、白磁のような肌。透き通るような青い双眼は本来ならばぱっちりとは見開かれ、強気に吊り上げられているが、今は悲しげに伏せられている。

葬儀に参列した者は皆、彼女に何らかの声を掛けていった。しかしそのどれも、彼女の心には届かなかった。動かすには至らなかった。

左手には、革製の鞘に納められた剣型魔導器。グリップは銀、同じガードには中心に透き通る蒼の宝玉――事象誘導式演算機関――がはめこまれた、風を操る剣だ。アシュクロフト一族の家宝であるそれは、常に彼女、クリスティナの傍らにある。今は彼女しか、扱える者がいない。

（騎士とは、何なのですか、父上。民に害をなす輩をただ殺すというのでは、人殺しの堂々巡りにしかならない。人が人を裁くというのは、審問会の仕事であり騎士の役割ではない。ならば騎士とは、人とは、どのように在れば良いのでしょうか？ このままでは私は、ただ業の深い人間になってしまう）

いつもなら強い意志の光を湛えている彼女の双眸が、弱々しく伏せられる。目の前には父が埋葬された、もりあがった土の上に十字碑が立てられていた。

アシュクロフトの人間の特徴なのか、彼女もまた生真面目な性格であった。そのためにこうして一度思い悩むと、どんどんと沈み込

んでいってしまう悪癖も持っている。

目標がある時はそれに向かって一直線に邁進する彼女の性格には、こうした裏の面にとっても弱い。容貌からはあどけなさが抜け、少女のそれから成熟した女性のそれへと移り変わる途上の彼女は今、とても不安定な状態にあった。どちらでもない。成長の途中。割り切るには幼過ぎるし、知らずに罪を犯せる程、幼稚でもない。

クリスティナは墓碑から横に視線を逸らす。同じような石碑が縦横に等間隔に並ぶ、一族の墓地。その最前列に、彼女の父も並んでしまった。

（母上、お爺様、お婆様……私は、どのように在ればよろしいのでしょうか）

以前までの彼女であれば、ただ一目散にカタリナ姫を助けに行っただろう。しかし運悪く重なった不幸が彼女の足を止めた。一度立ち止まった彼女は、弱い。

ただそれは、愚直なまでに真っ直ぐな性根。ディオンのように人の裏面を見てきた事がないために、彼女はひたすらに、純朴に真っ直ぐだったのだ。

今も彼女の心は、カタリナを助けに行けと騒ぎ立てている。だが、それで誰かを失う事になると思うと、怖い。彼女の足を踏みとどまらせているのは、それが原因だ。失うかもしれないという恐怖。

（あの怪物……またあれと遭遇するかと思うと、足が震える。あの時だってお兄様が庇ってくれなければ、私が怪我を、いや、死んでいたかも知れないのだ）

それは、考えても意味のない“もしも”だ。しかしそれもまた、頭の隅から離れない。そして、未知への恐れ。

彼女の背後には、焼け落ちたアシクロフト邸が無残なその姿を曝している。焼け焦げて炭と化した木材の柱がそこかしこに覗き、黒く染まった煉瓦に石膏が、彼女の過ごしてきた思い出ごと、燃えてしまった。怒りを感じないわけがない。父親を殺された事も同様

だ。また、たった一人の友人を失う事も許せない。

だが。彼女は進めない。鎖に絡め取られたかのように、足が動かない。動かせない。

（清く正しく在れ。それがアシユクロフトの家訓。果たして私は、それに習えているだろうか？）

自分の手は既に血に塗れている。少なくとも彼女は、自分はもう汚れてしまったのだと思っている。

（だが――）

だが、それでも。正しく在ろうと努力は出来るのではないだろうか。少なくとも、あの黒い衛士はそう在ろうとしている。それはあの夜、子供達を助けた事からも明白だ。

（騎士という目標が無ければ、私はこんなにも弱いというのに。あいつは平然と、何にも寄りかからずに我を貫く。あいつと私の差は何だ）

悉く彼女の先を往く、黒い背中。彼女にはそれを追いかける事しかできない。

（……そもそも、どうしてお前が私の前に立っている。衛士如きに、それを許可した覚えはないぞ）

あの夜、目の前にした薄ら笑いを思い浮かべると、だんだんとむかつ腹が立ってきた。

（何も考えていないようで、人の何たるかを知ったような口を利く。気に入らない、全くもって気にいらぬ）

彼女は認めたくないもののようにディオンを思う。まるで対比のように柔軟な思考と身体操作を持つあの男と、自分のような肩肘を張って身分を最重視する、堅苦しい騎士とは相性が悪いという事を、クリスティナは直感で理解している。それはディオンも同様だった。（不愉快だ。怒りを通り越して呆れさえ覚える。ああ、私はお前が嫌いだ。大嫌いだ）

彼女の体が、くらりと傾く。

「うっ……」

眩暈。クリスティナはそこで、自分があの火事の時から満足に寝ていないのだという事を思い出し、宿屋に戻ろうと思ったところで再び墓碑を見た。

（父上……そういえば。父上は何のために、戦っていた？）

思い出す。火事以前から伝書鳩を使い、何か忙しそうにしていたリディオを。夜も満足に眠らない日もあった。それも一つの闘いだっただと、彼女は思う。

父の抱いていた理想。それはカタリナを軸とした平和主義者達によって描かれた理想郷、争いのない世界を造る事。

であれば、戦うべきではないのではないか。亡き父は復讐を望まないのではないか。それは何よりも平和を願ったリディオ・アシュクロフトを裏切る事になる。私怨ではなく、大義の為に戦わなくてはアシュクロフトと父の名に泥を塗ることになるだろう。

平和のために戦う。それが父の意志だった。この時代の子らが安心して暮らせるようにという願いが、そこにはあった。父は、その信念を半ばにして折られた。

剣をペンに持ち替え、賛同者を集めては首都での会合に夜遅く、駆けつける事もあった。その闘い、意志を無視する事がどうして出来よう。

ならば誰かが継がなくてはならない。父の遺志を受け取り、歩む者がいなくてはならない。

その瞬間から、彼女はリディオの前に立つ事になる。故に彼女は前へ進まなければなくなる。後ろには、行けない。

——先を往く者に導かれるのではなく。彼女は自分の後ろに、強く背を押してくれる人がいるのだと感じた。

退けない。立ち止まれない。父が、母が、彼女の背後にいる。進めと、強く背中を押してくれる。

決意。ただ馬鹿正直に騎士という憧れを目指していた少女の、それは成長だった。

（……さようなら、お父様。平和を願った貴方の遺志、このクリス

ティナが継ぎます。どうか安らかな眠りを)

クリスティナは剣を鞘から抜く。空よりも海よりも深い蒼を封じ込めた、二条剣。

それを祈るように、胸元で持つ。

事実、それは祈りだった。

ヴァルベルヴァイント

「旋風」よ、どうか聞いて欲しい。お前は駆け抜ける風だが、時には優しく皆を包む事もできるだろう。穏やかな風となって市井の者の間を通り、その営みを見守る事もできるだろう。お前は自由な風であるが故に。

“旋風”よ、どうか聞き届けて欲しい。何れのような辛苦が皆に降りかかろうと、その時は強き風となって皆の不安を吹き飛ばして欲しい。その為ならば私は、この身が砕け散るその時まで、平和の為に戦い続けよう。お前と共に。

父と子と精霊の御名において、クリスティナ・アシュクロフトが誓う」

彼女は閉じていた眼を開き、剣を納める。その眼にはもう迷いはない。

気高く、凛々しく。そこに在るのは義務を全うせんとする、貴き者の姿。

平和への障害が彼女の前に立ち塞がる時、恐らく彼女と旋風に容赦はないだろう。そう思わせる威風がそこにはあった。

彼女が立ち去る。跡には、一陣の風が緩やかに舞った。

＊ ＊ ＊

ディオンは、先日使ったアシュクロフト家の馬車を宿屋の庭先に断りを入れて置かせてもらっていた。植え込みの葉っぱをむしゃむしゃと食んでいる茶色い馬が二頭。性格は素直で、人の言う事によく従う。流石に貴族の保有する馬ではあった。

ディオンはそこに歩み寄りながら、ぼやく。

「葉っぱ、勝手に食って怒られないかね。まあいいか。おい馬、また頼むぜ」

その言葉に顔を上げると、百八十タイトあるディオンを上から見下ろす形になった。大きい。しかしおとなしい気性からか、頭を下げて視線を合わせるようにする。

「お、撫でろってか？ よーしよし、よしよしよしよし」

ディオンは馬の頭をわっしやわっしやと撫でる。タテガミも撫でる。通りすがりの老人が微笑ましいものを見るような暖かい眼差しで通り過ぎた。

元来、動物好きなディオンである。馬にも好かれたようで、抵抗らしいものはない。この男の趣味は釣りで、サライの木という良くしなる樹木の枝をナイフで切っては糸をくりつけ、自前の竿にする事が多い。この木はユーフォリア大陸の水辺によく生えているらしく、ディオンは釣り具に困った試しはなかった。

動物は、人間の持つ雰囲気というものに敏感だ。動物が好きか嫌いか、その嗅覚や勘で鋭敏に察知する。この馬はディオンの動物好きであり、自分にわずかも害意を持っていない人間だと理解したようだ。

「御者はアレックスにでも任せるか。俺も寝てねえからなあ。着くまでは眠らせてもらいたいもんだ」

馬から離れ、衛士協会への裏通りを通る。昼なのに建物の影になる部分は薄暗い。狭い路地というのも関係しているのだろう。基本的に日当たりが悪い。

目的地に着いた。扉を軽く叩き、中に入る。受付に頭領の姿はなく、若い青年が一人いるだけだった。背後にはぎっしりと書物の詰まった書棚が見える。

「よう、爺さんは？」

青年は答えた。開いているのか閉じているのか解らない細い目元に、瘦せた体を上下とも緑木綿の服に包んだ、穏やかな声音で話す男だった。

「頭領は、いません。仕事なら幾つか、ありますけど……」

「ああいや、仕事関連じゃないんだ。少し前に爺さんに頼み物をしてね。何か解ったか聞きにきたんだけど、いないんじゃないかな」

「頼み物？　もしかして、あなたがディオーン・アウフシュナイターさん？」

「そうだけど」

「ええと、たしか……これを渡すように、言われてました」

青年が何かの紙を差し出す。ディオンは受け取り、一目見て、言った。

「――何も書いてねえじゃん」

「ええ。僕も最初は意味が解らなかったんですが、一応渡すように言われてましたので」

「何だよ、それ……結局何も解らなかったって事か？」

がっくりと肩を落とす。眠気と疲労が一気に襲ってきた。氣力に穴が開くと、人間は疲れを思い出したように感じてしまう。彼も例外ではなかった。

「はあ、くっそー、しょうがないか。んじゃ俺はこれで。ありがとさん」

青年は一つ頭を下げる。氣弱そうな外見と内面だったが、荒くれ者の多い衛士協会の受付があれで務まるのだろうか、という考えが頭を過ぎり、自分には関係ないか、と投げ捨てた。

宿屋への道を歩く。

事実、具体的な策略は何もない。ただ霧の道に向かって、隠された敵の本拠地を暴き、攫われたお姫様を助け出す。それだけの事なのに、こうまで絶望しか感じられないのはやはり、あの場所が難攻不落の“要塞”として存在するからだろう。

あの何も見えなくなる霧は、恐らくどんな城塞よりも人の心をへし折る。進めど進めど、一向に先は見えてこない。深入りすれば、

出られもしなくなる。

（あの時、近くで川の音がした。たぶん冷えた水面に温まった潮風が流れ込み、蒸発して空気中の水分濃度が飽和状態になり、あれだけの霧が発生している。近くに山もあるって話だし、立地条件も関係してるみたいだな）

絶対防壁のような霧を吹き飛ばすには、どうしたらいいのかを考える。

（術式も無効化するような霧を、吹き飛ばすには……吹き飛ばす？）霧そのものに干渉する事は許されない、迷いの森。しかし戦闘用術式は機能するという話を思い出す。

（――可能性は、アレだけしかねえじゃん）

しかし、ディオンはその考えに反対だった。

（だめだ、あいつは、あの金髪はまだ甘い。怪異を目の前にした場合も、人を殺さなければならなかった場合も、もし姫さんが殺された場合も、耐えられるとは思えない）

それがディオンの、クリステイナに対する評価だった。

確かに“旋風”ならば、風を起こしてあの霧を吹き飛ばす事ができる、かも知れない。だが彼女を純粋な暴力の渦巻く戦場に連れていくには、強い抵抗があった。

それに、あくまで霧を飛ばせる可能性が高いというだけで、確実ではない。

（……ハンスなら、どうだ？ あいつも同じ家系みたいだし、旋風を使えるんじゃない、）

宿屋の扉を開き、一階の受付広場の階段を上る。

踊り場に辿り着いた時、上から声が掛かった。

「遅かったな。さすがにお前のような馬鹿でも、一人で行くような愚は犯さないか」

辛らつな言葉。少女の高く、澄んだ声音。尖った調子。全てに覚えがある。

「金髪か。ちょうどよかつ、」

ディオンは言葉を失った。あんぐりと口を開けて、階段の上から見下ろしてくるクリスティナを見上げている。

その姿は純白の戦装束と銀の鎧に身を包んだ、騎士の出で立ちだったからだ。

「金髪ではない。私はクリスティナだ。お前には特別に、本当は嫌で仕方がないが特別に、名前を呼ぶ事を許してやろう。感謝しろ」
尊大な口調。傲慢なまでの態度。口元にはどこか楽しんでいるような微笑。しかしそれが妙に似合う。

「な、何でそんな格好、してるんだ？」

「友人を助けに行くのに理由は要るまいよ。それとも何か。お前は、貴族である私が友人を、ましてや一国の姫君が命の危険に瀕しているかも知れないというのに、それを見過ごしてのうのうと暮らせるとも思っていたか。だとしたらとてもない侮辱だ。万死に値するぞ」

そう言って、腰の剣を抜き放ち、突きつける。ディオンは苦虫を噛み潰したような表情。

（こいつ、親が死んで兄貴も怪我で歩けないってのに何も変わってねえ！ 馬鹿正直に猪突猛進する性格のまんまじゃねえか！ 多少はへこみやがれ！）

そうであれば、ディオンのとしてもやりやすかったのだ。

しかし眼前の彼女は、戦う気に満ちている。その眼には些かの迷いも恐れもない。

「お前、本気か？ 遊びに行くわけでも訓練しにいくわけでもねえんだぞ。殺し合いだ。お前には到底、人を殺せるとは思えないんだがな」

「もう既に一人、殺している」

事も無げに言い放つ。ディオンは驚きつつも、真っ直ぐクリスティナを見た。

「確かに私は、再び人を殺す事になれば恐れを感じるだろう。殺されるかもしれないと恐怖するかもしれない。だがそれでも、それは

私が退く理由には成り得ない。恐怖は大概の場合、未知に関して付いて回る。あの化け物に関しても、私は恐怖を感じる。どうしようもなく足が震える。

しかしだ。真に恐ろしいのは、私が私でなくなる事だ。もしここでカタリナ姫を助けに行かず、どこかの貴族と結婚して幸せに暮らしたとする。そうした場合、私の心には一生の傷が残るだろう。カタリナ姫を棄て、見殺しにした、とな。一生、後ろを振り返り続ける。

そんなものは私ではない。私は常に前進する。後ろを振り返るのは、死の間際だけで十分だ」

ふわり、と腰に巻かれた白い戦闘用外套が広がる。ドレススカートのようなそれは膝下まであり、覗く足は銀色の具足で固められている。以前のものとは違うようだ。左手にも銀色に輝く、指先まで包む手甲。両手剣使いの必需品だ。

肩から胸に渡って身を守るのは、同色の胸鎧。下には白い長袖の戦装束。

清冽な覇気。以前のクリステイナとはどこか違う空気を纏っている。

「お兄様と、あの軽薄そうな講師から聞いた。助けに行くのだろう、カタリナ姫を」

「あ……ああ」

「なればこそ、私の力が必要なはずだ。あの霧を掃い飛ばす、強い風がな」

言い、両手剣を鞘に納める。

「お兄様には、この剣は使えない。適合者ではないのだ。アシクロフトでこれが使えるのは、今代では私一人。父上にさえ使えなかった。あの二人は既に説き伏せてある。少々、強引ではあったかもしれないが。何、問題はないだろう」

「意外としたたかな、金髪」

クリステイナは唇の端を吊り上げる。子供が何かを企んでいるよ

うな表情。

ディオンの影響かもしれない。

「騎士とは平和を守る者だ。その戦い方が一つ限りではないと、解ったが故の行動だ」

なるほどね、と心中で納得するディオン。

どうやら自分を見下ろすこの女騎士は、どこまでも高慢で……また一直線だった。

こうなるとディオンの側に拒否権はない。元からなかったのかも知れないが。

三人部屋にクリスティナを伴って入り、情報の整理を行おうとしてから、手に持っていた紙の事を思い出した。

「何だいそりゃ。新手の宣伝用具？」

アレックスがさもおもしろいものを見つけた、という眼で聞いくる。

「てめえ看板の話、まだ引きずってんな？ その毒しか吐かない舌根を引っこ抜いてやろうか」

「冗談。その前にお前の脳に催眠術式かけてやるよ。永遠に起きないように」

剣呑な雰囲気、ハンスが仲裁に入る。

「ま、まあまあ二人共。それよりディオン君、その紙は何なんだい？」

「ん？ ああ、教団関係とペルフェクティオってのについて調べてもらうよう、協会の頭領に掛け合ってたんだが、これしか渡されなかった」

アレックスが眼鏡を押し上げる。

「……霊子反応はないな。術式で封じられた記述じゃなさそうだ」

「お前、そんなの解んのか。この距離で」

アレックスは寝台に座ったままだ。

「伊達に術士じゃねえよ。しかしそうになると、何も解らなかったっ

て事なのか？ 衛士協会が？ そりゃ信じられない話だ」

「俺も最初はそう思ったんだがな……」

腑に落ちない。あの頭領がこんな意味の解らない事をするはずがないのだ。

「真っ白い紙と睨めっこしてても意味はないな。そろそろ出よう。馬車に松明は積んだか？」

ディオンは手に持った紙切れを二つに折り、胸元にしまった。

* * *

ハンスの強い要望で、彼も同行する事になった。エーデル・リッターともあろう自分が主君の危機に駆けつけられないようでは、それを名乗る資格はないと強く出たのだ。

馬車の中には三人。御者はアレックス。不満そうに手綱を握っている。

クリスティナはハンスの肩に凭れて眠っている。無防備な寝顔だった。反対側に座るディオンは腕を組んで、項垂れるようにして仮眠を取っている。

やがて、視界に白い霧が混じり始める。

（――着いたか）

ディオンは眼を覚ました。敏感な嗅覚が、水の匂いに刺激されたのだ。

「ああ、起きたのかい？ 今起こそうと思ってたところだよ。ほら、クリスマスも」

「んむ……」

ごしごしと眼を擦るクリスティナの姿に子供っぽさを感じ、ディオンはくすりと笑う。

荷台の隅に置いておいた松明を手に取り、発火用具を使って火を点けた。

「ディオーン・アウフシュナイター。今の笑いは何だ」

不機嫌そうな声音。ディオーンは苦笑する。

「いや、別に。何でもねえよ」

「嘘をつくな。私を馬鹿にしたのだろう。解っているぞ。気に入らない、その松明でお前の顔を炙ってやろうか」

（面倒臭い女だなあ……ん？ 炙る……炙る？）

何かが閃いた。恐らくディオーンでなければ、その可能性に辿り着く事はなかった。

それは倭国に伝わる伝統的な記述法。人に知られたくない、もしくは証拠を残したくない記述を紙に記す際に使われる“炙り出し”というものだ。

急いで胸元から紙片を取り出し、開いて松明に近づける。

すると、みるみるうちに黒い文字が浮かび上がってきた。それにはこう書かれている。

『教団とは関わるなど言いたいが、どうせお前の事だ、厄介事に首突っ込んでんだらう』

（ああ、その通りだ）

『この紙は読み終わった場合、すぐに燃やして捨てる。でないと俺の身も危なくなる。それを心に留めてから読め』

（すまねえな、爺さん）

ディオーンは、禿頭の頭領に心の中で頭を下げた。

『教団の本拠地は山の麓にある。サライの木が五角形に並んだ場所をよく探せ。そこに地下へ続く扉と階段があるはずだ。扉は雑草で偽装されてる。』

噂じゃ、シャントルイユの姫さんが行方をくらましたって話だ。

気をつけろ、教団の連中はウロボロスやミドガルズオルムに悪魔崇拜や邪神信奉を広めた。色素欠乏者である姫さんを攫って何かするつもりに違いねえ。事実、ミドガルズオルムの連中は既に国中に潜んでいる。市井の者に混じってな。もしかしたら衛士協会の中にもいるかもしれん。儂はしばらく身を隠す。

この方法を取ったのはそれが原因だ。お前なら気づくと思った。
無事に届いている事を願う』

(爺さん、無理をさせちまったみてえだな)

罪悪感を感じていると、最後の文の下に、文字の端が浮かんできた。松明で炙る。

『またどこかで会ったら、今度は酒でも飲もうや』

口元が、自然と吊りあがる。まだ付き合いの短い頭領ではあったが、どこかでディオンを買っていたのは彼自身も解っていた。そうでなければ厄介事など持ち込んでこない。リディオの件は失敗に終わったが、それでも任された事自体は、信頼されていた証拠だろう。本当に、失敗した事が悔やまれる。

『どうした、ディオン・アウフシュナイター』

クリスティナの声。なんでもない、と返す。閃きのヒントをくれた事に関しては、心の中でだけ礼を述べておいた。

「アレックス、止めてくれ」

馬車が止まる。

荷車から降りて紙を完全に燃やし切り、御者台にいるアレックスに言った。

「ここから山の方向は？」

「ん、ああ……ええと、どっちだったっけ」

「あっちだ。テルマビスタから来た道を背にして左側に真っ直ぐ。地図にはそうあった」

クリスティナが方向を指差す。地図は持っていない。頭の中に入っているのだろう。

「よし、行くか……いや、その前に」

ディオンは馬の口輪を外し、手綱をつけた馬具も外して、二頭の馬を解放した。

「な、何をしている？ そんな事をしては帰る手段が、」

「ここにいますと、人外に襲われるからな。町に返してやるのさ。宿屋で待ってろ、いいな？」

解ったのか解らないのか、馬は頭を差し出してきた。

「よしよし。良い子だ」

アレックスは興味なさそうに周囲の霧を見ている。ハンスは苦笑。クリスティナは、唇を噛んでいた。

まだ周囲の霧は薄い。馬を促し、町へと駆けていく後姿を見送った。

「金髪。動物にだって心はあるぞ。こんなところに置かれたら怖くてしょうがないだろう。お前だってそうだろう？」

「わ、解っている！ 自分で、言った後に気付いて後悔した！」

「ほお。多少は成長したな、素直になった」

「黙れ！」

「ふふん。じゃあ頼むぜ、白騎士殿」

クリスティナはまだ何か言いたげだったが、それは今するべき事ではないと無理やり自分を納得させ、諦めの溜息を吐きつつ剣を抜いた。

「全く……では往くぞ、つむじかぜ旋風の駆ける様をとくと見ておけ」

「はいはい」

「――フン！」

両手で祈るようにグリップを持ち、胸元へ。剣先は天へと向けられる。

“旋風”には能力行使の台座となる、事象誘導式演算機関という蒼い宝玉がはめこまれている。これが使用者との精神波長の共鳴によって活動を開始し、宝玉に込められた事象変移を引き起こす発端となる。

元来であれば、その名の通り旋風を起こすのが精々だったヴィルベルヴィントは、今回に至りその特性を大きく変えていた。

彼女の精神的な成長がそれを成したのか、剣に込められた能力が徐々に解放されているのか、それは解らないが、ことここに至り、それは正しく“そうなる事を予め決められていた”かのように働い

た。

霧の中で風を起こしても、意味はない。ならば上空の澄んだ空気を呼び寄せ、大地へと叩き付ける事で霧を掃おう。ヴィルベルヴィントは“そう考えた”

クリスティナの戸惑いと同時に、上空で圧縮された風は大瀑布となつて霧の道へと叩きつけられる。ディオン達はアレックスが腰の後ろから引き抜いた書物、それに記された術式障壁によって守られた。展開が遅れたらしく、皆が強風に倒れる。

「お、おい！ 何だこりゃ！ 駆けるって話じゃ、なかったのか！」
「私だって解らない！ ヴィルベルヴィントが、勝手に動いている！」

「勝手にだあ！？ お前しか扱えないって言ってたろう！ どうにかして止ませろよ、この風！ これじゃ進めやしない！」

「クリス！ 落ち着いて、集中するんだ！ 母上の手記では扱い方にそう書かれていた！」

「やっています！ でも、止まらないのです！」

やがて、クリスティナが必死に祈るように訴えかけ続けていると、暴風は治まった。

「はあ、はあ……一体何だというんだ、術式機関の暴走なのか？」
クリスティナの呟きにアレックスが眼鏡を押し上げて答える。

「馬鹿でかい霊圧だったな。普通の魔導器が放つ位階じゃない。それに暴走とも違う。演算機関は正常な数値を保っている。前例がないな、研究してみないと、何がどうなっているのか解らない」

「あー、いってえっ、よっと。まあしかし、随分綺麗に晴れたもんだな。うわあ、こうなつてたのかよ」

目の前には鬱蒼と茂る密林。延々と広がる樹海。昼間だと言うのに、行き先には影が差している。見れば膝丈までの草や植物が無遠慮に生い茂っていた。歩くのにも一苦労しそうだ。

「見通しが悪いね。油断せずに行こう」

ハンスが言う。皆は同様に頷いた。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (2) (後書き)

次の更新は2月3日以降となります。

なるべく早く復帰するつもりですので、よろしく願います。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (3) (前書き)

先週が更新無しだったので少し早めに更新しました。
ディオンは霧が晴れた樹海へと踏み込みます。

太陽の光がまばらに差し込む、深い森の中。濃密に茂る樹木は、まるでそこに踏み込んでくる者を拒んでいるようだった。強い日差しに切り裂かれてわだかまる濃い影は、複雑な陰影模様。闇がそこかしこに凝っている様は、いっそ完全な夜の闇よりも不気味だった。気温が下がった、とディオンは感じたが、濃さを増した湿気が纏わり付くように服と肌に染み付いた。その不快感に顔をしかめる。

青臭い緑の濃厚な匂いが鼻腔に届く。未踏査地区だったためか、自由奔放に茂った緑が足を取る。まるで罠のように地面から飛び出した木の根、石の塊がそれに隠れているのも珍しくはない。

ギアアギア、とどこから鳥獣の鳴き声らしきものも聞こえた。次いで羽ばたき、飛び立つ音。侵入者を警戒しているのだろう。威嚇かもしれない。

ディオオンが地面に横倒しになっている樹木の幹に足を掛け、肩越しに後ろを振り返りながら言った。

「ハンス、足は大丈夫か？ ダメなら早めに言えよ」

「走るのは、つらいかな。けど、歩くぐらいならどうにかなるよ」

そう返すのは、膝に手をつく金髪の青年。女性のそれとも見えるような、端正な顔立ちには今、苦痛に歪められて汗を滲ませていた。赤装束と金色の胸鎧は、王族を守る義務を与えられた高貴なる騎士の証。

ディオオンにしてみれば、普段の踏破速度より少し遅めを維持しているつもりだった。無論ハンスへの配慮だ。しかしこれでは、これ以上進むのもまずいのではないかと心に迷いが生じる。だが怪我をした仲間を見捨てて行く事など、この男には出来ない判断だった。

「お兄様、しっかり、」

クリスティナが肩を貸そうと傍に寄るも、それより先にハンスの後ろを歩いていたアレックスが彼の腕を取った。ハンスよりもわず

かに長身。赤い髪はこの男は、アムネシア製の朱染色された革製ジヤケットの前を開いて着こなし——下には黒いアンダーシャツが覗く——踝まである、黒の革パンツという様相だ。身軽で動きやすい服装に、馬車に乗る前に着替えたのだろう。

「しょうがねえな、温室育ちのお坊ちゃんはこれだから。怪我人が敵地に行くなんてどんだけ恥知らずだよ」

「っ……」

その辛らつな言葉に、金髪の青年は返す言葉もない。ただ、悔しそうに顔を顰めた。アレックスはハンスの左腕を自分の首に回し、立たせる。

「お嬢ちゃんは後ろを頼むぜ。不甲斐ない兄貴の尻拭いだ」

「し、尻などと。破廉恥なっ」

顔を赤くして反論するクリスティナは、やはり年頃の女なのだろうとディオンは苦笑いした。アレックスに至っては声を押し殺してくつくつと笑っている。

「しかしディオンの、さっきからやけに迷いなく進んでるが、目星は付いてるんだろうな？」

アレックスは問うた。

「もちろんだ。しかしこんな人外魔境だ、苦勞するかもな」

「そうか、ならいい。それとなディオンの。俺はやばくなったら仲間を見捨てて逃げるぞ。変な期待するなよ、俺はこう見えても薄情で我が身かわいさに仲間を売る事だって出来る。死んだら終わりだからな。そのあたり、よっく覚えておいてくれ——命を賭けてまで、お前に協力する必要はないって思ってるからな。自分の目的を優先させてもらう」

「了解だ。テメエが人でなしのロクでなしだったのは、よっく覚えておいてやる」

「ま、俺がケツを持たなきゃならん出来事だけは片付けてから帰るけどな。

でなきゃ、来た意味がない」

即ち、アルフレッドとヴィクター博士。この男の目的は、それだけなのだ。

ディオン達にも目的があるという事は出立の際に話してある。それがカタリナの救出という事は伏せてあるが、誘拐された人物を救出するのだと説明はしておいた。

「それで構わねえ。テメエは俺を利用する。俺はテメエを利用する。それだけのこった」

「利用ね。それでいい。これは仕事なんだから。そうある事が正しい」

元来、衛士や商人などの利用される側の人間というのはそう使われるべくして、利用される。また、利用する側もそうとは自覚せず、利用されている。

利用する者、される者。世間にはその二つが複雑に入り組んだ人間関係を為して、その大きな構図として社会や“国”を形成している。

しかし。

この黒い男、国から国へと渡り歩いてきた渡り鳥の考えは、その柵を下らないと吐き棄てる。

「――世の中には二種類の人間がいる。二種類に分けたがる人間と、そうでない人間だ」

それは正にクレアドールがカタリナに語った言葉の正対。

そして明らかに、二十台に至ったばかりの青年が口にするような内容の言葉ではない。二十程度の青年が語るには重すぎる。人間の底を語るには、若過ぎる。

彼の背景に何があるのか、それを知る者はここにいない。

「言うじゃねえか。そんなに俺が気に入らないのか?」

「今更だな、それは。俺が気に入らないのは、そういうふう到一个の呪いじみた観念に縛られる事だ。知らずして俺も囚われているから、性質が悪い。別に、自由でありたいとかそういうのじゃねえけど、余計な荷物は背負いたくないからな」

「ああ、そりゃ間違いなく人の性質だ。呪いや術式なんぞといった曖昧な要素は一切ない、極めて物理的で論理的なお話だ。お前が嫌いなのは、薄汚くて矮小で、卑屈で自分勝手な人間の性質」

アレックスは晒う。どれだけ嫌おうが、お前もその中の一人だと詰まらない自己欺瞞の鎧で外界と自分を遮断したお前は、下らないと。

ディオンは視線を前に戻し、歩を進める。

世に対する解釈の仕方全てが、アレックスとは合わない実感した瞬間だった。

そしてクリスティナは、そんな二人を興味深そうに眺めていた。

やがて、水の流れる音が聞こえてきた。さあさあという静かな音。清流らしい。

薄っすらとかかり始めた霧は、やはりその原因がこの川にあるのだろうというディオンの推測を裏付ける証拠になるだろうか。

密林を掻き分けるように進み、ディオンはそこに辿り着いた。下を覗き込む。

「渓谷……？ 意外に深いな、五リールはあるか」

地面が唐突に切り立った崖になっており、見下ろせば澄んだ川の水がさらさらと流れている。その高さが五リール前後だとディオンは当たりをつけたのだ。湿気にわずかな暖かさが混じり始める。温い空気。眼下に横たわる断崖からのようだ。

「向かいまでは、三リール……ギリギリ飛んで行ける範囲だな」

「いけねえよ！ それにこっちにはハンスがいるんだぞ！」

後ろからの声に、更に後ろから非難の声が上がる。

「大きな声を出すな！ 敵に気付かれるぞ、ベートーヴェン！」

意外な方向からの注意に、アレックスは戸惑った。

「え？ あ、ああ、悪い。姓で呼ばれるのは何年ぶりだろう……いや、それよりもそんな声出したお嬢ちゃんもうるさいんじゃない？」

「うっ……！」

うるさい、と言いかけて口を嚙む、クリスティナ。自戒したようだ。

ディオンはすぐさま、周囲を警戒した。右手は大剣を握り、左手はナイフの柄に添えられる。前後左右、上。様子を伺うも不自然な物音、動きはない。右手の警戒を解く。こうも密に茂る樹木の中では、ナイフで対応した方が状況に適切だという判断。

見れば、周囲には健やかに伸びるサライの木。直径五タイト程の幹が、灰色の樹皮に包まれて上へと伸びている。この木は枝が多く、水分を多く含んでいるためか柔軟性があり、よくしなる。

（ここ、か……？ 違うな、無造作に乱立している。五角形に並んでいない。しかし五角形と言っても、どこを基点として見た場合なんだ？ そのあたりの細かい情報は爺さんの報告にも無かったな）
ディオンの頭には正五角形の図形が浮かんでいる。もし“正”でないとするば、かなり厄介な事になると頭を悩ませた。

ただの五角形。どうしようもない不安が浮かぶ。図形は、法則が介入しなければ無限にその形を変える事が出来るものだ。角度や辺の長さ、面積。それに縛られない五角形だとしたら、もはや探す手立てはない。

「霧が濃くなってきたな。生温い空気だ」

クリスティナが言う。

「……ん？ 何か嫌な匂いがしないか？」

可愛らしい鼻をひくつかせて、それを嗅ぎ取ろうとしている。

ディオンの言う匂いを探ろうと鼻を尖らせる。

「この臭い……血か？」

「血？ こんなところで？」

クリスティナは信じないが、ディオンの拭えない不安があった。（間違いない、この鉄が錆びたような臭い。そしてサライの木が茂る状況からして、恐らく衛士協会が派遣したあの二人もここに訪れ、そして……）

暗殺者を殺し、入り口へと辿り着いたか。それともこの臭いの原

因が、彼と彼女のもののなのか。

それは確認しなければ解らないが、どうやらアジトへの入り口は近いのだろうという事だけは推測できた。

「行こう。この臭いが手掛かりになる」

「確証は？」

アレックスがそう聞いてくる。ディオンはわざわざ一から説明してやるつもりはないらしく、それを無視して歩みを進めた。

渓谷の崖に添って、上流へと進む。先ほどの位置から左手側に真っ直ぐ。ディオンの鋭敏な鼻は、臭いの原因がこちらからだと感じ取ったのだ。

既に一行の顔にはじつとりと汗が浮かんでいる。纏わりつくような湿気もそれに拍車をかけている。蒸し風呂のようだとディオンは思った。以前シルメリア国で味わった蒸気機関を応用した浴室というものがあつたのだ。

地面は僅かに傾斜してきており、そういえばこの先には山があるんだっけ、という考えが浮かぶ。

（国境寄りか。なるほど、山の裏手から物資を運んでいるとすれば、霧の影響を受けずに兵糧を確保出来る。国に縛られない暗殺組織ならでは、か）

補給線の確保は戦力維持には必須の要素だ。こんな樹海の奥へ何の考えも無しに立てこもっている訳ではないと理解する。

山を境に国境が敷かれている為、シルメリア側は山の麓で石を隙間なく積み上げた防壁を要に厳重に監視している。しかし人員と装備はテルマビスタとの国境付近に集中しており、さすがに霧の樹海を超えて攻めて来るとは考えていないようだ。

（飛行船でもあればな……なんて、無い物ねだりしても始まらないか）

シルメリアにいた頃、一度だけ空から見下ろした景色を思い出す。

見渡す限りの地平線。海の上とは違う、何も遮るものがない、広

大な空の景色。頭上に流れる雲、頬を叩く強風に髪と外套がはためき、眼下には、ちっぽけに見える地上。豆粒にも満たない王城。見上げるばかりだった景色が、今はそれを認めるのも難しいほどに小さい。

その強烈な景色は、ディオオンが一生囚われ続けるであろう魅力と開放感に満ちた光景だった。自分がとても小さい存在であり、何もかも悩みや拘りがその景色の前では雲散霧消する。空という海に浮かぶ、何隻もの船。

いつか見た景色。彼女、リグレットと共に。

（だが……アイツは、）

ディオオンの胸に暗いものがたち込める。その先は思い出しくないのだ。悲劇であった為に。運が悪かったと言えば、それまでであろうが、彼はそう割り切るにはまだ幼い。

リグレットは、飛行船から落ちた。到底助かったとは、どうしても思えない。

しかし、死んだという情報も聞かない。そしてどれだけ願おうとも、もう帰ってはこない。彼女はそうして姿を消した。

無論、ディオオンはリグレットを探した。せめて遺体を弔おうとしたが、どれだけ捜し歩いても彼女の遺体は見つからなかった。

まさか、死者が黄泉返るなど、そんな冗談を信じる程、ディオオンは弱くはなかった。その為に彼女の行方不明後は生き地獄ではあったが、それをどうにか堪えて、乗り切る事が出来た。彼女は、ディオオンが自分の事に囚われて人生を諦める事など由としないだろうという、それだけの理由に縋って。

変化に痛みは付き物だ。痛みの伴わない変化ほど、本人にとって為にならない試練はないだろう。敗者は敗北から学び、勝者は勝利から何も学ばないのと同じように。

近接戦闘術、ワイルド。ディオオンの身に付けたそれは、リグレットの父から教わったものだ。ユゾンの民という、大陸の辺境に住まう民族の一人から。

進化し過ぎた近接格闘術。これを上回る近接格闘は恐らく存在しないと、ディオンは見ている。国から国へ渡り歩いた結論だ。ミドリメ打倒の為に、彼は魔を討ち伏せる剣と盾を手に入れ、ワイルドを得た。その為に背負った荷物も多い。だからこそ余計な荷物をこれ以上背負う事を嫌う。それは弱点と成り得る故に。

「見ろ、吊橋つりばしがあるぞ。縄と木の板で作られてるらしいな。どうやら、アジトは近いようだ」

アレックスの声に、もの思いに耽っていた思考を引き戻す。今はそんな場合ではないと自戒した。

「相手からしたら狙いどころだな。アジトはたぶん、あの吊橋を渡った向こうだろう。なら、見張りを置いておかない訳がない」

「視界のきかない、霧の樹海でか？」

「……そうか」

「しかし、さっきの馬鹿に強い風で敵に異変は知られてるだろ。霧が晴れたってな」

「出てくると思うか？」

「十中八九な。もしかしたら、今もこっちの様子を伺ってるかも知れんぜ」

ディオンは腰を落とし、左手をナイフに添えた。

相手が暗殺者だという事を思い出す。何時、こちらに襲い掛かってきてもおかしくはないのだ。気配を殺し、自然と同化し、確実に獲物を仕留める狩人であるが為に。

「血の臭いが濃くなった。どうやら、近くで戦闘があったらしいな」

「解るのか、ディオン」

クリステイナがそう返した。珍しく、名前で呼ばれた事に若干の戸惑いを感じる。

「その木の幹に、刃物が掠めた後がある。こっち側には人が草を掻き分けて進んだような跡がある。加えて血の臭いとくれば、戦闘の痕と思わないか？」

「うーん……確かに、」

その時。

がさりと、草木の茂みが鳴った。

反応する四人。クリステイナは予め剣を抜いて歩いていた為、体勢を整えるのは速かった。アレックスはハンスに肩を貸している為、とても戦えるような体勢ではない。ディオンは二人を庇うように前に出ようと、足を一步踏み出し。

「違う！ 上だ！」

ハンスの声に、横へ一足飛び。次いで元いた場所へと剣を振り下ろしながら降り立つ、黒衣の暗殺者。両手には短剣を逆手に持っている。文字通り、頭の上から爪先まで黒づくめだ。目の部分のみが露出しているというだけ。

「——つとお！ 危ねえな、この野郎！」

ハンスに心の中で礼を告げ、暗殺者と対峙するディオオン。

「アレックス、俺の後ろにいろ！ ハンスを頼む。金髪！ そのまま隊列を維持しろ！ 恐らくコイツだけじゃない、後ろからも来るぞ！」

果たしてディオオンの予想通り、次々とその姿を現す暗殺者の、群れ。

アレックスが晒った。

「ははっ、何、もしかして囲まれてる？ だとしたらくっだらねえな。相手に少しでも隙があったらまず最初に一人、消しておくべきだろうに。そうだな、俺みてえな術士とか」

アレックスは眼鏡を押し上げる。凶暴な光がその双眸に宿っていた。

「術式起動。貫け」

くぐもった悲鳴が一斉に、あがる。それら全てが暗殺者のものだ。見れば、彼らの足の甲から奇妙な棘のようなものが生えていた。

血に濡れているが、僅かに覗くそれ以外の部分は土の色をしている。

大地の棘。それに足を貫かれたのだ。正に、足止め。

「ユリシーズ、第四次派生式で描写演算開始。指定空間座標に水素を圧縮、ベクトル修正、電子スピンの減速操作干渉、氷結体を生成」
速やかに紡がれる術式詠唱。薄い緑色の術式法陣が眼前に描かれる。

カドモニ

素子と言われる、世界を形作っている、眼に見えない程小さな球状の連なりがある。曰く、全てのものには素子が含まれ、また素子がなければ世界は成り立たない。それが物質世界の法則である。人間でさえ素子の塊なのだ。素子同士を電子によって繋がれているとはつまり理論上、電子に干渉ができれば素子同士を結合させ、思いのままに世界を造りかえる事が出来るのではないか。また、分離させられれば世界を壊す事さえ可能ではないか。

その結果、生まれたのが“魔導術式”である。

素子の成り立ちを解き明かした学者はいるものの、霊知学的にそれに干渉し、操作するという手法でアレックスは術式を行使する。今までの学者や術士には出来なかった偉業を成すこのアレックスは、それが当然であるように振舞う。

「氷結体だと？」

クリスティナが疑問の声を上げるのも当然。術式は通常、一人につき一つの主題構造という規則があって成り立つものだ。それを、このアレックスという男は地面を励起させ、更には氷の精製すら行おうとしている。二つの異なる術式を扱うという事は、この規則に違反している。

「――知ってた？ 俺って、魔法使いなんだぜ」

さも驚愕の事実を告げるように、口元に厭な笑みを張り付かせながら、アレックスはそう告げた。高圧的に、見下すように。

「まあ、ちょーっと、特殊だけだな！」

そう言い、腰の後ろに剣のように納められていた一冊の書物を引き抜く。

「――まさか、魔導書か？」

「そうだ、ディオオン。俺はこの魔導書に記されている術式を、全て使える」

魔導器が栄える以前、術式機関が生まれる前、術式は秘法とされた。

神聖視されるべき魔法として。

その仕組みを解明し、究明した記述が記された書物。それが魔導書。今では骨董品となり、古典的価値しかないと言われる。

だがどうだろう。魔導器や術式機関は限定された一つの術式を延々と行使するのに比べ、アレックスが使役するのは二つの術式。言によれば、書物に記された全ての術式を行使出来ると。果たしてそれは幾つの種類を指すのだろう。ハードカバーの分厚い書物。茶色い表紙。今、アレックスの目の前で宙に浮かび、バラバラと手も触れず項を繰られていく魔導書。

「ものは使いよう、ってね。骨董品でも媒介にすりゃ、こんな事が出来るのさ」

アレックスの前方、放射状に展開される氷の槍。長さ一・五メートル程、直径三タイト。

それが十五本。その全ての矛先に、暗殺者が存在する。足止めを食らった状態で。

「ヴォーパル、発射」

宣言と同時の射出。矢のように射ち出された氷の槍は細かな氷粒の輝きで尾を引きながら飛翔し、暗殺者の心臓を一切の容赦なく正確に、貫いた。

噴出す血潮。氷が赤く染まる。血の臭いがたちこめる。胸から氷の棘を生やした死体が倒れようとするも、地面に刺さって奇妙な倒れ方になる。足はそのままに、体は水平。氷の槍が地面に寝るのを拒否するように、支える。目の前に奇妙なオブジェが、十五も並ぶ。一撃の下に殲滅。圧倒的な戦闘力。

魔法使いを自負する赤い男は、底知れない可能性をここに示した。
「ハッ」

眼前に転がる死体を鼻で笑い、見下す。

「くっだらねえな。俺を殺したければ、この五倍は連れて来いよ」
魔導書を腰に納め、眼鏡を押し上げて、ディオンの先に進むよう促す。

「凄いものだね、術式」

ハンスの言葉に、アレックスは答える。

「当然だろ。何せこの魔導書は俺が自作したんだからな。伊達に教師じゃねえっての」

吊橋を渡る一行は、この傲慢な術士を憎むに憎めなくなってしまった。

上手く使えば、カタリナの救出に大いに貢献してくれるだろう可能性を秘めているからだ。しかしその“上手く使う”というのが至難の業であるようだった。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (3) (後書き)

次の更新は2月16日になります。
よろしくお願いします。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (4) (前書き)

ディオ^デオン達が吊橋を渡るのと同じ頃、違う場所ではある人物の計画が着々と進められていた。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』（4）

そこは暗闇だった。一寸先すらも見えない、夜よりも深い闇が凝っている。

闇の最中、呼吸音すら反響する広大な空間に、一人の人物が居た。地面と思われる平面に、巨大な紋章が黄金色に明滅している。人物はその中心に立っていた。足元の法陣が、ぼんやりとその風貌を照らす。大きく複雑な紋様のそれは、人物を中心として不気味に脈動していた。

光の明滅が中心から始まり、外側へと紋様を伝って流れていく。まるで生きているかのように。生物の心臓のように。

「――創造（Br i a h）」

声が響く。低い、男性のそれだ。

肩まで伸ばした、癖のない灰銀色をした髪。名のある名工の手によって生み出されたかのような、美しい彫像の如き中性的な容貌。陶磁器のように白い肌もそれに加わり、男性か女性か判別しがたい。すっきりとした鼻梁に細い首筋は、妖しげな魅力さえ放つ。

双蛇が木の杖に絡みついた、奇妙で不気味な紋章が背に描かれた、丈の長い肩留めのマントを纏う様はどこかの国の王であるかのように、威厳に満ちていた。その下には華美な装飾が施された、しかし動きを妨げないよう考慮されている、胸元にボタン留めポケットが二つ存在する、黒い軍服。

細身ではあるが、鍛え抜かれた肉体をその下に隠しているのが、堂々とした佇まいから伝わってくる。見た目に軍人の様相ではあるが、胸元に輝く武勲章と階級章から、人に指示する位の階級だと窺えた。

鋭い眼つきに穏やかな光。女性のような男性。相反する二面性が内在するかのようなこの人物は、どこか浮世離れした雰囲気を持っていた。

薄い唇から滑らかに紡ぎだされた言葉は、逆らいがたい重みのある声。人に命令する事に慣れている者特有の、心を震わせるような声だ。

詠唱と同時に、男の長い髪は風に吹かれたようにふわりと舞い上がった。

足元の紋章がいつそう強く、脈動する。

「……ふむ」

足元の紋様には、一定の法則の元に小さな円が要のように並べられている。

男を中心として直線状、前に一つ。次に男が立ち、そして背後に三つ。男のいる場所にも円が描かれるべきであろう規則性があるが、そこは空白となっていた。

そして左手、右手側にも同じく直線状の並びで、しかし中央にある円の間に位置する間隔で、それが三つずつ並ぶ。

左の円の並びを峻厳の柱と呼ぶ。右は慈悲の柱、中央は均衡の柱。合計十個の円。それらを結ぶ二十二個の路。

神秘思想“生命の系統樹”

セフィロト

ストレンジネス・オラトリオ

「アナンシアの予言通りか。果たして異約聖譚曲の役者として相應しいか否か。楽しみだ」

そう呟いた後、男の口元が、さも面白いものを見つけたとばかりに笑みを形作った。

「ふふん？　そうか、お前がそうなのか。シルマール殿の言われていた、面白い素材とは。お前が持つのは太陽のアルカナだな。それに傍らには魔術師、正義とは」

男の右眼は赤く、宝石のように澄んでいる。左は深い緑碧。妖しげに細められた。

「ならば第一部は派手に参ろう。到達者がそれだけ集まれば、場もそれに相應しいものでなくては興ざめというものだ」

男は、満足げに頷いた。

「それに、外なる物語の語り部が一堂に会するというのも、なかなか運命的で良いじゃないか」

くつくつと、嗤う。彼の筋書きは歌劇的であり、また悲劇的である。それを見届ける為に自らをも演出役として場に関わらせた。

これから起こる何もかもが、彼の掌の上の出来事。結末の決まっている歌劇。踊らされる役者は、運命に翻弄される人物達。どう足掻こうと、決められた結末からは逃げられない。彼らの預かり知らぬところで、彼らの未来は捻じ曲げられる。

それを止められる人間は、彼を打倒出来る武器を持つ唯一の人物は、今もその場所へと向かっている最中。間に合うか否かは、未だ解らない。

しかし。“彼女”の登場すら彼の筋書き通りであるとしたら、それは如何なる皮肉であろう。

例えるならば、魔王に操られる勇者のように。倒すべき敵の傀儡となってしまう主役など、まさに悲劇的と言えるだろう。

演出家を気取る男の名は、ペルフェクティオ。国家の裏で暗躍する、この男の名を知る者は、未だ少ない。

* * *

超弩級飛行船の製造が行われているという、シルメリアの造船工廠が爆薬で吹き飛ばされたという情報が国中を駆け回り、人々が混乱し始める頃、その張本人は姿をくらまして国外へと向かっていた。シルメリアとアルテリアの境、霧の樹海をその向こうにする、荒涼とした風景が広がるアイカ山脈。強風吹き荒れ、土埃が舞い上げられるその山肌にはおよそ一個の生命も存在しているとは思えない。岩石がそこかしこに顔を覗かせる荒れ果てた山路には道らしい路も存在しない。

しかし、そこを踏破する人影があった。

長い金髪を頭の後ろ、赤いリボンで一つに縛り、腰まで垂らして

風に吹かれるままにし、吊り眼がちのきつい双眸は見る者の眼を覚ますような、金色。すらりとした首筋、成熟した女性の妖艶さを放つ肢体を、袖口が大きく開き、肘側に寄ることに絞られている黒い長袖の服と、くるぶしまである白のコンバット・スラックスにマントを腰に巻いたような、青いアンダーコートで包む。歩行の邪魔にならないよう、前部分だけが開けてある。

その上にくすんだ茶褐色のローブを纏い、荒野のような山を登っている。時折、ローブが強風で煽られ、下の服が露になる。倭国に伝わるという和服の装いをユーフォリア大陸の服飾屋が参考にして造り、さらにこの人物の使用目的に合わせた服である。

足には頑丈そうな登山用革靴が穿かれ、ごつごつとした岩肌から主を守っていた。

背は高く、細身の女性。男のみならず女も惹きつけるような、類稀な美貌と容姿。露出の殆ど無い服装ながら腰の括れや胸の膨らみの主張は隠し切れず、魅惑的な色香を匂わせる人物だった。しかし薄い唇はぎゅっと引き結んでおり、その表情は硬い。

山脈を一切の迷いなく見据え、進む姿はまるで行軍する兵士のようにも思えてしまう。

白い肌を惜し気もなく山風に曝す彼女は、腰の後ろに二振りの剣を交叉するように携えていた。両手を下げた状態で、すぐ傍らに柄が来るように位置取られている。双剣使いだというのが一目に解る出で立ち。

剣は、右手側が刃渡り八十タイト程の直刃、剣身が通常のものよりも厚いミドルソード。左手側のもはそれよりも長く、バスタードソードのようにグリップが長い。特殊な造りのロングソードだ。鞘も、左手側のものだけが頑丈な厚い革で幾重にも巻かれている。まるで封じているようにも見えるのはしかし、そのガードの中心に碧の宝玉がはめ込まれている事から見れば、大方の予想はつく。

アンジェという名のこの双剣士は、しかし一人でこんな山登りをしている訳ではなく、見れば彼女の背後に、どうにか遅れないように付いて行くので精一杯という様子の少女がいた。

少女が纏う、アンジェと同じ色のコートがはためく際に見えるのは、膝まで隠れる灰色の革製ロングコート。首には赤と橙の縞模様縫われたマフラーが覗く。山は上に登る程空気が冷えてくる為、それへの防寒対策だ。事実、彼女達がいる場所も山の中腹を過ぎたあたりで、下界とは比べ物にならない寒気が渦巻き、吹き荒れていた。

少女は必死のようで、表情は苦しそうだ。額に汗も浮かんでいる。コートに付いているフードから覗く双眸は短い赤の髪、双眸。アムネシア人だ。

まだ高等学院の生徒であろう齡の少女は、歳の頃十七、まだ幼さが残る容貌。しかし生来のぱっちりとした目、ふっくらとした頬は同性にも愛らしく映る事だろう。

本来であれば澆刺として活発な性格の彼女も、急勾配が続く困難な登山が続けば、その元氣も奪われるようだった。幾らかは。

「せ、先輩、ちょっと待って下さい！」

高い少女の声に、アンジェが振り返る。肩で息をしている少女に比べ、先輩と呼ばれた女性は平然とそれに返す。

「ン？ 呼んだかい、エミリア」

エミリアと呼ばれた少女は、まだあどけなさの残る顔に怒りを滲ませて、言う。

横風が吹き、フードを両手で押さえる。びゅうびゅうという風の音が耳にうるさい。

「歩くの早すぎです！ 少しは私の事も考えて下さい！ ついていきません！」

「ああ、そうだね。僕、ちょっと考え事しててさ。エミリアの事なんか全く考えてもいなかったよ」

「ひどい！」

酷薄な言動にエミリアは半泣きになった。感情の起伏が激しい人物である。

「ひどいんじゃない。冷めてると言ってくれ」

口元に微笑を浮かべ、腰に手を当てて事も無げにそう言うアンジェはどこか、楽しんでいるようにも見えた。額の左寄りで分けられた前髪が風に煽られる。

「冷酷です！」

そんなアンジェにびしっ、と人差し指を突き出すエミリア。しかし彼女はそれに対し、顎に手を当てて、ふむと一つ頷いた。

「冷たくて酷いとは、これまた上手い事を言うね」

感心したらしい。

「私は先輩みたいに体力馬鹿じゃないんです！　お願いですからもつと速度落として下さい！」

「体力馬鹿というのは、体力が馬鹿みたいにある人の事を言うのか、それとも体力しかない馬鹿の事を言うのか、はたまた体力の事しか考えてない人を言うのだろうか。どう思う、エイミー」

エイミーというのが、エミリアの愛称だった。アンジェは時折、この名で彼女を呼ぶ。

「え？　えーと……たぶん体力しかない馬鹿の事です！」

「解った。君は僕にケンカをふっかけているのだな？」

アンジェがぼきぼきと両手の指を鳴らす。本気かどうかは、変わらず微笑を湛える表情からは解らない。

「あ、やっぱり違います！　体力が馬鹿みたいにある人の事です！」

「うん、そうか。それならいい」

じゃあ別にいいや、という様子でアンジェは前に向き直り、歩出す。馬鹿という単語には反応しない性格だった。

エミリアは心の中で溜息を吐く。怒ると怖いが、普段はこんなに不思議な性格をしているのが、アンジェという先輩だ。どこまでが本気で、どこからが冗談なのか、その線引きがよく解らない、と

いうのがエミリアの中でのアンジェの印象だった。

しかし、仕事となるとそれは一変する。一切の容赦なく人間、人外を殺害し、周辺への被害も考慮せず建物を破壊する。その行動力、判断力は衛士協会の中でも上位に存在する、特級衛士に並ぶだろうとエミリアは思う。

しかし。彼女の師事するこの先輩は、どうにも人との接し方が独特だった。

アンジェが振り返る。頭の上には疑問符が浮かんでいる。

「ところで何の話だったわけ？」

エミリアはがっくりと肩を落とした。

それからしばらく、黙々と山道を登っていくと山頂に到達した。

アンジェ達が歩いてきたシルメリア側とは一転し、見下ろすアルテリア側は切り立った崖のようになっている。眼下には雲をそのまま地表に落としたかのような光景が広がっていた。霧の樹海だ。ところどころに霧の海から突き出た、背の高い広葉樹が見える。

「おお、絶景かな絶景かな。ヤッホー」

「あ、アンジェ、先輩、私、もう帰りたいです……」

息も絶え絶えといった様子でエミリアが、倒れこむように腰を下ろした。

「え、ここから来た道をまた降りるの？　そう、それじゃ頑張ってさようなら」

「そんな薄情な！　せめてかわいいそうにね、とか言ってお下さいよ！」

「うん？　そうだな……かわいいよ、エイミー」

「ぜんぜん、全く、嬉しくありません！　それに方向性がこれでもかっけくらい違います！」

憤慨して地面をばんばんと叩く、エミリア。眼の端に涙を湛え、半泣きになっている。アンジェは困った顔をした。

「注文が多い後輩だ……それにしても、どうする？」

「はい？　何がですか？」

きよとんとした表情を返す後輩に対し、その背後に眼をやった。

「いやね、お客さんらしいよ。どうも僕達に用事らしい」

「こんなところでお客さんって……山賊の間違いじゃ」

「じゃあ山賊で」

「どっちでもいいんですかそうですか!」

すぐさま立ち上がり、左腰に差してあった両手剣を握る、エミリア。
ア。

「君は下がってても良いよ。本来は術士なんだし、荒事は僕に任せて」

「そうはいきませんよ。私だって遊びで来た訳じゃないんですから」
エミリアは両手剣を引き抜いた。その剣は、剣身に奇妙な節目が幾つもあった。

剣を等分したかのように存在するその節目には、しかし明確な規則性が見える。加えて、長大なグリップ。ガードの中央、剣身の根元には黄色の宝玉。魔導器だ。

「なら、いいけど……まあ、あまり無理しないようにね」

興味なさげにそれを流し見た後、アンジェは右手でミドルソードを逆手に抜いた。

乱立する岩石の影から、それを見計らっていたように一斉に現れる、行商人のような姿をした集団。手には短剣に、自動弓を所持している輩も数名見受けられた。
クロスボウ

自動弓とは、引き金を引くだけで矢を発射するよう改良された、弓の進化型だ。その性質上、連続で射撃する事が出来、その威力は人間の心臓や頭など、軽々と貫通するほどに高い。見渡せば、敵意を見せる商人達の数は十人前後。

「どこの誰かって聞くのが筋だけど、別にそんなもの、どうでもいいよね。そっちからしたら邪魔だから襲ってくる訳だし。こっちは殺される訳にいかない。それだけだ。」

でも飛び道具とは、ちょっと厄介だね。でもそれも、別にいいや……来ないの?」

アンジェの双眸が細められる。喋っている間に来ないのはこちらの様子を伺っている為かと予測。だがそれは彼女も同様だった。明らかに素人でない足運びと、構えにアンジェは口元を引き結ぶ。

日陰者の動きだ、と思った。戦闘慣れどころか、戦闘さえ起こさずに相手を殺すような、音を殺した所作が覗く。ゆっくりとした動作はしかし、人の眼にその行動の動き出し、つまりは始点を見せない。始点が読めねばそれに続く変化を見切るのに、遅れが生じる。武術に深く通じた者ほど騙される、暗殺の術。

彼らの眼は鋭く細められ、淀んだ瞳に殺意を灯している。人を殺す事に慣れている者の眼だ。

緑の上着に白いシャツとズボンという行商人の身なりなど、到底似合わないような連中だった。

アンジェの意識が集中し、戦闘用へと尖っていく。付随するように、その雰囲気も変化する。

「――来ないのなら、こちらから行くぞ」

棒立ちだった姿勢から瞬時に腰を落とし、最も近くにいた暗殺者に走り寄る。赤いリボンと金髪がたなびく。

待ち構えていたかのように商人の一人は短剣を振り、アンジェがそれを屈んでかわすと、地面を跳ねて距離を取った。双剣士が追う。自動弓の射界に入らないよう地面に半分以上埋もれた岩石を盾に回り込み、疾風のように肉迫。右手の横薙ぎを一人の喉下へと滑らせるように振る。しかし受け止められ、再び距離を取られた。

は、と気が付いた時には、短剣の一人とは別の方向から自動弓持ちが狙いを付けていた。一度後ろに飛び、岩石の裏に隠れる。元居た場所へ矢が突き立つ。

「連携戦闘か。賢明だ。戦は頭数で決まる、とは、帝国の戦将の言葉だったかな」

アンジェは薄い唇を一舐めし、エミリアの方へと覗き見た。

その時が、エミリアの剣が眼前の敵に向かって、展開された瞬間だった。

「やあーっ！」

長いグリップを両手で掴み、エミリアが剣を頭上から振り下ろす。しかしそれは既に“剣”ではなかった。

剣身に存在していた幾つもの節目が分離し、芯鉄代わりに内蔵されていた鞭が伸びる。

それは刃を纏った鞭だった。剣が幾つもの刃として分離、展開されて、それが鞭によって操作される。

分離された剣刃の形状は、楔を二つ合わせたかのような形状をしている。相手を引き斬る事に適した形状だ。

鞭型魔導器、スレイプニルテイル。

振り下ろされたそれはしかし、自ら相手を求めるかの如く、うねり、曲がる。

その剣筋を見切るには困難を極める。間一髪で避けた商人の一人は、だが返しの一撃にその頭を半ばから寸断され、脳漿と血液を岩場に撒き散らした。エミリアが前進する。自動弓から射出された矢が彼女に向かう。だがそれは眼前で宙に縫い止められたかの如く、停止。術式障壁だ。落下する矢。彼女の本分は術士である。しかし術士には致命的な弱点がある。術式発動までの間、本体が無防備になるという弱点。エミリアはそれを魔導器で補う。その為に戦闘行動には同時に二つの思考が必要とされる。術式と、魔導器の操作。普通の術士には不可能な芸当。彼女のこれは、既に離れ業の域にある。

その様は、まるで移動要塞。鉄壁の障壁は自動弓を残らず防ぎ、その一本も通さない。近寄ってきた敵への魔導器による攻撃は蛇のようにうねり、死角から回避困難な一撃を仕掛ける。鞭の一撃は小柄なエミリアの三倍はあるであろう岩石をも両断するほど、鋭い。
(あっちは大丈夫そうだな)

アンジェはその光景に心配を拭われ、己の敵へと意識を向けた。
(敵の数はそう多くない。しかし、陣形を組まれて連携されると、手が出せないな)

一対多では、どうしようもない戦力差というものが生まれる。

だが、彼女は絶望していない。迷いもない。アンジェにはあるのだ、逆転の一手が。

（とっておきだ。ヌアザの聖剣、見られるお前らは運が良いぞ）

左手側の剣を、逆手に持つ。滑らかに口から紡ぎ出される、詠唱。「アルカナ解放、外周因子起動。接続子を展開、事象誘導式演算機関に接続」

アンジェが持つ、左の剣が眩い銀色に輝き始める。加え、剣を持つ左手に複雑な幾何学紋様が、肘を通り肩にまで奔るように、浮かんだ。

ガードの中央に存在する、緑碧の宝玉が銀色に混じり、光を放つ。「ぬ、うう……！」

大気が震える。銀の光が周囲に満ちていく。アンジェは、この剣に選ばれたが為、戦う事を余儀なくされ、そして――

“――飛べ。銀の左腕――”
アガートラム
「うおおオオ――！！！」

解き放つ。鞘から。剣が引き抜かれて、まるでブーメランか何かのように、放り投げられた。まっすぐな直剣の中腹に、稲妻のような形をした二つ目の宝玉が存在。無造作に投げられた剣はしかし明確な目的を持っている。瞬間、その剣先を敵へ向けて軌道修正、飛翔。物理的に有り得ない現象、予想だにしない不規則軌道。剣刃は驚異的な速度で以って敵の心臓を貫き、そして翻る。弧を描いて別の敵に迫り、その首を通り過ぎざまに断つ。敵は呆けた表情のまま絶命。地面に転がる首一つ。更に一人。また一人。宙を縦横無尽、自在に飛び回る剣に、果たしてこの場の誰が対抗できるだろう。強大な力を持った術士でさえ、これの前には無力。命中不可避。伝説と化したオブラ・マエストラ。術式を薙ぎ払い、魔導器を打ち払う力を持った、銀の左腕。

アンジェは銀の剣に注意を奪われている商人へと音も無く接近し、背後からその首を横薙ぎにぶつりと切断した。噴水のように噴き出

す血潮。屍骸はそのまま、どうと倒れる。アンジェの左腕には変わらず銀色の幾何学紋様。これはヌアザの剣との接続子として存在する。

ヌアザ・アガートラムの剣とは、神話に登場する、一度鞘から引き抜かれれば必ず敵を打ち倒すという飛翔剣だ。無論、神話などはただのお伽噺である。實在しない。しかしそれを現実のものとした場合。神話の創造物を人間が現実を作り出してしまった場合。

常識は非常識に塗り潰され、ただ虐殺の構図が描かれる。

だが彼女のその様は優美の一言に尽きた。踊るように舞うように、岩場を駆ける、剣の巫女。

飛翔剣と己の剣を駆使し、青いアンダーコートを翻しては敵を次々に斬り捨てていく。金色の、一条に束ねられた髪が馬の尾のように風にたなびく。彼女の剣が敵に遮られても、全く別の予測もし得ない方向から飛翔剣が敵に襲いかかる。人間の死角を的確に突く飛翔剣は、彼女の意思によって操作されている。

——持ち主のアンジェですら、この剣の全容は掴めていない。そして今までこれがシルメリアの聖堂教会に封印されていたのには、当然の如く理由がある。

オブラ・マエストラに分類されるものはこのユーフォリア大陸にも確認されているだけで、十個程度はあるだろう。しかしこの銀の左腕だけは、パペット・クロウとは別に長年、封印され続けてきた。それは自ら使用者を選ぶ性質から。そして、これは真実“オブラ・マエストラ”ではない故に。

「……はあ」

アンジェが一つ大きな溜息を吐く。眼前には、荒れた岩場に散乱する人間の屍骸。撒き散らされた臓物の臭いが風に吹き上げられ、湿ったような生臭さが鼻に届く。彼女の元へと帰ってきた銀の左腕の柄を握り、血糊を払って鞘へと納める。

警戒を完全には解かず、右手には剣を持ったまま血と内蔵で彩ら

れた岩場を進む。敵が潜んでいないとは限らない。

「どうも、暗殺者のような連中だったな。やっぱり蛇か？ エイミ
ー、無事かい？」

「は、はい……」

力のない返事。何かと急いでみれば、岩石が切断された岩場の間にへたり込むエミリアがいた。顔が青い。

「どうした？ どこか怪我したのか」

「いえ、ちょっと、血の臭いが、濃過ぎて……」

アンジェはやれやれと頭を掻いた。エミリアはまだ幼い。人殺しを仕事と割り切るには、若過ぎるのだ。恐らく血の臭いだけではないだろうとアンジェは推察する。気分を悪くしたのには良心の呵責もあるだろう、その事に彼女も責任を感じていた。先生がこの少女まで人でなしにする事に、アンジェは最後まで反対していたのだ。

「それはどうしようもない。狙われる立場だからね、僕達。帝国やそれに連なる組織から目の敵にされてる。殺さなければ殺されるんだ」

「解ってます。解ってますよ、そんな事……」

エミリアは俯き、手の中の魔導器を見た。

「大丈夫、私は、戦える……」

その声に彼女が思い詰めているのだと感じたアンジェは、優しく肩に手を置いた。

「エイミー、君は一人じゃない。僕がいる。どうしてもダメなときは、僕を頼っていいんだよ」

エミリアは顔をあげる。潤んだ瞳から、涙が一筋、零れた。

場所を移動し、エミリアが落ち着くまで岩の密集した場所で風に当たらないよう休む。しかし寒風吹き荒れる山頂に長居しては体力を奪われるので、少しだけ休もうと腰を下ろした。

アンジェは赤茶色の岩に背を預け、自分の金髪を縛っている、赤いリボンに触れる。

「……………」

彼女の瞼が落ちる。眠るように、何かを思い出そうとしているようだった。

「先輩、どうしたんですか？」

エミリアが閉じた膝に顔を寄せるようにして、隣に座っているアンジェを覗き込んだ。

「え？ ああ、これからどうしようかなって。そうだな、降りる道を探さなきゃならないか」

それは嘘ではあったが、アンジェは自身の過去を無くした事実を、既にエミリアに告げてはいた。これは見栄だった。

それを知ってか知らずか、エミリアは問いかける。

「先輩ってリボン、ずっと手放しませんよね。それに以前から思ってたんですが、縛り方が変わってます」

その形はユーフォリア大陸では殆ど見かけない縛り方だった。

細いリボンは、倭国で生まれた独特の結び——蝶結びという形を取っている。

「ああ、僕もそう思う。僕が記憶喪失症だという話はしてあるね…：これは僕が先生に助けられた時にも、髪を縛っていたものだ。この縛り方も手が覚えているから、そうしているだけでね。何かの手がかりになるかと思って、続けてる」

「五年前、でしたね。先輩が先生に助けられたのは」

先生とは、アンジェとエミリアが師事している温厚な老人で、二人に剣や術式、様々な薬品の知識、操船技術等を仕込んだ人物だ。以前は帝国の軍人だったと言い、老後は実家のあるシルメリアで静かに暮らしている男性だった。

聞けばその先生という人物は最初、腰を抜かして驚いたという。というのも、空から少女が気絶したままゆっくりと降りてくる様を見れば、誰とて驚くだろう。まるで童話に出てくる、不思議な物語に巻き込まれる少女のように。

幸いにも現場には先生以外、誰もいなかったらしく大きな騒ぎに

はならなくて済んだようだが。

以後、先生は少女にアンジェという名前を与えた。元は童話に出てくる、不思議の森に迷い込むという少女の名前らしい。

「頭痛、最近は起きないですね」

当初、目覚めたばかりの頃のアンジェは頭痛に悩まされた。頭が失われた記憶を思い出そうとする為に起こる発作らしいが、時間の経過と共にそれは頻度が減り、今ではめっきり起きなくなっている。取り戻した記憶は、一つもない。名前さえも。

「うん。手掛かりはこのリボンだけ。これが私のものなのか、それとも他の誰かなのか、それも解らない」

先生はそんな彼女を引き取り、育てた。代わりに多国籍の反帝国同盟“国境無き騎士団”に加入し、その戦力として現在では動いている。シルメリアの超弩級武装飛行船エルドリッジを工廠ごと爆破したのはそれが争いの火種となり、戦争を起こす発端と成り得るからだ。

国境無き騎士団は、帝国の打倒のみならず大陸の平和を願う集団である。しかしその存在もまた争いの火種になるのだという事に、彼女たちはまだ気付いていなかった。

「でもまあ、考えてても事態が好転する確証はないし。こうして動いていれば、僕を知っている誰かに会えるかも知れない。とは言っても、今の生活が気に入ってるから、躍起になって思い出そうとも思わないけど」

そう語るアンジェの表情は穏やかだ。しかしリボンの事だけは、今もずっと彼女の心を締め付けていた。

（過去なんて捨ててもいいはずなのに、このリボンだけが、忘れようとしてもいつも心のどこかで引っかかる。思い出させる）

アンジェは苛立つ。記憶を無くす以前の知り合いに、五年もの間、一度でも自分を探しに来てくれるような、優しい相手はいないらしい。ならそんな記憶などいらないとさえ思う。今はこの後輩と先生、そして同盟の為に戦う事が自分の生き甲斐だと。

彼女は、そう心の中で無理やり考えを終わらせた。いつものように。

「先輩？」

「ああ、何でもない。さあ、そろそろ行こう」

「行こうって言ったって……」

アンジェに続いてエミリアが立ち上がり、山頂から下を見渡す。

「こうも崖になってちゃ、無理じゃないですか？ ああ、覗いたら眩暈が……」

周囲に足場となるような取っ掛かりや、斜面のない断崖絶壁。エミリアの足元から、小さな土塊がころりと落ちる。土塊は絶壁に当たってもせず落下していく。降りる算段など立てようはずもない、垂直な崖。

「——ン？ あそこ、あの一箇所だけ、霧が晴れてないか？」

アンジェの指差す先に、一部分だけ丸く霧が薄まっている場所があった。クリスティナの魔導器によって造られた風穴とでも言うべきものが、厚い霧のカーテンに穿たれている。

「本当だ……やっぱり凄いですね、あの人の予言、大当たりです」

「ああ、ルベンの予言は外れた事がないね。と言っても、見えるものと見えないものがあるみたいだけど」

同盟の仲間の一人、預言者を自称する人物を思い出す。

「いや、でも。降りる手段が……」

「何、心配はいらない。僕にはコイツがある」

そう言って、銀の左腕の柄をこつこつと叩く。

「……まさか……」

表情をひくつかせたエミリアを、にやりと厭な笑みで見返すアンジェ。

「そう。コイツは空を飛ぶ剣だ。空中での自由落下中に使えば、もしかしたら無事に着地出来ると思わない？」

「お、思いません！」

常識者の後輩は、烈火の勢いで反対した。唾を飛ばして反論し、

どうにかアンジェを思いとどまらせようと猛烈な早口で言葉を連ねる。

「先輩そんな事やった事ないじゃないですか！　ぶっつけ本番でそんな命が左右されるような真似しないでください！　私もいるんですから！　それにそれ、伝説のオブラ・マエストラなんですよ！　そう軽々と使わないでください！　この間なんてなんですか、キャンプでお肉切る時に使って！　キッチンナイフじゃないんですよ馬鹿じゃないですか！？」

「いや、あれは微妙な制御の訓練だよ。決して近くに刃物がなかったわけじゃない」

しれっと言い返すアンジェ。円環楽譜にさえ干渉すると言われる伝説のオブラ・マエストラが調理用ナイフ同然に扱われていると知れば、世の術士達はどのような顔をするだろうか。

そんなものに囚われない、奔放な性格のアンジェらしいといえ、らしいのかも知れないが。

「ちょっとぐらい、いいじゃないか。便利なんだぞ、魚だって取れるし、狩りだってできる。遠くのものを持つてくるのにも使えるし」

「ものぐさもいい加減に……！」

「はいはい」

喚きたてるエミリアを唐突に、正面から抱き寄せ、持ち上げる。アンジェの方が頭一つ長身だ。後輩は一瞬戸惑いながらも、運ばれる自分の体に嫌な予感を抱く。

「わ、わっ！　ちよっと、待ってください先輩、まさか、」

「そう、そのまさか。小うるさい後輩にはお仕置きだ」

アンジェが断崖の上へと足を勧める。

彼女とて、何も無闇に飛び降りようという訳ではない。アガートラームは人を浮かせる事はできないが、飛翔時の運動エネルギーで落下中に軌道を変える、もしくは減速させる事が可能だという事は解っていた。何しろアンジェが実践済みだ。全治二週間ほどの大怪我と共に得た経験である。

「あ、わ、止め、止めてくださいお願いします、」

青ざめるエミリア。足の下にはもう地面がない。アンジェが手を離せば、彼女は落ちる。

「さあ！ 空の旅へご招待！ 失敗しても恨まないでね！」

「いやー！ だ、誰か助けてえー！」

エミリアの悲鳴はしかし、アンジェと共に崖の向こうと吸い込まれて消えていった。

落ちる。どんどん加速して落ちていく。風がうるさい。体中の血液が重力加速に負けて、足の方へと集まる。意識が薄れていく。怖い。人間の体の中で、頭が一番重い。故に自由落下の際には頭から落ちていくようになる。それが摂理。

「きゃあああああ——！」

エミリアの悲鳴がアンジェの耳元で、思い切り吐き出される。鼓膜が破れるんじゃないかと彼女は心配したが、しかしそれどころではない。

頭痛だ。以前にも感じた事のある、記憶が甦ろうとする痛み。

以前もこれと同じ事があった。アンジェの体がそう言っている。

全く予想外のタイミングで襲ってきたそれに、彼女は低く呻いた。

「……っ！」

唇を噛み、意識を繋ぎとめる。落下と頭痛で彼女の意識は危ういところにあった。

後輩の悲鳴が途絶する。気を失ったのだ。

この上、自分まで気絶してはまさに、無理心中と言ったところ。彼女は必死に意識を保った。左手を剣の柄にかける。物凄い速さで眼下の景色が迫る。轟々と冷えた風が耳元でやかましくがなり立て、顔を叩く。体が急速に冷えていく。

アンジェは、頭痛を堪えて叫んだ。

「アルカナよ……！」

運命の大アルカナが、彼女の手の中で解放される。銀色の光が空

に流星の如く尾を引き、接続子と事象誘導式演算機関が繋がる。伴い、幾何学紋様が左腕に奔った。

全部で十九、存在するアルカナというものは、生命の系統樹に描かれた円……“セフィラ”を繋ぐ路となる、小径パスとしての役割を持つ。

生物のような物的存在の内に在る、精神に代表される内的世界にそれは眠っている。遍く存在イデアに内包された、刻印シリアル。しかしそれに触れ、ましてや現象として具現できる生命体は既に突然変異体とでも言うべきものに変質していると言えるだろう。

強いて例をあげるのなら、夢。寝ている時に見る夢を現実に起こしてしまえる生物などいない。アルカナの解放とは、それに近い。非現実を現実にする。現実を侵す夢。それが事象変移。そしてその根源、力の源となるのがアルカナ。人間が操る術式の主題構造モチーフはこれに由来する。

節制のアルカナを始原とするエミリアは、絶対防衛とでも言うべき術式障壁を持ち、魔術師のアルカナに属するアレックスは、電子に干渉するという制限の中でのみ術式を行使できるというように。しかしそれは本来、眠っているべきものだ。夢は寝ている時に見るもののように。

——だが、魔導器は、オブラ・マエストラは、マグナム・オーパスは、それと呼び起こす鍵として存在する。呼び声の鍵。開発者は、それが禁忌であればあるほど、惹き付けられる魔的な魅力に逆らえず、それらを生み出してしまった。

覚醒程度の浅い人間には靈知因子が内的世界に呼び起こされる。グノーシス・ファクターそれが術式を使う資格のように、現代では確認されているが、それがアルカナの極々わずかな片鱗だという認識はまだない。

アルカナを自覚し、呼び起こす事ができる人間を“到達者”と呼ぶ。概念的には人外に近いが、全く別の、第三種と分類すべき、進化した新人類。

速度が落ちる。アガートラムとて人を乗せて飛ぶ事は想定されていないが、減速し軌道を変えて落ちる事はできるという経験が生かされた瞬間だった。

「——っ！」

アンジェは咄嗟の判断で、自身の体を崖へと向けて軌道を変更した。殆ど真っ直ぐな壁へと剣を突き立てる。制動力がアガートラムだけでは足りないと思ったのだ。

姿勢が崩れる。空中へと投げ出されそうになりながら、アンジェは剣が得た制動力によって地面へと足の裏を向ける。剣には壁に張り付くよう、飛翔能力を働かせている。

「止まれえ——！」

壁に一直線の傷痕を残しながら、彼女達は霧の樹海へと落ちていった。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (4) (後書き)

次の更新は23日になります。よろしくお願いします。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (5) (前書き)

霧の樹海の中、ディオンは吊り橋を渡って対岸へと足を進めた。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (5)

人間がこの星に生まれたのは何時の事だったのか。

通説では生命進化の過程で生まれた、猿から進化した生命であると言われている。

しかし、それを裏付ける確固たる媒体は存在しない。

古くから残る古典や古文書、歴史書を紐解いてみても、その詳細はあまり記されていない。しかしそれらに見受けられる幾つかの記事では、人類の発祥は突然だったと一様に語っている。例えば魚に足が生えて陸上で生活したわけでも、猿から進化して人間が生まれただけでもなく、唐突に、何の脈絡もなく、発生したというのだ。

それを示すように、大地に埋もれる古い人骨などの出土品から専門家が起源を辿ってみると、最も古いものでおよそ一万二千年の経年劣化が見られるらしい。それより古いものは見つからない。

これは何を意味するのか。人は自然の中で、自然に生まれた存在ではなかったのか。それすらをも疑問視する風潮が学者の間に広まっては、証拠がない為に根も葉もない噂だと鼻で晒われ、切って捨てられていく。

異端審問会が隠す、禁書保管庫。世に出れば人を乱すとされる封印指定の書物が、そこには収められている。巨大な図書館だ。

そこに一冊だけ、人類史を間接的に裏付ける書物がある。

一人の占星術師が書いたとされるそれには、星の詠み方と「アカシックレコード」というものについて大まかに書かれている。

アカシックレコードは巨大な情報集合体であるという。空の果て、星の海に存在するとされる、世界の始まりから終わりまでを記録されたもの。だがその存在の存在を示すものは何もなく、またそれを知るような人物はいない。著者は既に亡くなっている。

書物は人心を惑わす妄言の塊として封印、著者はギロチンによって処刑された。無闇に人を惑わせたという罪で。

何故焚書されなかったかは、ひとえにその書物が持つ文化的価値からだ。天文学は今現在、発展の途上にある。後年どのような古書が必要になるかもわからない。蔵書として保管しておくのが良いだろうという専門家達の意見だった。

一万二千年を境に、見つからない人骨。それはつまり、一万二千年前に人類がこの地に発生したという事にはならないだろうか。

それはやはり何の確証もなく、天文学者の間でまことしやかに囁かれる噂。だがそれも専門外なものとして、風化していった。

発生。そこには多くの謎が秘められ、しかし異端審問会が世に示すのは、猿人類からの正統進化という学説。

隠された真実には未だ誰もその手を掛ける事は出来ていなかった。

* * *

「よう、姫さん。直接会うのは二度目だな」

男の声がした。聞き覚えのある声。そちらを見れば緑色の眼が薄暗闇に覗いていた。

煌々とロウソクの瞬きが辺りの暗闇を照らしている。ひんやりとした空気に揺らめくそれは、今にも吹き消されそうなほど儚い。洞窟に照らし出される鉄格子の陰影も、ちろちろと歪む。時折、ジジ、とロウソクが音を立てた。ロウの臭いが鼻に届く。

白い姫君、カタリナ・シャントルイユは決るように掘り込まれた牢獄の中に閉じ込められている。どうやらこの通路は入り口と出口が別々のところにあり、それらを繋ぐように掘られた洞窟の中なのだという事が、風の流れて予測できた。

（まるで、蟻の巣のようね）

しかし、カタリナに脱出するという考えは浮かばない。頑丈に嵌めこまれた足枷と手枷が、地面に深く打ち込まれた杭に繋がれている。動くとしゃらじゃらと音が鳴るのだ。

これを自力で破る事は、非力なカタリナには当然のように不可能。ならば残された手段は術式しかないが、術式の構成を乱す妨害式か何かが働いているらしく、術式そのものが起動しない。

男は、以前に城が襲われた時、カタリナとクレアドールの前に現れた赤い髪の若い青年だった。身には深い紅のコートを羽織るように纏い、ボタンを留めずに開いている。それは膝まであり、裾や袖に細かいベルトが巻かれぬままの状態であった。

下はくるぶしまであり身動きしやすい革のパンツ、これも赤い。精々靴とコートの下に着込んでいるアンダーがそれぞれ白いというだけで、全体的に見て真っ赤な男だった。

炎のようであり、また血塗れのようにも映る。

「お前は、あの時の暗殺者か」

カタリナが下から見上げるように男へ声を掛ける。

「そ。覚えててもらえて嬉しいね。いや何、ここへ来たのはちよつと俺も機嫌良いからさ。アンタにも良い事教えてやろうと思って。お互い、良い事は分け合うべきだよな？」

どこかおどけたように言う赤い男は、その眼をナイフの切れ目のように細めていた。

「良い事？」

不審さを隠しもせずに返すカタリナは、警戒するように身を硬くした。

「ああ、そう。アンタのお仲間が助けに来てるよ。たった四人でな」男の双眸が開かれる。その体全体から蛇のように相手を威圧する、暗い雰囲気を放ち始めた。洞窟内の暗闇と融和するそれは、どこか状況を楽しんでいるようで、笑い出したいのを堪えているようにも見えた。

濁った光を灯す、碧の眼。細まる瞳孔。

「四人だと？ たった、四人だけでどうして……！」

「さあ、余程気持ちだけが先走った、無知な連中なんだろうねえ。ろくな準備もないまま敵陣に突撃とは、恐れ入るよ。クク、アハハ

！」

男の眼が狂気を孕む。歪んだ感情がその顔に滲み出し、歪な笑みを形作る。

「そう、兄貴だよ、兄貴が来たんだよ！　ハハ、楽しみだ、今度は俺の番かな、それともまたあの兄貴は、俺におかしな妄想を吹き込むのかなあ！？　ふあはははは！」

左手で頭を抱え、僅かに胸を逸らして発作のように嗤う。

男は既にカタリナを見ていなかった。否、視界に認める必要性を感じていなかった。血の繋がった兄との死闘を心待ちにしているような様子がその言動から感じられ、カタリナは忌避すべきもののように眉を顰めた。

「貴公は、兄上を殺そうというのか？」

「あはははは！　いいぞ、そろそろ我慢の限界だ。早く来いよ兄貴“鬼ごっこ”で捕まった方が鬼になるのは、世の摂理だからなあ！」

カタリナは本能で、男に恐ろしいものを感じた。まるで憑かれたかの如く嗤い声をあげる男は既に尋常ではないと感覚で察したのだ。普通の人間ならばあんな笑みは作らない。口の端から涎が垂れるのも構わず、右手で壁をがりがり削る……普通の人間ならばそんな光景を目の前で繰り広げられ、恐れるなどという方が無理であろうが、ひとしきり嗤った男は口元を拭い、徐々に落ち着きを取り戻し始めた。肩で息をしながらも、その眼にはどこか正気の光が宿っているように見える。

「はあ、はあ……ああいけないね兄貴。俺って本当、寂しがりやだからさ。どうも兄貴の事になると一生懸命になっちゃうんだよね」

「き、貴公は、人間、なのか？」

恐る恐る、カタリナは尋ねた。男は、いたのかとばかりに冷たい視線を送る。

「ああ人間だよ。お前も俺を狂人だと言うか？　なら聞くが、お前の正気は誰が保証してくれるんだ？　常識なんぞ人の数だけある。固定観念に踊らされるお前らの自称する常識というのは、日の当た

る場所では生きられない人間を全て否定する。そんな正気や常識な
どの方が、余程狂っていると俺は思うがね」

「な、何だと!？」

彼女は王族だ。狂気や非常識などという人間の負の面とはあまり
にも遠く離れた場所にいた。彼女のいた場所では常に“正しい事”
が満ちていた。優しさや思いやり、人の善の面。それらの一切を狂
っていると言い放つ男の言葉は、彼女とは真逆の生き方をしてきた
者であり、またそういった方法でしか生きられなかった者の言葉な
のだ。

「生まれながらに社会に溶け込めない人間はいる。人が苦手という
だけで仲間はずれにされてしまう子供がいる。生まれ持った体に障
害を持ち、片腕で生活しなければいけない子供がいる。そういった
子供は否応にも世間から白い眼で見られ、弾き出される。異常だ、
とな」

カタリナは口を噤んだ。この男の言葉は、先ほどと打って変わっ
て静かに、心に響く穏やかな調子だった。それは男に残された僅か
な正気だったのかも知れない。

彼女は、これを聞くべきだと思った。

「だから俺は他人を信用しない。糧として見る。しかし糧を屠るに
は力がある。それには隻腕というのは大きなハンデだ。だから俺は
力を求めた。それが、コイツだ」

男が右腕――先ほど壁を削っていた、爪手甲を胸元に寄せた。

「パペット・クロウ。こいつは道具だ。道具は人を裏切らない。だ
から信用するに足る。解るか自称常識人。俺は、俺たちは異常者と
して世間に弾かれた。故にお前達に報復する。こんな自称常識人ば
かりで溢れ返った、狂った世界なんぞ壊れてしまえばいい」

冷たく鈍く光る、鋼色の爪手甲。がしやりとその五指が音を立て
た。

「――ああ、しかしアンタも異常者だったな。色素欠乏症か。生憎
だったな、あの魔女に裏切られて。つつつても、俺も魔女の事を知

ったのはついさっきだった」

「魔女、とは？」

「クレアドール・レーゲンハイト。人間から人外に変質した、数少ない存在だよ。それより俺もお前に聞きたい事がある。そう、俺はその為に来た」

カタリナが息を呑む。男は続けた。

「あの男だ。黒ずくめの、赤いバンダナを巻いた男。奴が持っているのは事象兵器か？」

「事象兵器……？」

カタリナは首を傾げた。敵であるこの男に情報を与えようとは思わない為に答える気はなかったが、黒ずくめの男……ディオオンがタバ・スマラグディーナのような事象兵器を持っているように見えなかったし、またそれに該当するような何かを持っていたような記憶が彼女にはなかった。強いてあげるならば剣だが、タバ・スマラグディーナでさえ何の反応も示さなかった事で、ディオオンはただの剣士として認識されたのだ。

首を傾げたのは、その質問があまりに意外だったからだろう。

男は口元を歪めた。これも先ほどとは違い、悔しげな……普通の人間が浮かべるような表情。狂気はなりを潜めたのか、今の男にはその一かけらも見えない。

「……そうか、違うのか。帝国で造られたってえ対術式兵装かとも思ったが、所詮噂か」

大陸全土を渡り歩く組織だからか、ウロボロスとミドガルズオルム、そしてその背後にいるプロヴィデンス教団の情報網は巨大である事がその一言からは伺えた。

予想以上に強大な組織。その背後には恐らく深く政治に関わる協力者や軍事関連の高位に情報提供者がいるのだろう。そうでなければこうも隠密に大量の情報を入手し、また捕まらずに各国を渡る事など出来はしないのだ。

軍や騎士団は治安を守る組織だ。それは外側からの武力や圧力と

いう干渉には強いかも知れないが、内部からの情報操作がなされてしまうとあっけなく混乱してしまう。敵からの情報には警戒しよく吟味してから受け入れるが、味方からの情報は何の疑いも持たず盲目的に受け入れてしまう……その性質は組織としては当然の反応だろう。

その為の、市井に潜むミドガルズオルム。憎まれるべき明確な適役としてのウロボロス。そしてそれらを水面下で総合し束ねる、教団。

人心の動き方、操り方を理解し、意のままに人を躍らせる策略がそこにはあった。

カタリナは理解する。これは何者かによって仕組まれた巨大で緻密な策略。何か致命的な間違いを犯しているような気さえしてくる。自分もその一端を担っているのではないか。知らないうちに敵の手助けをしてしまったのではないか。

——考えるまでもない。城から逃げ出し、こうして敵に捕まってしまった。敵に捕まりやすい状況を自ら作り出してしまった。ならばそれも全て、敵の掌の上で踊っていただけの事だったのでないか……

「しかし、その割にはこの爪と同じ……いや違う、波動関数の共鳴……相殺か。干渉内容を定義しない、広域干渉可能な術式障壁……それも違う、障壁じゃない。あれは、一体何だ？ チッ、やはりあの時奪っておくべきだったか」

男が舌打ちをする。ぶつぶつと呟いていた内容からは術式関連の専門用語が漏れ聞こえたが、独り言だったようで全てを聞き取る事は出来なかった。

——そうして、それがやってきた。

変質。鋼の爪手甲が、赤く、黒く、その色を変えていく。

カタリナは眼を見張った。どす黒く変わる爪の先端が、まるで人肉を裂いたかのごとく鮮血色に染まり、そして甲部分には人体に走る血管が露出したかのような、不気味に脈動する紋様が浮かんでき

ただ。

同時に、男の顔に再び、凝縮された狂気が滲み出す。

「――ふ、ふふ。近いね、兄貴。今会いにくよ」

オブラ・マエストラは代償を要求する。それは人間が扱える事象兵器として最低限必要な対価だ。それぞれのマエストラが様々な“人間としての、人間である故に払える代償”を求めてくる。

「馬鹿な……では、あの男は」

愕然とする。あの赤い男は正気か、もしくは情緒といったものをマエストラに奪われているのだ。一時的に戻った人間らしさがその証明。

それを自覚しているかどうかは定かではない。だが到底、手放すような様子ではなかったように思う。

力に依存した人間。赤い男はその象徴のような人間であった。それは奇しくも、力に傾倒する人間らしい人間の姿だった。

しかし、とカタリナは思う。

（そういう人を生み出してしまうのが、今の世の中……人徳法という法令によって定められた道徳が正常と異常に線引きをして定め、一度異常と認めれば徹底的に攻撃し、良くて迫害、悪ければ処刑という判断を下す。狂っているのは……果たして、どちらなのか？）

男は確かに、日陰でしか生きられない人間だろう。だからこそあの言葉には重みがある。ずっと日陰を見てきたが故の、人間の性質を一切の余分な先入観や価値観に左右されず、直視した意見。

カタリナには到底至れない意見であり、方向性や志向性の違った行動理念。

自分は知らない過ぎるのだ。世の中を、人間を、世界を。

小さく纏まった今までの世界は、とても居心地が良かった。彼女を害するものなど何もなく、暖かい日常が何もしなくても送れていた。だがそれは偽りだった。

裏切りや妬み、嫉みという悪に分類されるものも見なくては、国を導く者としてどうして君臨できよう。

そもそも善悪に人間は分類できるのか？ それは不可分ではないか。物事は常に善悪の両方を必然的に含む。極めて原始的なものの見方をしてしまえば。

(……けれど)

今の自分には何もできない、という無力感が彼女を苛む。クレアドールの言によれば、彼女は生贄のようなものにされて死ぬという。そしてこの逃げられない状況。

このままでは手遅れになる。助けを待っている時間はあるのだろうか。否、待つだけでは状況は好転しないのではないか。

助けに来た四人……心当たりだけでも、クリステイナ、ハンス、そしてディオンの三人。恐らく四人目というのが、あの赤い男の兄ではないかと予想した。

術式は使えず、しかし下手な嘘はあの女騎士が現れば一目で看破されてしまうだろう。長く傍にいた彼女には、自分の嘘など通用しない。

「どうすれば……」

彼女は腹の探り合いには長けていない。外界から切り離された楽園の如き場所に幽閉されていた為に。脱走の為に人を騙す方法も、偽る方法も思い浮かばなかった。

籠の中の鳥。母は死に、父に裏切られ、最も近い者にも裏切られ……

(でも、私は何のために生きるのだろうか……?)

彼女は、自分の生にしがみつく事にさえも疑問を感じていた。

*

*

*

密林での途上、川のせせらぎを耳に吊橋を渡りながら、彼は思った。

捕われのお姫様を助ける、というのは薄汚れた職種とされる衛士の自分には、過ぎた幻想ではないかと。

童話か何かでしか耳にした事がない出来事に、自分が関わっている。それどころか自分を中心として組まれた救助隊は、単独ながらも軍隊の一個中隊に匹敵するであろう量を持つ術士がいる。更に魔導器を持った少女、その兄、そして自分。

荒事には慣れているつもりであったが、一国の姫君を助けるとなるとどうしても肩に力が入ってしまうよな——と彼は思う。

愛用している、巨大な鉄の塊である大剣の柄を握る。

纏わり付く水蒸気——霧の中を先陣切って進むディオンは、どんどん森の奥へと向かっていく。

水辺に穴を掘る馬鹿はいない。雨天時に洪水になればあっけなく決壊するからだ。山の麓も同じ理由で、染み込んだ雨水によって地盤が脆くなる。自滅の可能性が高い場所に拠点を築くはずがないと睨んだのだ。

ならばその中間点。山と川の間が怪しいと思い、サライの木を目星にくまなく調べていく。

そして、彼はそれを発見した。

血の臭いの原因……男と女の屍骸。

「こ、これは……」

ディオンはその二人に見覚えがあった。衛士協会でも上位に君臨する、ワイズマンとガーネットだ。惨たらしく殺害されたその凄惨な様に、彼の後ろでは兄妹が憐れみを、赤い術士はこれが手がかりになると周囲に眼を凝らしていた。

「魔導器が、ない」

「何？」

呟きにアレックスが反応した。ディオンはこの二人が魔導器を操る腕の立つ衛士で、協会の派遣した人材だという説明を掻い摘んで話す。

「……奪われたか。ただでさえ不利だったのに、たまらねえな。そもそも二人でどうにか出来るつもりだったのか、こいつ等。それに協会もだ。だとしたらおめでたいね。彼我戦力差も把握せず、ただ

腕が良いからって理由で派遣し、有能な人間を殺された。無能だな、衛士協会ってのは」

アレックスの言う事は尤もである。しかしこの場合考慮されるべきは隠密行動であり、まともに正面からやりあうようであれば軍団級の戦力が必要になってくるのは明白だ。しかも暗殺者に通常戦力をぶつけるような真似は愚かである。

そしてディオンの知る限りでは、この二人は遊撃任務や迅速な奇襲戦闘を得意とする人材だった。

だが、情報が戦局を左右するというアレックスの論は間違っていない。それが解る故にディオンは口を噤むしかなかった。相手が情報屋という事もあり、十分な説得力を持っていたからだ。

視界が白いものに巻かれ始め、どうにか自分の周囲を見渡せる程度が彼らに取っての視界になりかけた時、魔導器の少女――クリスティナは再び風を起こした。

「へえ……」

風に巻かれて吹き飛んでいく霧の中から、そう声がした。

クリスティナの行動はディオンの目配せによるものだ。その証拠に一行は全員一様に腰を落とし、いつでも動ける体勢にある。

敵の待ち伏せ。鋭敏な嗅覚を持つディオオンがそれに気付いたのだ。むせるほどの血の臭いを纏う男は、蛇の眼を細めて言った。

「気付くとは思わなかったな。気配は完全に消してたつもりだったんだけど、ねえ」

「湯浴みしとくべきだったな。血なまぐさいんだよ、オマエ」

蛇はくつくつと声をひそめて囁く。

「さすがに着替えただけじゃ誤魔化せないか。それにそんな時間もなかったし、仕方ないかな」

赤い蛇はしかし、ディオオンから眼を逸らして――アレックスを見た。

「アルフ……!」

呻くように蛇を呼ぶアレックスは、苦渋に満ちた表情。対して彼に親しげな表情を返す赤い男……アルフレッド。

「久しぶりだね——兄貴。元気だった？　まだあの魔女と一緒にいるのかい？　ああそれはいけない、兄貴の為にはならないよ。あの魔女は兄貴を誑かす悪魔なんだから」

「アルフ、もうこんな事は止めろ！　その爪を捨てて、昔のお前に戻るんだ！」

「昔の、俺……？　おかしい事を言うなあ兄貴！　弱くて幼くて、無知だった頃になんて誰も戻れやしない！　どれだけ願っても、過去には戻れないんだよ！」

蛇は地を這うような低い姿勢を取る。今にも飛び掛ってきそうだ。
「さあ、やろう兄貴。あの時のように、鬼ごっここの鬼役を決めよう！」

愉悦、歓喜。そういったものを表情に滲ませるアルフレッド。

「クソ、やっぱこうなるかよ……！　おいお前ら、絶対に手え出すなよ！　コイツは俺の弟だ、俺が止めるのが筋ってもんだろ！　余計な真似したらぶち殺すからな！」

そう言っ腰の後ろに差し込んである魔導書を引き抜くと、手も触れずにそれは開かれる。余計な真似したら、というのは恐らく冗談や威嚇の類ではないという気配が、鬼気迫るその様子から伝わってきた。

「『オペレイター』か。良いね、ワクワクしてきた。今度はどんなネタを用意してきたんだい？　兄貴の本からはいつも予想出来ないものが飛び出すから……殺し合って一番楽しいよ！」

「以前のようにはいかねえぞ、アルフ……！」
ディオンは後ろに下がり、アレックスの望む通りにしようと様子見を決めた。

血の繋がった兄弟が殺し合う。尋常でない事態に眼を瞠る、兄妹二人。

赤い暗殺者とその術士が兄弟だという事を今初めて知ったからであらう——しかし止める事も手助けする事も出来ず、見守るしかない……と思われた時。

ざざざざ、という足音。大軍が攻めて来る時の、圧迫感。周囲を囲むように暗殺者達が回り込んだ。

手には短剣や槍、自動弓の類が見てとれる。

「まじいな、ハンス、俺から離れるな！ 金髪、あの時と同じだ！ 退路を——」

言い終わらないうちに返答があった。

「退いてどうするっていうのだ！ 我々はカタリナ姫を助けにきたのだぞ！ 退く道理はない！」

「この人数差が見えないのか！？ このままじゃ犬死にするだけだ！」

ディオンの考えでは、一度退いて態勢を立て直し、自分達に有利な条件を少しでも加味した上で勝率を引き上げ、再戦。押しては引いてを繰り返せば……という方法を取るべきだと思っていた。

それはある意味で正しい。大勢を指揮する際に死傷者を最小限に抑え、相手に効率的に被害を与える方法という意味では、だ。

しかし、この数である。何故幹部級の赤い男が現れ、これだけ大勢の暗殺者が現れたか……その意味に彼はまだ気付かない。

大局を見るという意味では、ハンスの一步引いた位置が最も適していた。

「ディオン！ どうして敵が大勢で現れたか考えるんだ！ それだけ必死になって守らなければならない場所……つまり、本拠地が近いという事なんだよ！」

「っ……、確証がねえだろ！ それにこのままじゃ数に潰される！」
「だからと言って、自称魔法使いを置いていくわけにも行くまい！」
クリスティナの叫びにそちらを見ると、アレックスと赤い暗殺者が刃を交えていた。

アレックスの両手には、バチバチと音を立てて四方八方にうねる、

青白い光……稲妻のようなものが握られている。

それは槍のような形を成してはいるが、あまりに暴れる雷の触手からそうと判断するには際どいものではあったが。

「ははっ！ 流石兄貴だ、今度は雷とは！ 本当に何でも出来るね、アレク！」

にいつ、という厭らしい笑みを口元に張り付かせた赤の片割れ……アレックス・ベートーベンが浮ついた声を上げた。

「鬼ごっこはもう終いだぜ、アルフ！」

「終わらせはしないさ！ 終わらせたら兄貴はあの女のところへ戻る。そうしたら俺はあの女を殺さなきゃなくなるよ！ それでいいのかい兄貴？」

「話に筋が通ってねえよ！」

稲妻の槍……否、鞭を受け止めていた爪手甲が赤く、鈍く、不気味に輝く。

「——さあ、ショウタイムだ！」

アレックスの左手側に浮遊していた魔導書の項が、ひとりでに繰られる。

アルフレッドが稲妻を振り払うのと同じ、アレックスは飛び退いて地面に右掌を付けた。

「……っ！」

食い縛った歯の間から短い吐息が漏れる。と同時に、先ほど暗殺者の足を止めた大地の棘が、異常なほどの巨大さで顕現した。大人一人分ほどの胴回りと丈を持っている。

それがアルフレッドの体を貫こうと、纏めて五本が反応も難しい速度で成長する。

「兄貴い。俺の四元素練成否定を忘れたのかい？」
フォース・デイレクト

しかし、棘は届かない。男の体を貫く目前で停止し、じりじりと分解されていく。

「チッ、相変わらずかよ！」

そううまくはいかないか——アレックスの思いを裏切るように、

弟アルフレッドは術式を無効化する特殊な力を、右手のオブラ・マエストラより与えられていた。

ディオンは囲まれた態勢のまま、四方八方から襲い来る様々な攻撃を捌きつつ、一人ずつ確実に仕留めていく。左手側から来る敵にナイフで応戦し、足を引っ掛けて体勢を崩す。右手側から迫る暗殺者に向けて、体勢を崩した敵をぶつける。一瞬もつれあって倒れそうになる目前敵から一歩退き、右手の剣を引き抜いて力の限り振り抜く。ぶつりと断裂する人体二つ。正面、草木のようにひしめき合う暗殺者の間を貫いて飛翔する、自動弓の矢。

それを視認してから回避など、人間には不可能。ともすれば頭蓋骨を貫通するほどの威力を持つとされる自動弓の一撃が、ディオンの額に突き刺さった。

「あ、がつ……！」

ショックが全身を駆け巡る。勝利を確信した暗殺者の醜惡な笑みが視界の端に映る。

「ディオーン！」

クリスティナの声。ディオンの思考はショックから引き戻される。
(リグレット……)

彼の頭部に巻かれた赤いバンダナ。彼女が与えてくれたもの。

頭という急所を隠す為の防具。リグレットは念入りに、バンダナに鉄板を仕込んでいた事を思い出す。事実、まだ自分の体は動く。死んでいない。普通なら致命傷なのに、何とも無い。ならばまだ戦うべきだ。仲間の為に。

バネ仕掛けの人形のように、仰け反った体勢から一気に低姿勢へ移行、敵陣へと潜り込む。呆氣に取られた敵の群れの中で、獐犢な笑みがその顔に覗く。

「おおお——！」

気合一閃、一刀両断。横薙ぎの一撃はいつかの旋風つむじかぜの如く、敵の体を引き千切り内蔵を木の葉のように巻き上げて暴力的に振る舞う。

それはもう旋風ではなかった。彼の戦いを形容するに最も相応しい言葉は荒れ狂う風の化身、『竜巻』であろう。

体に突き刺さる矢を無視して剣を振るディオンの姿に、普段の飄々とした様子は微塵も見えない。時に敵の体を盾代わりに矢を防ぎ――慣れてきたのか、受ける被害が眼に見えて減ってきた――自分に向かって突き出された槍を脇に挟んで軸にし、敵を振り回して薙ぎ倒し、群れる短剣使いを足払いで崩しナイフで仕留めていく。

ディオオンが衛士協会第十五位という事を知る人間がいれば、驚愕した事だろう。

彼の戦闘能力は、こと接近戦においてならばこのユーフォリア大陸広しと言えども五指に入る程の力量である。

状況を読み、相手の行動を読む、心。細かな技術で相手を崩し、状況を有利に運ぶ、技。そしてそれを支える鋼のように鍛えられた、体。

ディオオン自身の『生き延びる才能』もそれに加わり……状況は刻一刻と傾いていた。

風が巻き起こり、地面を撫でるように駆ける。舞い上げられた土埃が暗殺者の黒衣から露出した双眸へと襲い掛かり、その視界を奪う。

この純白の女騎士としては小ずるい手に自分自身納得していないようだが……今の彼女には背後に実の兄もいる上、多勢に無勢である。手段を選んで四の五の言っている場合ではないという判断だろう。

ディオオンが兄の防衛を捨てて敵陣に突っ込んでいった為、彼女一人で負傷した兄を守らなければならない。

しかし、その彼女に変化があった。

（ヴィルベルヴィントが、また勝手に……！）

動いているのだ、旋風が。再び、自分の意志を持つかの如く。

それは飛翔してくる矢を舞い上げ、敵が近寄れない程の豪嵐の壁

を造り上げる。

「ぬ、うう、どうしてなんだ、何故剣が勝手に……！」

苦しげに呻くクリスティナの右腕に――蒼く輝く、複雑な幾何学紋様が浮かぶ。

「何だ、これは！」

それは接続子。アルカナへと至る道程。

「と、止まれ、止まってくれヴィルベルヴィント――！」

彼女の叫びも虚しく。

彼女の剣は、彼女の心の奥底に眠るアルカナ――『正義』と繋がった。

ディオンを『竜巻』^{トルネード}とするならば、こちらは『大嵐』^{ストーム}。

巻き起こされた強風が渦を巻き、彼女達を取り囲む暗殺者の群れを吹き飛ばしていった。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (5) (後書き)

次の更新は3月2日になります。
よろしくお願いします。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (6) (前書き)

予定では第一部もう終わってるはずなんですが……かなり伸びてしまっています。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (6)

強い風に横合いから殴り付けられ、ディオンは倒れ込むように身を伏せた。林立する樹木にそれが遮られると、幾らかは暴風の威を抑えられた。まだ抜かれずに刺さっている矢の痛みで思わず表情が歪む。堪えて引き抜いた。

「こりゃ、確かにアレックスの言う通り、通常 of 魔導器の位階とはかけ離れてやがるな」

ディオンの脳裏に、粉々に碎ける宝玉の映像が浮かんた。設定された位階を超えて能力が行使される現象には、主に事象誘導式演算機関の故障が多く、事象変移を担う宝玉の無理な酷使や寿命がその原因とされる。当然、使い物にならなくなる。

彼は声を荒げた。

「金髪！ 魔導器から手を離せ、壊れるぞ！」

視界の先、木々の隙間から覗く金髪の少女はしかし聞こえていないのか、木の葉が舞う風渦の中心で剣を握る手元をじっと見つめている。ディオンのからはその表情が伺えない位置だ。

クリスティナを注視している彼に対して隙あり、と木の陰から飛び出し短剣を突き出してくる暗殺者の腕を取り、足を掛けて手前に引き倒すとその喉元を一息に掻き切る。噴き出す熱い血の飛沫がびしゃり、と顔の左半分を濡らす。熱い。

「……何やってんだあいつは！」

ぐい、と腕で目元を拭う。血の臭いが鼻につく。呆然と突っ立っている白騎士に今すぐ駆け寄りたいところではあったが、敵に囲まれていてそれは難しい。幸いにも彼女の周囲に群れていた敵は風に吹き飛ばされ、中には地面に背を強かに打ちつけたのか、気絶している者も数名見受けられた。

粘っこく絡みつく空気に不快感を感じ、唾を飲み込んだ。周囲に乱立する樹木には敵が潜み、およそ逃げ場はない四面楚歌。自動弓

を扱う暗殺者を優先的に殺さなければ味方が危険に晒される。ハンスが白騎士の名を呼ぶ声が耳に届く。ここは自分がすっかりしなれば、と齒を食い縛る。

頭上を覆う緑葉の中から、張った弦が何かを弾き出す、歪んだ音。「くあ……！」

ディオンが動こうとしていた為、それは彼の頭を避けて右肩へと突き立った。鉄の鏃が肉に食い込む。痛みに齒を食い縛って耐え、つい先ほど倒した暗殺者の短剣を拾いあげると同時に広葉樹の頭へと投擲する。

鈍く濡れた音がしたかと思うとがさがさ、と木の葉どうしが擦れあい、中から地面に落下してくる暗殺者がいた。矢が現れた方向に投げたので、短剣は暗殺者の腹部と胸の間……鳩尾へと命中していた。地面に手足を投げ出した敵を見て即死だと判断、ろくに確認もせず次の敵を探す。彼を囲む暗殺者の群れは、徐々にその数を減らしていた。

長い爪手甲を基点として固定化された、眼に見えない爪が空気に五条の切創を描く。弧を描く形に、景色が歪んで見えた。相対している男は地面を転がり、それを避けた。

すぐさま起き上がり、左手に持っていた一冊の本を広げる。ひとりでに項が繰られ、目的の場所で止まる。目前に紋章が描かれると同時に、右掌に炎が宿った。

赤い炎が猛く燃え上がる。赤いコート、赤い髪がそれに照らされる。あたかも篝火である。

向かい合う双子は当初、完全に互角だった。片方が押せば片方が引き、起死回生の可能性を持つ一撃で立場を逆転させる。互いに当たりはしない。だが掠める程度のそれは心の平静を刈り取るには十分だった。その駆け引きは互いの『引き出し』の数が先に尽きた方が手の内を全て晒してしまう為、致命的な不利となる。

アルフレッドが咆える。地面を抉る、爪が振り上げられる。兄が

右腕を一振りすると、格子状に編まれた炎がそれを遮る。漏れ落ちた炎の欠片が草木に移る、焼け付く臭い。

『引き出し』の数は一見、爪の男……アルフレッドの方が暗殺者という立場である為に多いように思えるが、兄であるアレックスは魔導書——オペレイターという——に記された全ての術式を使える性質を持ち、数の上では有利であった。

しかし四元素練成否定という術式障壁のようなものを持つアルフレッドにはほぼ全ての術式が通用しない。拮抗するのが精一杯なのである。

さらにアルフレッドには、オブラ・マエストラの力——爪の射程を延長する不可視の力があった。距離の遠い近いは意味を失う。

「オー・ソレ・ミオ（私の太陽）！」

兄の掌で燃える炎が、塊として投げつけられた。振り被ったそれは球技か何かに見えた。弟が振り払おうと、塊に右手を叩き付けた。兄がほくそ笑んだ。

弾けた。炎の塊が目前でぶわりと広がり、弟を包み込む。だがそれは弟に何らかの影響ももたらさない。炎が幕となって視界を遮る以外には。

「ハハッ！ まさかこんな使い方があるなんて！ 凄いよ兄貴、流^さ石^{すが}は『エルザスの魔法使い』！」

炎が拡散し、眼の前がクリアになる。そこに兄はいなかった。弟は周囲に眼を凝らした。

突然、脇腹に訪れる激痛、衝撃。勢いに押されて倒れる。何だ、と見上げれば、足を振り抜いた体勢の兄が居た。蹴られたのだ、と理解した頃には、遅かった。

「魔導術式三番譜、演奏曲目、ハイコート・オサバースームズ『大地咆哮』アース・サラウンド」

男の薄い唇から囁かれた声は、術式詠唱だ。基本的に詠唱を省くこの魔法使いがそれを行う時は、速度よりも精確性を求めている証だ。現にアルフレッドを襲う無数の棘は、地面の土が隆起して作られたものながらも、うねり、歪み、大きく伸びた。

それは蛇だった。土塊で造られた、巨大な顎と胴体を持つ蛇。尾を地面に繋がれながらのた打ち回る蛇に、鱗や眼は存在しない。土塊の継ぎ目が鱗のように見えなくもない。長さは巨木ほどもあり、胴回りは直径が大人ほどもあった。アレックスは眼鏡の位置を直す。「チェックメイトだな、アルフ。鬼ごっこは終わりだ」

同時、どしん、と胴を地面に叩き付けた蛇が這い寄り、牙が並ぶ顎を大きく開けた。赤い暗殺者の手甲目掛けて食らい付く。

命までは奪わない行動。アレックスの内面にある、アルフレッドへの思いやりだった。

しかし命のやり取りにそれは不必要だ。殺さなければ殺される場において思いやりや優しさは余計な荷物でしかない。無論アルフレッドにそれはなく、だからこそ暗殺者になれたのだから。

魔法使いは、甘かった。それが彼を裏切った。

アルフレッドの右腕に食らい付いた蛇は、そのままぴたりと停止する。ずるずると後退した。アレックスは、眼を疑った。

「なっ、何だそりゃ……!?!」

「何だ、これは!?!」

アルフレッドでさえ驚愕の表情を浮かべる。右腕の手甲は透けていた。青く、後ろの風景がぼんやり見えるぐらいには。

曖昧に輪郭だけを持たせた、半透明なものだ。時折、揺らいでいる。

『ウフフフ……』

子供の笑い声。幼い女兒に思えた。森の中に木霊する。姿は見えない。

ファンタズマ

『蒼い影が見ているよ。あなたの後ろで見えているよ』

やがてアルフレッドの体全体が、蒼い影に変貌した。どうしたらいいのか解らず、呆然とする。弟であろう蒼い影は、口元らしきものを歪めて……ふっと消えた。

「誰だ、どこにいる!」

それきり、声は聞こえなくなった。舌打ちをし、周囲を見ると、

仲間達とは大分離れた、開けた場所にいた。向こうからは剣戟の音や打撃音が聞こえてくる。

アレックスは走った。流石に仲間を切り捨てるのは、まだ早いと思ったのだ。

＊ ＊ ＊

ずしん、と重たい音がして揺れた。カタリナ・シャントルイユは考えに耽っていたところを引き戻された。ぱらぱらと上から土の欠片が落ちてきた。地震にしては嫌に短い。何か重いものを地面に落としたのかと考えたが、どうも確証が持てなかった。

そうしていると、こつ、こつという靴音が聞こえてきた。鉄格子の向こうに姿を現したのは、クレアドールだった。

その姿は黒い服に変わっていた。肩回りから肘までを覆う短い外套の下に長袖が覗き、下には黒い長足服。実戦用の装束だ。靴は鋏が打たれてしっかりした造りのもの。クレアドールは銀色の髪を邪魔にならないよう、後ろで結い上げていた。

「お前を移動させる。妙な事は考えるなよ」

そう言うのと鉄格子の錠を開けた。鍵は懷に仕舞われる。それを眼で追い、確認した。

「出る」

言われるままに通路へと這い出し、立ち上がる。進め、という言葉葉に前を歩かされた。

「――アルフレッド・ベートーベンが何を言ったか知らないが」

背に声が掛けられる。

「余計な望みは持たない事だ。お前は『代行者』としてその義務を真っ当する。それだけ果たせばいい」

「代行者……？」

聞き慣れない言葉に、思わず振り向いた。クレアドールは頷く。「儀式には十人の代行者が必要とされるが、一度に一人の代行者を

捧げなければならない。一人ずつ、丁寧に、消化していくつもりなのだ」

クレアドールは、そこでつまらなそうに溜息を吐いた。

「狂人のやる事だ、私には理解出来ない。だが、目的の為には止むを得ない」

「あなたの目的って、何なの？」

「ふむ。それを話すには最初に言っておかなければならない事がある。縛鎖というものだ」

ギアス、というその響きにカタリナは聞き覚えがあった。女騎士は続ける。

「ペルフェクティオという男は儀式によってこれを外し、『クローズド・レコード』という因果の環を断ち切る……と言っている。その為に十個のセフィラに該当する、十人の代行者をその生贄に変える。私にはどうにも壊れた人間の妄言としか思えないな」

因果の環が何であるのか解らず、首を傾げる。

「縛鎖を解かなければ未来は変わらない。幾万度もの繰り返しから外れた時、『外なる物語』はようやく始まる……との事らしいがね。要は、今のままでは何をやっても未来は決められたもののまま変わらず、持ってしまった性質のまま生きていかなければならないという事だな」

「縛鎖って、一体？」

「言ってしまうえば封印だ。事象の根源であるアルカナへの路を封じる、扉だとも思えばいい。それを解かれた人間は到達者と呼ばれる。そして代行者を到達者とさせるのが儀式であり、それが完遂された時『神の戦車』メルカバが起動する。それによってクローズド・レコードを破壊するという仕組みだな」

「神の戦車？」

聞いてばかりのカタリナに、何故か全てを教えてくれるクレアドール。それはこれから儀式によって命を落とす自分を憐れんだのか、それとも別の何かか、カタリナには推し量れなかった。

「星の船、とも言われるな。人間が何故、一万二千年前に突然生まれたのか……その謎を解く鍵であるというが、私には解らない。どうでもいいというのが本音だな」

クレアドールの言葉に、どこか途方もない何かが含まれている気がしたカタリナは口を噤んだ。

それを見て、女騎士は告げた。

「私の目的はな、カタリナ。死ねる体になる事だ」

はっと顔を上げる。女騎士の顔は諦めの形を取っていた。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (6) (後書き)

次の更新は三月九日になります。よろしくお願いします。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (7) (前書き)

戦闘後、敵本拠地へと向かう四人。

アレックス・ベートーベンの加勢により、戦況は一応の決着を見た。周囲に散らかる内蔵や死骸、血痕を横目に、ディオンはハンス・アシュクロフトとその妹に歩み寄った。額の鉄板に刺さっている矢を引き抜く。幸いにも貫通はしていなかった。血が一筋、流れた。風は止んでいる。これだけの人数差で誰一人として欠けなかった事に奇妙な違和感を感じた。

「おい、金髪。一体どうしたんだ」

その言葉に、クリスティナは蒼白な顔を向けた。

「……ディオン・アウフシュナイター。私より魔導の知識が深いお前なら、解るだろうか。魔導器は、生きているのか？」

「な、何だって？ 魔導器が？ いや、そんな話は聞いた事がないが」

横合いからアレックスが割り込んだ。

「事象誘導式演算機関は、中枢基幹部に人間の脳神経回路を模した回線を、幾何学模様の形をとって格納されている……って話を聞いた事がある。しかし実際に人間の脳を使う訳でなし、そういった事例も確認されてない。あくまで人工の、」

「では、ならば何故、私の剣はひとりでに動いたのだ？ 一度ならば何かの間違いだとも思えよう。しかし二度はもはや偶然ではない必然だ。まるで使うごとに変化しているようにも思える。ヴィルベルヴィントは、私を見限ったのか？」

クリスティナは剣を握る手元に視線を落とした。落ち込んだ表情を浮かべている。

ディオンは思う。魔導器が故障か何かを原因に自動的に動くのならまだしも、適合者を自ら拒否するなど有り得ない、と。所詮道具であり、自動的、いやさ自意識など持つはずがないと。

「——なあ、とりあえず移動しねえか？ こう血なまぐさいところ

で話し合いもねえだろ」

アレックスの言葉に、一行は一も二もなく頷いた。

片足を引きずるハンスに肩を貸しながら、ディオンは考え続ける。
(何故、敵はハンスを狙わなかった?)

もしかしたら狙ったのかも知れない。自分がそれを見ていなかっただけかも知れない。だが戦場において弱った敵から真っ先に仕留めるのは戦いの鉄則だ。数を減らして戦局を有利に運ぶ。暗殺者がそれを知らないはずはない。納得がいかない。

そもそも、暗殺者が敵の前に姿を現して戦う、という行為が大前提としておかしいのではないか。そういった考えに意識が取られるであれば、これは罠ではないかと勘繰るのは、当然と言えた。

「ん？ あれは……」

先を歩くアレックスが何かを見つけ、走り寄る。地面が抉れ、そこに洞窟が掘られていた。霧が再び、周囲を包み始めている。

「おい、これみよがしにそれっぽいがあるんだが」

周囲にはサライの木が、正五角形に並んでいる。敵はいない。奇妙さを覚えた。

(あまりにもうまく行き過ぎている。罠の可能性が高い)

だが、行かなければカタリナ姫は助けられないと思う。国家首脳の裏で秘密裏に国家間和平を唱える平和主義者達の頭がいなくなれば、国が乱れるどころの話でなく、国同士の戦争が起きるという予測は、あながち間違っていないだろう。

「入るか？」

彼女は楔なのだ。そしてここまで首を突っ込んだ以上、自分は投げ出す事は出来ない。それに、あのお姫様には言ってやりたい事もあった。

「罠の可能性がある。アレックス、障壁を張って進めるか？」

「――ああ、問題ない。罠、ね。まあ、そうだろうな」

アレックスは納得がいったようだった。

「金髪。魔導器に不信感を抱くとか、色々思うところはあるだろうが、今はお前を後ろに下げる事も、戦いから外してやる事も出来ない」

ディオンは続けた。

「ハンス、お前を守ってやる余裕もあるかどうか。俺は正直、全滅してもおかしくないこの状況で、ここまで進めた事すら奇蹟に近いと思っている」

その言葉に、皆一様に耳を傾けていた。

「通常、洞窟内で挟み撃ちにされた場合、勝敗は九割がた決していると言っている。だがアレックスの術式ならばその状況を強引に押し返す事も可能だろう。こいつには最後尾についてもらって、奇襲に備える。先頭は俺、次に金髪、そしてハンスの順だ。ここまでで異論は？」

「洞窟の中は誰も知らねえんだろ。お前が先頭で迷わない保証は？」アレックスの質問に、ディオンは眉を寄せた。

「当然の質問だな。迷わない方がおかしいくらいだ。だが俺には盾がある。爆弾の爆発や上級の術式も弾き返せる。反応が間に合えば、だけどな」

「なるほど。まあいい、最も危険な役回りを自分から努めるってのは評価できる。それに筋も通っている。お前に任せる」

そう言って頭を掻く。この赤い男が他人を認めるのを、ディオンは初めて見た気がした。

「次に脱出経路だが。仮に救出が成功して、カタリナ姫を連れてテルマビスタまで逃げ延びるのは絶望的と思う。そこで、さっき川があったよな、あれの下流にはサバステイオンとの国境付近に位置するリフル村がある。いざって時は川に飛び込め、そうすれば敵も振り切れるだろう」

「計算高いね、ディオーン」

ハンスが苦笑した。

「まだ死にたくはないからな。それと、目的はカタリナ姫の救出を

最優先する。変な欲を出してアサシン組織を壊滅させてやろうとか、考えないでくれよ。あとはそうだな、今までの暗殺者は雑兵だと思っただ方がいい。そもそも、暗殺者が姿を現してから攻撃してくる、なんてのがおかしいんだからな」

「暗に殺す者、ってか。確かに考えてみれば、そうだな。だから奇蹟と言ったのか」

赤い男の言葉に頷き、ディオンは洞窟の入り口に手を掛けた。

「行くぞ。俺が指揮官で問題ないな？ 俺に何かあった場合はアレックス、お前がこの二人を逃がしてやってくれ」

アレックスは意外そうに眼鏡を押し上げた。

「お前、俺の言った事忘れたのか。自分が危険だと思ったら、俺は真っ先に逃げるぜ？」

「つまり、危機察知能力には自信がある訳だろう？ 死んでからじゃ遅いからな。いいな二人共。こいつが逃げたら、その後を着いていけ。きっと生き延びられる」

「あ、てめ、俺を利用する気か！」

「お前、俺の言った事を忘れたのか？」

ふん、とやり返した笑みを残して前に向き直る。

「お前は俺を利用する。俺はお前を利用する。何もおかしいところはないだろ」

アレックスはしてやられたとばかりに呆れ、騎士二人を促した。

「全く、軍隊にでもいたのか？ やけに戦闘面に頭が回るじゃねえか」

「生き延びるのには知識が必要だからな。欲を言うなら、そうだな、腹ごしらえするものを持ってきてなかったのが悔やまれる」

そう言って、ディオンは腹を押さえた。

「思い出したら、腹が減ったな。協会に飯盒用具一式の貸し出し頼んどくんだった。干し肉でも良かったか」

ハンスがそれに苦笑した。

「無事に帰ったら、美味しい料理を振舞わせてもらおうよ。好きな食

べ物があれば、聞いておきたいんだけど」

「ありがたいね。まあ、それは帰ってからな。敵の本拠地の前で食
い物の話ってのも落ち着かない。じゃあ行くぞ」

ディオオンが洞窟の中を覗き見ると、奥に松明たいまつの光が見えた。人の
姿はなく、奥は曲がっていて先が解らなかった。

「直進する」

意外な事に、敵と遭遇するような事はなかった。それでもディオ
ン達は警戒しながら前進していく。松脂の焼ける臭いが鼻についた。
洞窟内は、松明の熱もあって、寒いという程ではなかったが、湿気
が入り込んできていてじめじめしていた。

「敵がいねえな……おかしい」

「後ろにもそういう気配は感じられない。暗殺者って、ここまで気
配を消せるもんなのか？」

そんなはずがない、とディオオンは思った。もし既にこちらの動き
がばれているのなら、いつ襲われてもおかしくないのだ。もう既に
深部まで来ている。現に松明に火が点っていた事から、使われてい
ないという事はあるまい……そこで、ディオオン達は、開けた明るい
場所に出た。

休憩所のように、卓台や椅子が中央周りに何脚もある。隅に
は酒瓶の並ぶ棚があった。卓台の合間、合間に火の点ったロウソク
の燭台しよくだいがあった。

そしてそれに横顔を照らされ、グラスを傾ける……女。

「クレアドール騎士団長!？」

「レーゲンハイト騎士団長!」

「パラディン聖騎士か!？」

三者三様に驚き、彼女を呼ぶ。銀色の髪と眼が、一行を捉えた。
立ち上がる。その姿は黒い服に包まれ、長い銀髪を後ろで一つに束
ねていた。暗殺者と、同じような出で立ち。ディオオンは決定的な違
和感を覚えた。

何故今まで姿を現さなかったのか。どこかで立ち往生しているだろうと考えてはいても、優先度は低かった。つまりはそう思わせるように仕向けたのではないか。自分の立ち位置をあえて低く見積もらせる事で（王女誘拐の影に隠して）ことを運んだのでは、ないか。「人払いは済ませてある。死なれても困るのぞな」

張りのある声が反響する。その言葉が含むものは、既に一行の身を案じるような、再会を喜ぶような、それではない。

「縦横二十リール、高さ二、五リール。これだけあれば、立ち会うのに不満はあるまい？」

女騎士が、左腰から銀の剣を抜く。背筋が凍えた。

「な、何故ですか団長！ 貴女が、カタリナ姫の直衛騎士である貴女がどうして、こんな事を！？」

「私はお前達の敵だ。寝返った訳でも裏切った訳でもないが……まあ、好きに解釈すればいい。さあ、どこからでもかかって来い。四人程度で私を斬り伏せる事は出来んがな」

左手には小柄な盾を、下腕部に添えて装着されている。革の握りを左掌が掴む形だ。

最初に戦闘態勢を整えたのは、ディオオンだった。この四人の中では彼が最も近接、白兵戦闘に優れている。また、潜り抜けてきた場数も十や二十ではない。闘いの臭いに敏感なのだった。

「――仮にも聖騎士だ。手段なぞ選んでる暇はねえぞ。ハンスは下がってろ、全員散開、三方より押し包め！」

言った後、大剣を抜き放って横薙ぎに斬りかかった。聖騎士がそれを盾で受け止める。

「応！^{オウ}」

「ぬ……っ！」

圧倒的な質量と重量、そして剣圧をもろに受ける。それは既に自殺行為に近かった。近かったが、頑強な盾はそれをよく受け止めた。その勢いに地面から体を浮かせてしまった騎士は、ディオオンから見て左に飛ばされる。そこに待っていたのは、クリスティナだ。

「くっ！」

苦しい表情（情や尊敬する人へのそれ）をしながらも、聖騎士へと剣を向け、突き出す。苦渋の剣先は迷いばかりが現れている。殺そうという意志が見えない。

聖騎士は地に足を付けて一転、蒼い剣先を鼻先に捉える。唱える。

「――ソリッド・アクセラレーター」

クリスティナの目前、剣先を突きつけた聖騎士が、突然目の前から消えた。その動きの予測もつかず、後姿も追えない程の速度で、クリスティナの死角へと飛び込んだのだ。超瞬発、とでもいうような、突発的加速。

クリスティナの剣が横合いから弾かれ、取り落とす。胸鎧に強打が入る。銀色の美しい彫刻がなされたそれは、粉々に砕けた。金髪の女騎士は意識を刈り取られ、地面に投げ出されて転がった。電光石火の一撃。疾風という形容が相応しいだろう。

次にそれが向けられたのは、ディオンド。しかし動体視力に優れた彼にはどうにか聖騎士の姿がかすんで見えた。左手の手甲で、予測した剣筋を防ぐ。首筋への一筋。

「うおっとお！ そいつがあんたの隠し玉かい、聖騎士殿？」

目の前には銀色の髪と、双眸。

「動くなよ！」

アレックスの声だった。視界の端では赤い男があの本を開いている。術式が働く。

「無駄だよ、術士。私に術式は通用しない。多重積層障壁シャンデリアが現存する、あらゆる不可思議を私から遠ざけるのだ」

「……コイツも障壁持ちかよ！」

ディオンの前から聖騎士が姿を消す。現れたのは、アレックスの前だ。

「化け物、か……！」

「そうだ」

無感情に、平坦に、そう言って。聖騎士は魔法使いの腹を『蹴っ

た』

「ぐふっ、」

超瞬発力で動く聖騎士の、蹴打だ。地面に叩きつけられ、壁にぶつかり、アレックスの体は止まる。

「団長！ 何故、このような事を！」

ハンスの声にクレアドール・レーゲンハイトは少しだけ戸惑い、しかしそれを足蹴にした。

無造作なそれは彼の顎を蹴り上げ、脳震盪のうしんどうを起こしてハンスは倒れる。

「てめえ！ 姫さんはどうした！」

怒涛の攻めに空いた隙に、ディオンは問うた。

「――これで、邪魔者はいないな」

聖騎士は、周りを注意深く見渡し、ディオンの他に誰もいない事を、確認した。

「良いか、ディオンの・アウトシュナイター。『姫様』を助けるには、お前達だけでは無理だ」

「何！？ お前、裏切ったんじゃ……」

「最後まで聞け、時間もない。私はお前達を戦えない状態にして、とある場所へと移す。そこに姫様もいる。そこで、一騒動を起こす。混乱に乗じて姫様を救出し、脱出しろ」

「ど、どうして、そんな事を……」

「敵は強大だ。下手な小細工では誤魔化せん。以前、お前の情報を衛士協会で調べた時、こいつならばと思った。私はお前に賭ける。お前にしか、出来ない」

「つまり、これは全て、演技だ？」

そこで、聖騎士は、諦めたような表情をした。そして、右の掌を、懐かしげな眼差しで見る。

「――そうだ。敵を欺き、味方を欺き、己すらも欺く。全ては我が主君の為に。あの方が……あの小さかった子供の手が、幸せな未来を手にする為に。その為に私は出来る事をする」

「なら何故、敵の陣中から逃がしてやらなかったんだ？」

「逃がせば追ってくる。故に姫様には必要なものがあつた。そしてそれを、敵に奪わせ、儀式を行わせる必要が、あつたのだ」

「何……？」

「『タブラ・スマラグデイナー』だ。遍く事象を『都合の良いように書き換える』アーネンエルベ。それを、姫様の代替部品として使わせる。それが私の、本当の目的」

ディオンは、眼を見開いた。

「姫さんの、代わりになるのか。アーネンエルベが」

「『替えが利く』のは一回限りだ。恐らくこれで、アルテリアの国宝であるアレは失われる。だが知った事ではない。私にはそんなものの、関係がない」

ディオンの頭の中で、答えが導き出された

「そうすれば、敵は姫さんを、諦める」

「そうだ。ディオンの・アフシュナイター。その為にも、今しばらくは私の企みに――付き合ってもらおうぞ！」

言うが早いか、聖騎士はディオンのどてっ腹に強烈な拳打が打ち込まれた。

「ぐあ、はっ！」

意識が、断線する。

理不尽に断ち切られる意識は、抗おうとするも、それは適わず、膝を折って地に伏した。

ディオンは、痛みと歪む視界の中で、どうしてか――微かな安堵を、覚えた。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (7) (後書き)

次の更新は3月16日になります。よろしく願います。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (8)

目が覚めると、顔の横に冷たい感触があった。平たいものが当たっている。

それが床だと気付くと、次に自分は寝転がっている体勢なのだと解った。横になっている体勢だ。

「う……」

身動きしようとするのと殴りつけられた腹部が痛みを訴え、思わず苦悶の声が漏れた。

周囲は暗い。夜にしても深すぎる暗さだった。床と空気の境目すら、曖昧だ。

「気が付いたかね? 『レイヴン』」

男の声声がした。背後を見ると、男とも女とも見えないが、整った美貌の人物がいた。身を軍服に包んでいる。背丈はディオンのより高い。

自分の事を聞き慣れない言葉で呼んだ男に、ディオンは寝転がったまま聞いた。

「どちらさんだい? たぶん人違いだぜ、俺はレイヴンって人間じゃない」

「フフツ、良いな。ふざけた男だ……」

人物は楽しげに微笑んだ。ディオンは己の体を確認する。両手を後ろで縛られ、両足も同じように縄で縛られている。腰の大剣も、ナイフもない。

——床が淡く光っているのに、気が付いた。何かの紋様のようにも見える。

「ところで、カタリナ姫はどこにいるか、教えちゃくれないかね?」

「ああ、彼女にはこれから儀式の人柱として働いてもらわねばならないのでな。召し物を用意させてもらったのだよ」

今はそれをお召しになっている最中、という事らしい。

「聖騎士を仲間に取り込んだのか、元からこっちの人間だったのかは、もうどうだっていい。だが王城陥落からアシュクロフト家への逃亡、そしてリフルへの道程は、全て計算ずくで王女誘拐を企てたのか？」」

ディオンの質問に、男は微笑みながら答えた。

「少し違う。彼女が私の思惑通りに動いたのでも、私が彼女の思惑通りに動いたのでもない。そうなるように、そうであるから、そう動いたに過ぎないのだ。解るかな、レイヴン」

「ぜんぜん、これっぽっちもわからねえな！」

「ふむ、では少し教授しよう。君達に命の危険が無いとは言え、解らないものが解らないまま目の前で繰り広げられる事ほど、つまらない事はない」

「その前に名乗れよ。お前が親玉だろう、プロヴィデンス教団の！」
言葉強く告げると、男は密やかに眼を細めた。自分の反応が興味深く、それを観察しているようにディオンのには思えた。美しいが、腹に一物抱えている人間の行動だ。

「一目で看破されるとは、思っても見ない。君は洞察力が優れているようだ。それに勘も良い。『シルマール』殿が目をかける訳である」

「シル、マール……？」

男は、くつくつと微笑んだ。眼が暗闇に慣れてきたせいか、視界の端にクリスティナやアレックス、ハンスも自分と同じような状態で転がっているのが見えた。しかし、彼らの安否よりもその名前が興味を、根強く、惹いた。

「誰だ、そいつは。俺を知っている奴か？」

「君は質問が多いな、レイヴン。私としても教えてやりたいところではあるのだが、どれから教えたものか考えなくてはならない。故に制限する。質問は一つだ」

ディオンは考えた。この男が教団の頭、名前はアレックスの言っていた、ペルフェクティオというので間違いはないだろうと。例え

違っていたとしても然して問題はない。

問題なのは、カタリナ姫がこれからどうなるのかという事。儀式とは何を行うのかという事。自分本意で言えばシルマールという人物が気になるが、指揮官としての役割を持つ今の自分にそれは不必要。切って捨てる。手段を問わず目的を達成するのが職人である。

「――カタリナ姫は、儀式によってどうなる？」

男は口元を吊り上げた。

「彼女に齎されるものは死である。苦痛はなく、体を傷付けるような事もない。美しいまま、安楽に死んで逝く。何故なら彼女の体そのものが、一つの回路であるからだ」

質問が一つ、という制限があり、これ以上の応答は期待出来ない。ならば自分で答えを導き出すしかない。今まで得た情報を元に、考える。

回路とは、先ほどアレックスが言っていた言葉だ。魔導器の機関部に使われている演算機関の中枢は、人間の脳神経回路を模した作りになっていると。しかし事例はなく、ただ人の手によってそれが最も効率が良く情報を処理出来る形態であるからとされているらしい。

儀式には、関係がない。次にディオンは周囲を見た。幾筋もの、橙色をした光の筋が床に走っている。それらは時折、丸い円環状を形作っては、更に向こう側に伸びている。全体像はここからでは見えない。

「これは……？」

「うむ。オリジナルを元に複製した、転生術式である。見たまえ、この完成された基盤を。全て計算された配置の上にセフィラを置き、レコードを配置し、アルカナを接続子にする事で機能するようになっている。元はセフィロトのようだが、その意味するものは違う。果たしてレイヴン、君はこれが何を意味するのか、解るだろうか」

急に饒舌になった男は、もしかしたらこれを自慢したかっただけなのかも知れない。ディオンはそう判断し、言葉の意味を吟味した。

オリジナルの模倣、転生術式。死者を甦らせるという禁断術式の一つだ。昨今の術式理論では人体の治癒や蘇生は禁止されており、また激しく人徳法の倫理に触れるとして研究されていない。

ならばこれは挑戦だ。異端審問会、引いては人間の秘密、命の神秘への。

「な、何を企んでいるんだ、お前達は？　こんなの、人間が制御できる訳がねえ！」

「術式を統合する制御基盤は常に安定している。これもまた、そうであるから、そうであるように、そうになっているのだ。そも、全ての術式は一つであるのだから、乱れるという事はないのである」

「何を、言ってるんだお前？」

男の言葉は、ディオンの胸中に不安を呼んだ。見透かした視線が、見下すように送られる。

「『賢者の石』というのを、聞いた事があるかな？」

「ニコラ・フラメルの……？」

「うむ。ああ、これは先ほどの質問の制限に抵触するかな？　まあ私からの問いであるし、気にする事はない、まだ時間はある、私も話し相手が欲しかったところだからな。あちらのお仲間は、まだお目覚めにならないようだし……ふむ。賑やかにしたかったのだが、こども静かでは興も冷めてしまうな」

「賢者の石が、全ての術式を制御しているのか？」

「それは違う。アレは抑止力なのだよ」

頭を捻る。言葉の意味が、解らなかった。

「術式というのは、その人間が通じるアルカナによって生まれ、制御される。そうして世界の事象を歪め、他者を傷つけたり建物の工事をしたり、果ては調理に使われたりする。では術式が世界を造りかえられるかと言うと、そうではないだろう？　賢者の石はなレイン、ある一定以上の事象変移を行えないよう、それらを調整しているのだ。世界中を流れる『アストラル・ライン』が、それを監視し、制御している。俗称で言うのなら、地脈というものだな」

定められた霊子摂取量を超えた規模の術式は、行使出来ない。それが全ての術式に定められた『ルール』であると、男は言う。

「故にこれは挑戦である。死者の蘇生による、不死の軍団。私は三國統一の後、この惑星から『魔獣』を駆逐する為に、戦争を起こす」その言葉には重みがあった。しかし同時に、罪惡の重さもあった。人としてやってはいけない事の線引きを踏み外してでも、魔獣を根絶したいという思いがそれを見えなくさせているのだろう。

ディオオンからすれば、家族と故郷をミドリメに焼かれた彼には、その気持ちの一边は理解出来た。だがそれでも、手段を選んで、自分なりのルールを守りながら、せめて家族と故郷の人々に報いられる方法を取ってきたつもりだった。

この男の前では、それも全て、甘さとなるのだろうか。

「お、お前は、人間としての倫理を持ってないのか」

「ふむ。人間である事でやれる事が制限されるのであれば、私はその一切を棄てよう。『今全てが一変してはならぬ法など、どこにあるのか』」

そう、故人の詩を口にして、男は言葉を締め括った。

「じきに刻限である。レイヴン、君のヘリオス・グラシリスは封印させてもらった。妙な事は考えない事だ。万に一つも、この状況は覆せない」

ディオオンは内心、ほくそ笑んだ。

『今全てが一変してはならぬ法など、どこにあるのか』

その言葉が自身にも適用される事を、この男は考えていなかったからだ。

勝機はそこにあり、しかしそれも、望みの薄い逆転劇。

ならばやる事は一つである。諦めない事。それだけが、自分に出来るたった一つだと。

ディオオン・アウフシュナイターは諦めの悪い男だった。

それが復讐の恨みから来る生き汚さなのか、人としての強さなのかは、彼自身にも解らなかった。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (8) (後書き)

次の更新なのですが、ちょっと予定の見通しがつかないので不定期とさせていただきます。申し訳ありませんが、スケジュール的にもプロットのにも破綻気味なのでこのあたりで一度整理したいと思います。

毎回読んでくださっている方には大変感謝しており、今回の話も完成途中のままあげてしまい、本当に申し訳なく思っております。今後このような事がないよう十分に注意していきたいと思います。よろしく願います。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (9) (前書き)

更新が遅くなってしまう、申し訳ありませんでした。ようやく体調も持ち直したので、短いですが久しぶりの更新となります。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (9)

ひゅう、と風が吹き、霧が流れると、濃密に茂る背の高い樹と膝まで伸びた草が姿を現した。くすんだ茶褐色が、密生する緑の合間に見える。がさり、と草が擦れ合う音がして、次に人の呻く声がした。

「あいたた……やっぱり最短距離とは言え、もう少し道程を考えた方が良かったかな。でも山脈回りこむと、夜になっちゃうしねえ。道中の危険性を、自分から上げる事もないだろうけど」

茶褐色の布切れを払って、一本に束ねられた金髪が現れ、白と青の独特な装束を纏った女性が現れた。

アンジェという名前だ。姓はない。肌は白く、小顔で、顔の部品も造形美術を思わせる整った造りをしている、金色の瞳をした、美しい女性だった。

「頓着しない、というのも問題のようだ。しかし、さっきの頭痛は何だか、気に障るな」

アンジェは眉根を寄せて嫌そうな表情を作ると、何かを思い出そうとして、思い出したように視線を、自分の横の地面に下ろした。

「エミリア。エミリア・スカーレット。起きるんだ」

そこにはアンジェと同じ色のマントに包まれ、シャツ代わりにし、まだ起きる気配のない一人の少女が横たわっている。アンジェは屈み、少女の肩を揺すった。一条に纏められた金髪が、アンジェの背で少し波打った。

「……うん、息はしているな」

右の手で呼吸を確認する。異国風に袖口の開いた衣装が揺れる。落ち着いている。

森の匂いが鼻腔を満たす。緑の青臭さに、混じる血の臭い。鼻をひくつかせた。

「何だ……殺しがあったのか？」

アンジェは腰を落とした姿勢のまま、エミリアを背に庇うよう位置取り、右の剣に手を掛けた。

細い体を前傾させ、跳ねる為の力を足の裏に満遍なく行き渡らせる。左手はエミリアの襟首を引っつかむ。まだ寝息を立てている。今敵が襲ってきたらと考えると、アンジェはエミリアの将来が不安になった。

「――進むか」

ずるずる、と熟睡中の少女を引きずると、地面の緑葉に滴る水滴が灰色の衣服に染みこみ、それが不快だったようで表情を歪ませ、少し呻いた。起床は近いかも知れない。

アンジェの表情は硬く、緊張した面持ちだった。闘いの予感を感じ取っていた。

彼女達の所属する組織、国境なき騎士団から課せられた密命は、霧海にて暗殺組織の首領を殺害せよ、という内容だ。既に敵地への進入を果たした彼女は、風の流れてくる方向へと、密に茂り水気を含んだ森林の中へと、歩みを進めた。

しばらくそうして進むと、エミリアが起きて、アンジェに対して酷く憤った。主に自分の扱いに対して。

「先輩！ 人を荷物のように引きずらないでください！ おしりが濡れちゃったじゃないですか！」

「そうかい。でも寝てる君も悪いよ、気絶してたんなら、ともかく」
エミリアは、ぐっと堪えた。

「そ、それは無意識という無防備な状態で、船舶爆破からろくに寝れず、登山の疲労も溜まっていたところに襲ってきた睡眠欲に抗うのは難しくありまして、」

「で、寝てしまったと」

赤髪の少女は項垂れ、灰色のフードコートを目深に被った。

「す、すみません」

「ああ、謝罪はいいよ。僕に実害があった訳じゃないし。ただ、次

はどうなるか解らないからね？」

アンジェは後輩にそう語る。戦闘とはつまり命の奪い合いだ。それは現状、人間、動物、人外の三つ巴であり、同じ人間とて味方ではない。敵だらけの世の中で、油断や隙を見せるといった事は自殺行為に等しい。

彼女は語る。次はない、と。しかし睡眠時に敵を察知し即座に戦闘態勢へ移行できる者は相当な訓練と場数を踏まなければ、そういった『感覚^{センス}』を磨く事は難しい。

眠っていても気絶していても、生き延びる為に行動を起こせる者……これを生存本能に優れた固体として『戦闘好適種^{ドミネーター}』と呼ぶ。

六〇年に一人生まれるという、優れた人間。歴史上に登場するニコラ・フラメルや戦で名を馳せた英雄などがこれに当てはまる。それら全てが『歴史の分岐点』に存在していたとされる。

アンジェは密林の中を進んでいく。やがて、ディオン達が死闘を繰り広げた、死体が散乱する場所に出た。未だ吹いている巻き風に生臭さは大方流されていくらしいが、その元凶……人間の残骸は数が多い。

「これは、どうやら先客がいるらしいね」

「せ、先輩。そういった情報は一切聞いてませんよ？ どうします、引き返します？」

「進みます。エミリア、これは好機だよ。何者かは解らないが、どうやら暗殺組織と敵対しているらしい連中が、乗り込んできたみたいだね。この混乱に乗じて、頭領アンセムの首を狙う」

「だけど、不明な点が多すぎます。高度な術式が発動された残滓もありますし、強い魔導器の反応も残ってます。もしかしたら、かなり訓練された人たちかも……」

エミリアの言葉を右から左に聞き流しつつ、戦闘の痕跡に眼を細めるアンジェ。

大木がその幹を荒々しく両断され、ささくれ立った断面を晒している。人体は胴を払われたのか、上半身と下半身がアンジェから見

て右と左の離れた位置に転がっている。臓器を引きずりながらも逃げようとしたのか、別の死体は胴体に風穴を開けられたまま、絶命している。

凄惨である。頭痛がする。何かを、見落としている。

しかしそれを、頭にこびりつく不快感と一緒に捨てると、アンジェは先へと進んだ。

そうして、そこから遠く離れた場所での入り口を発見し、洞窟の中へと、足を進めた。

静かで、ひんやりとした空気が満ちている。ごつごつとした岩肌に左手をつきながら、頼りなく備え付けられたロウソクの明かりを辿っていく。敵はいなかった。

しかし、彼女は出会った。

「何者だ！」

鋭く力強い声が、反響して耳に届く。狭い洞窟の向こうに、銀髪の騎士が現れたのだ。

右手には銀色の片手剣と、左手には盾を持つ。剣を突きつけてアンジェの前へと、足を薦める。

「貴様もアウフシュナイターの仲間か？ にしては、行動の開始にズレがあるな。潜入なら同時であるべきだ。しかし、その出で立ち……似ているな、奴に」

アンジェは頭痛を堪えて、低く呻いた。

「——その名前、嫌な感じだ。誰なんだ……いや、いい。知りたくない。知れば、もっと酷くなる」

「……一応、言っておく。ディオーン・アウフシュナイターは私の案に乗った。敵でなければ、協力しろ」

「上から視線は、好きじゃないな！」

一層酷くなる頭痛に顔を顰めつつ、アンジェは右の剣を、逆手持ちのまま、鞘ごと抜いて、顔の前へ持つてくる。左手は鞘を握り、いつでも抜ける状態だ。

「僕も一応、言っておく。そいつと僕は無関係だ。僕達は、お前たちを潰しに来た」

アンジェは腰を低く落とし、足の裏に体重を、満遍なく散らす。膝は柔らかく、右足を前にした体勢だ。

銀髪の騎士——クレアドールは目の前の二人を敵と認識し、剣を中段に構えた。

「良からう、ならば全力で参れ。この身は多重積層型術式障壁シヤンデリアを帯びている。これを破らぬ限り、勝利はないと知れ」

自ら手の内を晒し、相對する銀の聖騎士に、アンジェはにんまりと笑った。

「騎士道、という奴か。侵入者に対して、律儀なものだ——エミリア！」

アンジェの背後に控えていた少女が、はいと返事をした。

「状況は閉所での近接戦闘だ、敵は積層型の防御障壁を持っている。例えるなら城塞みたいなものだね。これを破る方法は極限られてくる。でも、君の空間屈折型術式障壁ブロケリアならば戦況は拮抗する」

アンジェの言葉は小声で、クレアドールに聞こえないように言っているつもりだが、反響してそれもあまり効果はないようだった。

「互角、という事ですか？」

エミリアは腰の剣を抜く。がしやり、とそれが、幾つもの分節になって地面に垂れた。ワイヤーが中心に通った、剣型鞭だ。根元に宝玉が光る。

「——一転突破ならば、勝機はある、かも知れないね」

ざわり、と一条の金髪が揺らいだ。剣気が奔る。膨れ上がる闘気を察し、クレアドールもまた、目の前の敵が油断出来ない力量を持つと理解し、魔法の杖へと武器を移させた。

「——創造イェツィブ。聖刻文字解放。霊門、開放」

右手の片手剣から、迸る銀の光。一瞬でも直視すれば眼を灼くであろう、光量だった。洞窟を満たす。熱を伴うような錯覚さえ覚える。アンジェは手を翳してそれを防いだ。

「なっ……聖刻文字！？ 馬鹿な、あの紋章は、」

クレアドールの周囲空間に、環が広がる。それは腰の位置で留まり、銀色をしていて、何かの文字が連なる紋章だと解った。長い銀髪が、うねる。

「いざ、参れ。或いはこの身に届くかも知れんぞ」

聖騎士は言う。これで対等だと。

しかしアンジェからすれば、冗談にもならない程の霊圧を放つこの騎士に、底知れなさを感じていた。

（エミリアの絶対防御があつて、本当に、ようやく互角……いや、攻撃を防げるというだけか。攻撃手段が、ない）

双剣士は戦慄し、闘いの始まりに体は打ち震える。高ぶる感情。自身を制御できない程の恐怖を感じる。バランスを失う自己を律し、前を見据えた。

同じ銀でも、その持ち得る特性を大きく異にする、二振りの銀剣が相対する。

一つは空を断つ聖剣、一つは幻獣を呼び寄せる魔杖。

クレアドールは、既に看破している。

アンジェの持つ左の剣が、マグナム・オーパスとは似て非なる、しかしオブラ・マエストラではない——オーパーツであると。

兵は己より強い者との闘いを、半ば本能的に求める性質がある。つわもの内に持つ闘争本能を満たす為だ。

そんな人間が蔓延るこの世に、『主』の求める恒久的平和は果たして訪れるのか——銀の騎士はそんな事を考えて、目の前の剣士を真っ直ぐに見据えた。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (10) (前書き)

遅くなって申し訳ありません。久しぶりの更新です。

美女と見紛うような長身の男が、ディオンを見下ろしている。長い銀髪がさわりと揺れた。真夜中よりも深い暗闇の中でも、それが解るぐらいには、男の髪は輝かしかった。

「レイヴン、君は、あの魔女にいいように使われて、それで満足なのか？ いくつかの復讐を遂げる為に、ヘリオス・グラシリスの使い方を、それこそ我が身を削りながら研究してきたのだろうか？ 君がああ魔女の飼犬でいる理由など、どこにもない」

憐れみを含んだ微笑で、穏やかに語りかける男に、ディオンは齒を食い縛った。

「今からでも間に合う。私の下へ来ないか？」

予想外の言葉に、自然と、驚きの声が漏れた。

「君はあの魔女の弟子だ、戦士としても、術士としても優れている。現にヘリオスを、今まで誰も起動に成功した事がなかったアーネンエルベを使って、事象変移を起こしたのがその証左。君は間違いない、選ばれた人間だ。私は君に興味がある」

わずかに微笑み、ディオンの眼を、その深くを見るように覗く。

「君ならば転生術式の補佐も十分に出来るだろう。私の力になって欲しい」

「ハッ！ 随分高く評価されてるな。だがそんな話、俺がのむと思うのか？」

「無論ただで、とは言わない。『ミドリメ』の情報、知りたくないか？」

「何!？」

ディオンの声と同時に、かつん、という音が闇に響いた。

「そこまでだよ、ジークフリード」

男のしわがれた声。老人のようだった。ジークフリードと呼ばれた男はディオンから眼を逸らし、そちらを見た。何も無い、暗闇の

向こうを。

「君の愚行もここまでだ。正直、付き合いきれなくなった、というのが本音かな。儂としてはもっと現実的で生産的な計画が好みなのでね、国王と姫君を使って王国を操り、莫大な資金と物資、そして二匹の蛇があれば三国統一は容易だろうさ」

かつん、という音。恐らく杖か何かだ、とディオンは当たりをつけた。

「詰まらない話だな、アンセム。盛り上がりには欠ける。山場の無い脚本では観客を惹きつけるのは難しいぞ」

「君の妄言に付き合うのがそもそもの間違いだったかな。よろしい、セリーヌ」

かつん、と、今度は違う音質を持った音が響いた。靴の音のようだった。

直後、ばちん、と何かが弾け、青白い光が暗闇を照らした。

「イエス、マイマスター」

少女の声だった。そして、青白い光は少女の手から生まれていた。雷。複雑に絡み合い解けながら、主の姿を照らす。肩から羽織る式の、肘まである肩掛けは前をぴしりと閉じている。袖口だけが白く、ボタンで留められていた。

金髪碧眼のアルテリア人。その少女が背後に老人らしき腰の曲がった人物を庇い、前に出る。

「ふむ。実験体二十号か。あの計画は順調のようだな」

銀髪の男の言葉に、ディオンは思い出した。

（どう見たって未成年だ、戦えるような土台が出来ているとは思えない。アーティファクトなんかの魔導器も見当たらないのに、雷を使っている。術式の反応もないのに、そんな事が可能なのか？ そそも計画って何だ、まさか、未成年誘拐事件って……）

銀髪の男が右足を引き、体を開いて構える。徒手空拳のようだ。

セリーヌと呼ばれた少女は、肩までの髪を風に流しながら、男へ向かって低い姿勢のまま走り寄った。暗殺者さながらの動きに、デ

イオンは少女が素人ではない事を知る。

白い両手から放たれた少女の雷は、主の碧眼を照らし、銀色の男へ突き刺さる。

心臓目掛けてのそれを両腕で受け止め、気迫のこもった声と共に、両手の中で潰す。

（に、人間技じゃねえ！）

「――トルトータス・クリスタラー」

次いで、少女は数歩下がって距離を取ると、両腕を広げた。五指から雷が飛び散る。

「ふうむ。電子の回転数へ干渉するか。魔導術式の行使もフリーハンドで行えるとは、どうやら予想以上に研究は進んでいたようだ」
老人の声はない。巻き添えをくわないように姿を消したようだった。

「まあ、良からう。あの老人の事だ、私を潰すと決めた以上、これ以上なく徹底的に仕掛けてくるはず。この神殿も、」

ずしん、という重苦しい地響きが、腹の奥まで届いた。

「――潰すよなあ、アンセム！」

銀色の男は口元を歪めた。どこか、喜んでいるようにも見えた。
相対する少女はしかし凄まじい稲妻を生み出し続け、男に浴びせ続ける。それらを腕で弾き、時に受け、そして、浴びた。服が焦げ付く臭い。

ディオンの耳に、小さな声が届く。

「おい、おい！ こっちだ、ディオン」

「え？ あ」

見れば、すぐ傍にアレックスがいた。右手に小さなナイフを持っている。それで縛られていた拘束を断ち切ったのだろう、とすぐに察しがついた。

「逃げるぞ、どうもあの優男は戦いに夢中で、こっちに気付いてないみてえだからな」

「お、俺は、いや、あいつに聞きたいことが、」

アレックスが襟首を掴んできた。

「馬鹿言うな！ 俺たちの役目は姫さんの奪還だろ！ 丸腰で何が出来る！ ここは聞き分ける！」

畜生、と内心で零し、ディオーンとアレックスはまだ気絶しているクリスティナを抱え、その場から逃げ出した。

背中に、銀色の視線を感じながら。

＊ ＊ ＊

ハンス・アシュクロフトは眼を覚ました。そこはロウソクの灯火が冷たい岩肌を照らす、洞窟の牢屋だった。

（何故、僕はここに……？）

周りを見回すと、遠くで剣戟がしているようだった。反響してここまで聞こえてきているのだろうと思い、しかし声を出して人を呼ぶのはまずいか、と考えた。

（敵は僕をどうするつもりだった？ 何のためにここへ放り込んだんだ。ディオーンやアレックス、それにクリスは無事なのか……いや、心配よりも、これからどうするかを考えよう）

まず鉄格子の鍵に眼をやる。錆び付いていて、太い門が入れられている。弄ってどうにかなるようなものではないと解り、しかし淡い期待を込めて、幸い自由の利く両手を使い、がちゃがちゃと音を立てて運よく外れないか、と試した。

すると、声がかけられた。ハンスにとって聞き覚えのある、聞きなかった声だったが、以前とはかけはなれた声音だった。

「誰か、いるの？」

まるでか細い。弱りきった少女の声だ。威厳のあった城内での様子からは、ほど遠い。

「か、カタリナ姫、ですか！？」

「ハンス！？」

駆け寄ってくる足音、姿が見えると、白い姫君が姿を現した。全

身を純白のドレスに包んでいる。花嫁衣裳のようだった。ヘッドドレスの類は、ない。

「ハッ!? えっ!?」

「ああ、ハンス! 無事だったのね、良かった……!」

鉄格子の向こうにへたり込み、安堵したように涙を零す主は、彼の知る『一国の姫君』ではなかった。その仮面を取り払った本来の姿を一度も見たことがない彼にしてみれば、それは多大な精神的ショックだったろう。

「ひ、姫様、なのです、よね……?」

「ええ、ええ、そうよ。何を言ってるの? あ、この衣装かしら。これは、クレアドールに着ろと言われて、着ただけでクレアドールは部屋の外にいらなくて……終わったら呼べと言ってたのだけど……他の皆は、どうしたの?」

カタリナの言葉にハンスは眼を閉じ、深く考え、そして何かを思いついたのか、立ち上がった。

「カタリナ姫、申し訳ありませんが術式でこの鍵を開けてもらえませんか?」

「え? ええ、解ったわ……」

白いドレスを纏った姫君が、鉄格子の鍵に手を翳す。何も、起きない。

「ど、どうして……?」

洞窟のあちこちに埋め込まれた、霊子の動きを妨害する石によって、この洞窟内で術式は行使できないようになっていたのを、カタリナは知る由もない。

「私、力が、使えない……」

「術式が? そうですか……では、何か代わりになるようなものを探してきていただけますか?」

「え? 何か、って?」

ハンスは頷く。カタリナは眼を白黒させている。

「お願いします。貴女だけが、頼りです」

カタリナは慌てて立ち上がり、白く高級そうな靴を脱ぐと、ドレスの裾を半分以上、引き裂いた。合間から太腿が覗き、ハンスは思い切り首を捻って眼を逸らした。そうしなければ注視していたからだ。

「待ってて！」

決断は早く、行動も速い。ハンスは姫君の姿に頼もしさを感じた。

カタリナは洞窟内を走り、息が上がる心臓を押さえて尚、走った。(クレアドールは言っていた、武器倉庫は入り口の近くにあるって！　ここからなら――)

ひゅう、と風が吹いた。カタリナは、最初それが何なのか解らなかった。

気付いた時には、カタリナを導くように、すぐ前方の部屋へと風が道を作っていた。

まるで、ここだ、と言っているようだった。

『つむじかぜ
旋風』

己の意思を持ったアーティファクトが、呼んでいる証だった。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (11)

小さな音の波でさえ、肌で感じられそうな静かさを、ぶつかり合う剣の音が破った。鏑迫り合いへともつれ込み、火花を散らして二人の姿をちらちらと照らした。

幾度目かのせめぎ合いは、均衡を保っているように双方、同時に距離を取った。

ロウソクの頼りない灯が暗い洞窟の中を照らしている。二人の姿は、片方が銀、片方が金である。銀色の髪をした女の方は、どうか両手を広げられる程度の幅がある洞窟内に、腰の高さ程で不可思議な文字を浮かび上がらせていた。文字の環。それは白銀色をしていて眩しかった。金髪の女が姿勢を低くして駆け寄る。環に触れる直前、左手の剣を逆手に横薙ぎし、それを引き裂く。破れる文字群。更に右手の剣を振り下ろし、銀髪の女の頭を狙った。盾で防がれる。すぐさま左手の剣を、その首元目掛けて突き出す。これは剣で遮られた。

——銀髪は、黒衣を纏った騎士、クレアドール。金髪は倭国の装束に身を包んだアンジェである。結ぶ位置は違えど、二人共長い髪を一条に纏めている為、動く度にそれは尾を引いて流れた。

ぎゃり、と剣どうしが擦れあい、また、距離が離れた。ちた、ちた、という音に眼をやれば、どうやら洞窟の天井から水滴が垂れてきているようだった。雨が降っているのである。

「……………」

アンジェはそれを見て、次にクレアドールに眼をやった。状況は不利であり、どうにか地形と後衛のサポートがあって互角に持ち込めていた。突破にはそれなりの時間がかかると推測、しかしアンセムの抹殺という任務から、早期撤退は躊躇われた。

(あの障壁のおかげで、近づくのに苦勞する。アガートラムでなければ破けない以上、こちらの手の内は、初手がそれになってしま

う。そうせざるを得ない。いい加減、読まれる頃合いだろうな)

クレアドールは無表情で、剣を構えている。雄牛の構え、である。左足が前の体勢から、鰐カイトを顔の横まで持ち上げ、切っ先を相手に真っ直ぐ向ける。剣を雄牛の角に見立てたものだ。アンジェは足元を見る。構えから、下段が空いていると見たのだが、生憎クレアドールは鋼鉄製の具足を着けている。狙えば角が来るのを察し、アンジェは右手のミドルソードを納めた。左手の白銀剣を順手に持ち、両手で、構える。正眼……倭国独特の構えで、常の構えと呼ばれるものだ。

クレアドールが、じゃり、と地面を踏み、姿勢を低くする。剣術だけならばアンジェに負ける理由はなかったが、術式がそれに加わると、途端にこの銀騎士は手強くなった。

「これだけ狭いと、お互い、剣を振るのに苦勞するな」

騎士の言葉に、アンジェは眼を細めた。余裕の覗く態度に気を悪くしたのだろう。

「別に僕は剣じゃなくてもいいんだがね。そっちの、その邪魔な障壁がなければ、一発で終わらせてやるんだが」

その言葉を聞いて、へえ、と口元を面白そうに歪めた。

「こちらもな。お前を守るその邪魔な障壁がなければ、一瞬で終わらせてやるのだが」

狭い洞窟内では、それに限らず剣は、刺突が最も速く、防ぎにくい攻撃としてある。しかしこの二人に限っては、諸々の攻撃を防いでしまう障壁というものがある以上、ただの突きではもはや届かない。

それはつまり、拳や蹴り等の接近戦術も、近づけない以上は使う事が出来ないという事。アンジェは体がぶつかり合う、その距離での近接戦闘を得意とする為、大きな不利を抱えていた。

「――先輩。洞窟の壁が水気を含んできました。過度な衝撃を与えると、崩落するかも知れません。あと、ついでに言うと、さっきから霊子の操作にかなりの誤差が生まれてます。何か、霊子の動きを

妨害する何かが、ここにあるのかも」

そう言うのはアンジェの背後にいるエミリアである。赤い髪を隠すように灰色のフード付きコートを目深に被っている。天井から落ちる水滴を嫌ったのかも知れない。

「誤差……？　しかし、アイツは」

目の前の銀騎士は。それを一切、ものともしていないように見えた。

「どうやら、ちょっとやばい相手のようだ……っ！？」

突然の、揺れ。地震のようであったが、すぐに収まった。からから、と土壁から、細かい土塊が転がり落ちる。落ちてくる水滴の数が、増した。

同時に、きゃあ、という女の悲鳴が、若干の反響と共に聞こえて、クレアドールは、姫様、という言葉の口の中で呟いて、アンジェをけん制しながら、退いていった。

「何だ……？　あの騎士、と、それに今の揺れ。気になるな」

「何にしろ、状況が動きました。どうしますか、先輩？」

アンジェは、エミリアの言葉に少し考えてから、口を開いた。

「そうだな——」

＊ ＊ ＊

クレアドールがそこへ辿りつくと、先ほどの揺れで転んだのか、地面に手を付き、擦り剥いた膝から出る赤い血に白い布を巻きつけている、カタリナが居た。

普段の白い洋装よりも、更に白い花嫁衣裳。破れたドレスの隙間から覗く白い肌も、また白かった。苦痛を堪えている表情は、背後にクレアドールを見つけると、傍らに転がっていた長剣——金と蒼の意匠が強調されたヴィルベルヴィントを構え、きつと見つめて、立ち上がった。

「ひ——いや、カタリナ。妙な考えは起こすな、と言ったはずだぞ」

カタリナの肩が少しだけ、震えた。恐らく、剣技では勝てないと解っているのだろう。

「それでも。私は、助けに行くの。私でも、誰かを助けられるから」ほんの少し震える声音で、がっちりと剣を握り、騎士と相対する。クレアドールは眼を閉じて、剣を向けてくるこの少女に対して、自分も剣を向けようと、した。

「――そこまでだよ、女騎士」

ドスの効いた、低い声、である。

「なっ、」

クレアドールの首元に、白刃が押し当てられた。短い。ひやりとしたそれに驚いた騎士は、背後には最優先で気を配っていた。敵の接近を警戒して、だ。それを全く気取らせぬ、奇襲である。

「いつの、まに」

クレアドールにナイフを押し当てるのは、アンジェである。

「僕は剣士というよりは、実は暗器使いなのさ。暗殺者とは違うけど、倭国には、そういう奴もいるって、覚えておいた方がいいよ」

金の両眼を細める。カタリナを見ていた。

「……まさか、アベルの末裔か？　こんなところに……異端審問会に処刑されるのがオチだろうに、何故。こんな、アリの巣みたいなところに……いや、こんなところだからか。おい女騎士。お前ら、何を企んでいる？」

クレアドールは、しかし、不死性を持った騎士である。恐れる事はないであろうそのナイフに、何故か、いいようにされていた。

或いは。カタリナに危害が及ぶ事を、避けようとしているのかも知れない。

「私は、ペルフェクティオと名乗る男に協力してただけだ。妄想家で、とらえ所のない男だ。そいつの企む、転生術式の準備を手伝っていた」

「転生術式？　はあ、一時期噂になったな、死者を甦らせて、不死者の軍団を造るとかっていう、帝国の戦将の話……恐らくは、」

そこで、おっと、と口を塞いだ。何も敵に全てを教えずとも良いだろうと思ったのだ。

「ジークフリード、ですね。先輩」

（言ってるし……）

エルミナだった。真面目な顔をして現れ、台無しにしてくれた後輩を恨めしく思った。

「そうだ。数年前に行方不明になって以来、奴はこの計画を内密に進めていた。そしてそれに必要なのが、恐らくは、人間に架せられた縛鎖を破る為の、人とも魔獣とも異なる、血」

「だから、人と魔獣の間である、アベルの末裔を使うのか。先天的に病弱だが余りある術式回路……グラス・フォニムス・ピクトグラムを持った存在」

アンジェの言葉に、クレアドールは少し顎を引いて、頷く形を取った。

「あの男の言い分は、少々ケレン味が強すぎたが、それから私が推察するに、そうだ」

ふうん、と頷いた。

「色々ありがとう。ベラベラ喋ってくれてとても助かったよ。お礼に、さっき言った通り、一発で殺してやろう。何、痛みは感じないさ」

その言葉に、カタリナが口を開いた。

「ま、待って下さい！——あ、その、お願い、待って、下さい……」

次第に自信をなくしていく言葉は、何故か自分でも、何故そう叫んだのか、解っていないようだった。

ただ、女騎士が殺されるのを止めさせようと。

「聞きたい事は聞いたのだから、もう抵抗しないと約束すれば、殺す必要なんてないでしょう！？」

「それを、僕が聞くとでも？」

冷たく、眼を細めてアンジェは言う。

「コイツは危険だ。生きていれば、必ず僕の障害になる。安心しなよ、次は君だ。教団の企みはどうやら、君が鍵になっているようだしね」

「――待て」

クレアドールだった。

「話には続きがある。タブラ・スマラグディーナだ」

何、とアンジェが問うた瞬間。二度目の地震が起きた。

「っ！」

瞬間振り払い、拘束を逃れたクレアドールは、カタリナの脇に滑り込み、その手から蒼い剣を奪い取った。脇にカタリナを抱える。

そして、逃げ出した。とっさの早業、である。

「あ、しまった……！　くそ、待て！」

アンジェのエルミナは、それを追った。

出口からの進行ルートにアンジェ達が居る以上、進む先は入り口……ディオオン達が侵入してきた方向である。アリの巣、とアンジェは言ったが、この巣は貫通している為、どちらも出入り口になっていた。

「はあっ、はっ……！」

その途中。大きな、広い階段が続く場所があった。通路は、その前を通り抜けるようになっていて。下り階段になっており、そこから、偶然か必然か、ディオオン達が姿を現し、若干の間を空けて、クレアドールと遭遇した。

「うお、お前！？」

ディオオンの声に、クレアドールは安心したようだった。離して、と叫んでいたカタリナを下ろすも、戸惑っていた。

「すまん、刺客に追われている。手助けを……」

「素手なだけで！」

クリスティナを背負ったディオオンはそう叫んだ。元はといえばクレアドールの所為である為、彼女は頭を抱えた。

「す、すまない、そうだった」

解らないカタリナは、問い掛けた。

「あ、あの、どうして、二人は、敵同士じゃ……?」

「ああ姫さん。こいつは、アンタの為に――」

「無駄話はいいい。早くしないと、」

そこに、何かが飛来した。黒く、速い。いち早くそれが何であるのか気づいたディオンは、眼を見開いた。

「棒手裏剣、か!？」

地面に突き立つ、細い刃物。倭国製の暗器、つまり暗殺用の、隠密が体に忍ばせる武器である。

「誰だ!」

「お前こそ、誰だ」

ロウソクの灯に水滴がぶつかり、辺りが暗くなる。

「そ、その声……まさか、でも」

「――お前、誰だ。その声、聞き覚えが……ある?」

アレックスが、松明に灯を点けた。

「や、やっぱり、リグレット、なのか!？」

かつての恋人が生きていた。ディオンは、それだけで頭がいつぱいになった。

「リグレット? それは、僕じゃない」

その言葉に、やはり他人の空似なのか、と思ったが、頭の赤いリボンが、それを否定した。

「僕は、アンジェだ。アンジェリーナ。だから、リグレットじゃない」

アンジェは頭を押さえた。

「ぼ、僕じゃない。それは、僕とは、違う。くそ、違うのに、頭が、痛い……」

「まさか、記憶喪失なのか!？」 飛行船から落ちた時のショックか!？」

「どうして、僕が、飛行船から落ちた事を知ってる。お前、お前は、

一体誰、なんだ」

苦しそうにうずくまるアンジェを見て、ディオンは膝をつき、視線の高さを合わせて、言い聞かせるようにした。

「俺は。俺はディオンド。いや、お前には……『ユウ・シラガイ』って言った方が良いのかな」

アンジェは、視線を逸らした。

「――お前、お前は……僕を、知って、る……？」

「ああ、ああ。良く知ってる。よく、生きててくれた。その赤いリボンも、よく、持ってくれた。ほら、このバンダナ。覚えてるか、お前が俺にくれたんだよ」

アンジェは、呆然として。ディオンは、少し、笑った。

「覚えて、ない……解らない」

そうか、と呟き、ディオンは苦笑して。思い出したように周りを見た。

「ああすまん。コイツは俺の……そう、旧知の、知り合い、かな。とにかく敵じゃない。ほら、立てるかりグレット。一緒にここから出よう」

待って下さい、という叫びが、差し伸べられた手に、伸ばされた手を、止めた。

エルミナ、である。

「先輩！　しっかりして下さい、そんな見ず知らずの男の人に付いて行く気ですか！？　先輩言ったじゃないですか、過去はもういいって、今生きている事を大事にするって、私に言ったじゃないですか！」

その言葉に、あ、いや、と戸惑ったアンジェは、どうしたいのか解らないようだった。

三度目の、地響き。地鳴りと続き、強い揺れが襲い掛かる。

各々の悲鳴があがる。地面に這い蹲り、それをやりすごした。

「納まった、か。多分、次で崩れるかもな」

ディオンの呟きに、全員頷き、納得した。早急な脱出が望まれる。

「武器の回収を。それと、ハンスがいる場所が解る奴は？」

「あ、それなら、私が……」

カタリナが手を上げて、クレアドールがそれを制した。

「私が、行こう」

「く、クレア……？」

そいつは敵じゃねえよ、とアレックスが言った。ぞんざいな口調である。

「詳しい話は後だ。とにかく、急ごう」

全員、生き埋めという事態は避けたいようであり、反対する者はいなかった。

やがてハンスを牢屋から解放し、武器庫から各々の装備を回収する。

アンジェが、ディオンの大剣を見て、呟いた。

「……『塔』の、アルカナ……？」

ディオンはそれに気付かないふりをして、腰に納め、先を促そうと。

ごり、という物音。岩壁を削るような。

「何だ？ って、何だありゃ！」

武器庫から通路に出たアレックスが叫んだ。次に、ハンスは度肝を抜かれた。カタリナは恐怖に青ざめた。

「くそつ、ヤツか！」

混生体、である。うじゃ、と触手のように生える蛇の群れ、毛むくじやらの二本足。通路いっぱいに広がる、その巨体。

びちゃびちゃ、と水を垂らして、壁にぶつかりながら歩いてくる。

「地震の正体見たり、ってか！？」

アレックスが女性陣を促しつつ、言った。

「水か、あれは。もしかして、外に居たのか？ いや、まさか川に潜んで、」

ディオンの言葉に、いいから逃げるぞ、と肩を叩いた。

そのまま全力疾走し、ついには出口にたどり着く。外に出る。雨

が一行を襲う。霧が煙る樹海が、再び眼に入った。

「――おい、起きろ！ 金髪！」

「……ん？」

アンジェが反応した。あ、違う、お前じゃない、と訂正する。

揺さぶられてクリスティナは眼を覚ました。

「ふあい」

寝不足が祟ったのか、眠りが深かったようである。たたき起こされ、剣を無理やり握らされた。

「ど、どこだここは」

クリスティナにしてみれば、何故カタリナがいて、クレアドールがそれにつき従っていて、そして見知らぬ二人組が加わっている状況である。

「私が眠っている間に、何があったんだ？」

「いいから！ 後で詳しく、お兄様が話すから！ 仕事しろ！」

ディオンの言葉に戸惑いながら、クリスティナは風を起こした。

――霧が晴れる。一行は駆け出した。背後からは混生体の這い寄る音。上空にはぎゃあぎゃあとうるさい鳥。虫の声がそこかしこから湧き出している。雨粒が顔にあたり、眼に入り、視界が悪く、また、不快だった。

「森を抜ければサバスティオンとの国境が近い。人外も襲って来ないはずだ」

人外は先日、ディオンとクリスティナを襲った黒い獣である。人の明かりを極度に嫌う性質の為、集落や町には寄り付かないのだ。

「方角は、こっちでいいの？」

「違ってても行くしかねえだろ」

ハンスとアレックスのやり取りに頷き、腰のナイフに左手を添える。

（リフルの村までの間に、多分、あそこを通る。混生体や敵が襲ってくるには、絶好のポイント。俺が敵なら、そうする）

ディオンの脳裏に、海沿いの、崖下を通る狭い道が浮かんだ。

（逆を言えば、そこさえ押さえてしまえばいい。どうにかして、追跡が不可能にすれば……そう、例えば、崩落を起こしたり）

それには多大な労力が伴う。術式の力でも、現段階ではカタリナか、クレアドール、アレックスにしか出来ないだろう。

（あそこまでの長距離を走った後に、そんな事できるか？ 術士としてののは大概、体力ねえからな……）

果たしてその予想は当たり、森を抜け、地肌に見える街道で、カタリナは泥に足を取られて転んだ。クレアドールが肩を貸す。アレックスは肩で息をしており、それも荒い。ハンスは足の怪我が響くのか、それでも懸命に走っていた。

ここで、横道に逸れて敵をやり過ごそうという案が出る。

ディオンは決断を迫られた。この先の崖まで無理をしてもらうか、皆を休ませる為に横道へ逸れるか。

（どうする、何か良い方法は……）

「悩んで、いるな」

そう、声がかけられた。見ると、アンジェである。

「リグレット」

「何故か、解った。お前がそういう顔をしている時は、一人で悩んでいる時だ。だから、そういう時はまず話せ。お前一人で悩むより、二人で、皆で悩むんだ」

ディオンは、それで、ずっと肩の荷が下りた気がした。抱えていたものが少しだけ、軽くなったように思えた。そして、間違いなくこの女性はリグレットなのだと、確信した。

ディオンは全員に話を聞かせた。皆は耳を傾けた。それがありがたかった。

アンジェが言う。

「足止めが要るな」

そしてアレックス。

「体力ねえヤツは先に行かせろ。俺含め、な。それで崖のところで落ち合おう」

「クリス。僕達だけでは、敵に襲われた時に歯が立たない。護衛を頼めるかな」

「はい、兄様」

「クレアドール……貴女は、どうするの？」

「私は……」

皆それぞれ、考えを話し合った。そしてすぐにそれは決まった。ディオオンが纏める。

「先行するメンバーはアレックス、ハンス、カタリナ姫。

護衛はクリスティナと、エルミナだ」

「そうになると自然、足止めは僕とお前になるが」

「クレアドールを忘れるなよ。聖騎士様だぜ？」

ああそうだったか、と頭を掻く。どうやら気まずいようだった。

「先程の事なら気にするな、暗器使い。私は、私の守るべきものの為に動く。お前もそうだろう？」

「どうかな。僕には、まだ、そういうものはない」

憂いを顔に浮かべ、地面へ視線を落とした。雨が、ざあざあとうるさい。濡れた髪が数条、顔に張り付いていた。

「そうか。それは何よりだ」

「……何？ 嫌味か」

「違うさ。空っぽなら、これから幾らでも、そこに詰め込めるだろう？ 全く羨ましい限りだよ。私は、一つ二つで手一杯だ」

クレアドールは、視線だけ向けて微笑んだ。アンジェも、それにつられたようだった。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (11) (後書き)

次で第一部は終わりです。よろしくお願いします。

暴風を伴って、黒い大剣が振り下ろされると、濡れた地面は泥水を弾き、土塊となって砕けた。斬り落とされた蛇は水溜りの中で苦しげにのたうち、口を大きく開けて、やがて絶命する。

雨水に混じる血は、人のものよりも濃さが薄い、生臭さは人以上である。

大剣の持ち主、黒ずくめの男は吐息を白く煙らして、死んだ蛇を踏み潰す。雨が肌を打つ。服を濡らして、不快だった。水滴が鼻筋を伝い落ちる。いらついた表情。

混生体と呼ばれる、人外の化け物——毛だらけの足に蛇の塊を乗せたようなそれは、しかし数匹程度斬られただけでは、怯む様子も見せない。

男は屈んで蛇の追撃を避ける。肩口に数匹、噛み付いてくるものも構わず剣を担ぐようにし、大きく頭上から振り下ろした。

頭上——混生体に頭は無いが——から股下までを、一撃で分断する。蛇の群れや足を統制していると思われた『核』のようなもの——大きく、血走った眼球が破壊され、泥水のように濁った液体を撒き散らして、後ろ向きに倒れた。しゃあ、という悲鳴が蛇の塊から聞こえる。それは群れなす為、酷く耳ざわりだった。

「アタリか、どうやら眼ン玉が弱点らしいな」

その言葉に、背後から声が掛けられた。若い女の声ながら、鋭く、通りが良い。

「こんな生き物、見た事も聞いた事も無い。自然界には間違いなく存在しない。まさかアンセムの計画というやつで、産まれたものか？」

薄暗い中、女の眩い金髪は雨に濡れ、数条、顔に張り付いている。後頭部の高い位置で一纏めにされた長い髪も、今は元氣なさげに垂れていた。

黒い男——ディオンは考える。

（そういえば、さっきの子供。ペルフェクティオが言うには、あの少女も計画で生まれた、とか言ってたな。どうにも——厭な憶測しか浮かばねえ）

ぎり、と歯を食いしばる。背後の女が手に持つ銀の剣を、混生体へと飛ばすと、それは正確に中枢を貫き、眼球を破壊し、絶命させた。

アンジェの銀剣は風雨の中で、幾度も閃き、手を触れる事なく混生体を次々と事切れさせた。彼女の場合、鈍重な敵を相手にしていて、その弱点が解ってしまえば、後は作業になってしまうような、飛剣使いというスタイルである。

「便利だな、それ」

「ああ。戦うだけの道具にしておくのは惜しいよ……ところで、気のせいかな？ 戦い方がぎこちないぞ。何というか、無理にそうしている、ような——」

「誰が」

お前だ、とアンジェが言う。背中越しに視線を感じた。大剣を握り直す。左手側では銀髪の女騎士が、これでもかと術式を乱発して大立ち回りを演じている。彼女——聖騎士クレアドールに至っては何の心配もいらなそうである。思う存分暴れてもらおうと、それを横目に、手元へ視線を落とした。

——ディオンの・アウフシュナイターは剣が得意ではない。それどころか、どんな武器の心得も持たない。加えて術式の技術も、才能も無い。

彼は剣士でなく。戦士ですらない。術士でもなく——つまりはただのヒトである。市井に混じって商いでもしているべき、凡庸な人間なのだ。

「戦い方なんて、人それぞれだろ」

恐らく、三人の中では尤も弱く、脆いのが、ディオンのである。それどころかカタリナやアレックス、ハンスを含めた一向の中でも、

恐らく最弱であろう。

力任せの斬撃を繰り出す。それは技術の無さを隠す為。相手が攻撃しにくい位置に動く。それは生き延びる為の知恵。隙を見つけて接近する。それは機敏に避ける運動能力が無い為。ディオンは、己が弱者である事を、誰よりも自覚している故に、生き延びる手段に執着する。

アンジェやクレアドールは未だ無傷である。ディオンだけが肩や腕、大腿から血を流している。彼女らのようにスマートではないが――力強く踏み込み、誰よりも強い一撃を叩き込むスタイルは、自分出来る事と出来ない事をよく知り、血みどろになって築き上げたものだ。

だからこそ――彼女らに引けを取らぬ程、この衛士は強い。

並ぶ樹木を回り込み、混生体の背後に出る。振り向くより速く。ディオンは横合いに大剣を構え、腰を落とし、足を踏ん張り肩を力ませ、つまり全身の力でそれを振る。

二体並んだ混生体は、その薙ぎ払いに中枢を破壊されて真っ二つにされると、地面でうごめいた後、息絶えた。

止めていた呼吸を吐き出し、再開する。死骸の向こうに、今までと違う形をした混生体らしき生物を認めて、大剣を握り直した。

肩に担ぐようにして、駆け寄る。暗がりにはいた――新生体とでも言うべきその生き物は、四足で、肉食獣のような体形に一對の黒い翼を持っていた。

キマイラと分類されるそれを、しかしディオン達は知らない。

複数の生命体を繋ぎ合わせた、命の新しい形――である。

金色の鬣たてがみを逆立てて、鋭い牙を剥き出しに、翼をはためかせて、飛ぶ。四足の生物が飛ぶというのを、ディオンは今日、初めて眼にした。無論、足には鋭利な爪が備わっているのです、飛びながらそれを用い、攻撃を仕掛けてくる。

今までにない攻撃方法に、戸惑う。

「速いな」

通り過ぎ様、爪と牙が襲う。そしてこちらの攻撃が届かない高空へと飛び上がり、再び速度をつけて降下してくる。

胸を横に一筋、浅く裂かれた。血飛沫が弱く噴き、よろめく。痛み顔が歪んだ。そうしているとすぐに、キマイラの降下攻撃が再開される。

タイミングを合わせて、大剣を振るも、跳ねるように飛んで回避した。

「ちょこまかと！」

態勢を整えようと振り返る――キマイラは、倒れていた。

「お前とソレは相性が悪いようだな、アウフシュナイター」

クレアドールが、屍の山を踏み越えて銀の大剣を振りかざしていた。どうやら何かの術式を使い、撃ち落としたりしたい。

かくも術式とは万能である。汎性が高く、地形や距離に左右されない。

「これで、おおよそのところは片付けたか」

アンジェが呟く。彼女の周りに死骸はなく、離れた場所にばらばらと転がっている有様だ。

「あ……ああ、すまん、助かった、クレアドール」

気にするな、と返して、女騎士は大剣を戻し、ミドルソードとなったそれを鞘に納めた。

「死体の原だな。とても姫様には見せられん」

ひとまず合流しよう、と提案すると、二人は頷いた。デイオンは大剣を腰の後ろに納めて、走り出そうと――踏みとどまった。

「どうした、デイオン」

そう声をかけてくるのはアンジェだったが、デイオンは応えられなかった。

「――音がする」

二人はいぶかしんだ。雨のざあざあという音だけが周囲に満ちている。細かい音は拾えそうにない。

しかし、ディオンは言う。

「近寄ってきてる。蠢いてる。間違いない、こいつは、この音は――」

女騎士が一步、近くに寄った。

「何を言ってる、アウフシュナイター。敵か？」

油断なく柄に手をやる。衛士は続けた。

「離れろ！　〈ヤツ〉が来た！」

弾かれたようにディオンは、前に飛んだ。途端、元いた場所が――

――〈割れる〉

何だ、と誰かが言った。罅が入る。空間が、ぱりん、とガラスのように、壊れていく。徐々に広がる。空間の亀裂。

「次元干渉だ――こんな事が出来るのは、魔獣だけだ。それも、相当力のある」

「魔獣！？　世界の壁――アル・カートラスの向こう側にいる存在じゃなかったのか？」

「そんなデマカセ、いつまで信じてんだよ！　魔獣がオリの中で大人しくしてるような生き物かよ！　動物じゃねえんだぞ！　出て来ないってどうして断言できる！」

亀裂の向こうから、黒い何かが現れた。人外――と言えばそうなのかも知れない。確かに人外には分類される。しかし、存在としての密度が違った。

鋭利な爪が、罅を広げていく。そこに光る、二つの何かが在った。

――碧色の、宝石のような眼――

ディオンは歯を食い縛った。今度こそ――死ぬかも知れない、と。しかし、復讐を果たす為に今まで生きてきた彼は、同時に歓喜もしている。異なる二つの感情を抱く現象――ダブルマインド。

「ミドリメえええっ！！　今度こそ、今度こそテメエを殺してやる！」

感情の爆発が抑えられない。抑える気が無い。犬歯を剥き出して、敵意を向ける。およそ今まで冷静だったディオンは、明らかに違

っていた。

「ディオオン、どうした！？ あれとは何か因縁があるのか！？」

「ありもあつたりだ、ヤツは故郷を、里の皆を殺した！ 弟も妹も父も母も、全部ヤツに奪われた！ 奪われたんだよ！」

大剣に手を掛ける。肩に担ぐよう構え、足を開いた。

「下がれ！ セレス・アルトマデリウス 闇魔女が生み出したこの剣は、魔獣を狩る為だけに造られた。俺は、これを振る為だけに生きてきた！ ヤツは俺が殺す、邪魔するんじゃないぞ！」

ミドリメが、亀裂から顔を覗かせた。剣のような牙が並ぶ、顎がある。

鋭い眼は細められ、天を衝く角が二本。

龍族である。

「ヘリオス・グラシリス、アクセプト」

ディオオンの周囲が渦を巻く。風、ではない。景色が歪んでいる。クレアドールが剣を抜いた。

「どうやら、退けと言っても無駄な様子だ。やるしかないようだが、アンジェ」

「僕は、まだ死にたくないんだがね。まあ、やるだけやってみるか。この三振りがあれば何とかなるかも知れないし。しかし――」

アンジェが、ディオオンの剣を見た。

「あれは、剣なのか、クレアドール。」

どうにも僕には、そうとは思えないんだが」

黒剣の異容が、白く光を灯した。

クレアドールは首を振る。

「魔獣を狩る為の、剣、だろうか……いや、魔女が造ったものなど、私を知るものか。まあひとまず、私は左から、お前は右から。ディオンは……言っても聞かないか」

好きにやらせるしかないだろ、とアンジェ。

「とりあえずの勝算はあるようだからな。付き合ってやるさ、ディオオン」

二人の心遣いも露知らず——ディオンは、剣の制御に没頭した。

（アルカナ接続、ピラー解放）

大剣に存在する、数多の細かい罅から、眩い光が漏れ出した。薄暗い周囲を、それは切り裂くように照らし出し、眼を焼いた。

クレアドールの言葉は的を得ている。これは間違いなく剣である。異容の為に、ただ力任せに叩きつけるだけの大剣という使われ方をしているが、それは本来の用途と違う。

自重は確かにある。並の男では持ちあげる事さえ出来まい。しかしこの黒色偽装は、内部に隠されたモノを抑え込む、封印である。

ディオンは、結界を生み出すというヘリオスの性能を——文字通り、剣と成す。

（コード入力。霊脈へのコンタクト成立、サーキット全段直結。干渉体形成開始）

光が収まり、大剣を包み込むと、それは一層巨大な剣身を持った、剣となる。樹木の背ほどに伸びた全長は、およそ人が扱える武器を超えている。

それはどのような術式も、アーティファクトも、アーネンエルベも引き裂くモノ。

万物を正しく照らす太陽。

ヘリオス グランシリス

太陽の剣である。

「づあああ——！」

振り下ろす。周囲に空間歪曲さえ起こしてしまう程の霊圧を持った剣は、およそ魔獣といえど触れれば例外なく、消滅させられる威を誇る。

しかし。

「な、に」

受け止めた。腕の一本で、軽々と。

碧色の眼が歪む。嬉しげに、きちきちと。

クレアドールは、横合いからそれを見ていた為に、違和感に気付いた。

空間が歪んでいる。受け止めたのではなく、ミドリメは光の剣を空間に固定したのだ。動かないように。

流石に直接触れるのは、ミドリメといえどまずいようである。

流石に空間までは——斬れないようだ。

ミドリメが、右手の爪で何かを弾くようにすると、ディオンの体はたちまち後方に吹き飛ばされた。ずたずた、とあちこちが切り裂かれる。地面を転がり、泥だらけになった。

ディオンは、これがミドリメの〈遊び〉だと知っている。自分を良い玩具と見ているのである。だからこそ、こうして計ったように、自分のいる場所へと現れる。もしくは自分の往く先へと現れるのだ。「グッ……くそ、それでも、ダメかよ……！　まだ、ヤツには適わないのか」

体を起こすと、クレアドールとアンジェが立ち向かっていた。ミドリメはまだ頭と右手だけしか亀裂から出していない、のにも関わらず、圧倒している。

アンジェが、深い傷を負う。左脇腹から左太腿へと走る、裂傷である。

クレアドールは右腕を飛ばされた。血飛沫が噴水のように飛び散る。

ディオンは、頭から血の気が引いた。

「逃げる！　このままじゃ死ぬぞ！」

アンジェからの返答は無い。焦りが生まれる。

クレアドールが、呟いた。

「もう、遅い」

——びし、という音。何かが割れた音。

音源はと見上げると、遙か上空、十字を描くように空が——割れていた。

ディオンは、開いた口が塞がらなかった。曇天に、虹の十字架が現れたのだ。異常と言わず何と言おう。それはどんどん大きさを増していき——そこから、何かを吐き出した。

最初、それが何なのかは解らなかった。ただ、視界の端でミドリメの大きな口が、笑みの形に歪んだ、気がした。

隕石、である。周囲一体に降り注ぐ、岩塊の雨。

地鳴り。地震。地響きの三重奏。立つ事も座る事もままならない天変地異。横でなく縦に揺れる為、脳も揺らされて倒れる他は無い。ざわざわと樹木が揺れる。折れて倒れるものもある。

「」

そんな中、ミドリメだけが――揺れる事なく、苦しむディオン達を見下ろして、嗤った。

第十一章 異約聖譚曲 第一部『新世界より』 (12) (後書き)

ここまで読んで下さりありがとうございました。第二部の開始は第一部の整理と改稿を済ませてからになる為、ちよつと時間がかかると思います。

より良い形で作品を公開させていただきたい為、どうかご理解いただきたいと思っています。

よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5174i/>

ストレンジネス・オラトリオ

2010年10月8日12時44分発行